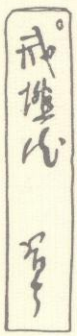
大宰府史跡

平成７年度発掘調査概報



平成８年３月

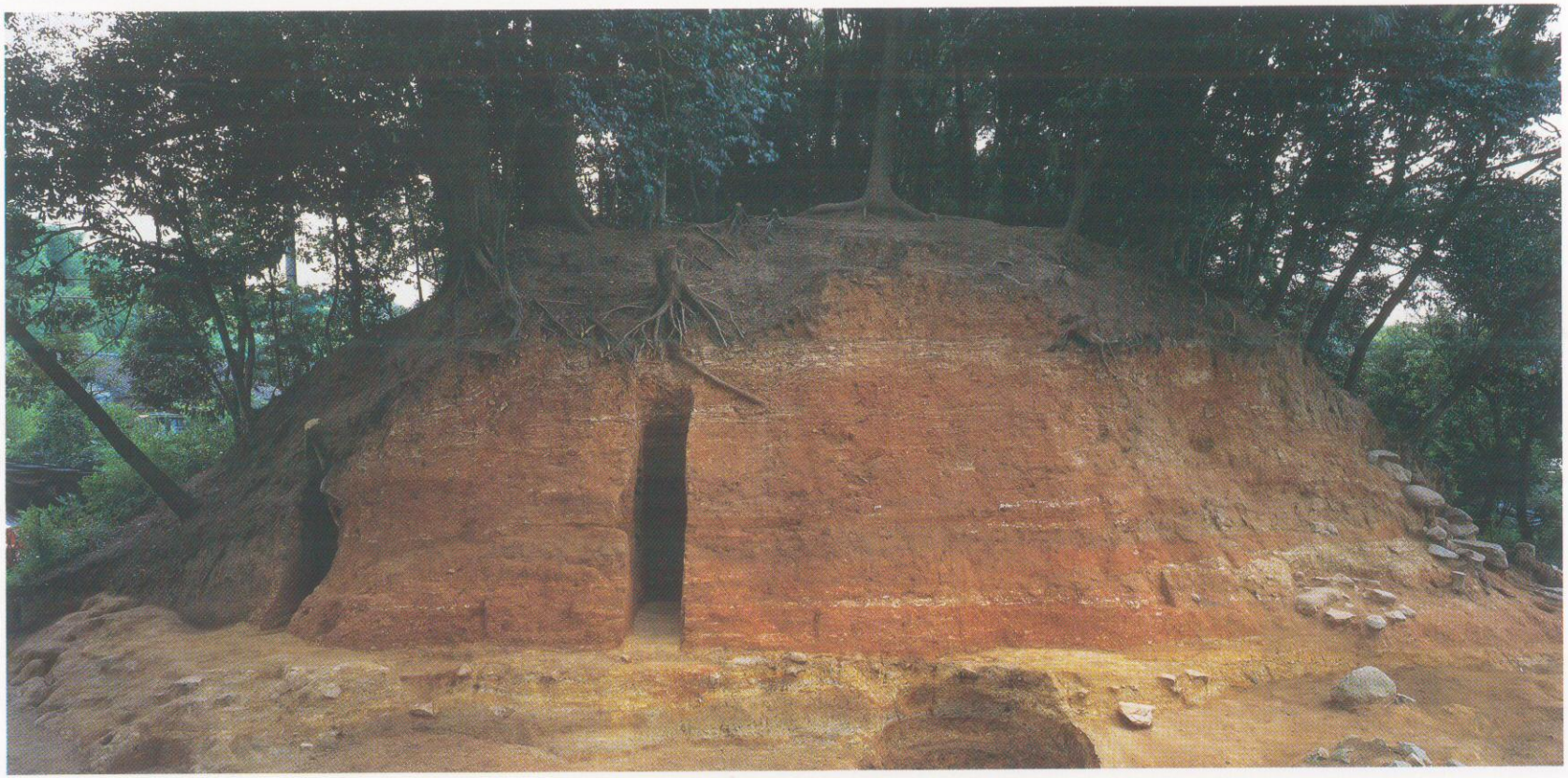
九州歴史資料館

大宰府史跡

平成7年度発掘調査概報

平成8年3月

九州歴史資料館



水城跡第26次調査　西門跡西側土塁壁面

序

大宰府史跡の発掘調査は、平成4年度から第5次5箇年計画を立案し、調査を進めている。この計画では、特別史跡水城跡の諸施設の解明に重点をおいている。平成7年度は、その第4年次にあたり、水城西門跡に重点をおいて調査を実施した。調査の結果については報告したとおりであるが、多大の成果を挙げたものと考えている。

この水城跡の調査方法については、考古学的側面からの調査のみでなく、考古学以外の諸分野からのアプローチも必要ではないかとの大宰府史跡調査研究指導委員会の助言もあり、今回は地盤工学、地中電気探査、植物遺体の鑑定などについて九州大学、佐賀大学の協力を得て調査を行った。調査にあたられた関係者各位に心からの謝意を表する次第である。なお、この西門跡については、平成8年度も継続して調査を行うこととしている。

また、本書には平成6年度に調査を行った戒壇院庫裡建て替えに伴う事前調査の結果についても併せて報告することとした。

この大宰府史跡の発掘調査については、昭和43年の鍬入れ式以前から史跡指定地の拡張や調査組織の確立の問題をはじめ多方面にわたって御指導いただいた平野邦雄、坪井清足の上記指導委員会の両委員が本年度をもって委員の職を辞されることとなった。永年にわたって御指導いただいた両委員に心から深甚の謝意を表する次第である。

発掘調査にあたっては、大宰府史跡調査研究指導委員をはじめ文化庁、太宰府市教育委員会、地元関係者各位に御指導と御協力をいただいている。今後ともなお一層の御指導、御鞭撻をお願い申し上げる次第である。

平成8年3月31日

九州歴史資料館長　吉久　勝美

例　言

1．本書は平成７年度に福岡県が国庫補助を受けて、九州歴史資料館が発掘調査を実施した大宰府史跡発掘調査の概要報告であり、大宰府史跡第116次・163次・165次・166次・167次・172次の調査及び太宰府市教育委員会が調査を行った第170次調査（第160次調査隣接地）を掲載した。水城跡については、第26次・27次調査を掲載した。

なお、第171次・173次調査については、顕著な遺構が検出されなかったので報告を割愛した。また、第169次調査は来年度も調査継続の予定であり、来年度の報告とする。

2．遺構実測図は、国土調査法第II座標系をもとに基準点を設け作成した（昭和51年度発掘調査概報参照）。

3．検出遺構及び出土遺物については、大宰府史跡調査研究指導委員の御指導と御教示を得た。

4．水城跡の地盤工学的調査は、佐賀大学低平地防災研究センター林重徳教授に依頼し、調査成果を掲載させて頂いた。

5．水城跡の電気探査は、九州大学工学部牛島恵輔教授に依頼し、探査結果を掲載させて頂いた。

6．水城跡第24次調査出土の敷粗朶の樹種同定は、九州大学農学部井上晋助教授に依頼し、同定結果を掲載させて頂いた。

7．肥前系陶磁器については、九州陶磁文化館の大橋康二氏に御教示を得た。

8．本文中の挿図は土器・陶磁器類を３分の１、瓦塼類は４分の１の縮尺を原則としている。

9．本書掲載の写真は、学芸第一課石丸洋の撮影による。

10．本書の執筆・編集は、調査課栗原和彦・横田賢次郎・小田和利・小川泰樹・杉原敏之及び県文化課吉村靖徳、太宰府市教育委員会狭川真一・大隈和子による。掲載図面の製図には、小田美和・今井涼子の助力を得た。

また、遺物の復元整理作業は大宰府史跡坂本発掘調査事務所において行い、大田千賀子・中田千枝子・市川千香枝の協力を得た。

目　次

I　はじめに ……1
　1　調査計画 ……1
　2　調査経過 ……2
II　発掘調査 ……8
　1　第116次調査……8
　2　第163次調査 ……11
　　検出遺構……11
　　出土遺物……19
　　小　　結……73
　　付　　記……76
　3　第165次調査 ……81
　　検出遺構……81
　　出土遺物……82
　　小　　結……83
　4　第166次調査 ……85
　　検出遺構……85
　　出土遺物……86
　　小　　結……91
　5　第167次調査 ……92
　　検出遺構……93
　　小　　結……93
　6　第170次調査 ……95
　　検出遺構……95
　　出土遺物……97
　　小　　結 ……101
　7　第172次調査……102
III　水城跡の発掘調査 ……104
　1　第26次調査 ……104
　　検出遺構 ……106
　　出土遺物 ……112
　　小　　結 ……126

2　第27次調査 ……128
検出遺構 ……128
出土遺物 ……129
小　結 ……130
IV　水城跡の理化学的調査
1　水城土塁の地盤工学的研究 ……131
2　特別史跡「水城」基底部より発掘された植物遺体の同定について ……144
3　水城土塁中の木樋の電気探査 ……147

挿　図　目　次

第1図　大宰府史跡発掘調査地域図……折込
第2図　第116次調査遺構配置図……8
第3図　軒平瓦拓影・実測図……10
第4図　戒壇院周辺地形図……折込
第5図　第163次調査遺構配置図 ……折込
第6図　土層模式図……11
第7図　SB4180断面実測図 ……13
第8図　SD4175・4185・SX4182実測図……15
第9図　SD4189・SG4190土層図 ……16
第10図　SX4172・4177実測図 ……17
第11図　SX4174・4191実測図 ……17
第12図　埋甕・桶埋設遺構実測図……18
第13図　SD4175出土土器・陶磁器実測図 ……20
第14図　SD4175出土陶磁器実測図 ……21
第15図　SD4185・4186・4187・4188出土土器・陶磁器実測図 ……24
第16図　SG4190出土陶磁器実測図 ……26
第17図　瓦質土器実測図……28
第18図　SX4176・4178・4179出土埋甕実測図 ……29
第19図　SX4174出土土管実測図 ……29
第20図　SD4189・SE4195・SX4177・SX4184・層位出土土器・陶磁器実測図 ……31
第21図　軒丸瓦拓影・実測図（1） ……34

第22図　軒丸瓦拓影・実測図（2）……35
第23図　軒丸瓦拓影・実測図（3）……37
第24図　軒丸瓦拓影・実測図（4）……39
第25図　軒丸瓦拓影・実測図（5）……40
第26図　軒平瓦拓影・実測図（1）……43
第27図　軒平瓦拓影・実測図（2）……44
第28図　軒平瓦拓影・実測図（3）……46
第29図　文字瓦拓影……47
第30図　丸瓦拓影・実測図……48
第31図　平瓦拓影・実測図……49
第32図　丸・平瓦刻印拓影……51
第33図　道具瓦拓影・実測図……52
第34図　雁振瓦拓影・実測図……53
第35図　伏盤・塼拓影・実測図……54
第36図　SX4191出土丸瓦①拓影・実測図……56
第37図　SX4191出土丸瓦③拓影・実測図……57
第38図　SX4191出土丸瓦④拓影・実測図……58
第39図　SE4195・SG4190出土墨書木札実測図……59
第40図　SD4186出土木製品実測図……60
第41図　SG4190出土木製品実測図（1）……62
第42図　SG4190出土木製品実測図（2）……64
第43図　SG4190出土木製品実測図（3）……65
第44図　SG4190出土下駄実測図（1）……66
第45図　SG4190出土下駄実測図（2）……67
第46図　SG4190出土金属製品実測図……68
第47図　銅銭拓影……69
第48図　石製品実測図（1）……70
第49図　石製品実測図（2）……71
第50図　石製品・土製品実測図……72
第51図　戒壇院築地関係図……75
第52図　旧太宰府町役場・戒壇院境内建物図……79
第53図　第165次調査遺構配置図……81
第54図　SK4199出土土器・陶磁器・土製品実測図……83

第55図　第166次調査遺構配置図 ……84
第56図　SB4200柱掘形断面図 ……85
第57図　SD4210出土土器・陶器実測図 ……87
第58図　SD4215・SK4201・4203・SX4205出土土器実測図 ……89
第59図　SD4209・SX4212・褐灰色土層・茶灰色土層出土土器実測図 ……90
第60図　軒丸瓦拓影・実測図……91
第61図　石鏃実測図……91
第62図　第167次調査遺構配置図 ……92
第63図　SA4225柱掘形断面図 ……93
第64図　第137・167次調査主要遺構配置図……94
第65図　第170次調査遺構配置図 ……96
第66図　SE4290掘形出土土器実測図 ……97
第67図　SE4290出土土器実測図 ……98
第68図　軒丸瓦拓影・実測図……99
第69図　SE4290出土木製品実測図……100
第70図　SE4290出土木印実測図……101
第71図　第172次調査遺構配置図……102
第72図　水城跡発掘調査地域図……折込
第73図　水城跡第26次調査トレンチ配置図 ……103
第74図　水城跡西門地区測量図……折込
第75図　水城跡第26次調査Jトレンチ遺構配置図……105
第76図　石垣SA103実測図 ……106
第77図　基底部石列SA104実測図 ……107
第78図　門建物SB110柱掘形断面図 ……108
第79図　SD101北壁土層図 ……109
第80図　暗渠SX105・106実測図……110
第81図　SD122・濠SX108土層図 ……111
第82図　SD101・102出土土器・陶磁器実測図……113
第83図　SD122・SK125・SX107・108・119・121出土土器・陶磁器実測図 ……115
第84図　層位出土土器実測図（1）……117
第85図　層位出土土器実測図（2）……118
第86図　軒丸瓦拓影・実測図 …… 119
第87図　軒平瓦拓影・実測図（1）……120

第88図　軒平瓦拓影・実測図（2）……121
第89図　鬼瓦拓影……122
第90図　面戸瓦拓影・実測図……123
第91図　文字瓦拓影・実測図……123
第92図　土製品・石製品実測図……125
第93図　水城跡第27次調査区・土層図……128
第94図　水城跡第27次調査出土土器実測図……129

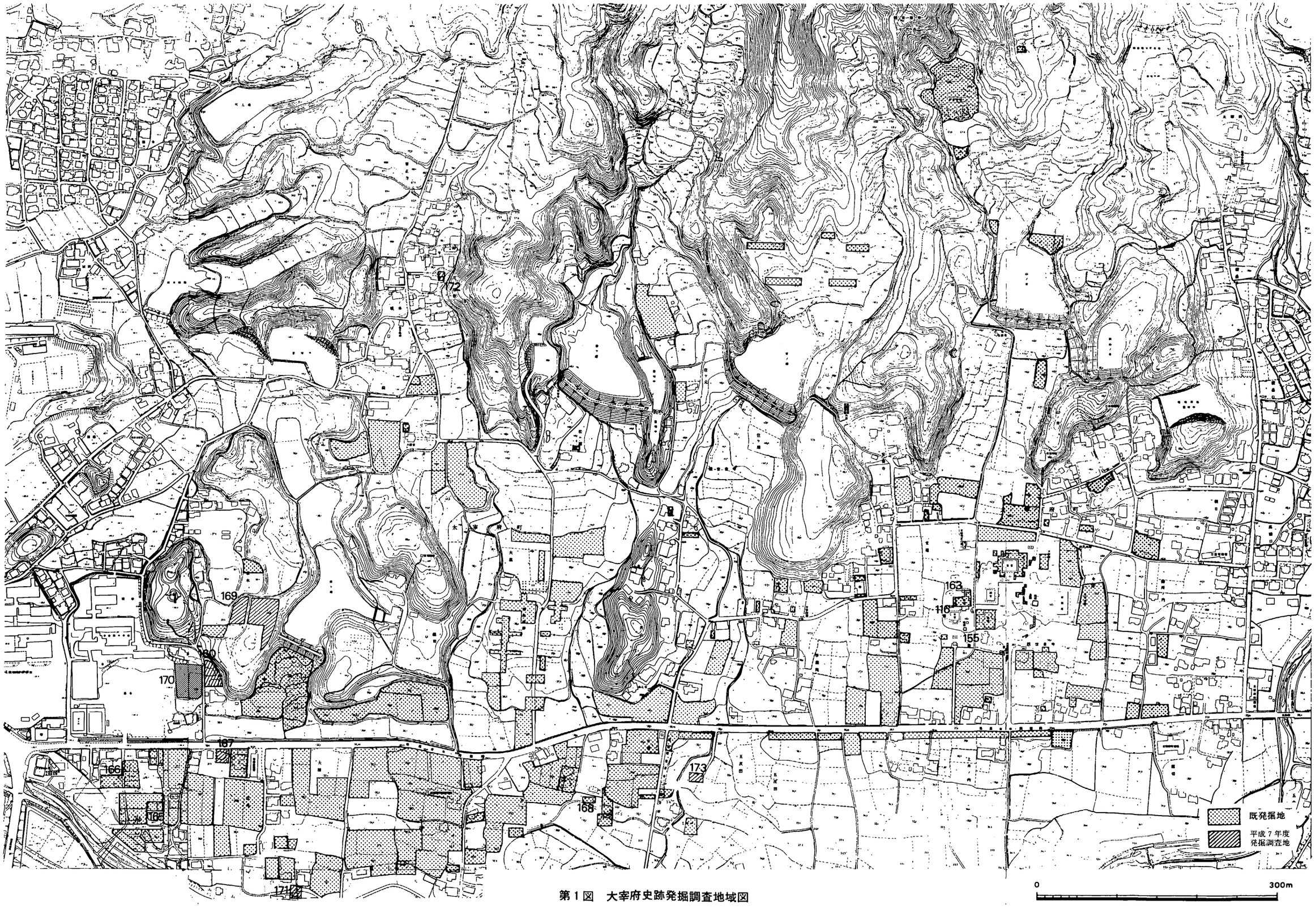
図　版　目　次

巻頭図版　水城跡第26次調査　西門跡西側土塁壁面
図版1　（上）　第163次調査区全景（南から）
（下）　第163次調査区全景（東から）
図版2　（上）　溝SD4175（東から）
（下）　溝SD4175裏込め状況（東から）
図版3　（上）　溝SD4185・溜枡状遺構SX4172（東から）
（下）　溝SD4185（北東から）
図版4　（上）　溝SD4186・池状遺構SG4190（西から）
（左下）溝SD4188（東から）
（右下）溝SD4189（西から）
図版5　（上左）排水施設SX4174（西から）
（上右）暗渠遺構SX4191（東から）
（下）　Aトレンチ中央部土層断面（西から）
図版6　（上）　埋甕遺構SX4177
（下）　埋甕遺構SX4178
図版7　（上）　埋甕遺構SX4179
（下）　埋甕遺構SX4181
図版8　（上）　Dトレンチ全景（南から）
（下）　Dトレンチ全景（北から）
図版9　（上）　第165次調査区全景（東から）
（下）　第165次調査区全景（西から）
図版10　第166次調査区全景（空中写真）

図版11　（上）　第166次調査区全景（北から）
（下）　第166次調査区全景（南から）
図版12　（上）　掘立柱建物SB4200（空中写真）
（中）　掘立柱建物SB4200（南から）
（下）　掘立柱建物SB4200（西から）
図版13　SB4200柱掘形
図版14　（上）　溝SD4209・4215（北から）
（下）　溝4209（西から）
図版15　（上）　溝4209（東から）
（下）　溝4209土層断面（東から）
図版16　（上）　第167次調査区全景（東から）
（下）　第167次調査区全景（北から）
図版17　（上）　柵ＳＡ4225・竪穴住居ＳＩ4220（西から）
（下）　竪穴住居ＳＩ4220（西から）
図版18　第170次調査区　上空から大宰府政庁跡を望む
図版19　（上）　第170次調査区全景（空中写真）
（下）　北半堀立柱建物群（空中写真）
図版20　（上）　掘立柱建物SB4300（西から）
（下）　竪穴住居ＳＩ4305（北から）
図版21　（上）　SE4290（西から）
（下）　SE4295（南から）
図版22　（上）　第172次調査区全景（東から）
（下）　第172次調査区全景（西から）
図版23　（上）　第116次調査　戒壇院出土軒平瓦
（下）　第163次調査　SD4175堀形上面出土陶磁器
図版24　第163次調査　SD4175出土土器・陶磁器（1）
図版25　第163次調査　SD4175出土陶磁器（2）
図版26　第163次調査　SD4185・4186・4187・4188出土土器・陶磁器
図版27　第163次調査　SG4190出土陶磁器
図版28　第163次調査　SG4190、SX4177・4184、層位出土土器・陶磁器
図版29　第163次調査　黄色整地層出土土器、瓦質土器、SX4176・4178・4179出土埋甕
図版30　第163次調査　戒壇院出土軒丸瓦（1）
図版31　第163次調査　戒壇院出土軒丸瓦（2）

図版32　第163次調査　戒壇院出土軒丸瓦（3）
図版33　第163次調査　戒壇院出土軒丸瓦（4）
図版34　第163次調査　戒壇院出土軒丸瓦（5）
図版35　第163次調査　戒壇院出土軒平瓦（1）
図版36　第163次調査　戒壇院出土軒平瓦（2）
図版37　第163次調査　戒壇院出土軒平瓦（3）
図版38　第163次調査　戒壇院出土文字瓦（1）
図版39　第163次調査　戒壇院出土文字瓦（2）
図版40　第163次調査　戒壇院出土文字瓦（3）・丸瓦
図版41　第163次調査　戒壇院出土道具瓦
図版42　第163次調査　戒壇院出土平瓦・雁振瓦
図版43　第163次調査　戒壇院出土雁振瓦・伏盤・塼・土管
図版44　第163次調査　暗渠遺構SX4191使用丸瓦（1）
図版45　第163次調査　暗渠遺構SX4191使用丸瓦（2）
図版46　第163次調査　SD4186出土木製品、SE4195・SG4190出土墨書木札
図版47　第163次調査　SG4190出土墨書木札・木製品（1）
図版48　第163次調査　SG4190出土木製品（2）
図版49　第163次調査　SG4190出土木製品（3）
図版50　第163次調査　SG4190出土下駄（1）
図版51　第163次調査　SG4190出土下駄（2）、金属製品・銅銭
図版52　第163次調査　出土石製品・土製品
図版53　第165次調査　出土土器・陶磁器・土製品
　　第166次調査　SD4210出土土器
図版54　第166次調査　SD4210・4215、SX4205・4212出土土器
図版55　第170次調査　井戸SE4290出土木印
図版56　水城西門跡付近遠景（空中写真　北西から）
図版57　水城跡第26次調査区部分（空中写真　北西から）
図版58　（上）　水城西門跡切り通し部分（北西から）
　　（下）　西門跡Eトレンチ北半部（北西から）
図版59　（上）　西門跡Bトレンチ中央部（東から）
　　（下）　西門跡Bトレンチ中央部（西から）
図版60　（上）　石垣SA103（北から）
　　（下）　石垣SA103（西から）

図版61　（上）　石垣ＳＡ104（東から）
（下）　石垣ＳＡ104西端断ち割り状況
図版62　（上）　石垣ＳＡ104西端
（下）　石垣ＳＡ104細部（暗渠SX105取付き部）
図版63　（上）　西門跡切通し部分（南から）
（下）　西門跡切通し部分（東から）
図版64　（上）　西門跡土塁壁面（東から）
（下）　門建物SB110（東から）
図版65　（上）　門建物SB110柱掘形（1）
（中）　門建物SB110柱掘形（2）
（下）　門建物SB110柱掘形（3）
図版66　（上左）暗渠遺構SX105（北西から）
（上右）暗渠遺構SX105（蓋石除去後　北西から）
（下）　暗渠遺構SX105（蓋石除去後　西から）
図版67　（上）　暗渠遺構SX106（北西から）
（下）　暗渠遺構SX106細部（西から）
図版68　（上左）Gトレンチ全景（南東から）
（上右）濠SX108（南から）
（下）　溝SD122土層断面
図版69　（上）　水城跡第27次調査区全景（南東から）
（下）　トレンチ東壁土層断面
図版70　水城跡第26次調査　SD101・102・121出土土器・陶磁器
図版71　水城跡第26次調査　SK125、SX107、層位出土土器
図版72　水城跡第26次調査　出土軒丸瓦
図版73　水城跡第26次調査　出土軒平瓦（1）
図版74　水城跡第26次調査　出土軒平瓦（2）・文字瓦など
図版75　水城跡第26次調査　出土鬼瓦・面戸瓦、石製品、土製品



第１図　大宰府史跡発掘調査地域図

Ⅰ　はじめに

1．調査計画

発掘調査第5次5箇年計画は、本年度早くも4年次目を迎えた。昨年度から実施している水城跡西門地区（水城跡第26次調査）を早期に完了すること、新たにJR鹿児島本線東側地区で土塁本体の断ち割り調査を行うことを特別史跡水城跡の調査計画としてとりあげた。

この他に、緊急を要する調査として大宰府政庁跡の前面官衙地区4箇所と来木丘陵南側の第160次調査西側の隣接地で学業院中学校の拡張計画用地、それに来木丘陵東半部の個人畑地の調査地2箇所が見込まれた。このうち、来木丘陵の東半部及び学校用地は、2箇所合わせて5,600㎡と広い調査面積を占める。この地域は、第160次調査地区で検出した遺構の内容とかつてこの付近の水田が「たくみのつかさ」と呼ばれていたことと合わせて考えれば、大宰府機構の「匠司」跡に関連する有力な推定地域である。従って、この2箇所の緊急調査は極めて重要と言える。しかしながら、過去の発掘調査実績からすると、この2箇所の調査を消化するには一箇年が必要である。そのような状況から発掘調査の立案にあたり、太宰府市の学校用地造成計画をふまえて太宰府市教育委員会と協議を行った。

この結果、学校用地については太宰府市教育委員会が発掘調査を行うこと、来木丘陵東半部の調査については、九州歴史資料館が行うことで合意した。さらに既調査区の第160次調査地の内容と新たに発掘調査を実施しようとする2箇所については、遺構の内容が密接に関連すると予想されることから一連の調査として位置づけ、両者協議して一冊の概要報告書として作成することとなった。このため、九州歴史資料館が実施予定の来木丘陵東半部の調査を大宰府史跡第169次調査とし、太宰府市教育委員会が実施する予定の学校用地造成地の調査を大宰府史跡第170次調査とすることとした。

これにより、九州歴史資料館が今年度予定する発掘調査は、水城跡で2箇所、大宰府政庁跡周辺で5箇所の計7箇所が見込まれることとなった。予定された7箇所の調査地の面積は7,000㎡に近い。この調査のすべてを年度内に終了することは不可能であるが、これを努力目標とし、4月以降の発掘調査に着手した。

5月26日に開催した大宰府史跡調査研究指導委員会に発掘調査計画を諮り、その大要については了解を得ることができた。ただし、水城跡西門地区（水城第26次調査）の調査経過及び今後の水城調査計画について審議頂いた結果、西門地区の調査では門の遺構や石組・官道などの発掘調査による新たな発見があり、水城跡の他地区の調査を新たに実施するよりも西門地区の調査を徹底して行うようにとの指導を受けた。この委員各位の助言により、今年度の水城跡の調査は西門地区のみに集中することとなった。

	区　分	場　　所	面積(㎡)	地　　番	備　　考
1	水城跡	西門・西門付近太宰府側基底部	500	大野城市下大利４丁目705－5他	現状変更
2		JR線東側（土塁本体の断ち割り）	2,000	大野城市下大利5丁目－1他	〃
3	政庁前面	蔵司西地区	2,600	太宰府市観世音寺字蔵司431－1他	緊急調査
4	官衙域他	蔵司西地区	(3,000)	〃　〃　字来木368－4他	〃（太宰府市調査）
5		不丁地区	1,100	〃　〃　字不丁301－1	緊急調査
6		不丁地区	360	〃　〃　字不丁286－8	〃
7		不丁地区	264	〃　〃　字不丁287	〃　（保留地）
8		大楠地区	182	〃　〃　字大楠329	〃　（保留地）

2．調査経過

（1）特別史跡水城跡

水城西門跡の調査は、昨年からの継続調査である。昨年の調査経過の報告では、門跡推定部分付近で数条の礫敷きの溝状遺構、東側土塁の大野城市側基部の石列、これに直交する基壇状の石組（後に石組暗渠と判明）、官道の西側溝など今回の調査で検出した段階までを報告した。この調査は盆の休暇までで一旦区切りをつけ、調査を再開したのは平成７年３月中旬である。再開後の調査では、西門跡周辺の地形測量・土塁前面の濠の調査・土塁横断面の調査・土塁頂上部の調査などを計画していた。さらに、新たに大野城市側で官道跡推定地部分の公有化が実現し、この部分の調査も可能となった。

調査再開後、市道西側の土塁本体積土の基部で３個の柱穴を検出した。これまで、西門の位置については、大野城市側・太宰府市側で調査された官道がここを通過すること、西門跡から出土したとされる門礎・鬼瓦などの状況証拠のみであった。柱穴の発見は、ここに門が存在したことを直接示すものとして大きな発見であった。

この発見を足がかりとして５月の指導委員会では、以下のような調査結果を報告することができた。

ａ．市道西側の土塁断面の基部で３個の柱穴を検出した。柱間間隔は心々で2.7mである。

ｂ．大野城市側官道部分（濠の想定地）は地山であり、西側では側溝が付くが、東側では濠に直接流れ込む。

ｃ．大野城市側の門跡東側の土塁本体基部に長さ18mの範囲に限って花崗岩の石列が発見された。

ｄ．門跡西側土塁の基部でも石列を発見したが、ｃの石列よりも高い位置にある。

ｅ．ｃの石列に直交するかたちで濠に向かう石組暗渠がある。

ｆ．濠はｃの石列の前面６m程から落ち込み、調査区内での深さは２m程である。なお、官道の西側でも濠の確認を目的としたトレンチを設定したが、幅５m程・深さ１m程と浅いものであ

った。

g．土塁頂上部の発掘調査区内では、柵列などの遺構は見つかっていない。平均的な頂上部の幅は３m程であるが、門跡付近では12m程に広がっている。西側土塁の頂上部では丸･平瓦片がまとまった状態でみられ、軒丸・軒平瓦も出土した。

h．大野城市側・太宰府市側で調査されている官道は、水城西門に対して斜めに取り付くと想定できる。

これに対して、指導委員各位からは、質問・助言を含めて以下のような指導があった。

①　柱穴から門の平面形を方形に推定しているが、必ずしもこの規模で納まるとは考え難い。他に柱穴がないか、また、門が建ち得る範囲についての検討が必要である。

②　西門は築堤当初から存在したか。鴻臚館との関係から８世紀段階ではないか。

③　土塁本体基部に認められる石列は、神籠石の石列にも類似したところがあるが、石列をなぜあの部分に施したのか。石組暗渠はなぜ設置する必要があったのか。

④　太宰府市側に認められる土塁の張出し部は、築堤当初まで遡ることができるか。

これらの意見を整理すれば、①については、新たに柱穴を探すためには、西側土塁の積土を断ち割ることや、柱穴検出面の精査が必要である。②については、検出した柱穴の時期の確定と門を構築した時期を示す遺構の調査が必要と考えられる。③については、石列をいつ構築したかの問題、暗渠と石列の関係を追跡する必要がある。④についても、土塁の断ち割りを行い、築堤当初と改修工事との見きわめを行う必要がある。

西門跡に関しては、以上のように幾つかの新たな調査成果を報告することができたものの、同時にそれに伴って疑問や問題とすべき点が生じており、それについての指導助言であった。本年度の調査計画では、水城跡の調査としてJR鹿児島本線の東側で土塁全体の断ち割り調査を予定していたことから、西門跡の調査については８月の盆休み前までに終了したいものと考えていた。このため、指導委員会に西門跡の調査の進め方と今年度計画の調査の進め方について意見を伺った。

委員各位からは、様々な助言を伺うことができたが、結論として「西門跡の調査については、今日までの調査で門跡と土塁との関係・官道・濠などについてようやく見えてきた状況である。今後、西門跡を調査する機会がまず無いとすれば、腰を据えて徹底した調査を行うべきである。」、「JR鹿児島本線東側の調査計画を実施するには、準備を充分にしてから実施しても遅くはない。」との意見を頂いた。

以後、発掘調査は指導委員会で受けた助言を吟味して12月末まで実施した。この調査状況については本文に譲るが、検出されていた柱穴の南で新たに柱穴を１個見い出したこと、柱穴は８世紀段階まで下がること、８世紀段階で大きな改修が行われていること、門跡前面の土塁基部に組み込まれた石列にも２時期あること、門跡地区を縦断する７世紀後半の溝遺構が存在す

ることなどが新たな事実として判明した。このうち、石列の古期のものと7世紀後半～末の遺物を包含する溝については、調査をほぼ終了した段階の12月のだめおし調査で見つかったものであり、調査不十分なため平成8年度に改めて調査を計画している。水城西門跡の調査で、これらの調査成果を挙げ得たのは、指導委員会のご指導によるところが大である。

なお、水城跡の考古学的調査と併行して関係諸分野の専門家による調査研究を行うよう第5次計画の立案時点で指導委員会から指摘を受けていた。なかでも、水城跡は「わが国の古代を代表する大土木工事の一つ」であるから、土木工学的な分野の研究者による調査研究をぜひ行うべきであるとの強い意見があった。

この分野については、既に水城跡東門地区の調査（水城跡第24次調査）の下成土塁の断ち割り調査時点で佐賀大学教授林重徳氏に現地視察をお願いし、合わせて今後の共同研究を依頼することができた。林氏（当時は九州大学工学部助教授、平成6年度から佐賀大学教授）は、現地視察の直後、学生とともに土質試験用のサンプルを採集されたり、佐賀大学に移られてからは研究室の研究テーマの一つとして「水城築堤」に関する研究に取り組んで頂いている。さらに平成6年8月には、研究室の研究事業として水城横断面のボーリング調査を実施されるなど水城築堤に関する研究に積極的に取り組んで頂いた。なお、指導委員会では、「地盤工学からみた“水城”の築堤技術」と題して中間報告的な研究報告を行って頂いた。本書には、その研究報告を掲載することができた。

また、5月10日には、水城跡第24次調査で「敷粗朶」として使用された植物遺体の樹種同定調査を九州大学農学部井上晋助教授に行って頂いた。井上氏の調査結果で注目されるのは、樹木の伐採時期と樹種についてである。井上氏は「植物遺体は木本12種・草本1種」を同定され、伐採の時期については、「晩春から夏（5月中・下旬～7月上旬）」という季節を示された。さらに、生態について「本調査地を含む福岡県の丘陵低地帯における暖温帯性常緑広葉樹（照葉樹）二次林」と報告されている。

この結果は、大正2(1914)年、現JR鹿児島本線の水城開削工事現場を調査された黒板勝美・中山平次郎両博士の報文と対比される。黒板氏は6種の植物遺体をあげ、「それらの植物は、この付近に繁茂している」ことと水城の築堤にふれて、「この築造が春から夏に及んでいる…（後略）」と報告されている。中山氏は「晩春より秋の間に築かれた…（後略）」とともに『続日本紀』の水城修理に関する記載を吟味した上で、植物遺体の出土状況について「夥しく枝葉を包含せる盤根部粘土層内の諸土質の界線は、略水平に位置せる…（中略）…創築当時のままにて…」と報告されている。

JR鹿児島本線の水城開削部分と水城跡第24次調査区とでは、距離にして770m程離れているが、植物遺体の出土状況や樹種、その伐採された時期などの点で共通性がある。

『日本書紀』では、水城の築堤について天智3(664)年に「是歳」と記している。天智2年8

月白村江の敗戦後、9月の日本軍の帰還の記事は百済派遣軍の主力の帰還を意味するものであろう。また、「是歳」とは、通常水城の築堤に着手した年と理解されよう。664年の築堤工事の内容が「杭打ち」や「縄張り」だけであったものか、築堤工事そのものにかかっていたものかは判らない。が、白村江の敗戦後、短時日のうちに水城を完成させる必要があったことは事実である。JR鹿児島本線開削工事で出土した植物遺体も中山氏の記述から「敷粗朶」と想定できる。しかも、「晩春から夏（あるいは秋）」にかけて伐採された樹木という記事の一致は、工事の同時性を想定させ、一気に築堤工事が進められた状況を想像させる。

九州大学工学部牛島恵輔教授には、水城跡太宰府側下成土塁を中心とした地中電気探査を実施して頂いた。その結果も本書に掲載することができた。

水城跡前面の濠に水を満たすとすれば、ざっと24～25万㎥の水が必要である。水城跡の東西端部と中央を貫流する御笠川付近では、比高にして7mの差がある。前面の濠にどの様にして水を満たすかは大きな問題である。中央部付近では御笠川の水を塞ぎ貯水するとしても東西端の濠までは満たせない。これまで2箇所の埋設場所が判明している巨大な木樋暗渠は、水城を横断して埋設されていて、前面の濠への導水施設と考えられている。水城跡の地形からは、発見されている木樋暗渠以外にも埋設されているであろうと推測される。地中電気探査は、この木樋埋設箇所を探る目的で実施された。報告文にあるとおり、木樋埋設箇所として有力な候補地が指摘されている。今後の調査計画の立案にあたって、大きな示唆を得ることができた。

九州歴史資料館が進めている水城跡の調査（第5次5箇年計画）は、計画とおりに進んでいない。第6次計画以降も水城跡の調査に積極的に取り組みたいと考えている。

（2）特別史跡大宰府跡等

水城西門跡の発掘調査に本腰を入れたため大宰府政庁周辺部の調査は大きくは進展していない。調査計画のうち、調査を終了したものは太宰府市教育委員会が実施した第170次調査（学業院中学校用地）だけである。本書にはその概要報告を掲載したが、第19次調査（1972年）・第160次調査（1995年）や現在発掘調査を継続中の第169次調査と合わせて来木丘陵一帯の調査結果を改めて報告する機会を作りたいと思っている。

第170次調査では、東側隣接地（第160次調査）で調査された掘立柱建物と同時期に存在したと考えられる建物（SB4300）が検出され、鞴羽口・坩堝・鉄滓などが出土していることからこれらは一連の官衙であり、金属製品の生産に関わるものであったと想定される。ただ、工房の主体は第160次調査でみるように丘陵に近接した部分に存在したようである。調査は4月中旬に開始され、10月下旬近くに終わっている。

4月下旬、第171次調査として大宰府政庁跡前面の観世音寺字大楠地区で民家の新築工事の事前調査を実施した。観世音寺地区区画整理実施前の地形図では、御笠川の流路に近接した場所

である。バックフォーを使用して地表下2.3mまで掘り下げたが、再堆積の砂層が認められる状況で、遺構などは残っていなかった。

6月下旬、史跡観世音寺境内及び子院地区の現状変更（住宅増築）申請地の発掘調査を文化庁の指示により実施した。現九州歴史資料館調査事務所から北に100m程の民家である。調査地付近は小字名を「花の屋敷」と呼び、大宰少弐氏の館跡との伝承もある。トレンチ調査の結果では石垣遺構を検出しているが、近世以降のものと推定された。第172次調査である。

大宰府政庁跡周辺部の調査としては、来木丘陵で実施中の第169次調査が中心となる。大宰府蔵司の西、すうだ池の西側丘陵にあたり、現地は民有の畑地である。畑地は東から西に3段になっており、標高は東から44m・42m・39mである。平成5年8月、太宰府市教育委員会が実施した予備調査によって中段及び下段の畑地約2,600㎡の範囲に大宰府政庁関連の遺構が遺存していることが判明し、九州歴史資料館が調査を担当することとなった。早い時期に着手を予定していたため、中段部分の表土除去は平成7年3月末に実施していた。8月、博物館学の実習生の発掘調査の実習地として一部調査を行ったが、実質的には水城西門跡の調査が実測段階になった11月上旬に入ってからである。調査は3月現在なお継続中であるが、大宰府政庁跡周辺の未指定地では、不丁地区官衙で発見された礎石建物に次いで二番目の礎石建物1棟と掘立柱建物2棟が調査されている。

また、調査区の西斜面では、鞴羽口・坩堝などが投棄された状態で出土している。畑地中段の調査で建物跡や金属生産に関連する遺物の出土があったため、上段の畑3,000㎡にも遺構が残っている可能性がでてきた。予備調査では遺構が発見されなかったことから調査対象外としていた場所である。予備調査の記録を見直した結果、再調査を試みることとした。バックフォーを使用して畑地に東西トレンチ3本、南北トレンチ2本を入れて遺構の検出を行った。調査面積は約390㎡である。この結果、丘陵の周辺部に弥生時代前期末頃の貯蔵穴が10基程見つかっている。畑地中央部は表土の下がすぐ地山であり、遺構はなかった。このように、上段の畑地では弥生時代の遺構は残っているものの歴史時代の遺構が検出されなかったことから、調査は遺構確認のみに留め埋め戻しを行った。

平成8年1月中旬、日吉地区官衙の東側で民有地の緊急調査を実施した。現地は北にある松ヶ浦池方面から南流する小河川の隣接地で、現地表下3.3mの深さまで掘り下げたが、河川の堆積層を確認したに留まった。第173次調査とした。

以上が本年度に実施した大宰府政庁跡周辺での発掘調査の概要である。

調査次数	調査地区	調査面積(㎡)	調査期間	備考	※
水城第26次	6AMK−Y	500	950419 ～ 951227	水城西門跡	12
169	6AYL−A−R	3,300	950725 ～	来木地区官衙	
170	6AYL−A−H	(3,000)	950417 ～ 951019	〃	

平成７年度史跡地内現状変更申請等対応状況

No.	提出月	申請者	目的	地番	申請面積	指定区分	文化庁等指示	九歴等の対応	備考
1	６年　11月	太宰府市長	市民の森案内板設置	太宰府市観世音寺４丁目	27㎡	観世音寺	工事許可	指示	
2	〃	〃	法面復旧	〃　太宰府	80	大野城跡	〃	〃	
3	〃	福岡法務局長	基準点標準設置	〃　国分	1	〃	〃	県協議許可	
4	〃	個人	水路改修	〃　観世音寺５丁目	5	観世音寺	県教委許可	太宰府市教委対応	
5	12月	〃	住宅改築	〃　〃　6丁目	306	観世音寺(観世団地)	工事許可	立会指示	平成７年４月６日（盛土範囲で施行）
6	７年　１月	建設会社	舗装工事	〃　国分１丁目	67	水城跡	県教委許可	太宰府市教委対応	
7	〃	太宰府市教育長	発掘調査	〃　国分	9	国分瓦窯跡	発掘調査許可	太宰府市教委発掘	調査後九歴及び市教委で土嚢を積む
8	〃	太宰府市長	解説板設置	〃　観世音寺５丁目	3	観世音寺	工事許可	指示	（戒壇院）デザインについて協議
9	〃	個人	信仰施設撤去	〃　〃　〃	968	〃	〃	太宰府市教委対応	平成７年６月１日 県教委・九歴・太宰府市現地立会
10	3月	太宰府市選管委員会	公営ポスター掲示場	〃　〃　4丁目 〃　水城３丁目		観世音寺・水城跡	県教委許可	〃	
11	〃	太宰府市長	配水施設改修	〃　国分５丁目	388	大野城跡	工事許可	指示	
12	4月	九州歴史資料館長	発掘調査	〃　吉松 大野城市下大利	1,500	水城跡	許可	４月～12月調査実施	水城跡第26次調査
13	〃	個人	住宅増築	太宰府市坂本３丁目	1,120	観世音寺	発掘調査後 許可	発掘調査実施	第172次調査、平成７年６月21日～６月27日
14	〃	太宰府市民まつり 実行委員会長	仮設物設置	〃　観世音寺３丁目		大宰府跡	県教委許可	太宰府市教委対応	
15	5月	大野城市長	広場整備	大野城市下大利	392	水城跡	工事許可		
16	〃	宗教法人	納骨堂建替	太宰府市国分４丁目	913	国分寺跡	発掘調査	発掘調査予定	平成８年３月頃
17	6月	太宰府市長	公共下水道設置	太宰府市観世音寺５・６丁目	170	観世音寺	工事許可	立会指示	平成７年９月12日以降約２箇月間立会
18	〃	〃	行政区標示板設置	〃　4丁目他２ヶ所	28	大宰府跡 水城跡・観世音寺	県教委許可	太宰府市対応	
19	〃	福岡県農林事務所長	創造の森整備事業	太宰府市・宇美町		大野城跡	工事許可	県教委・九歴 調査	現地調査ならびに発掘調査実施
20	6月	太宰府市長	行政区標示板設置	〃　観世音寺３・４丁目、水城１丁目	27	大宰府跡 水城跡・観世音寺	県教委許可	太宰府市対応	
21	7月	福岡県農林事務所長	予防地山事業	〃　国分	300	大野城跡	工事許可	県教委指示	
22	〃	宗教法人	仮設物設置	〃　観世音寺３丁目	1,500	大宰府跡	県教委許可	太宰府市教委対応	
23	〃	個人	住宅改築	〃　〃　6丁目	287	観世音寺(観世団地)	工事許可	指示	
24	8月	〃	〃	〃　〃　5丁目	82	観世音寺	工事許可	指示	（第144次調査隣接地）
25	9月	九州電力 福岡営業所長	電柱建替	大野城市下大利４丁目	2	水城跡	県教委工事許可	立会	西門地区　平成７年11月
26	〃	福岡県教育長	発掘調査	太宰府市太宰府	500	大野城跡	許可	10月～12月調査実施	
27	11月	太宰府市長	街路灯設置	〃　観世音寺	160	大宰府跡			
28	12月	福岡県知事	樹木植栽	〃　〃　3・5丁目		大宰府跡・観世音寺	県教委許可		
29	〃	太宰府市長	法面工事	〃　太宰府1491他	452	大野城跡			

No.は福岡県教育庁指導第二部文化課からの申請文写の受理の順番である。

調査次数	調　査　地　区	調査面積(㎡)	調　査　期　間	備　　考	※
171	6AYM—C—J	48	950426	大楠地区	
172	6AYT—A	6	950621 ～ 950627	観世音寺子院地区	
173	6AYI—C	12	960117	日吉地区官衙東	

※は前掲表の番号に対応する。

本書では、今年度調査分の水城西門跡（水城第26次調査）の概要報告を行う。水城関係では、昨年度調査の水城第27次調査の結果も掲載した。

本年度の大宰府政庁跡周辺の調査では、大宰府市教育委員会が実施した第170次調査概要と第172次調査概要を掲載した。第170次調査については、第19・160・169次調査などの調査結果を検討した上で、後日に再度報告を行う予定である。

また、昨年度の調査のうち、戒壇院庫裡建設地の事前調査の結果（第163次調査）と戒壇院境内地の調査で未報告であった第116次調査（1988年）を合わせて報告する。昨年度未報告であった広丸地区の第165・166・167次調査の結果についても報告することとした。なお、第171・173次調査については、遺構が検出されなかったため省略する。

平成6年11月から平成7年2月までの現状変更申請及びその対応状況は、別表のとおりである。

参考文献

1　黒板勝美　「福岡県学術研究旅行報告書」『史学雑誌』　25-3　1913

2　黒板勝美　「福岡地方旅行談」『考古学雑誌』　4-6　1914

3　中山平次郎　「水城の研究」『筑前史談会講演集』第一集　1914

上記論文については、「福岡県筑紫郡太宰府町水城跡の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸＸＶＩ』（福岡県教育委員会　1978）の巻末に「(付) 水城関係史料ならびに主要文献」として載録されたものを利用した。

II 発 掘 調 査

1．第116次調査

本次調査は戒壇院の墓碑建立に伴う事前の発掘調査である。調査は昭和63年度に行ったが、諸般の事情により、今回報告することになった。当調査地は古代における観世音寺の戒壇院に推定されている地域である。現在は臨済宗・戒壇院として観世音寺とは分離独立しており、調査地はこの境内地内に位置している。古代の観世音寺の主要堂宇を囲む築地が調査区の付近に推定されており、これに関する何らかの知見を得ることを目的として調査を行った。調査地番は太宰府市観世音寺５丁目192-１である。調査期間は昭和63年９月19日～９月26日で、調査面積は10.5㎡である。

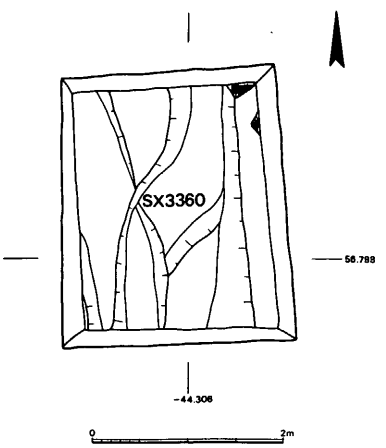
検出遺構

調査の結果、顕著な遺構の検出はなく、僅かに溝状の遺構（SX3360）がみられたのみである。当調査地は地表下120cmの所まで近世の攪乱を受けており、古代の遺構面に達するのは地表下約140cmの深さである。この遺構面上には部分的ではあるが、厚さ約20cmの遺物包含層があり、奈良・平安期の瓦片が混入している。

溝状遺構

SX3360　発掘区の中央部で南北方向の溝状の落ち込みを検出したが、西側の溝の立ち上がりは攪乱を受けており、溝肩が明瞭でないため溝と確定するには至らなかった。これに対して東側の肩は明瞭で、ほぼ直線的なプランをもつ。その線はほぼ真南北方向となっている。この肩部と底部との高低差は20～30cmである。

埋土中からは丸・平瓦が出土したが、上部が完全に近世の攪乱を受けている状況と調査範囲が狭小であることなどから、これが単なる段差であるのか溝であるのか、今回の調査では明らかにすることができなかった。



第２図　第116次調査遺構配置図

出土遺物

瓦類

軒平瓦１点と丸・平瓦片の出土があった。

軒平瓦（第３図、図版23）

調査区東壁の北隅近くで、整地土層の上面から出土した。瓦当文様は観世音寺創建時に使われた老司Ⅰ式軒平瓦である。瓦当笵の使い込みによって文様自体はやや潰れている感じはするが、笵傷などはない。平瓦部は粘土紐桶巻作りによって形成され、粘土紐の一単位は３㎝強程である。平瓦側面を面取りしている点も変わりはない。しかし、この軒平瓦は普通の老司Ⅰ式軒平瓦と異なる点がある。その１は、顎が曲線顎に作られている。平瓦凸面叩打具痕のやや上部には、曲線顎とするために粘土を継ぎ足した痕がある。曲線顎の老司Ⅰ式軒平瓦は大宰府史跡では初めての出土例である。

その２は、通常の老司Ⅰ式では、凸面に見られる叩打具痕は回転台上で叩打された結果、いわゆる「叩き締めの円弧」を描くのに対し、本例は縦方向に連続的に叩打された痕跡を残していることである。この点は山崎信二氏が藤原宮式軒平瓦で検討された6641Ｅの縄叩打具の叩打法と同一である。叩打具は第122次調査（観世音寺南面築地東半部前面、1990年）のSE3680出土平瓦の老司Ⅰ式軒平瓦に伴う叩打具と同一のものである可能性が高い。また、胎土に砂粒を混ぜているから老司Ⅰ式でも短顎のもの（ｂ類）に近い。

老司Ⅰ式軒平瓦の瓦当笵は、筑前国分寺の建立にあたって粘土板桶巻作りに製法を変えて再利用されていること、笵傷のあるものや彫り直した痕跡のあるものなどがあり、かなり長い期間にわたって用いられたことが知られている。

観世音寺の戒壇院の設置は、天平宝字５（761）年である。この軒平瓦が直ちに戒壇院の創建に関連するものとは言えないが、粘土紐桶巻作りという製作法を残し、叩打具も同じものを使っていながら、叩打方法や曲線顎にしていることや使用粘土に砂を混ぜることなど、やや老司Ⅰ式軒平瓦としては新しい時期のものであろう。

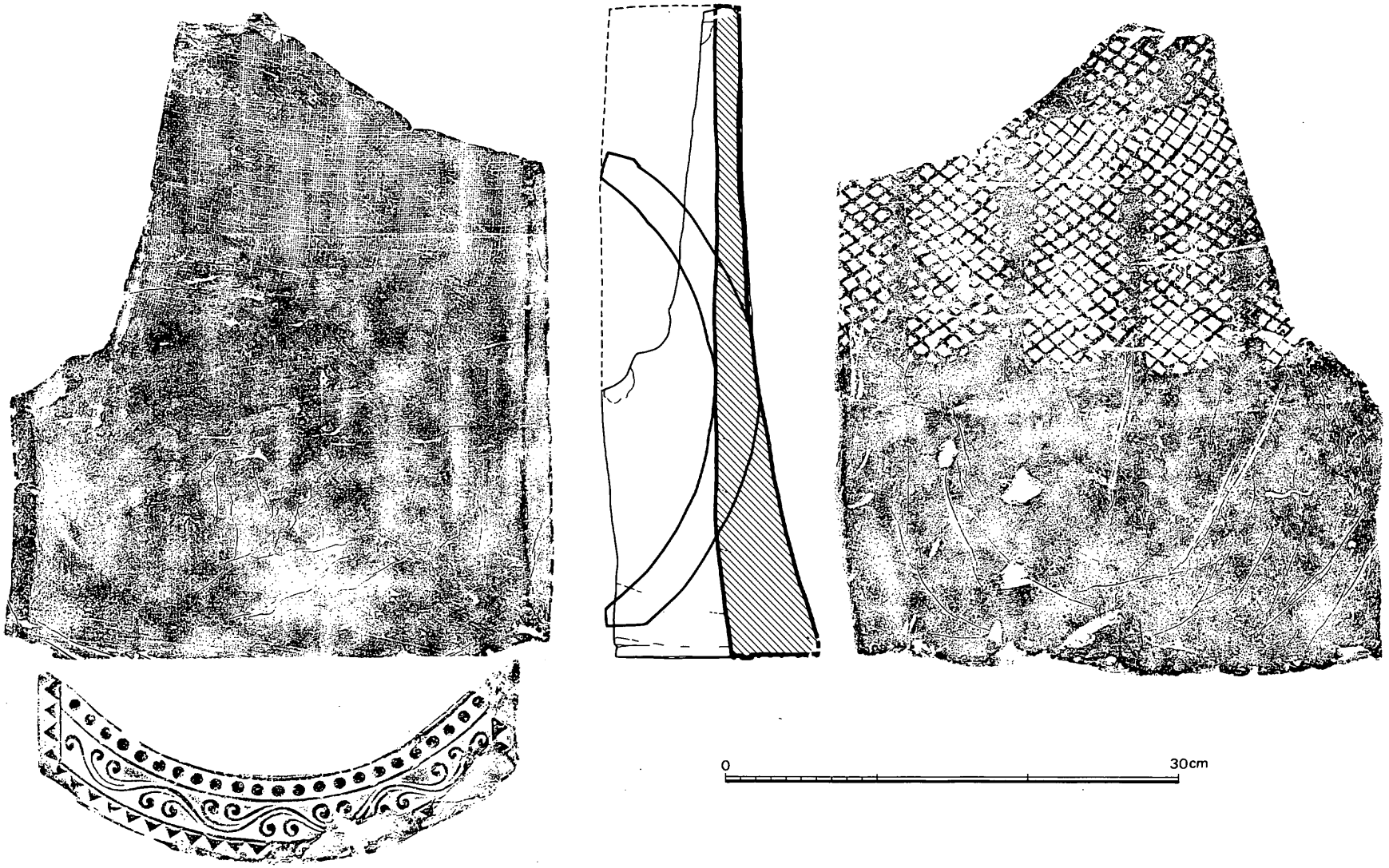
参考文献

山崎信二「桶巻き作り軒平瓦の製作工程」『考古論集』　潮見浩先生退官記念事業会編　1993

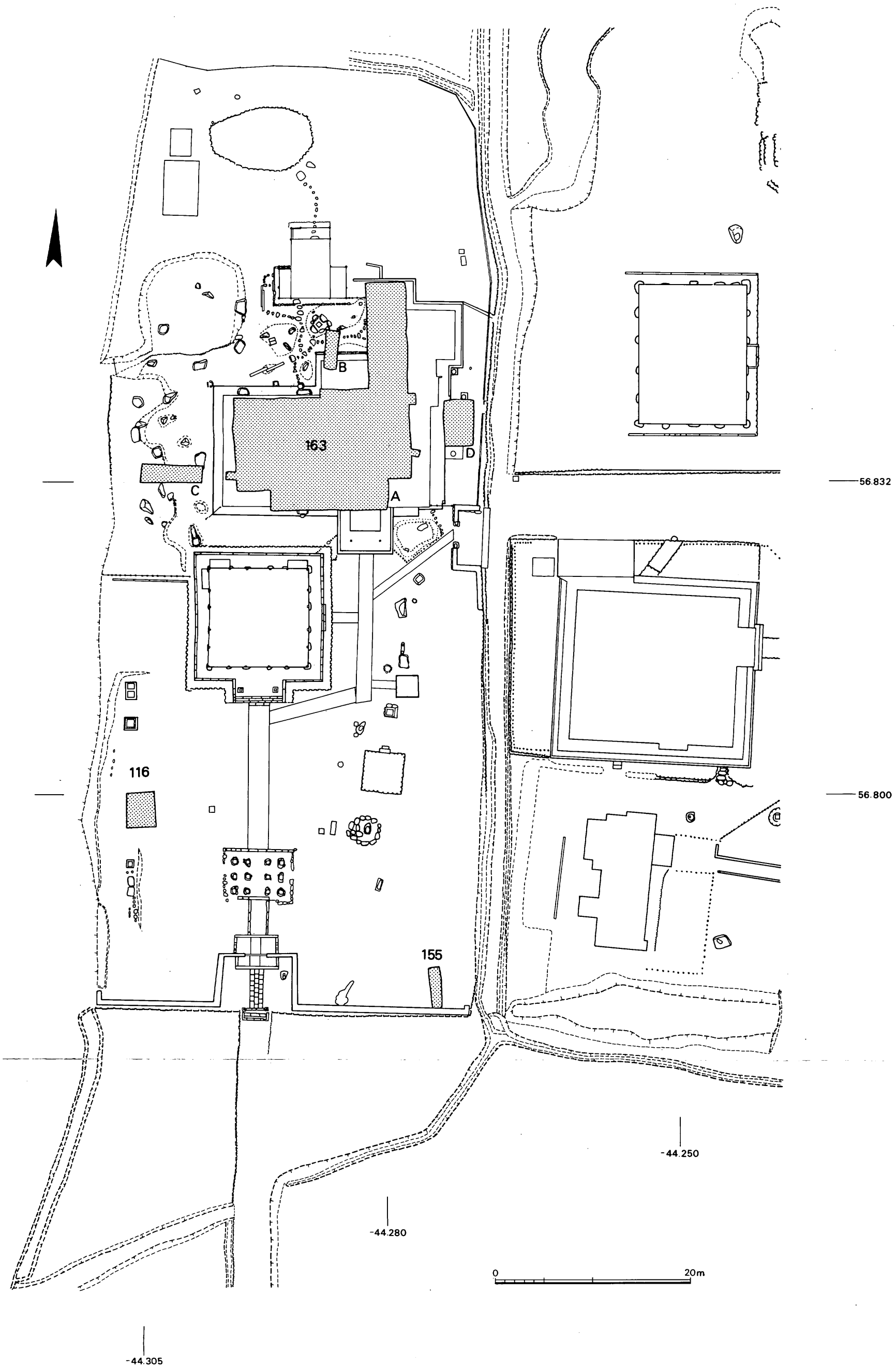
石松好雄「老司式軒先瓦について」『研究論集８』　九州歴史資料館　1982

「第122次調査」『大宰府史跡平成２年度発掘調査概報』　九州歴史資料館　1991

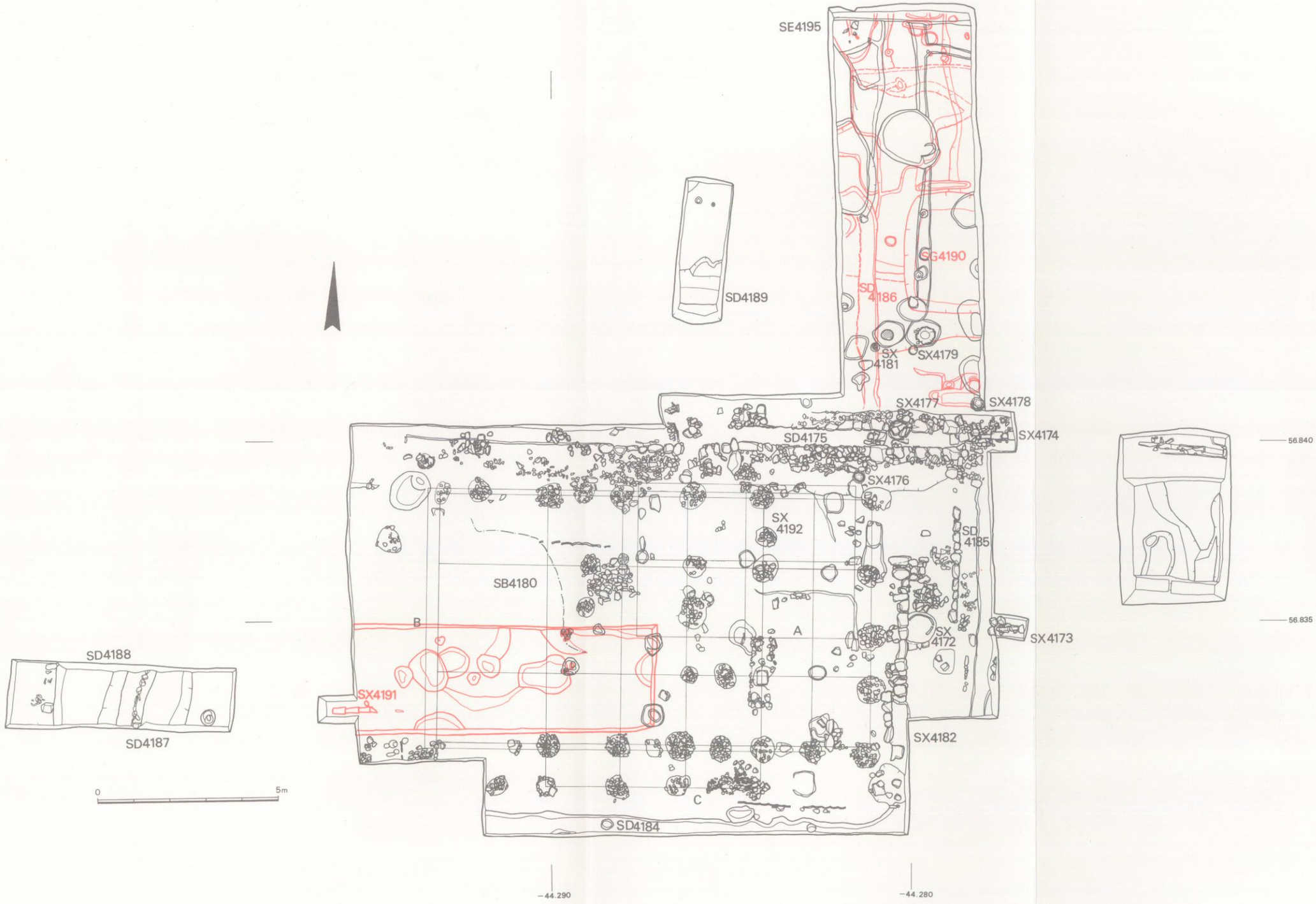
「第130次調査」『大宰府史跡平成４年度発掘調査概報』　九州歴史資料館　1993



第3図　軒平瓦拓影・実測図



第 4 図　戒壇院周辺地形図



第５図　第163次調査遺構配置図

2．第163次調査

本次調査は戒壇院庫裡の全面改築に伴う事前の発掘調査である。戒壇院の庫裡は昭和36年に太宰府役場の庁舎として使用されていた建物を移築したものであり、かなり老朽化が進んでいたが、加えて北部九州に猛威をふるった平成３年の台風17・19号により屋根が損壊したため庫裡改築の現状変更申請が提出され、文化庁の指示を受けて発掘調査を実施した。調査地番は太宰府市観世音寺５丁目192－１で、戒壇院本堂の裏手にあたる。

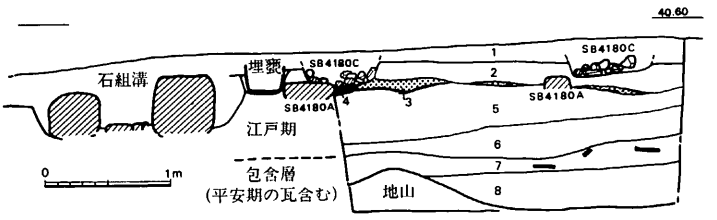
九州歴史資料館は昭和62年度から平成４年度にかけて大宰府史跡第４次５箇年計画として史跡観世音寺及び子院跡の調査を実施したが、戒壇院に関しては第115次調査として南面築地の前面域の調査を行ったのみであり、境内地においては前述の墓碑建立に伴う調査を行った程度である。延喜５(905)年の『観世音寺資財帳』によると、戒壇院には「檜皮葺堂」一棟、「板葺禮堂」一棟、それに北側と東側には戒壇院を囲む「築垣」が存在し、築垣には「瓦葺東門屋」と「檜皮葺西門屋」の二つの門が存在したことが知られる。

今回は、戒壇院境内地における本格的な調査ということで、古代の戒壇院に関わる遺構の検出が期待され、それらに関連する遺構を検出することを目的として調査を行った。庫裡解体後、重機によってＬ字形にトレンチを入れたが、表土直下から礎石の根石と思われるぐり石及び石組が検出されたため大半は人力で掘り下げる結果となった。調査区は庫裡新築部分に主として設定し、調査区の北西部及び南側は排土置き場とし確保していたが、根石・石組溝の検出により幾度となく調査区を拡幅したため調査面積は最終的に278㎡となった。

検出した遺構は、江戸時代の礎石建物・石組溝・井戸・池状遺構などであるが、元禄期の戒壇院復興に関わる貴重な遺構と言うことで、根石・石組溝・井戸・ピットなどにはマサ土を入れて養生し、重機で埋め戻した。古代の遺構としては、調査区の南西側で検出した暗渠遺構SX4191を検出したのみであり、庫裡部分においても地表下１ｍまで江戸期の攪乱が及んでいる。調査は平成６年10月17日に開始し、12月９日で一旦終了したが、便漕埋設部分を追加調査として翌年の１月24日～２月６日にかけて行った。また、庫裡建設にあたっては、業者に調査区全体を50cm程かさ上げしてもらい、遺構の保存措置を図った。

検出遺構

建物部分の層序は上層から①黒色土（表土、10～30cm)、②黄灰色砂質土(10cm程)、③赤橙色土（５cm前後)、④焼土・炭層、⑤褐色土（10～40



第６図　土層模式図

cm)、⑥暗褐色土（10～30cm)、⑦灰褐色包含層（20cm程)、⑧黄色整地層であった。江戸期の礎石建物SB4180Cは、礎石建物SB4180A焼失後、②・③層による整地を行い建てている。⑤・⑥層は締まりのない土質で、⑤層には江戸期の瓦が含まれている。⑦層も締まりがない土質で、平安時代の瓦を多く包含していた。⑧層は整地層で締まりがあり、奈良時代の暗渠遺構SX4191はこの層に埋設されている。

調査区内には昭和期の庫裡のコンクリート基礎（今回改築する建物)、明治期の庫裡の基礎、江戸期の礎石建物の根石が同一平面で重複しており、昭和期のコンクリート基礎に関しては、平板で場所を押さえた後に除去した。近現代の庫裡建物の変遷に関しては、付記に譲ることとし、ここでは江戸時代及びそれ以前の遺構について報告する。

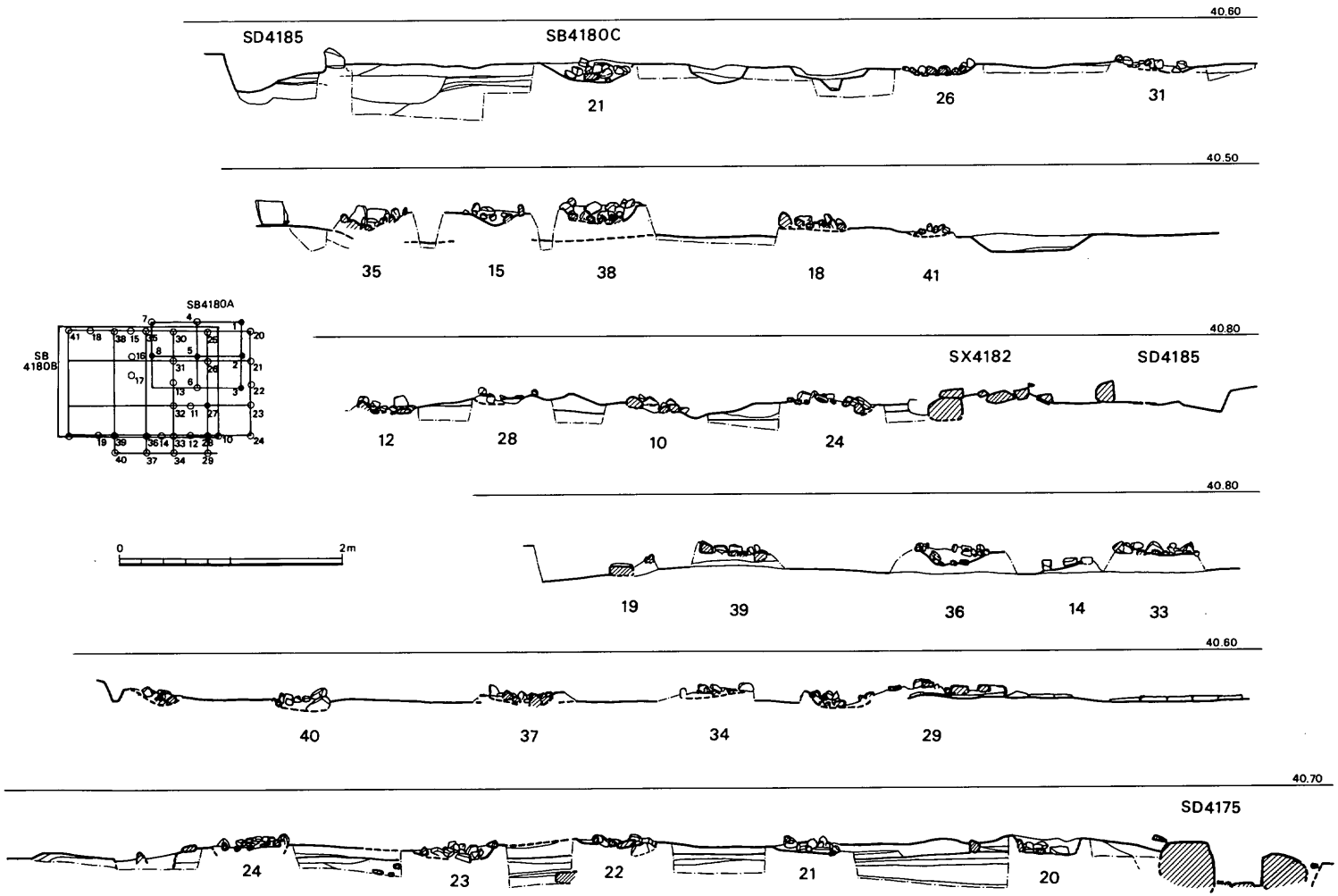
発掘調査の結果、江戸時代の遺構として礎石建物３棟（SB4180A・B・C）とそれに伴う石組溝・雨落ち溝・溜枡・排水施設及び井戸１基、池状遺構１基、埋甕３基、埋桶１基などがある。古代・中世の遺構としては、瓦を並べた暗渠遺構、池状遺構に切られる東西溝、調査区の西端で検出した平安期の瓦を包含する南北溝などを検出した。

掘立柱建物

SB4180A　調査区の中央で、SB4180Cの下層で検出した。レベル的にはSB4180Cの掘形下端とSB4180Aの礎石上端がほぼ等しい高さにある。東西棟の礎石建物で、５個の礎石が残っていた。礎石には30～50cm大の方形に加工した花崗岩を用いている。建物の規模は梁行２間(4.2m)×桁行２間（６m）で、柱間寸法は梁側10尺、桁側７尺を測る。調査においては、上層建物の根石を残した状態で、当建物の礎石が並ぶと予測される部分のみを掘り下げたため建物の全体像は把握しきれていない。また、礎石の上面は火熱により黒変し、建物整地面には炭の間層がみられることから火災により焼失したものと考えられる。

SB4180B　SB4180Cと重複して存在する。両者はレベル的にほぼ等しいが、根石の遺存状況がSB4180Cより悪いことから当建物が先行すると考えられる。東西棟の礎石建物であるが、礎石は全く残っておらず、10個の掘形をとどめるのみであった。掘形は径60cm前後の円形を呈し、中には５～10cm大の礫・瓦片を詰めて根石としている。遺存状態が悪いため建物の詳細は明かではないが、残っている根石からみて梁行４間（7.2m)×桁行５間（10.6m）の規模を想定している。

SB4180C　当建物はSB4180A焼失後に赤橙色土・黄灰色砂質土で30cm程の整地を行い築造している。東西棟の礎石建物であるが、礎石は全く残っておらず、掘形をとどめるのみ。掘形は径50～80cmの円形を呈し、SB4180B同様、角礫・瓦片を詰めて根石としている。建物の規模は梁行３間（6.9m)×桁行５間（12m）である。梁側の柱間は中央間が広く10尺で、北・南側は6.5尺で、桁側は中央間が６尺と狭く、７尺・10尺と左右に広くなる。また、南桁側の1.2m南側には廂を設けているが、南東隅部には桁と平行させ平瓦を３mの長さで埋設していた。



第7図　SB4180断面実測図

礎石建物掘形

SX4192　礎石建物の掘形であるが、対応する建物は不明。掘形の径は0.6mで、角礫・瓦片を詰めて根石とする。

建物基壇石組

SX4182　SB4180C基壇東面の石組で、南桁側柱列から5.6mの長さに築いている。30～40cm大の花崗岩切り石を2段積んだもので、石組溝SD4185同様、積み石の上面が焼けており、SB4180A基壇の積み石を再利用している。また、南端部は幅1.2m、奥行き0.4mの規模で内側に入っており、石を5個並べていた。東南隅の柱間一間分に相当し、階段と考えられる。

溝

SD4175A　建物基壇の北面に築かれた花崗岩の石組溝で、溝の幅は0.35～0.45m、長さは北壁側で6.3m、南壁側は10mに渡って設けている。溝底は西側から東側に緩やかに下がり、西側では30～40cm大の切り石を1段積み、東側では50cm大のやや大振りの切り石を基底部に据え、1段ないしは2段積んでいる。第8図の・印を付した石は上面が火熱により黒変していることから、当石組溝はSB4180Aに伴うものと考えられる。埋土中には17世紀末～18世紀前半代及び18世紀後半～19世紀後半代の陶磁器類が含まれているが、前者の時期をあてておく。

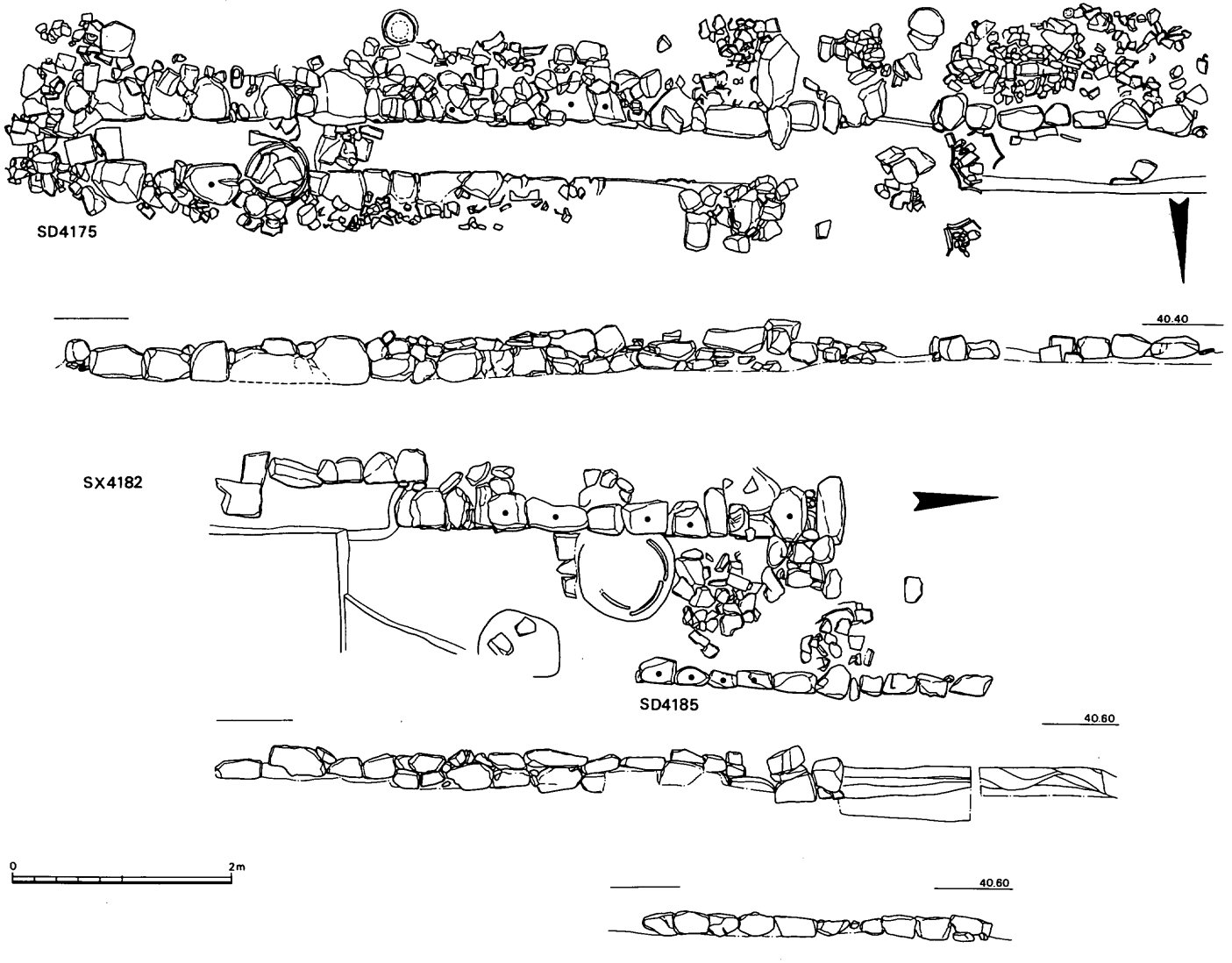
SD4175B　SD4175Aを再利用し、東側に溜枡遺構SX4177を、東端部には土管を使用した排水施設SX4174を設けている。また、SX4174の平瓦はSD4175Aの底面から10cm程上に並べている。SB4180Cに伴うと考えられ、18世紀後半～19世紀後半の時期をあてたい。

SD4184　礎石建物SB4180Cに伴う雨落ち溝で、廂の0.7m南側に設けており、長さは11.6mまで検出した。深さは10cm前後と浅く、褐色の砂質土で埋まっていた。南東端は未掘であるが、南北溝SD4185につながるものと思われる。

SD4185　調査区の東端部で検出した石組の南北溝で、北端はSD4175Bにつながる。溝の規模は未確認であるが、東側に丸瓦を並べた排水施設SX4173があり、溝側に排水していることから幅は0.9m程であろう。石組は西壁の中程にあり、長さ3.2m残っている。20～40cm大の花崗岩切り石を並べたもので、上面が焼けている石があることからSB4180A基壇の積み石を再利用したものと考えられる。

SD4186　調査区の北側に位置し、SB4180Aに伴う黄褐色砂質土の整地層を掘り下げて検出した。南端はSD4175Aに切られており、長さ6.2mを検出したが、西側は調査区外に延る。幅15cmの矢板を打ち込んで護岸としており、矢板の先は西側に曲がっている。また、裏込め内からは「□□十七年」銘の軒丸瓦が出土しており、寛永17（1640）年・享保17（1732）年の何れかであるが、埋土中からは17世紀後半代の染付が出土しており、また17世紀末～18世紀前半としたSD4175Aに切られることから寛永17年としておく。

SD4187　調査区西側のCトレンチ中央で、平安期の溝SD4188の上部で検出した。上面幅0.4



第8図　SD4175・4185・SX4182実測図

mで、東壁側には20cm大の石を並べている。北東－南西方向に傾いているが、トレンチで存在を確認した程度であり、詳細は不明。埋土中から江戸時代の遺物が出土しているが、SB4180Aより0.6m程下がっており、礎石建物より古い時期と考えられる。

SD4188　Cトレンチで検出した溝で、下端幅3.25m、深さ0.3mを測る。当溝も一部を検出したにすぎず、詳細は不明。埋土は締まりのない褐色土で、平安期の瓦が多く出土している。

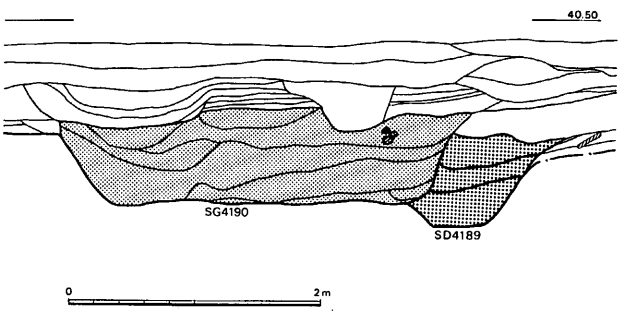
SD4189　調査区の北側で検出した東西溝で、溝状遺構SD4186と池状遺構SG4190に切られる。Bトレンチでも検出しており、長さは8mまで確認している。上端幅1.4m、下端幅0.4m、残存高0.7mのしっかりした溝で、埋土から糸切りの杯と鬼瓦片が出土した。

井戸

SE4195　調査区の北端で検出した井戸で、北半部は調査区外に延びる。井戸枠そのものは残っていないが、枠を留めていた角柱が打ち込まれていることから横板を使用したものと考えられる。掘形幅は1.5mで、埋土中から「戒壇院」銘墨書木札が出土した。

池状遺構

SG4190　石組溝の2.7m北側で、SD4189を切る。東半部は調査区外に延びる。上端幅3.3m、下端幅2.6mで、深さは0.7m。埋土中層及び下層には植物遺体層が堆積し、滞水していた状況を呈しており、墨書木札・漆椀・杓子・下駄などの豊富な木製品の出土があった。また、当遺構からも「□□十七年」銘の軒丸瓦が出土している。



第9図　SD4189・SG4190土層図

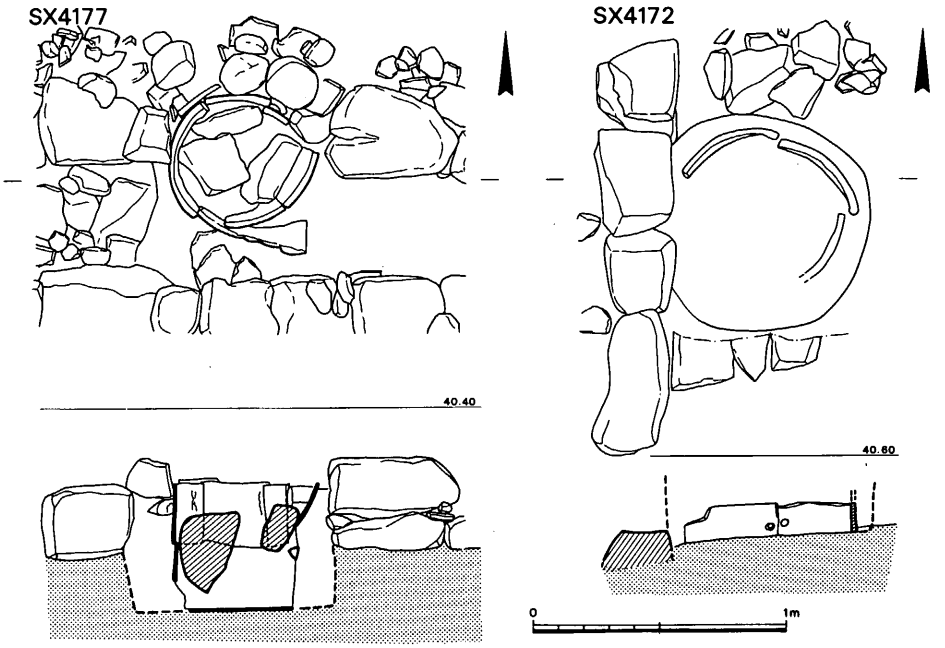
溜枡状遺構

SX4172　SB4180Cの基壇東面石組に接しているが、石組に切られている。掘形は径0.85mの円形で、深さは僅か10cm残存する。枠には平瓦を立てて用いており、復原すると5枚になる。枠の径は0.65mを測る。なお、2枚の瓦の下端部には径3cm程の孔が接して穿たれており、この部分を緊結していたものと思われる。

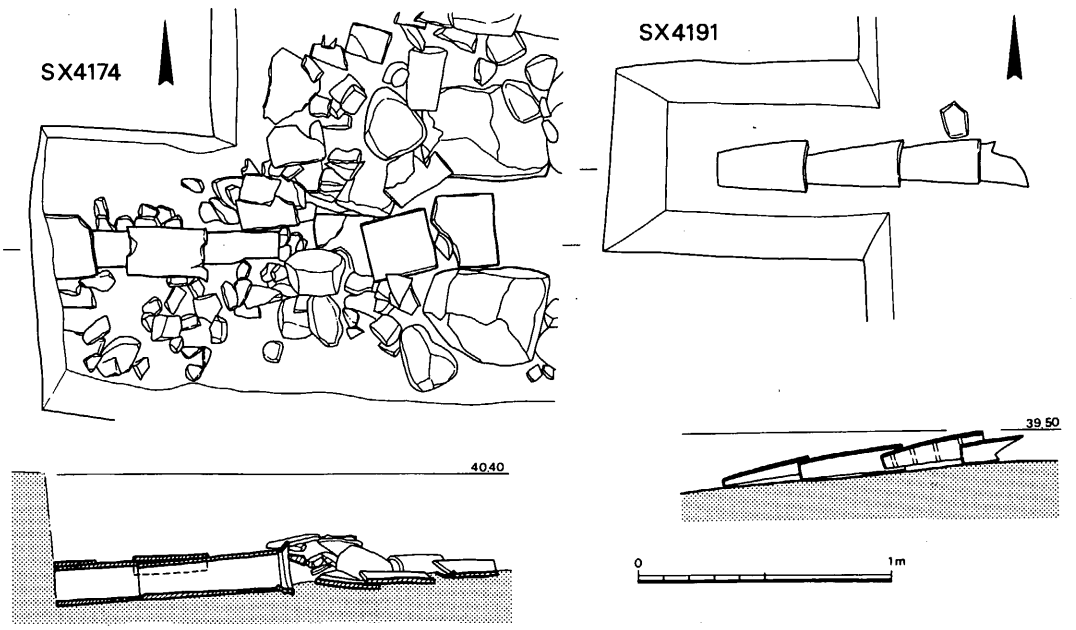
SX4177　SD4175Aの北側石列の一部を除去して構築される。SD4175B・SX4174と一連のものと考えられる。掘形は径0.65mの円形で、深さ0.5mを測る。上部は6枚の平瓦を枠として立て並べ、下部には径0.45m、深さ0.25mの桶を配するが、腐植が著しく底板と側板の一部を残すのみ。枠内には人頭大の石が3個投げ込まれていた。裏込埋土は暗灰色粘質土であった。

排水施設

SX4173　SD4185に排水したもので、丸瓦2個を並べるが、大半は区外に延びる。



第10図　SX4172・4177実測図



第11図　SX4174・4191実測図

SX4174　SD4175Bに伴う排水施設である。基壇の北東隅部から東に8mまで確認したが、発掘区外に延びる。施設は平瓦部と土管部に分かれる。平瓦は東に流れるように3枚連なって配され、土管部分に接続する。土管は長さ60～70cm、径15cm。これらの土管の継目には瓦当面を打ち欠いた軒丸瓦や平瓦を被せているため、この部分は暗渠であったものと考えられる。

SX4191　発掘区の西南隅部下層で検出した暗渠施設。地山直上で行基式丸瓦が3個体と玉縁を打ち欠いた丸瓦1個が連なった形で出土した。瓦は水が西に流れるように配され、据えられた面は両下端部で8cm程西側が低くなっている。延長部分を掘り下げたが瓦列は連続しておらず、また、これに伴う溝等の遺構も確認していない。

甕埋設遺構

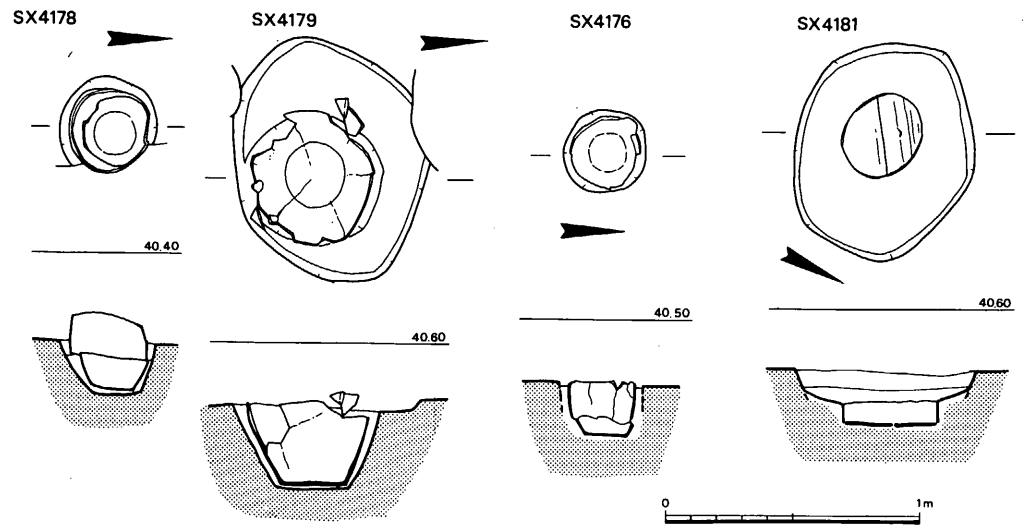
SX4176　SB4180Cの北東隅柱のすぐ北側で検出した小型の埋甕で、SD4175Aの掘形を切っている。掘形のプランは円形で、上端径0.35m、深さ0.2mを測る。

SX4178　SX4174の北側で検出した小型の埋甕。掘形のプランは円形で、上端径0.35m、下端径0.2mを測る。甕は僅か北側に傾斜して据えられる。

SX4179　SG4190の南側で検出した。掘形のプランは楕円形で、上端径1.0×0.8m、下端径0.35m、深さ0.3mを測る。掘形の西南隅に接して径20cmのピットが存在するが、建物の覆いに関係するものであろうか。

桶埋設遺構

SX4181　SX4179の西に接する桶埋設遺構で、これとセットをなすものか。掘形のプランは楕円形で、上端径0.85×0.7m、深さ0.25mを測る。掘形の中心に径38cmの桶枠が残るが腐植が著しい。底板は2枚。SX4179同様、掘形の西南隅部に接して径20cmのピットが存在する。



第12図　埋甕・桶埋設遺構実測図

出土遺物

SD4175掘形上面出土土器・陶磁器（第13図、図版23）

SD4175の掘形上面からは、石組溝の裏込め石に混じって土器・陶磁器・瓦片が出土しているが、近世陶磁器類はSB4180B・Cに伴うものと考えられる。

須恵器

長頸壺（1）　長頸壺の口頸部破片。口縁部は緩く外反して立ち上がり、頸部と口縁部との境は明瞭ではない。上位に2条の沈線を巡らす。口径11.1cm。

土師質土器

鉢（2）　体部は直線的に立ち上がり、口縁端部はシャープに仕上げて上に面をつくる。内外面ハケ目調整。暗茶褐色を呈し、体部外面には煤が付着する。器高3.7cm、復原口径15.2cm。

中国陶磁器

白磁

皿（3）　見込は釉を蛇の目状にカキ取っている。外面は高台畳付部以外を施釉している。釉・胎土ともに白褐色を呈する。高台径4.4cm。

青磁

椀（4）　龍泉窯系の青磁椀。高台畳付部から内側が露胎。釉は青緑色、胎土は灰色を呈する。

日本製陶磁器

染付

蓋（5）　肥前系広東椀の蓋で、復原口径9.9cm。外面の文様は草花文であろうか。内面の天井部中央には「寿」の文字がある。1780年代～19世紀前半のもの。

陶器

椀（6・7）　6は関西系の陶器で、口径11.2cm、器高5.5cm、底径4.7cmを測る。体部中位の屈曲部付近は手持ちヘラ削りを行う。釉は灰緑色で、胎土は淡褐色。18世紀末のもの。7は京焼風の陶器で、体部は丸い。外面には（松）竹梅を赤・青・緑の3色で描いている。18世紀代のもの。口径9.0cm、器高5.8cm、底径3.3cm。

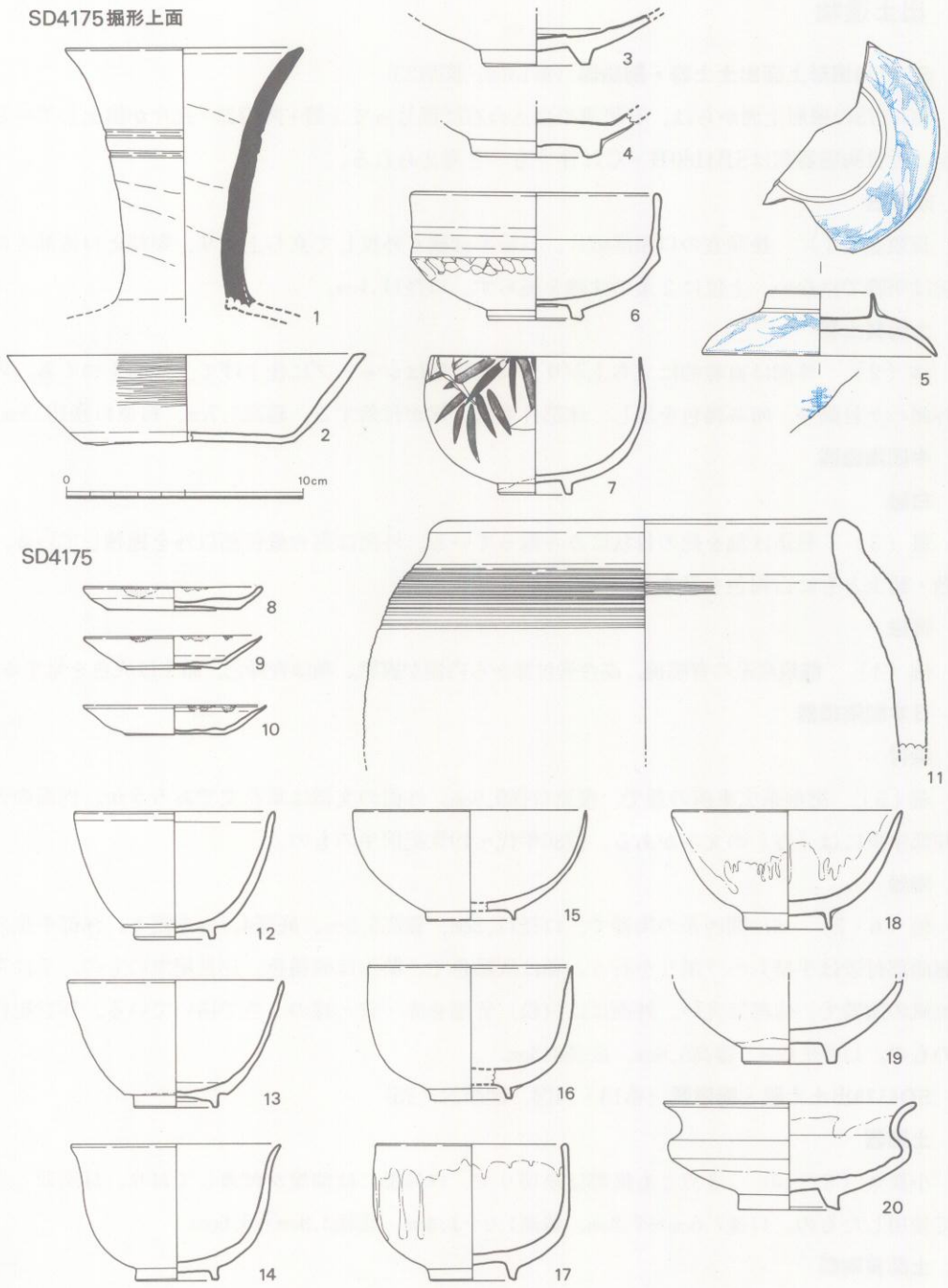
SD4175出土土器・陶磁器（第13・14図、図版24・25）

土師器

小皿a（8～10）　3点とも底部は糸切りで、口縁部には油煙が付着しており、灯明皿として使用したもの。口径7.6cm～7.8cm、器高1.0～1.4cm、底径3.9cm～5.6cm。

土師質陶器

壺（11）　無釉の短頸壺で、復原口径は16.8cm。口縁部を除き、内外面ともカキ目調整による。口縁部はヨコナデ。

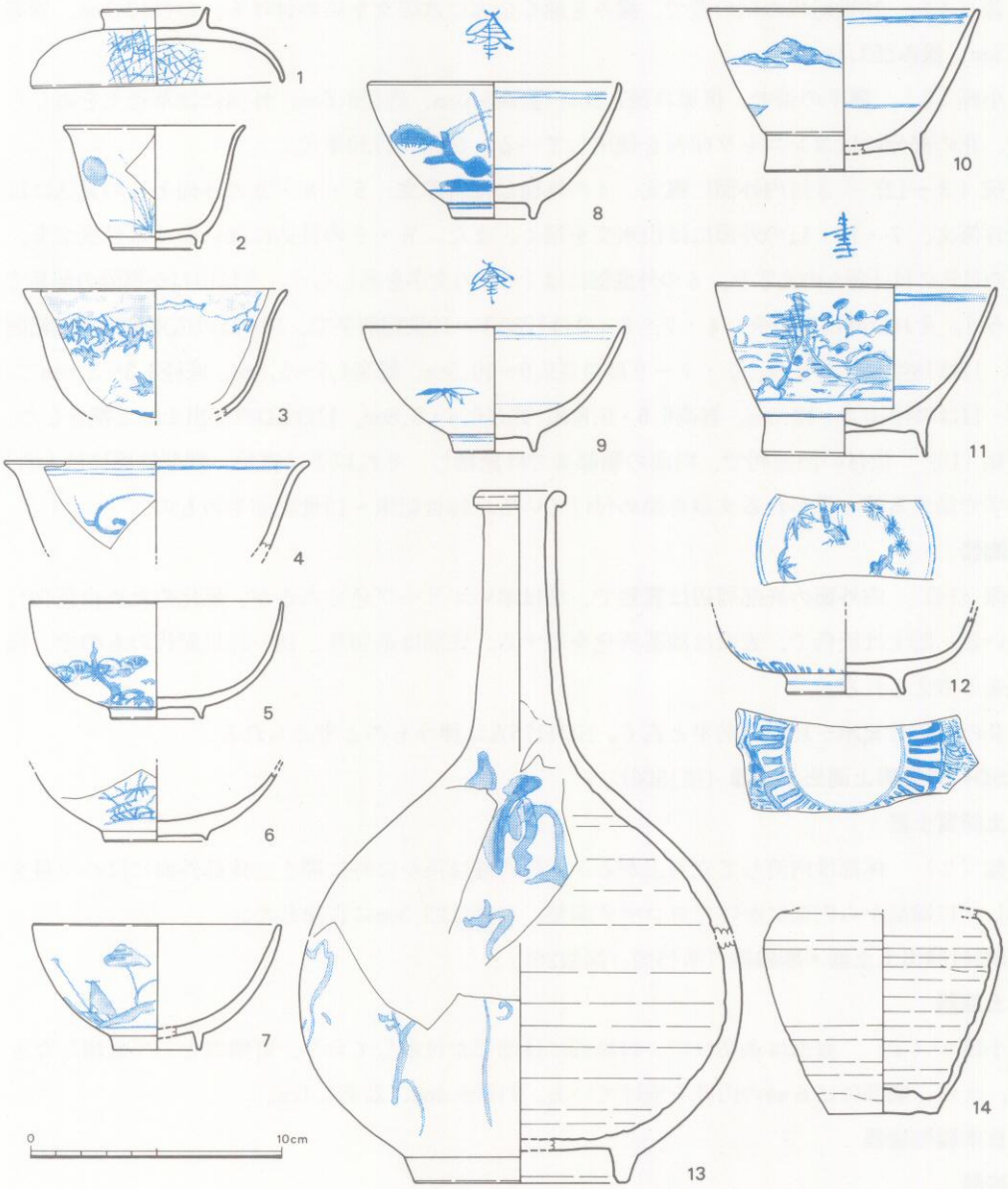


第13図　SD4175出土土器・陶磁器実測図

日本製陶磁器

白磁

椀（12～19）　18世紀後半～幕末頃の湯呑み椀。12～14は関西系、16～19は在地のものであろう。12～14には細かい貫入がみられる。17は口縁部全体に、18は口縁部の片方の半分弱に鉄



第14図　SD4175出土陶磁器実測図

釉を流しかけている。12は口径8.5cm、器高5.4cm、底径3.6cm。

香炉（20）　口径10.8cm、器高4.6cm、底径4.3cmで、口縁部はS字形に屈曲する。内面と体部下位は露胎。底部内面には砂状のものを塗っている。18世紀末～幕末のもので、須恵または筑後地方の製品であろう。

染付

蓋（1）　18世紀代の椀の蓋で、摘みを除く全面に氷裂文を染め付ける。口径10.1cm、器高4.3cm、摘み径3.1cm。

小杯（2）　薄手の盃で、復原口径7.2cm、器高5.0cm、底径3.6cm。外面には草花文をあしらい、花の部分にはコンニャク印判を使用している。1690～1730年代。

椀（3～12）　3は内外面に楓文、4の外面には唐草文、5・8・9の外面と12の見込には松竹梅文、7・10・11の外面には山水文を描く。また、8・9の見込にはいわゆる昆虫文を、11の見込には「寿」の文字を、6の外底部には「せ」の文字をあしらう。5は山口か福岡の製品であろう。それ以外は肥前系。4・7・8・9は1780年～19世紀前半で、10・11の広東椀は19世紀前半、12は18世紀代のもの。5・7～9は口径9.9～10.5cm、器高4.7～5.5cm、底径3.3～3.8cmで、10・11は口径10.8・12.3cm、器高6.5・6.8cm、底径6.4・5.8cm。11はSD4185出土品と接合した。

瓶（13）　染付の酒徳利で、内面の頸部までは施釉し、それ以下は露胎。胴部外面には「酒」の字で始まる詩と思われる文章を染め付けている。18世紀末～19世紀前半のもの。

陶器

壺（14）　内外面の底部周辺は露胎で、釉は濃いオリーブ色であるが、風化のため白色化している。胎土は灰色で、表面は淡茶灰色を呈する。底部は糸切り。18～19世紀代のもので、福岡産と考えられる。

2のみ17世紀末～18世紀前半と古く、SD4175Aに伴うものと考えられる。

SD4185掘形上面出土土器（第15図）

土師質土器

盤（2）　体部は内湾して立ち上がるが、口唇部は僅かに外に開く。体部外面にはハケ目を施し、口縁部から内面にかけてヨコナデ調整。口径は23.3cmに復原した。

SD4185出土土器・陶磁器（第15図、図版26）

土師器

小皿a（1）　底部は糸切りで、口縁部には油煙が付着しており、灯明皿として使用したもの。また、底部には6㎜の円孔を空けている。口径8.4cm、器高1.1cm。

日本製陶磁器

磁器

椀（3）　関西系の湯呑み椀。高台部周辺を除く全面に施釉する。釉は透明で貫入がみられ

る。胎土は白色。18世紀末～19世紀代のもの。

陶器

灯火器（4）　油皿部の一部を切り込んでおり、この部分から油芯を出して火を灯すと考えられる。内面のみ施釉するが、油皿部上端は削り取る。釉は灰緑色で、胎土は灰色。関西系と思われるが、地元窯の可能性もある。江戸後期のもの。

蓋（5）　関西系の鍋の蓋。内面のみ施釉する。外面は露胎で、回転ヘラ磨き調整の後に鉄絵と白色顔料で梅を描く。釉は灰緑色、胎土は褐色を呈する。江戸後期のもの。

土瓶（6）　体部の中央で屈曲して、算盤玉形をなす。屈曲部のやや上方に円孔を空けて注口を貼付する。外面の屈曲部から下はカキ目調整を施す。屈曲部から口縁部内面にかけて施釉するが、口唇部は露胎。釉は暗黄茶色で、胎土は赤灰色を呈する。口径10.1cm、器高11.2cm、底径7.4cmで、胴部最大径は12.6cm。18世紀後半～19世紀前半のもの。

鍋（7）　口縁部の2箇所に∩形の取っ手を貼付する。底部には突起状の脚を3個張り付けているが、形骸化しており、一脚のみが接地する。外面の体部下位から底部にかけてが露胎で、それ以外は茶色の釉をかけている。胎土は灰色。関西系かと思われるが、福岡産の可能性もある。18世紀中葉～江戸後期。

SD4186出土土器・陶磁器（第15図、図版26）

土師器

小皿（8）　底部はヘラ切りで、板状圧痕がみられる。口径9.6cm、器高1.0cm、底径7.0cm。

日本製陶器

椀（9・10）　9の内面は施釉するが、風化している。外面は露胎。また、内底部には目跡が見られる。唐津系。10は京焼風の椀で、復原口径12.4cm、器高5.1cm、底径4.5cm。見込には山水文を描く。底部外面にはヘラ先で「清（水）」の文字を書く。外面の高台部周辺は露胎。また、割れ口の一部に漆が付着しており、漆継ぎを施したものであろう。1660～1690年代。

鉢（11）　口縁部の小片で、内側に突出する。内面はカキ目状のナデ、口縁部上面はミガキ。外面は風化により器面が荒れている。内面黒色、口縁部は淡赤褐色を呈する。

SD4187出土土器・陶磁器（第15図、図版26）

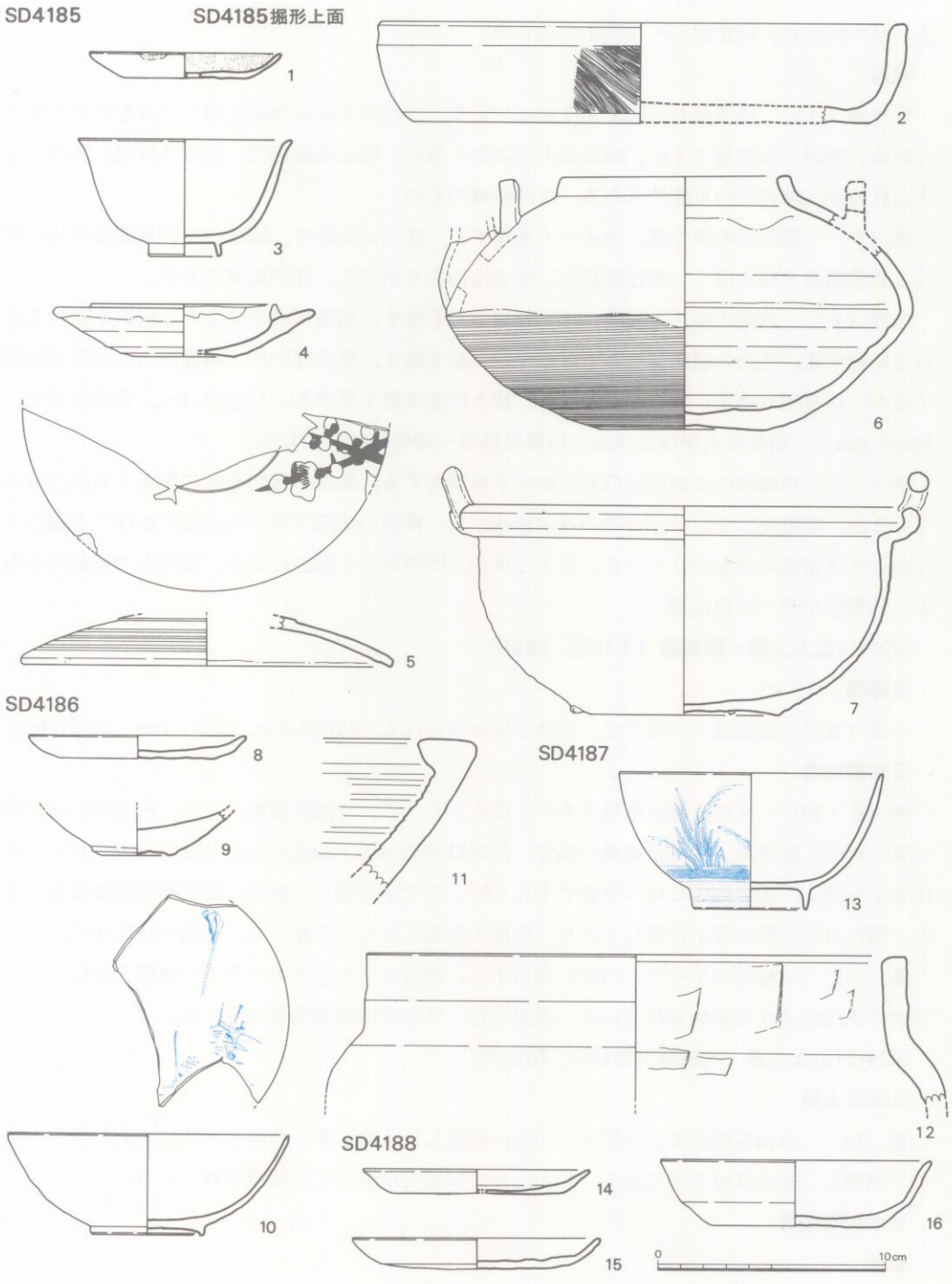
土師質土器

壺（12）　口縁部破片で、口径は24.0cmに復原した。直立する口縁部と体部の内外面をヘラナデ調整し、器面は滑らかである。胎土に砂粒の混入は少なく、精製されている。

日本製陶磁器

染付

椀（13）　川辺の薄をモチーフとして描く。やや黄色味ある白地に淡い青で明瞭な絵付けをしている。1670～1690年代。



第15図　SD4185・4186・4187・4188出土土器・陶磁器実測図

SD4188出土土器（第15図、図版26）

土師器

小皿（14・15）　底部はヘラ切り離しによる。口径は14が10.0cm・15は11.0cm、器高は14が1.1cm・15は1.4cm、底径は14が7.6cm。

杯（16）　復原口径12.0cm、器高3.0cm、底径7.5cmで、底部はヘラ切り離し。

SD4189出土土器（第20図）

須恵器

皿（2）　小片であるが、口径は24.8cmに復原した。底部外面はヘラ削り、口縁部内面はヘラナデ、その他はヨコナデ調整。

土師器

杯（1）　口径12.8cm、器高2.9cm。底部は糸切りで、板状圧痕が残る。

SE4195出土陶磁器（第20図）

日本製磁器

染付

蓋（3）　内面に蓋受けのかえりを有し、かえりの外面と受部は露胎。外面には葡萄文を描く。復原口径11.4cmで、18世紀前半のもの。

SG4190出土土器・陶磁器実測図（第16図、図版27・28）

土師質土器

壺（14）　土師質のもので、器面が剥離しているため調整不明。

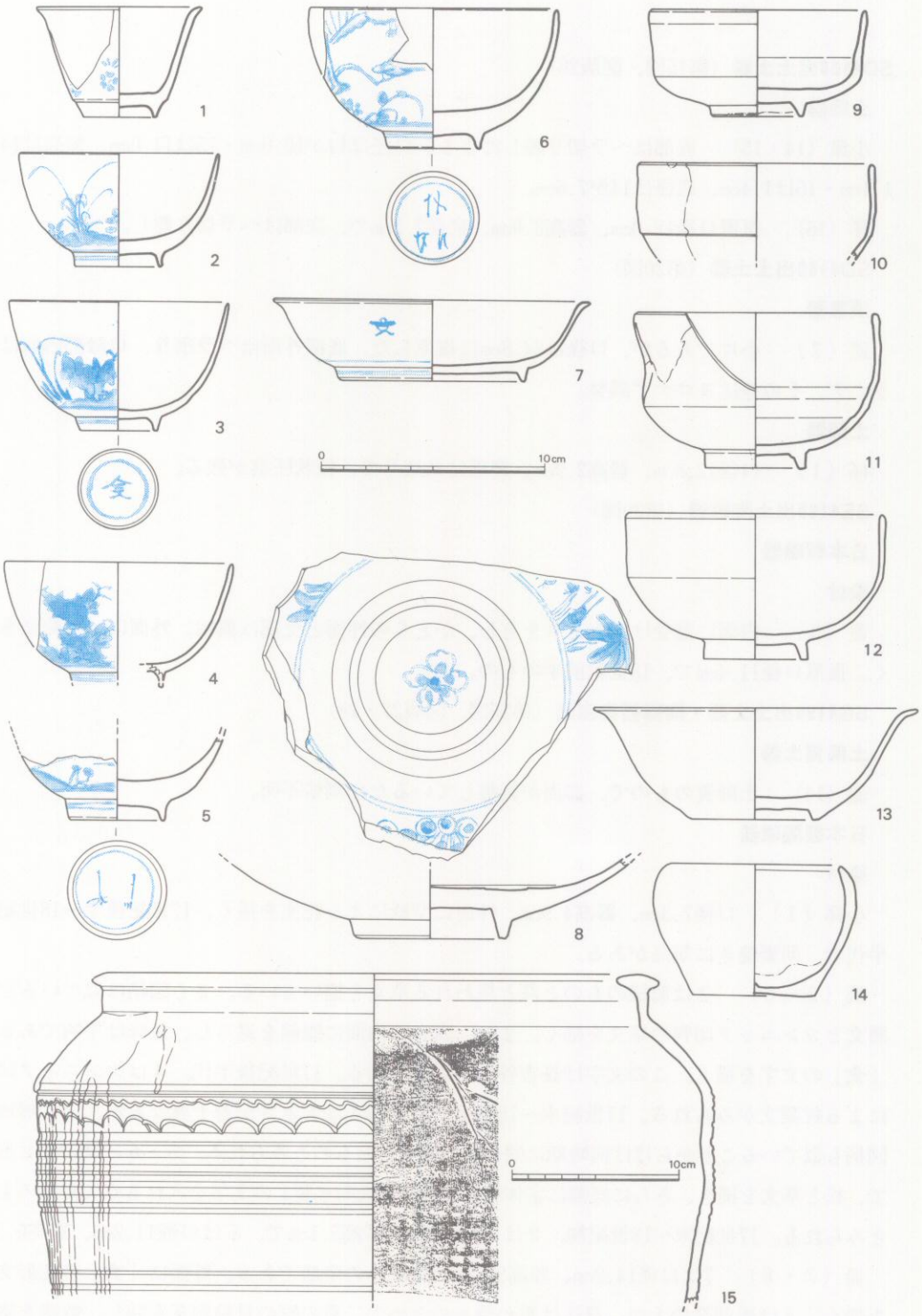
日本製陶磁器

染付

小杯（1）　口径7.3cm、器高4.9cm。外面に型紙による花文を描く。17世紀後半～18世紀前半代で、朝妻焼きに類品がある。

椀（2～6）　2は蘭様のものと萩と思われる草文を描いている。3も図柄は似ているが、蘭文とコンニャク印判の草文を描く。また、高台の内面に圏線を巡らし、意味は不明であるが「**吉**」の文字を描く。この文字は長吉谷窯跡にみられる。17世紀後半代。4はコンニャク印判による紅葉文がみられる。17世紀末～18世紀初。2～4は大きさが若干異なるが、同じ形態で図柄も似ていることからほぼ同時期に同じ窯で焼かれたものとみられる。5・6はほぼ同じ形態で、松と草文を描き、さらに底部に字体は異なるが「大明年製」の文字を入れる点同時期のものとみられる。17世紀末～18世紀初。2は口径8.9cm、器高5.1cmで、6は口径11.2cm、器高6.3cm。

皿（7・8）　7は口径14.2cm、器高3.7cmの端反りの中皿である。外面に「**女**」の変形文字を描く。8は肥前系の大皿。見込は重ね焼きのための二重の蛇の目釉剥ぎを施し、鉄錆を塗る。見込の中心には桜、周囲には八つ手文様が見える。今回報告する中では古期に属し、17世紀後



第16図　SG4190出土陶磁器実測図

半代のものである。

陶器

椀（9～13）　9は関西系であるが、在地産の可能性も強い湯呑みである。灰色味の強い淡緑黄色を呈し、体部下半は露胎である。18世紀代。10～13は小石原系（上の原・樋口谷窯か）の椀である。10～12は畳付部を露胎とする他は全体に錆釉をかけ、部分的に鉄釉をかける。11は体部の一部を窪ませ趣をもたせている。13は碁笥底の端反り椀である。高台の見込部分を除いて全体に錆釉をかけ、その上から全体に光沢のある鉄釉を施す。17世紀末～18世紀末。

甕（15）　肥前系の甕である。口縁端部をT字状に肥厚させる。体部の上位に波状文と数条の圏線を巡らす。内面には格子目の当具痕がある。肩部に薄い円盤状の耳を貼付する。内外面には暗褐色の釉を薄く施す。復原口径33.8cmで、17世紀末～18世紀末。

SX4177出土陶磁器（第20図、図版28）

日本製陶磁器

染付

椀（4）　肥前系の小椀で、口径9.8cm、器高4.6cm、高台径3.4cm。垣根と菊を描くが、焼成が悪く呉須は良好でない。18世紀末～19世紀。

黒釉

椀（5）　関西系とみられるが、在地の端反りの小椀の可能性もある。外底部は露胎で、全面に黒釉を施す。19世紀代。

SX4184出土土器・陶磁器（第20図、図版28）

土師器

小皿c（6）　口径8.2cm、器高2.7cmで、底部には高台を貼付する。底部は糸切り離し。

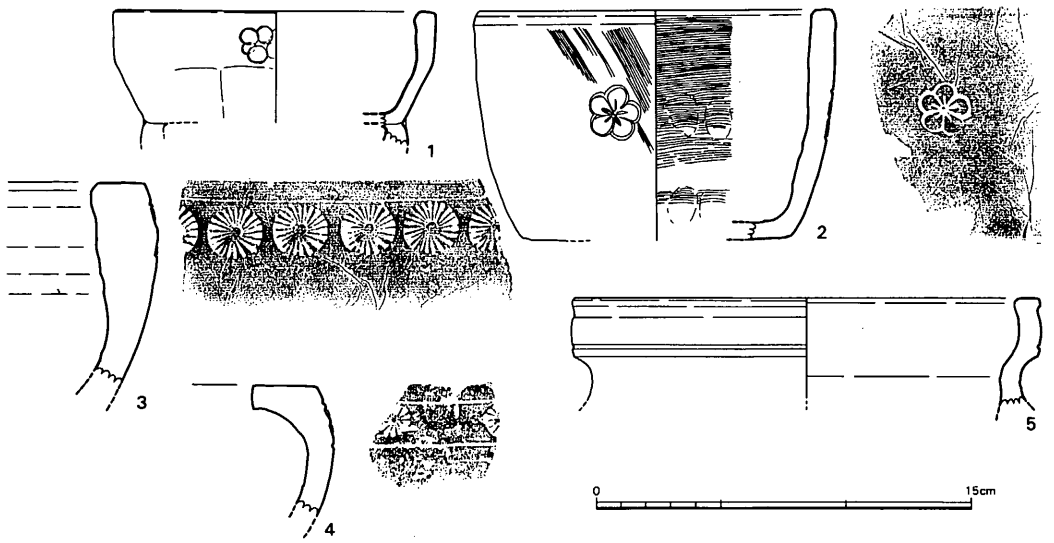
染付

高杯（7）　脚裾を欠くが、仏飯器になろう。染付は濃い青色で文様が描かれる。

瓦質土器（第17図、図版29）

鉢（1・2）　1は口径12.9cm、深さ4.5cmの小型の鉢である。完形ではないが、脚1個が認められる。脚が何個あったのかは残存部からは判らないが、他例からすると3脚であろう。焼成が悪く器面が荒れているが、体部の上位と口縁部はヨコナデで、体部下半の外面はヘラケズリで、内面は指オサエとナデによる。内面の中位から口縁部は煤で部分的に黒くなっている。外面の口縁部付近には梅花の印刻文が不規則ではあるが間隔をおいて巡る。大きさと内面の煤からみて香鉢すなわち線香立であろう。SD4186の出土。

2も口径14cm、深さ13.5cmの小型の鉢である。底部端に脚の貼付痕が僅かに認められる。体部と口縁部は全面にわたって細かいハケ目調整する。内面に指オサエ痕がある。体部の中位付近に梅花の印刻文が1個みられる。残存部の状況から判断して、梅花文はかなりの間隔をもっ



第17図　瓦質土器実測図

て押印されていたとみられる。焼成は良好で硬く焼き上がっているが、燻しが完全でないため部分的に茶褐色を呈する。茶褐色土層からの出土。

火鉢（３・４）　３は口縁部の小片で、復原口径は不確実であるが54cm前後になろう。外面はヘラ磨きを施しており、器面は滑らかである。口縁部に１条の沈線と菊花の印刻文を連続して押印する。４は口縁部を「く」字状に折り曲げた小型の火鉢である。外面はヘラ磨きを施し、器面を滑らかにしている。口縁部には２条の沈線と菊花の印刻文をやや間隔をおいてスタンプする。３はSD4175Ｂ掘形上面の出土で、４はSD4185掘形の出土。

壺（５）　壺の口縁部片である。復原口径18.6cmで、二重口縁風になった端部を平坦にする。外面はヘラ磨きにより器面調整し、内面は細かいハケ目により整える。また、口縁部の外面には朱を塗った痕跡が部分的にみられる。Ｃトレンチ上層の褐色土の出土。

SX4176・4178・4179出土土器（第18図、図版29）

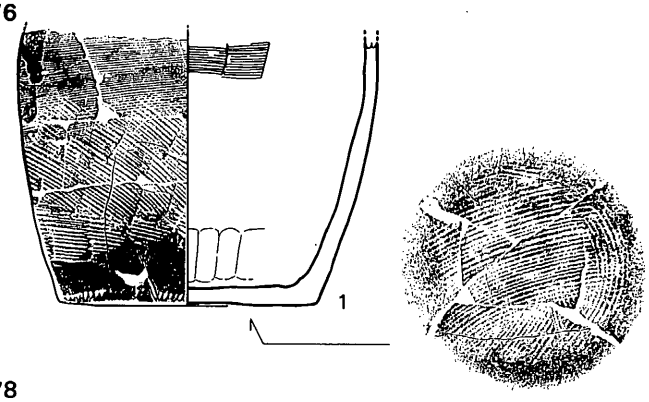
瓦質土器

甕（１・２）　１・２とも胴下半部の資料であるが、口縁部は短頸の直立するものになろう。１は胴部最大径28.4cm、底径20.5cm。外面中位に横方向、下位に斜めの方向のハケ目を施し、下端はハケ目の後回転ヘラ削り調整。底部外面もハケ目調整。内面は胴部中位と底部にハケ目を施すが、胴部下位はナデ調整。２は最大径36.5cm、底径21.8cm。外面は上から順に横・斜め・横方向のハケ目調整で、下端部は回転ヘラ削り調整。１と同じく底部外面にもハケ目を施す。内面は胴部が横方向のハケ目調整、底部はヨコナデ・ナデ調整で仕上げる。

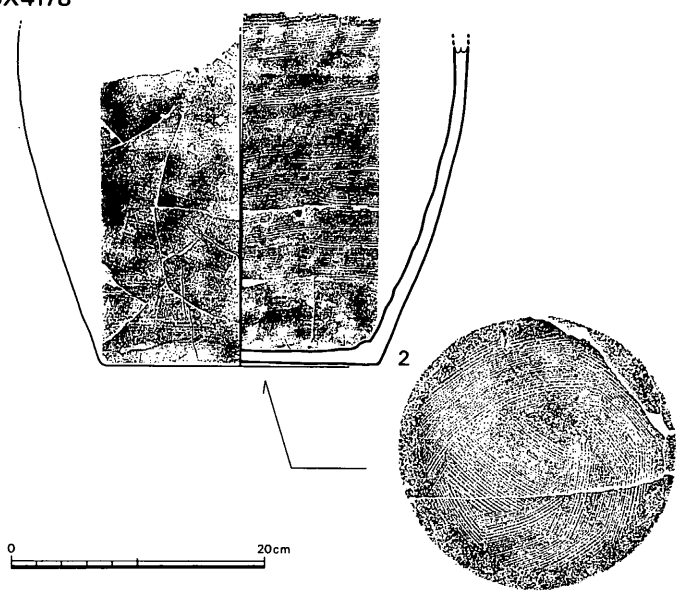
陶器

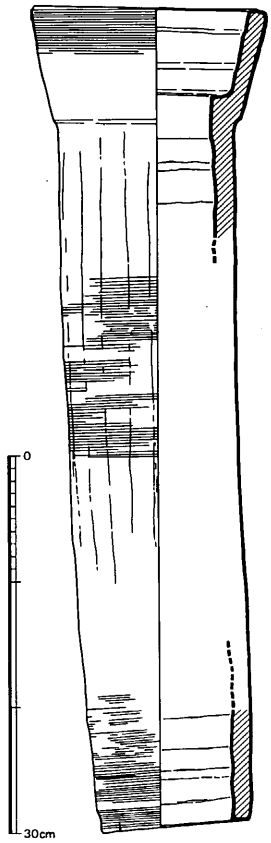
甕（３）　内外面全面に暗茶色の釉を施釉するも、外面上半部は茶色を呈する。底径27.6cm。

SX4176



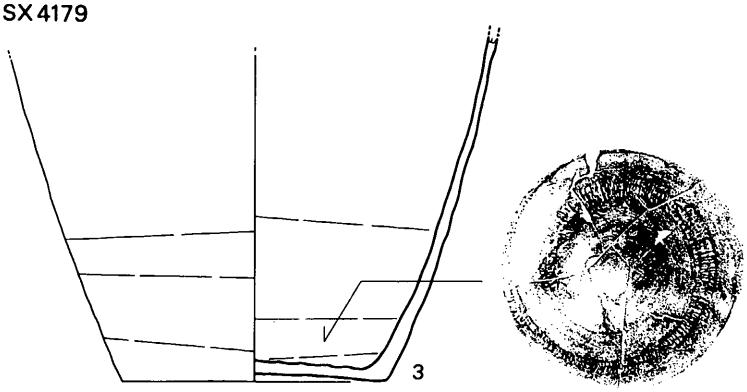
SX4178





第19図　SX4174出土
土管実測図

SX4179



第18図　SX4176・4178・4179出土埋甕実測図

SX4174出土陶器（第19図、図版43）

土管　全長66.0cm、接合部広端径18.5cm、狭端径12.0cm程の大きさである。土管の表面は柾目板状の工具により横方向にナデ調整をした後、縦方向にナデツケて仕上げている。接合部広端には、柾目状工具によるヨコナデ痕跡が明瞭に残る。表面は灰かぐらによって光沢のある茶褐色飴色となっているが、狭端部下半はくすんだ灰色で光沢はない。内側には粘土を輪積した後、横方向にナデツケした痕が残り、凹凸面が連続している。広端接合部と本体部分とは広端接合部を一回り大きく作って貼り合わせている。

土管は輪積によって作られていることや製作法からくる歪みがあることをみるとそう新しいものではない。SD4175はSB4180Cの雨落ち溝であり、SB4180Cは元禄14年以降の建物と考えている。ただ、SX4174の土管は、遺構の検出状況から一部破損した後に補った痕跡がある。従って、元禄14年以降に据え付けられたものと考えている。

この土管の類似資料として、小石原村教育委員会が調査した中野上の原古窯跡（註１）がある。この窯跡の最終の焼成段階で焼き上げられた土管はすべて輪積されたものの7ようである。ここで焼かれた土管の長さは70cm前後と報告されている。ほとんどの土管の接合部の径は、今回の出土例より大きいが、接合部広端で20cm程のものも中にはある。また、中野上の原古窯跡の土管にはヘラ書き銘があり、その１点には「□保七年」と書かれており、享保七（1722）年と推定されている。戒壇院出土の土管の製作年代を上の原古窯跡との比較から直ちに推測することは困難であるが、SD4175を切って作られた溜枡（SX4177）に「元禄十四年」銘の戒壇院楼門の瓦が使われていて、この溜枡とSX4174が対応関係にあることを考慮すれば、上の原古窯跡出土土管との製作年代の近似を考えても良いのではないだろうか。

層位出土土器

上層出土土器・陶磁器（第20図）

土師器

小皿ａ（８）　口径8.2cm、器高1.2cm。底部は糸切り離しである。

小皿ｃ（９）　口径9.2cm、器高2.5cm。底部には高台を貼付する。糸切り離しである。

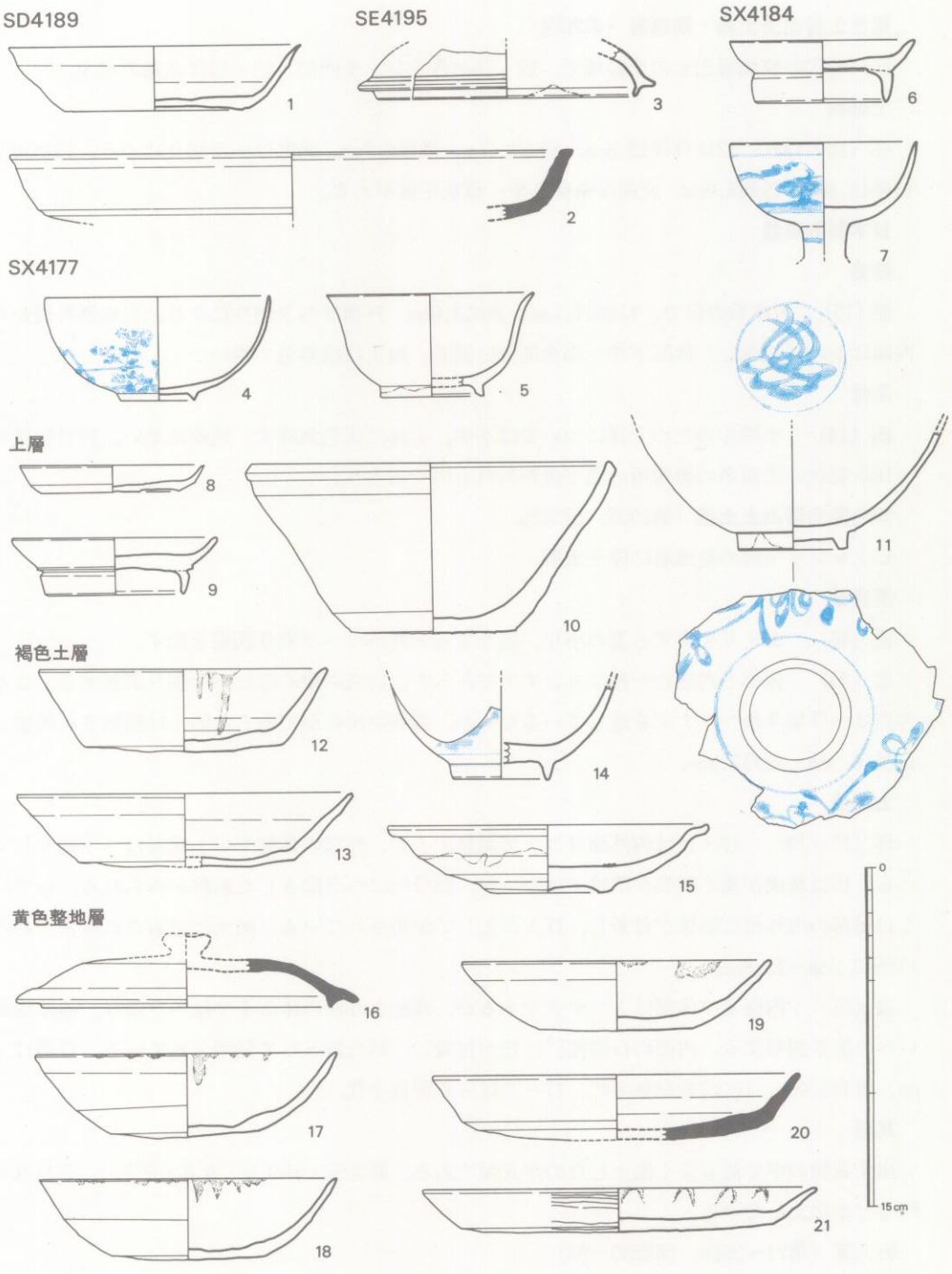
須恵器系土器

鉢（10）　東播系のコネ鉢である。口径16.0cm、器高7.5cmで、口縁部を玉縁状に肥厚させる。体部は内外面を刷毛目調整し、外面の底部付近はヘラ削りを施す。底部には板状圧痕を残す。

中国陶磁器

染付

椀（11）　口縁部を欠失し全形は不明であるが、中国南部（福建省付近）の産であろう。見込には一条の圏線と変形の宝珠文を、体部外面には簡略化された唐草文を描く。染付は薄墨色を帯びており、粗製の椀である。大宰府での出土は初めてのもので、16世紀末～17世紀初。



第20図　SD4189・SE4195・SX4177・SX4184・層位出土土器・陶磁器実測図

褐色土層出土土器・陶磁器（第20図）

江戸時代の整地層出土の土器類で、12・15がAトレンチ西側、13・14は北側の出土。

土師器

杯（12・13）　12は口径12.8cm、器高3.7cm、底径8.7cm。底部はヘラ切りによる。13は復原口径14.8cm、器高3.0cm。底部は糸切りで、板状圧痕がある。

日本製陶磁器

陶器

皿（15）　唐津系の皿で、口径14.1cm、器高3.0cm。外面はヘラ削りにより、口縁部外面から内面にかけて施釉し、体部下半～高台部分は露胎。胎土は淡茶色で粗い。

染付

椀（14）　小破片のため文様については不明。全体に灰色気味で、焼成は悪い。17世紀後半～18世紀代の肥前系の雑器用の窯で焼かれたものであろう。

黄色整地層出土土器（第20図、図版29）

Cトレンチ下層の整地層に伴う土器。

須恵器

蓋（16）　かえりを有する蓋の小片。残存する天井部はヘラ削り調整を施す。

皿（20）　体部と内底の一部はヨコナデであるが、内底の中心部はヘラ削り調整する。また、外底はヘラ切り後ヘラナデを施しているためか、器面が滑らかである。胎土は精製され緻密。口径16.3cm、器高2.9cm。

土師器

杯（17～19）　17・18は内外面ヨコナデ調整するが、外面の体部下半と底部はヘラ削りしている。19は焼成が悪く調整が明瞭ではないが、部分的にヘラ磨きした痕跡がみられる。いずれも口縁部の内外面に油煙が付着し、灯火器として使用されている。胎土は精製され緻密である。口径13.2cm～13.8cm。

皿（21）　内面及び体部はヨコナデであるが、底部と外面の体部下半はヘラ削り。他は細かいヘラ磨き調整する。内面の口縁部に油煙が付着し、灯火器として使用されている。口径17.4cm、器高2.0cm。16は7世紀後半代、17～21は8世紀後半代。

瓦類

出土遺物の中で最も多く出土したのが瓦類である。軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦片・道具瓦・塼などが出土している。

軒丸瓦（第21～25図、図版30～34）

総点数にして125点出土し、奈良・平安期のもの34点（27%）、巴文軒丸瓦67点（53%）、文字瓦12点（10%）、分類不能12点（10%）である。巴文軒丸瓦については、今後細かい編年などを

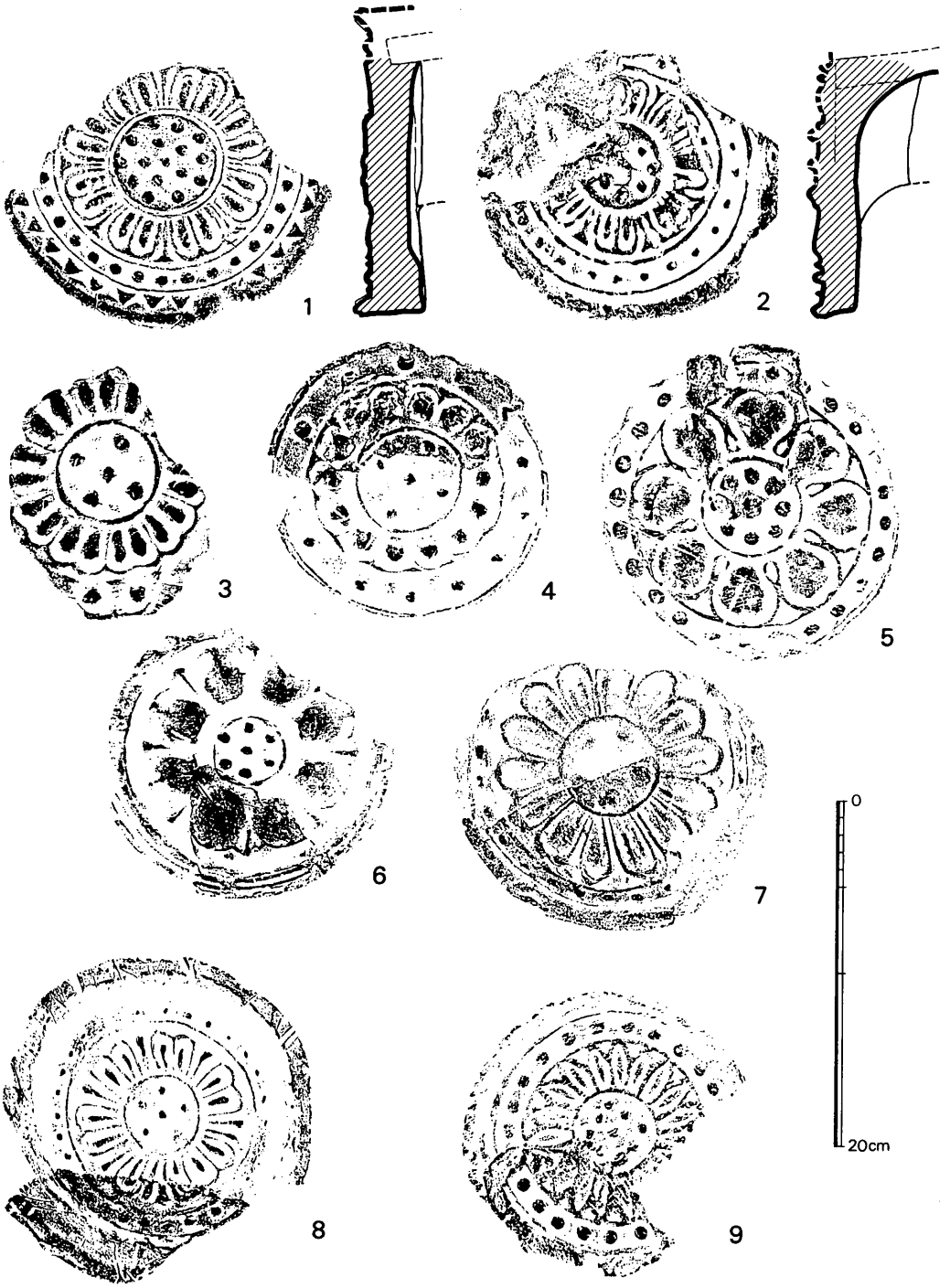
確立する必要があるが、暫定的な編年観については、第126次調査(観世音寺講堂跡の調査『大宰府史跡』平成3年度発掘調査概報参照)でⅠ～Ⅲ類に分類し、Ⅰ類を鎌倉時代から天正14(1586)年頃に、Ⅱ類を江戸時代の前半を中心とした時期に、Ⅲ類を明治時代以降のものと考えた。今回出土の巴文軒丸瓦は、同じ観世音寺境内地であることもあって等質の資料である部分が多い。

観世音寺講堂跡での分類に今回出土の巴文軒丸瓦を対応させれば、Ⅰ類21点(17%)・Ⅱ類27点(21%)・Ⅲ類19点(15%)となる。さらに、瓦当に「戒壇」などの文字を入れた軒瓦12点(10%)がある。文字瓦当のなかには、明治時代以降のものも戒壇院で使用しているが、今回出土のものは江戸時代のものと判断した。このことから、出土軒丸瓦125点について時代順に整理すれば、古代(奈良・平安時代)34点(27%)、中世(鎌倉・室町時代)21点(17%)、近世(江戸時代)39点(31%)、近代(明治時代以降)19点(15%)となる。江戸時代の資料が最も多く出土していることは、この時期が戒壇院の復興期であった状況と合致している。

第21図は奈良・平安時代の軒丸瓦である。9種34点が出土した。このうち1・2が1点ずつ、Cトレンチの南北溝SD4188(平安時代)から出土している。また、池状遺構SG4190や石組溝SD4175などから出土しているが、軒丸瓦の使用年代よりも新しい時期の遺構からの出土である。特徴的なのは、1とした老司Ⅰ式の出土点数が20点あり、この軒丸瓦が観世音寺創建時を代表するものであることをこの調査でも裏付けた(観世音寺境内地の調査では68%の出土状況を示す)。掲載した軒瓦は多量の砂を混ぜ(b類)、黒褐色・軟質に焼かれている。

2は鴻臚館Ⅱ式の軒丸瓦で、筑前国分寺創建時の軒瓦と考えられている。2点の出土。3は複弁10弁の平安期の軒瓦である。中房・外区の珠文がきわだって突出する特徴がある。良質の粘土で比較的薄手に仕上げられている。3点出土。4は複弁7弁の平安期の軒丸瓦である。3に比較して文様の彫りが浅い軒丸瓦であるが、観世音寺境内地の調査では3%前後と比較的多い出土率を示している。少量の砂を混ぜた粘土で灰色・軟質に焼かれている。1点出土。5は平安時代の観世音寺を代表する軒丸瓦で、境内地内の調査では5%に近い出土率がある。粘土に細かい砂を混ぜるが、淡橙色に硬く焼き上がったものが多い。1点出土。

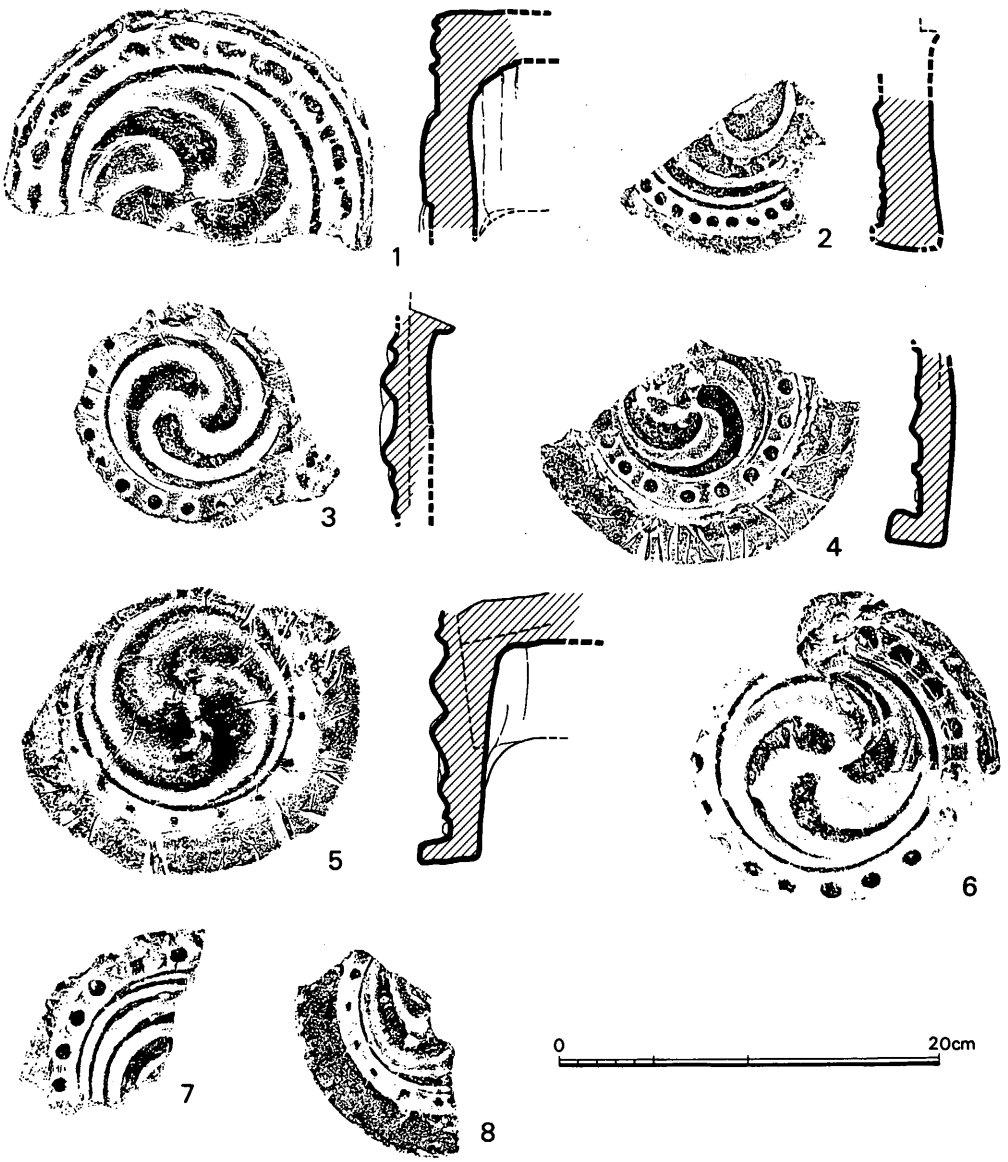
6は百済系単弁軒丸瓦である。直立した外縁には、三重の圏線が配置される。観世音寺境内から出土する百済系軒丸瓦は、この1種類のみで3%強の出土率がある。暗灰色・須恵質に硬く焼けている。7は単弁14弁の弁の中に子葉を2つ配置した軒丸瓦である。最近、大分廃寺の発掘調査(未報告)で、9世紀前半の土壙から同笵例が出土している。灰色で須恵質に硬く焼きあげられる特徴がある。1点出土。8は複弁7弁の軒丸瓦であるが、蓮弁の文様の割り付けが整っていないこと、外区外縁が高く突出するなどの特徴がある。大粒の砂粒を混ぜ、灰色に硬く焼き上げる。1点出土。9は細弁21弁の軒丸瓦である。観世音寺境内での出土例は少ないが、筑前国分寺では10%に近い出土率を示し、筑前国分寺創建当時の軒瓦の一つと考えられている。



第21図　軒丸瓦拓影・実測図（1）

1点出土。

第22図は巴文軒丸瓦のⅠ類に分類される軒丸瓦である。Ⅰ類は尾の長い巴文で、外区素文縁の幅が比較的狭く、珠文も小さいことが特徴である。Ⅰ類は21点出土。今回の調査では江戸時代の遺構から出土した例をあげ得るが、年代観のうえで問題とするようなものはない。1は左回りの巴文軒丸瓦である。中心で巴の頭が結合している。外区には杏仁様の連珠文を配置する。



第22図　軒丸瓦拓影・実測図（2）

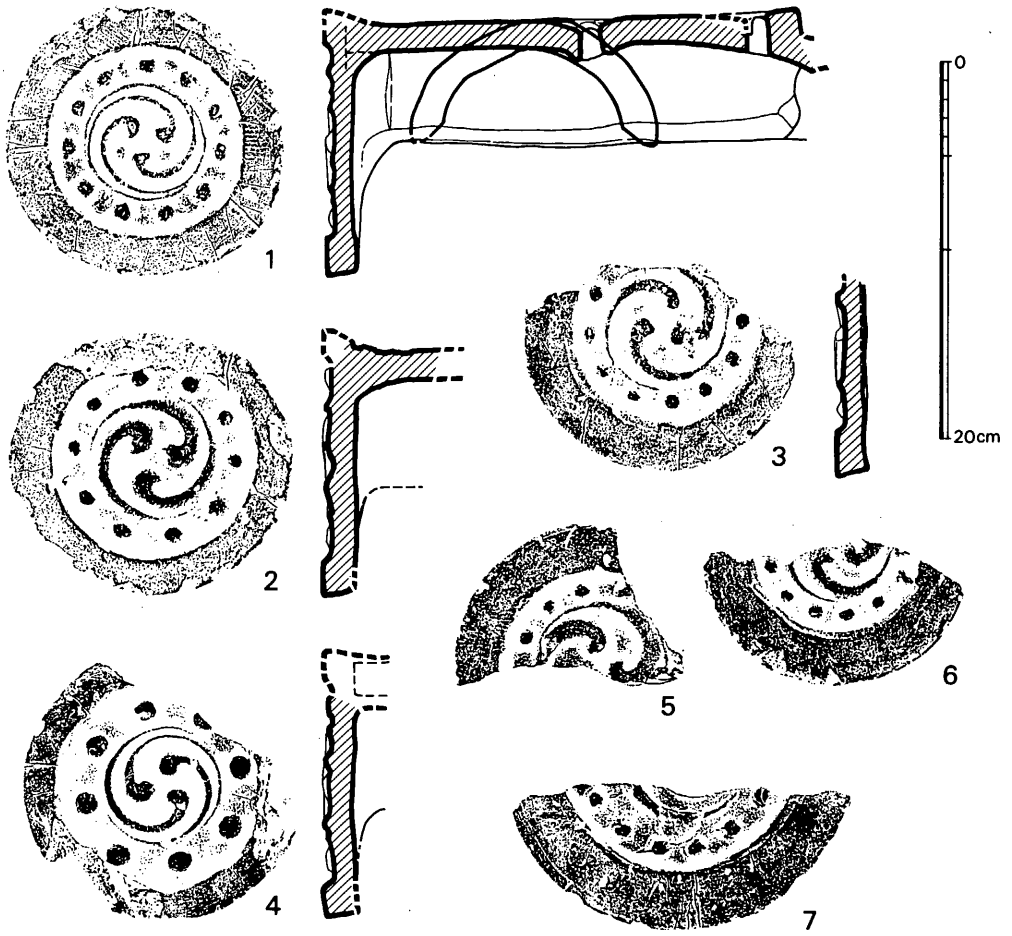
瓦当径18.2cmと大ぶりな軒丸瓦の一つである。外区外界線の外に狭い平坦面ができており、平坦な笵型であったと想定される。外縁部に沿ってヘラで整形した痕がある。観世音寺講堂跡・南門付近の宝蔵東側・金光寺跡の調査でも出土している。巴文の雄健さから平安時代末に溯る可能性がある。粘土には細砂粒を混ぜる。黒色に燻し仕上げされたもので、焼きも良い。1点出土。2は左廻りの巴文軒丸瓦で、尾は長く瓦当円周の2/3に近い。外区珠文帯との間に界線がある。巴の尾は界線につかない。2.8cmと比較的厚手の瓦で、粘土には多量の砂を混じえている。灰色に焼けた部分と黒色部分とあるが焼きは硬い。1点出土。鎌倉時代の巴瓦と考えたい。

3は長い尾の左廻り巴文軒丸瓦で、外区珠文帯との間には界線はない。連珠文は2に比較して粗い。この軒瓦の外縁は欠損しているが、他の出土例でも欠損しているものが多く、笵型の外縁部にまず粘土を詰めた後、巴文部分に粘土を詰めているようである。本例にもその剝離面が残っている。砂粒を混ぜた粘土を用い、暗灰色に硬く焼き上がる。講堂跡からも出土している。2点出土。4は外区素文縁の高い右廻りの巴文軒丸瓦である。瓦当面には離れ砂を使用した痕がある。淡橙灰色で硬く焼き上がる。粘土に大粒の石英粒を混ぜる。2点出土。室町時代か。5は彫りの深い右廻りの巴文軒丸瓦で、外区の高い素文縁との間に狭い珠文帯がある。丸瓦との接合には、丸瓦の凸面にヘラ状工具で刻みを入れ、丸瓦の先端は瓦当面から0.8cmのところまで達している。粘土には多量の石英粒を混ぜている。黒色に焼き上がるがやや軟質である。大宰府崇福寺跡の調査に同笵例があり、講堂跡・南門付近でも出土例がある。2点出土。

6は珠文が比較的大きな左廻りの巴文で、外区素文縁は比較的狭く低い。瓦の厚さは2.5cmと厚手である。粘土には少量の砂粒を混ぜているが良質である。燻し仕上げされ、黒色に硬く焼き上がる。大房跡の調査に出土例がある。3点出土。7は尾の長い左廻りの巴文である。外区珠文帯との間に界線があり、外区素文縁は狭く低いものと思われる。良質の粘土で燻し仕上げされ、焼き上がりも硬い。2点出土。8は右廻りの巴文軒丸瓦で、外区には細かい珠文が配置される。外区の素文縁はやや幅広である。2点出土。

第23図は巴文軒丸瓦のII類に分類されるものである。II類は観世音寺講堂跡の調査で「寛永」銘鬼瓦を出土した土壙SK3777出土の巴文軒丸瓦を基準として設定している。特徴として、I類と比較して巴文がやや小さくなり、尾の長さも短くなる。連珠文の数も11～13前後と少なくなり、素文縁の幅が2cmより広いものが普通となる。また、瓦当笵の彫りも比較的浅い。27点出土しているが、文様の類似を指摘できても、破片資料からは図に掲載したものに特定できないものが多くある。

1は左廻りの巴文で、巴の尾が外区珠文との間に界線を作る。珠文数は11、素文縁は高さ0.4cm・幅2.3cmである。この軒瓦には丸瓦が残るが、玉縁は欠損している。丸瓦残存長20.4cm。凸面は縦方向のヘラ磨きをし、両端部は横にナデる。凹面には粗い布筒の痕が残る。焼成前に凸面から穿孔された釘穴が2箇所にある。燻し仕上げされ黒灰色で焼きも良い。石組溝SD4175か



第23図　軒丸瓦拓影・実測図（３）

らの出土例がある。２点出土。２はやや巴の頭の大きな例で左廻りである。珠文数は10子。造りも１に近似する。４点がこの軒瓦と判定できる。石組溝SD4175から出土しているものがある。３は講堂跡の土壙SK3777から最も多く出土した資料である。巴の頭は丸くなく、一方にやや尖った角を作っている。連珠文の数は12子。灰色から黒色のものが多く薄手である。造りは１・２に近似する。３点出土し、石組溝SD4175から出土しているものがある。

４は連珠文８子の右廻りの巴文軒丸瓦である。素文縁の高さがやや高い。瓦当笵に傷があり、木笵であったものと推定される。２点出土し、石組溝SD4185の南端から出土している例がある。５は連珠文の数が13子になる左廻りの巴文軒丸瓦と推定される。造りはほぼ１～４に近似している。１点出土。６は連珠文13子と推定された左廻りの巴文軒丸瓦である。造りも前例と変わりないが、素文縁の幅が2.7cmとやや広い。また、この瓦当には笵傷があり、木笵であった

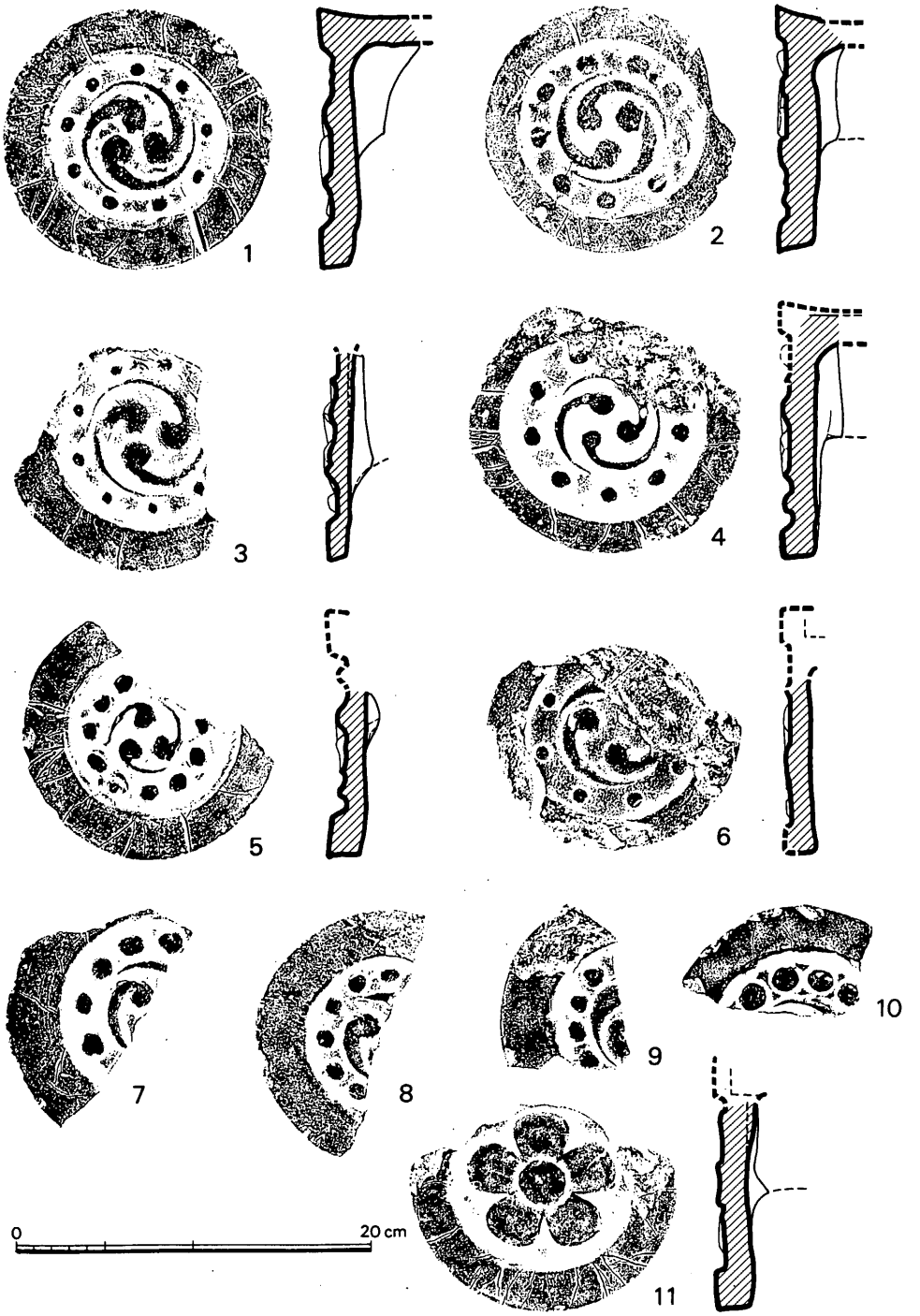
と推定される。1点出土。7は瓦当径が18.0cm前後とやや大きく、素文縁の幅も3.1cmと広い。連珠文の数は13子となろう。1点出土。II類の巴文軒瓦については、これまでの出土例の瓦当と比較し、特定できるものとできないものとがあるが、質的には講堂跡の土壙SK3777と等質の資料とみてよいものと考えている。

第24図は講堂跡の土壙SK3774出土瓦を一応の基準としたもので、巴文の大きさが瓦当面径のほぼ1/3と小さく、頭は丸く尾が短いことが特徴である。第24図に示した巴文軒丸瓦のなかに、巴文の幅が瓦当径の1/3より大きなものも含まれるが、II類に比較してやや彫りが深く、巴文の頭は丸く、尾は短い傾向にある。19点がIII類と確定できる。

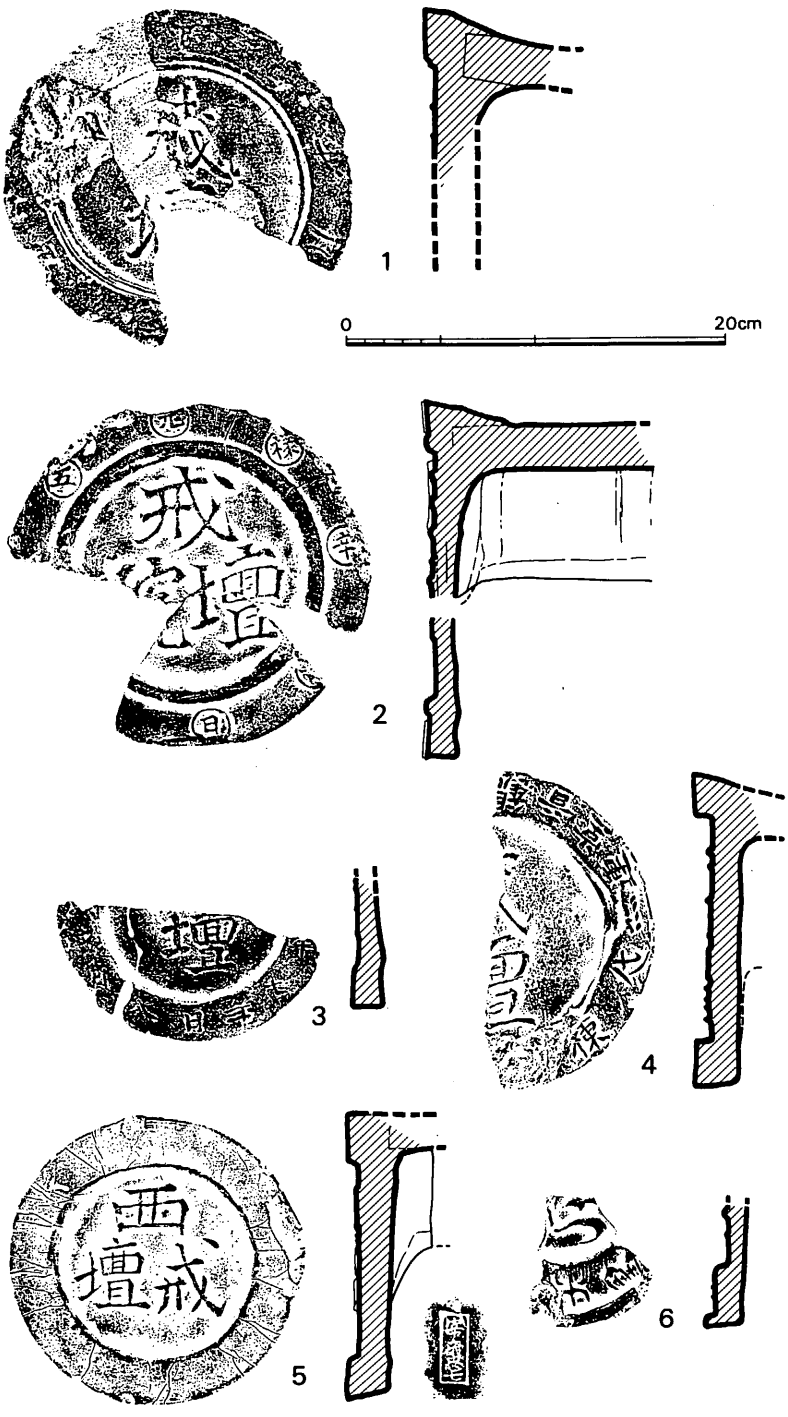
1は9子の連珠文を配した左廻りの巴文軒丸瓦である。巴の頭は丸く、尾は円周の1/2程である。造りはII類と近似する。2点が石組溝SD4175の上面から出土した。粘土には砂を混ぜているが、良質で黒く燻し仕上げされ焼きも硬い。2は9子の連珠文を配置する右廻りの巴文軒丸瓦である。III類としては瓦当の厚さが2.1cmと比較的厚手である。本例にも木笵と思われる傷がある。4点が特定でき、石組溝SD4175からの出土もある。3は9子の連珠文を配置する左廻りの巴文軒丸瓦である。瓦当厚1.0cmと薄く作られるが、造りはII類と変わりない。6点が出土していて、石組溝SD4175からの出土もある。4も9子の連珠文を配置するが、左廻りの巴の尾は2・3に比較して短い。SD4175から1点出土した。5は講堂跡の土壙SK3774出土瓦に同笵例がある。珠文数は11子。巴文は極く小さくなる。瓦当と丸瓦は別々に作っているが、機械によって作られたものかもしれない。粘土には砂を混ぜず、黒く硬く焼き上がり光沢がある。1点出土。6は8子の珠文を配置する左廻りの巴文軒丸瓦である。細かい砂を混ぜた粘土を用い薄手に作っている。丸瓦の接合にあたっては、丸瓦に刻みを入れた痕跡がある。1点出土。

7は10子前後の連珠文を配した左廻りの巴文軒丸瓦である。珠文が目立って大粒となっている。砂の混じらない均質の粘土を用いる点、瓦当・丸瓦とも機械によって製作された可能性がある。8は珠文数が12子前後となる左廻り巴文軒丸瓦である。黒く燻し仕上げされている。1点出土。9は大粒の連珠文を配置する左廻りの巴文軒丸瓦である。燻し仕上げされている。1点出土。10も大粒の連珠文を配置した左廻りの巴文軒丸瓦である。黒く焼き上がり光沢がある。丸瓦には布筒を用いた痕を残す。1点出土。11は梅の花を瓦当にあしらった軒丸瓦である。黒灰色に仕上がるが、燻し仕上げされたものだろう。1点出土。

第25図は文字瓦当軒丸瓦である。12点出土している。1は観世音寺講堂跡に出土例がある。「戒壇」の二文字を中央に配置し、低い外縁が周る。一見して、軒瓦のもつ重厚さは鎌倉時代の軒丸瓦を想起させるものがある。講堂跡の出土例では、軒瓦に向かって外縁右側中央付近に「廾」の文字が見えていたが、外縁の他の部分は平滑であるため素文縁と考えていた。今回の調査では3点が出土した。この1点に「廾」の下に「月」と思われる文字が見える。また、外縁の頂部と他の破片の左下にも2～3字分、文字ではないかと思われる部分がある。現状では



第24図　軒丸瓦拓影・実測図（４）



第25図　軒丸瓦拓影・実測図（5）

判読可能な資料の出現を俟つしかないが、「廾」と「月」の間隔から10文字前後が配置されたものだろう。二つの文字からは、文字瓦当の製作年月日を記したものと２・３の資料から推定できる。また、２・３の例からこの文字瓦当も江戸時代のものと考える。粘土には砂を混じえるが、黒く硬く焼きあげる。石組溝SD4175南側の石組裏込めから出土したものがある。

２は瓦当面に「戒壇院」の三文字を配置する文字瓦当である。外縁は一段高く、外縁の上にやや太い界線が周る。外縁には丸の中に文字が記されている。４点の破片が出土しているが、文字の判読に有効なものは掲載した二つの破片である。頂部から向かって右側に「元禄辛巳」左側に「五囲圄日」と記したものであろう。元禄辛巳の年は元禄14（1701）年で、楼門に使用された平瓦の刻印銘文と一致する。４点のうち１点が池状遺構SG4190から出土している。胎土には砂を混じえるが、燻し仕上げされた硬い軒丸瓦である。

３は「戒壇」の二文字を瓦当に配置するやや小型の軒丸瓦である。１・２に比較して「戒壇」の文字も細く弱い。2点出土しているが同位置の破片である。低い外縁には向かって右から「□□十七年」、左から「□四月八日」と記されている。江戸時代の瓦と考えられるから「寛永」か「享保」の二文字が補える。寛永17年は西暦1640年であり、享保17年は西暦1732年である。瓦の造りからは享保17年をとりたい。１点が池状遺構SG4190から出土し、他の１点は南北溝SD4186から出土している。灰色で薄手の瓦で少量の砂粒を含むが、硬く焼き上がっている。

４は右半分の破片１点が出土している。瓦当面の文字は「戒壇」と判読できる。外縁に書かれた文字は「観音堂圖圖代　棟□」と判読すべきであろう。観音堂の建てられた位置ははっきりとはしないが、東長寺所蔵文書から寛保２（1742）年に戒壇堂が大破したため観音堂を引移して改築したことを知ることができるという。運照は江戸期戒壇院復興期の「運照慧燈」住職で、元禄５（1692）年から正徳５（1715）年まで戒壇院住職を務められた人物である。戒壇院の復興につくした住職のようで、銅梵鐘や楼門用に発注された平瓦の刻印にもその名前が見える。また、代の字は運照が住職であった時代の意味であろうし、代から１字分空いて書かれた棟の文字の存在から、この軒丸瓦は観音堂建立のために製作され、その建立は運照が住職であった期間（1692～1715年）と考えることができよう。確かなことは、欠損している左半部の出土に期待がかかる。粘土には砂粒を混ぜているが、燻し仕上げされ硬く焼き上がる。石組溝SD4175から出土している。

５は瓦当面に「西戒壇」と三文字を陽刻している。外縁は素文縁である。瓦当裏面に「宰府忠七」の刻印がある。この瓦は平成５年に解体修理の行われた本堂初層東側の軒列に葺かれていたものの一種で、「宰府忠七」の刻印のある軒瓦のいくつかにヘラ書きで「文政五年二月」（1822）の銘がある。従って、この軒丸瓦も文政５年に製作されたものと断定することができる。粘土に少量砂を混ぜるが、黒く硬く焼かれ光沢がある。１点出土。６は小破片で瓦当面の文字は判読できない。外縁はやや高く作られ、篆書体の文字を配置する。外縁の外側には、さ

らに一段高い界線が周る。篆書文字は瓦当の中心から読むもののようで、「草木」の2字が見える。良質の粘土で硬く焼かれ光沢がある。1点出土。

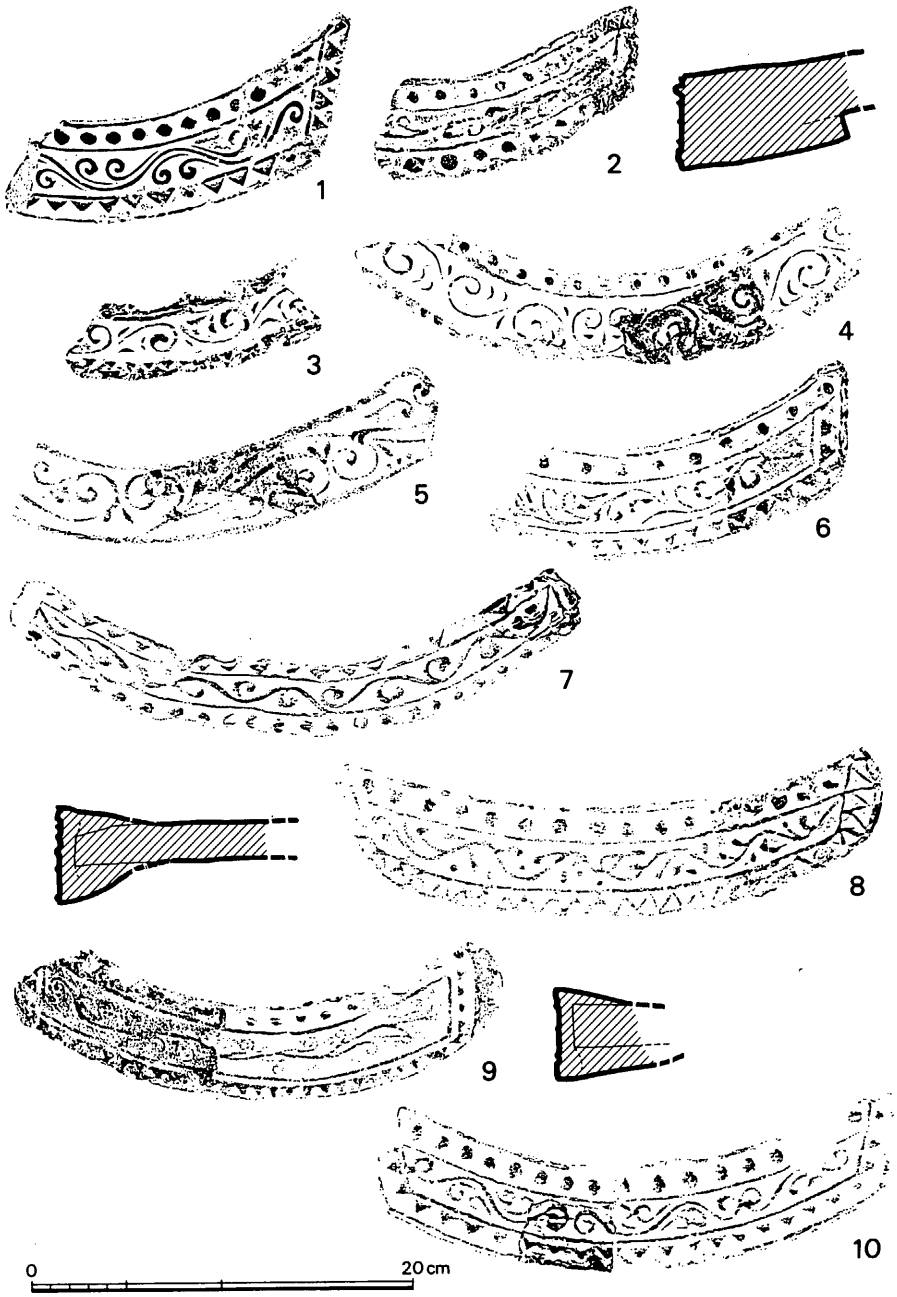
軒平瓦（第26～28図、図版35～37）

軒平瓦は軒丸瓦に比較して出土点数は少ない。75点が出土している。このうち古代の軒平瓦20点（26%）、中世5点（7%）、近世以降50点（67%）の出土比率を示している。

第26図は奈良・平安時代の軒平瓦で20点が出土している。1は老司Ⅰ式軒平瓦で、今回の調査では9点が出土している。老司Ⅰ式は段顎の軒平瓦で、長顎（a類）・短顎（b類）とがあるが、両者とも出土している。また、老司Ⅰ式軒瓦は観世音寺境内地の調査では62%に近い出土率があり、今回の調査でも最も多い出土傾向を示している。2は右から左に偏行する唐草文を内区に配置し、上・下帯に連珠文を置く軒平瓦である。顎は長く比較的深いことから奈良時代末期に想定して良いものと思う。顎には縄目の叩打痕が縦方向に打たれている。胎土に少量の砂を混ぜているが、暗灰色で須恵質に硬く焼き上がっている。1点出土。

3は鴻臚館Ⅰ式とされる均整唐草文軒平瓦である。観世音寺境内地の調査では2%弱の出土率であるが、大宰府政庁脇殿の主要な軒平瓦であり、筑前国分寺では創建当時に使用され16%の出土率を示している。この軒平瓦独特の暗褐色に焼き上がっている。2点出土。4は鴻臚館Ⅱ式とされる均整唐草文軒平瓦である。今回の調査では1点だけ出土した。観世音寺の調査では8%に近い出土率で、老司Ⅰ式に次いで最も多い。筑前国分寺では26%に近い出土率を示し、筑前国分寺創建時に最も多く用いられている。砂を混じた胎土で、灰色に焼けやや軟質である。5は左から右に偏行する忍冬唐草文軒平瓦で、観世音寺境内地では比較的多く出土している。観世音寺の調査での出土率は3.5%程で、複弁8弁の偏行忍冬唐草文軒丸瓦と組合う軒平瓦である。1点出土。6は内区の唐草が右から左に一本の軸を中心に偏行する唐草文である。上帯は連珠文、下帯から脇区へは凸鋸歯文が周る。瓦当文様は均整がとれた古い感じを与えるが、平瓦はつつみ込み技法によって作られ、顎部は短く深い。平安時代のものか。1点出土。

7は一本の蔓が右から左へ偏行し、蔓が反転するごとに一つの子葉を派生する唐草文を内区に配置し、上帯には下向の凸鋸歯文、下帯には連珠を配置する。平瓦はつつみ込み技法のため顎は曲線顎に近い段顎である。1点出土。8も右から左へ偏行する唐草文を内区に配置する。唐草は6の唐草から変化したかの感じがする。上帯は珠文、下帯から脇区にかけては線鋸歯文という文様構成も6に似る。安楽寺天満宮からの出土例がある。平瓦の接合はつつみ込み技法で、顎の形状は曲線顎となる。平瓦の凸面には粗い斜格子の叩打痕を残す。1点出土。9の内区には左から右へ細かい唐草文が偏行している。上帯には連珠文、下帯から脇区には凸鋸歯文が配置される。胎土に多量の砂を混ぜ、灰色で焼き上がりも軟質である。平瓦の接合はつつみ込み技法である。1点出土。10は小破片である。内区の文様は、一見して偏行唐草文のようにみえるが、3単位の唐草文が配置されたものである。上帯は連珠文、下帯から脇区にかけては、



第26図　軒平瓦拓影・実測図（1）

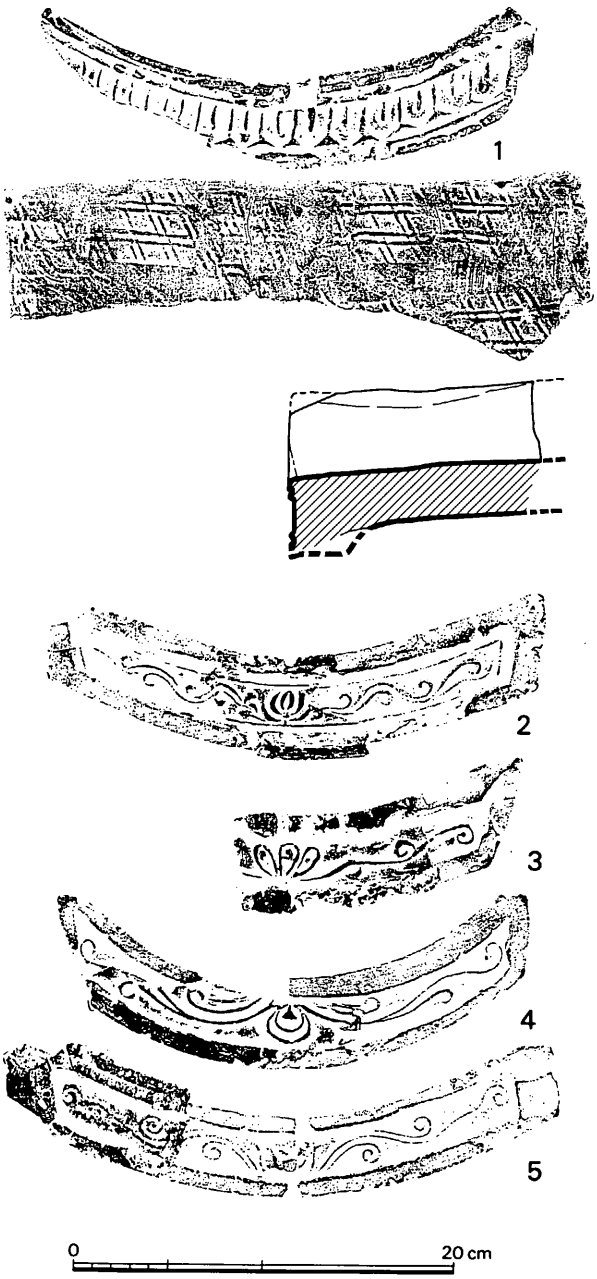
やや退化した凸鋸歯文が配置されている。須恵質で硬く焼きあがっている。1点出土。

第27図は鎌倉時代から室町時代の軒平瓦である。すべて1点ずつの出土である。1は剣頭文

軒平瓦である。上帯の両端に3子の珠文を置き、この間を四分した位置に2子ずつの珠文を置いている。観世音寺小子房地区の調査に同笵例がある。凹面は灰色に、凸面は黒色に硬く焼き上がる。平瓦部には図のように二重の斜格子の叩打痕を残す。この格子目は横方向に叩打板の端が認められる点、大宰府では珍しい。鎌倉時代の軒平瓦。

2は周縁の高い均整唐草文軒平瓦で、中心飾から両脇に4回反転をみせる。観世音寺では講堂跡や南門跡などに同笵例がある。胎土に少量の砂を混ぜるが、淡橙色で硬く焼き上がる。3は三つの花弁の様な中心飾から左右に3回反転する均整唐草文軒平瓦である。瓦当文様が均整がとれていないのに比べて比較的厚みのある曲線顎をしている。観世音寺講堂跡の調査で同笵例が出土している。

4は宝珠文を中心飾りとして左右に3回の反転をみせる均整唐草文軒平瓦である。平瓦部分を欠くが、平瓦の接合にあたって櫛状の工具で平瓦に刻みを入れた痕を残している。天正14年に焼失する大宰府崇福寺から出土していて、第22図5とセットとして使用された可能性がある。また、観世音寺講堂跡の調査でも講堂SB3800Dの整地層出土瓦の主流を先の軒丸瓦とともに占めている点注目される。5も宝珠文を中心飾とし、3回反転する均整唐草文軒平瓦である。大宰府崇福寺でも、観世音寺講堂でも5を補完する軒平瓦であるようだ。



第27図　軒平瓦拓影・実測図（2）

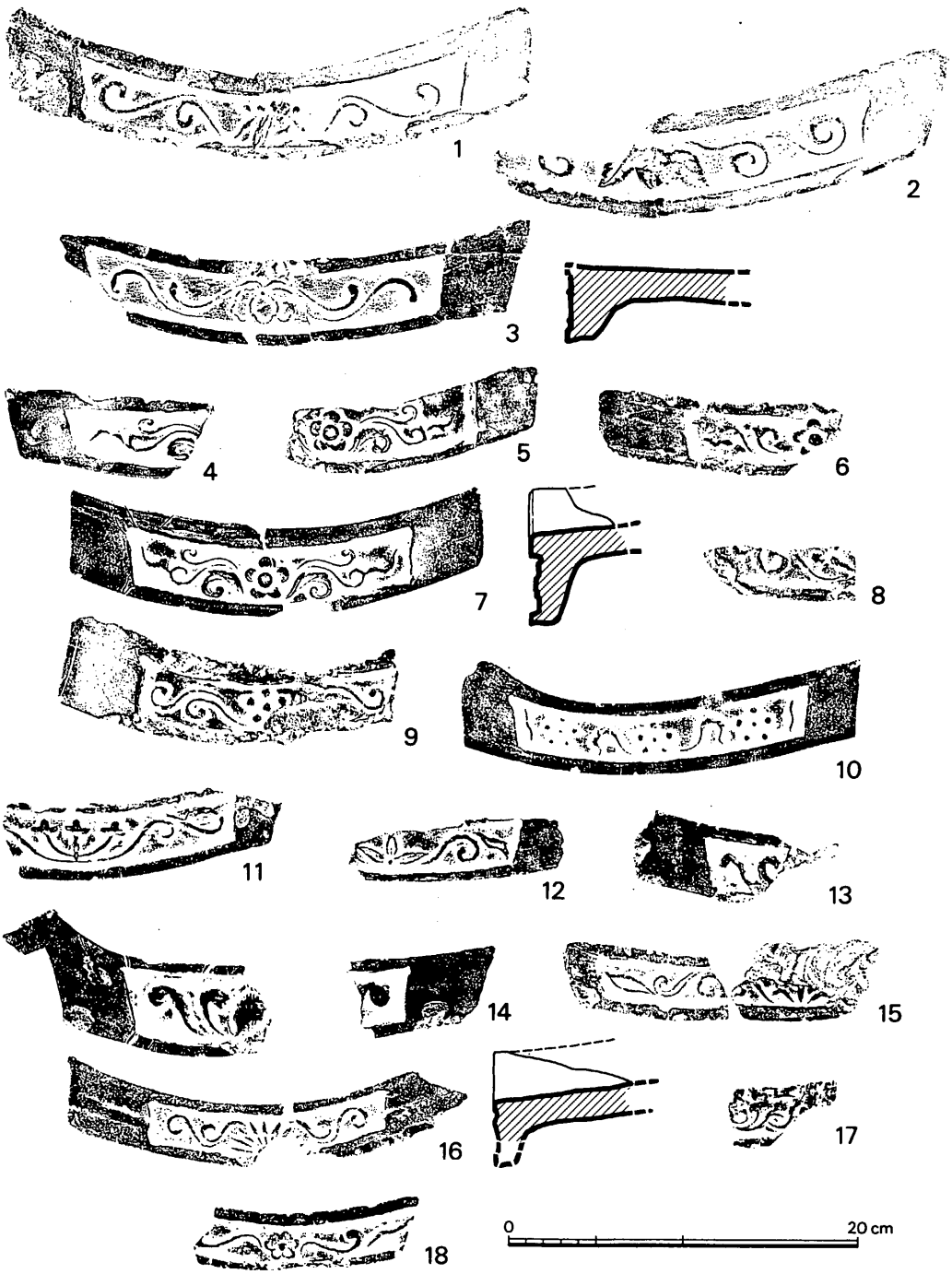
出土点数は少ないが、各地で比較的出土例の多い軒平瓦である。

第28図は江戸時代以降、近代までの軒平瓦である。一部に軒桟瓦も含むものである。1は5つの付点に対応する5つの葉状の中心飾の左右で2回反転する均整唐草文軒平瓦である。講堂跡・南門跡の調査に同笵例がある。また、山口県岩国城跡の調査でも同笵と思われる資料が出土している。短く深い顎を持つ。粘土に砂を混ぜているが、燻し仕上げされ硬く焼き上がる。2点出土。2は小破片で、講堂跡の調査に同笵例がある。福岡城御鷹屋敷にも類品があることから博多瓦町の瓦職人によって作られた可能性が高い。1点出土。

3は中心飾の左右で2回唐草が反転する均整唐草文軒平瓦である。瓦の造りや形からは江戸時代のものとしてよい。まだ類例はないが、今回の調査では5点が出土しており、1点は石組溝SD4175からである。4～7の軒平瓦の中心飾は梅花文である。文様の類似から第24図11の軒丸瓦とセットとして生産された可能性がある。4の中心飾は欠損しているが、唐草文は5・7とよく似ており中心飾も梅花文と推定される。観世音寺南門地区に出土例がある。2点出土。

5は4・6・7の唐草文とは微妙な相異がある。5の唐草の端部がやや上向きになるのに対し、4は下向に、7は上向に尾が長くのびる。2点出土。6は梅花文を中心飾にしながらも、左右の唐草文は4・5・7と相異する。4・5・7が燻し仕上げされているのに対し、6は灰色に焼けている。7はヘラ磨きされ、黒色の光沢のある軒平瓦である。1点出土。8は小破片である。瓦当文様の特定には同笵資料の出土を俟たなければならないが、新出資料と思われる。また、瓦当面に離れ砂を使用した痕を残す点、他の軒平瓦と相異している。9・10は14のように左端に折り返しの付く桟瓦の一種で、唐草鎌軒瓦と呼ぶようだ。9の中心飾は梅花文の一種で、梅花を付点で表現している。唐草は2回反転する均整唐草文である。2点出土。

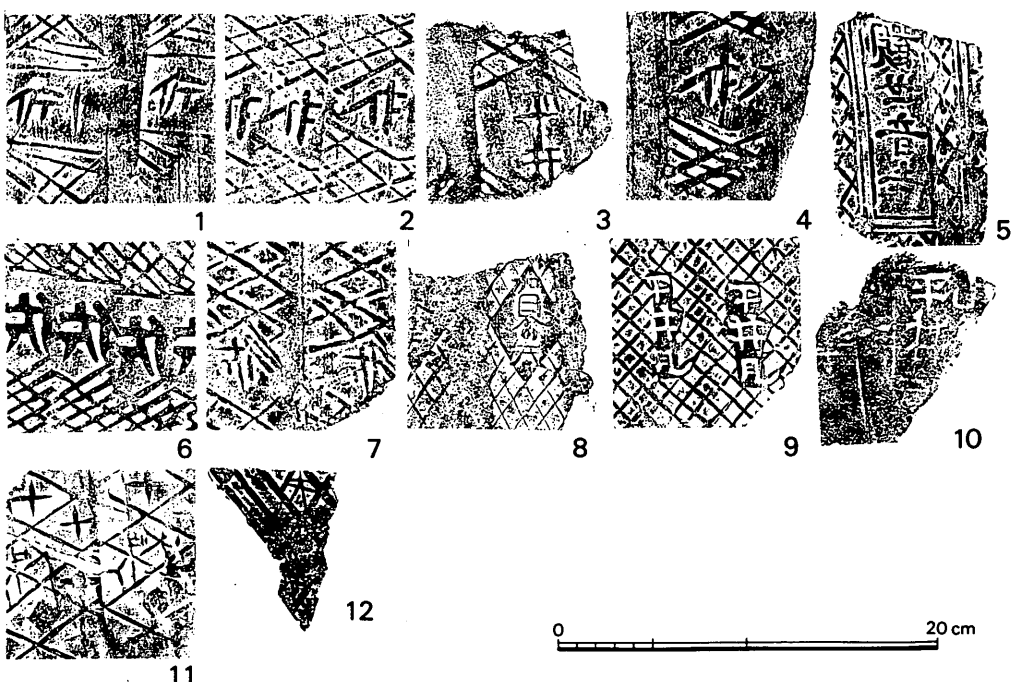
10は梅花文を瓦当面3箇所に配置し、梅花文間と両端部に唐草を置き均整唐草文としている。2点出土。11は3本の茎の上に花が付けられたような変わった中心飾の左右に2回反転する唐草文が配置される軒平瓦である。中心飾の左側で瓦当文様の幅がやや広くなるから、9・10・14と同様の桟瓦かも知れない。3点が出土し、1点は石組溝SD4175から出土している。12はやや小型の軒平瓦である。3枚の葉をあしらったような中心飾の左右に唐草が配置されている。まだ同笵例の出土はないようである。6点が出土している。このうち3点が石組溝SD4175からで、2点が池状遺構SG4190から出土している。13・14は同じ文様の大小の関係にある軒平瓦と思われる。南門跡の調査に14の同笵例がある。この瓦から中心飾は下向の3枚の葉の上に付点三つを乗せたもので、唐草は2枚である。13では左端部に「太宰府石」の小さな刻印がある。初出資料であるが、文政5年の『西戒壇』銘軒丸瓦の「宰府忠七」の刻印瓦や講堂跡出土の平瓦の端面の「太宰府平井製」などとともに、地元の瓦工房の所在を知ることができる資料である。1点出土。14の左端にも刻印がある。「古賀□」と3字分あるが、下の1文字は判読できない。工房名であろう。瓦の凹面はヘラ磨きされ、瓦当面とともに光沢がある。2点出土。



第28図　軒平瓦拓影・実測図（3）

15は講堂跡出土瓦に同笵例がある。同笵例でも中心飾部分が欠けていて判らない。2点出土。16も講堂跡で同笵例が出土している。やや小型の瓦で、燻し焼きされていない点やや古いのかもしれない。4点が出土し、3点が石組溝SD4175からの出土。17は小破片で、文様の全体はつかめないが、唐草文は他の軒平瓦の文様とは異なる。小型瓦である。初出資料の可能性があり、新たな資料の出土を俟ちたい。1点出土。18の中心飾は梅花文に似るが梅花文ではない。唐草が2回反転する均整唐草文の小型軒平瓦である。1点が池状遺構SG4190から出土している。

今回の戒壇院出土の軒丸瓦・軒平瓦と観世音寺講堂跡や南門付近の調査区で出土した近世の軒丸瓦・軒平瓦を比較するとき、両者から出土しているものと観世音寺だけのもの、戒壇院だけに出土しているものの違いがあることに気づく。江戸時代の初期では、瓦の生産は博多瓦町の播磨系職人により独占的な生産体制であった。福岡城御鷹屋敷で出土する軒丸瓦で観世音寺と戒壇院の両者で出土する軒瓦は、これにあたるであろう。戒壇院が再興される寛文8(1668)年と戒壇院が観世音寺の支配から独立する元禄13(1700)年が節目となって戒壇院独自の軒瓦がそれぞれ瓦工房に発注された状況が起こったものと思う。「戒壇」・「戒壇院」・「西戒壇」などの文字瓦当軒丸瓦の出現は、このことを物語っているものと思う。また、これ等の文字瓦当は製作年代の判る資料であることから、遺構からの共伴関係等を整理することで戒壇院境内出土軒瓦の編年観を確立できるものと思う。戒壇院境内地での本格的な発掘調査は今回が初めてである。今後の調査に期待したい。



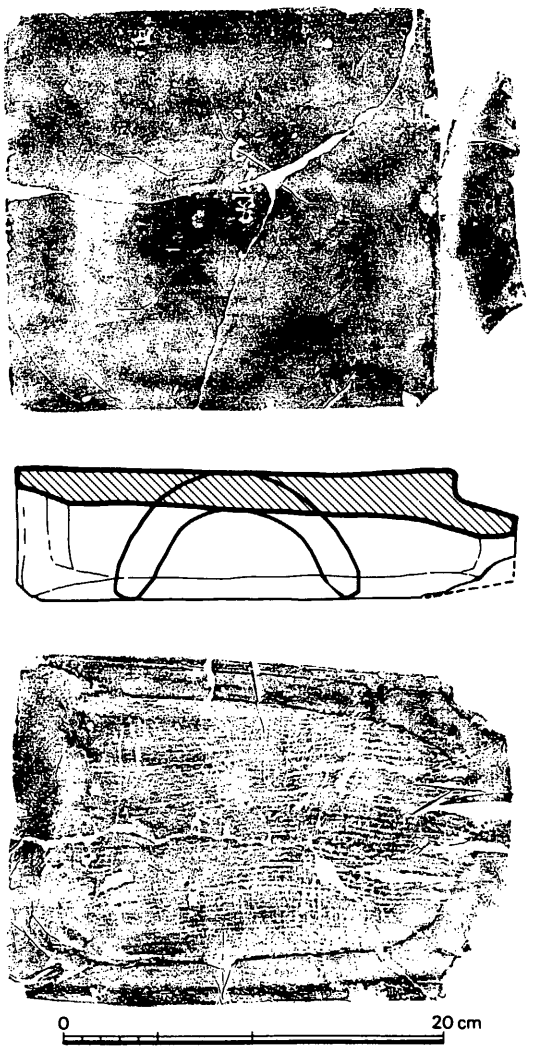
第29図　文字瓦拓影

文字瓦（第29～32図、図版38～40）

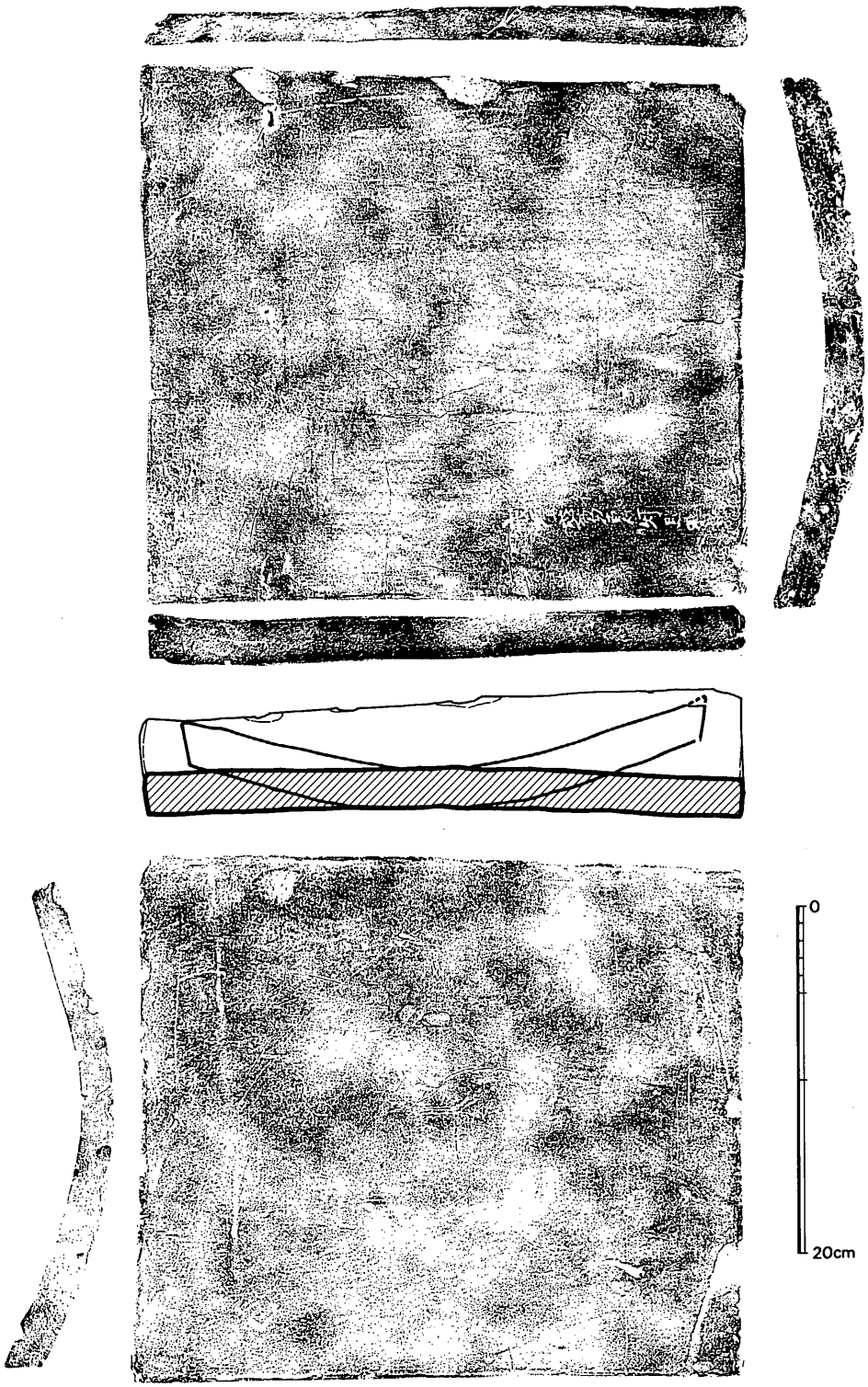
今回出土の文字瓦は二つに大別される。その一つは９～10世紀段階のもので、丸瓦・平瓦・の叩締具の板の格子目や斜格子目の文様の一部に工房名や生産地などを表す文字を１字～５・６字程刻み込んだものである。その二つは近世の瓦で刻印を押したもので、人名や瓦を製作したいわれなどが記されている。第29図は叩打具の一部に文字のある丸・平瓦片の文字の部分である。丸瓦で６型式９点、平瓦で９型式35点が出土した。

１は「佐」であるが「佐」の脇に棒状のものが彫られている。これも文字か。「佐」の文字瓦は正字と左右逆字含め10種類あるうちの一種類である。丸瓦片１点・平瓦片で24点の出土があり、Ｃトレンチの南北溝SD4188から平瓦片23点が出土している。２も「佐」の一種と数えている。丸瓦片で２点、平瓦片で５点の出土があった。うちSD4188からは平瓦片２点が出土している。

３は「平井」である。「平井」は正字・左右逆字・横位に叩打するもの合わせて8種ある。この「平井」はこのうちの一種で、平瓦片４点が出土し、うちSD4188からは３点が出土している。４は「佐瓦」であろう。丸瓦で１点、平瓦４点が出土している。うち平瓦２点がSD4188出土である。５は「観世音寺」の左右逆字である。「観世音寺」には２種類あって、そのうちの一種である。今回は丸瓦が１点、平瓦４点が出土している。６は「佐」の左右逆字の一種である。丸瓦が２点、平瓦が３点の出土があった。うちSD4188から丸瓦２点と平瓦１点が出土した。７も「佐」の一種である。平瓦３点の出土があった。SD4188から１点出土している。８は「賀茂」と読んでいる。「賀茂」には４種があって、その一種である。丸瓦３点・平瓦３点が出土した。うち丸瓦２点がSD4188から出土している。



第30図　丸瓦拓影・実測図



第31図　平瓦拓影・実測図

9は「平井瓦」と陰刻している。「平井瓦」には3種ある。平瓦で2点出土し、1点がSD4188からの出土である。10は「平井瓦屋」と陰刻されたものである。平瓦1点が出土している。11・12は斜格子目の中に文字と思われるものがある。平瓦で1点ずつ出土している。これ等の出土瓦のうち1は来木北瓦窯に出土例があり、7は松倉瓦窯で焼かれたことが判っている。

第30～32図は近世の刻印を押した資料である。第30図は玉縁式丸瓦である。長さ26.4cm、瓦部長23.1cm、玉縁長3.3cm、広端弦幅13.8cm、後端弦幅14.1cm、広端深さ5.7cm、厚さ1.5cm程の瓦である。凸面は縦方向にヘラ磨きされ、端部を横ナデする。凹面は粗い布筒の痕を残す。広端・狭端ともヘラ削りをし、側面を丸く、その内側を広くヘラ削りしている。胎土に砂を混じえるが、灰褐色に硬く焼き上げられている。この丸瓦の凸面に行書体で横位に「甚衛門」の刻印がある。この瓦は文政5(1822)年の「宰府忠七」銘の丸瓦より長さにして2cm程短く、やや新しいものかもしれない。

第31図は溜枡SX4177に使用されていた元禄14(1701)年の紀年銘のある平瓦が1/3程割って使われていたため本堂の改体修理の際、屋根から降ろした全体の判る資料を図示した。長さ34.5cm、広端弦幅31.0cm、狭端弦幅28.7cm、広端深さ2.9cm、狭端深さ3.1cm、厚さ1.8cmを測る。凸面は粗い縦方向のナデで、端部のみ横ナデ仕上げしている。凹面は平滑にヘラ磨きされる。凹面の側縁は丸く、凸面の側縁は角張って仕上げる。側面・狭端面ともヘラで削りそろえるが、広端は乾燥時に砂が付着している。胎土には砂を混ぜるが、灰色から暗灰色に硬く焼き上がる。この平瓦の凹面左狭端近くに刻印の銘文が二行にわたって押されている。この刻印の銘文は第32図に示す。

第32図1・2は前図の平瓦凹面左狭端隅に押捺された刻印の銘文である。1は下端が、2は上端がそれぞれ欠けているため両者を図示した。1の刻印の左端の縦線は、刻印の端部を示している。銘文は

「樓門元禄十四年孟夏立
　戒壇苾芻恵灯照代」

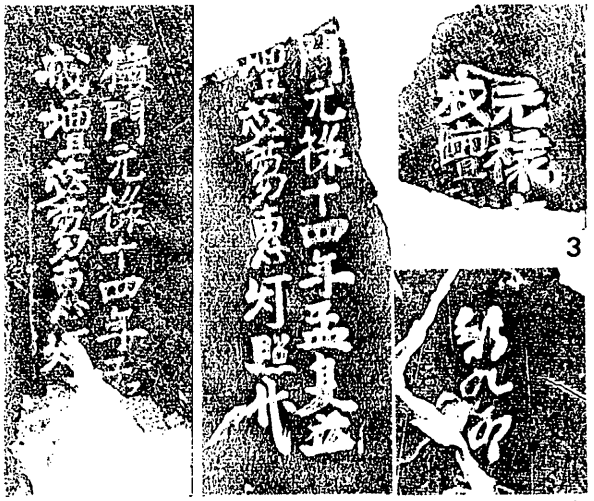
と二行にわたって記されている。この楼門は現在は礎石だけとなっているが、寛政5(1793)年に完成した『筑前国続風土記附録』の挿絵や、文政4(1821)年にほぼでき上がったという奥村玉蘭の『筑前名所図絵』に描かれている。銘文はこの楼門が夏に建立されたこと、その時の戒壇院の僧職が恵灯（運照慧燈）であったことを示している。

3は平瓦小破片に押されていたもので、瓦の質やつくりは第31図の平瓦によく似ている。この刻印は1のように長方形の枠の中に文字を陽刻したものではないようで、元と戒の上部に不整形な刻印の端がみえている。銘文は二行に記されている。

「元禄□
　戒壇□」

で、1と同様、それぞれ2字の下に数文字が配置されていたであろう。

4は丸瓦の凸面に行書で「新九郎」と玉縁方向を頭に縦方向に押された刻印である。この丸瓦は破片資料であるが、かろうじて長さと幅を知ることができる。長さ28.5cm、丸瓦部奥弦幅14.8cmほどである。布筒に抜取縄を付けている点多少の差異はあるが、細部の大きさや造りが文政5（1822）年の「宰府忠七」銘丸瓦によく似ている。



第32図　丸・平瓦刻印拓影

道具瓦

鳥衾・棟のさし込み瓦（花巴・菊丸）・鬼瓦・雁振瓦などが出土している。

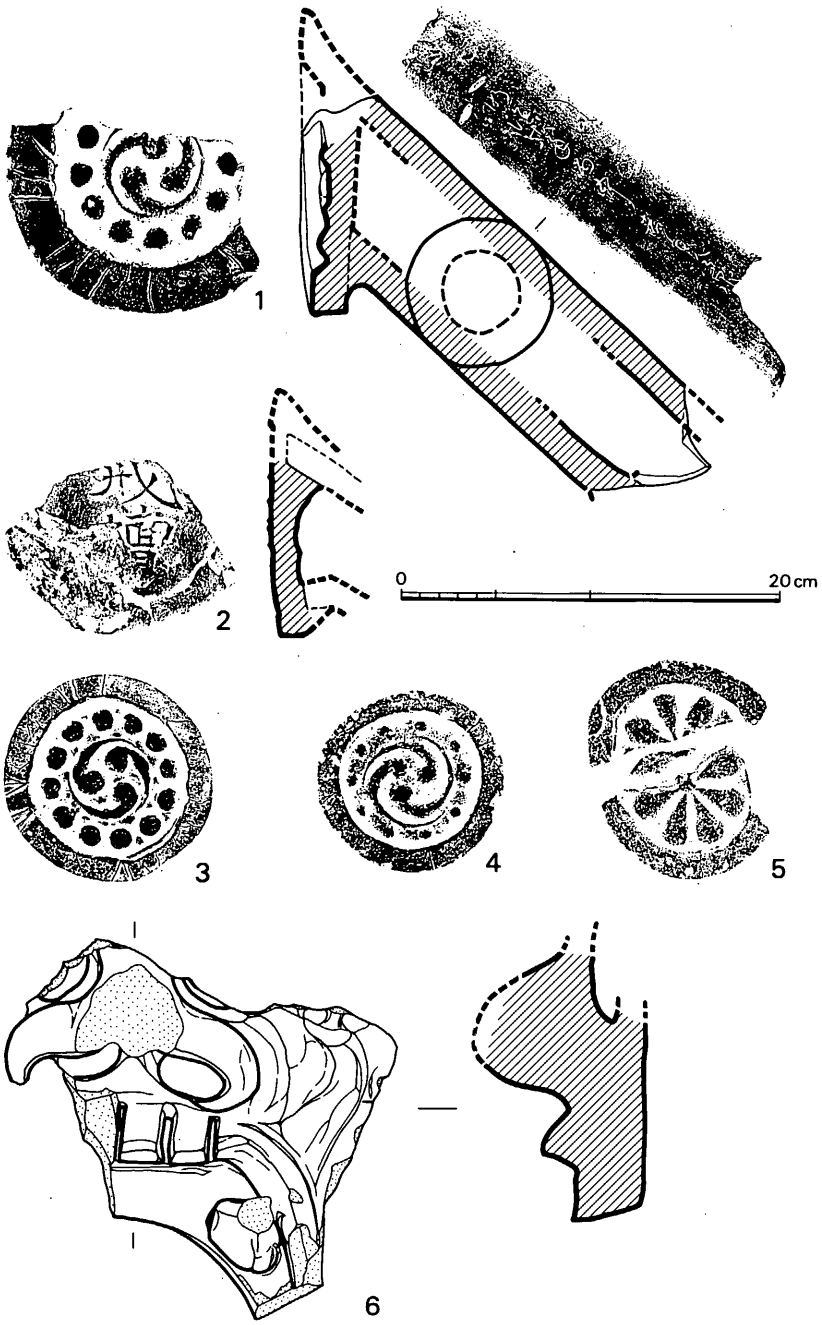
鳥衾（第33図1・2、図版41）

1は巴文の瓦当を付けた鳥衾瓦である。円筒部背面に行書体で「明治十八年酉五月吉日冷泉□」と書かれている。製作年月日の下は博多冷泉町で、製作者の工房の所在地を記したものと思われる。円筒部を据えつけた丸瓦の部分は失われている。円筒部はヘラ磨きされ、燻し仕上げで黒色の光沢がある。調査区の西に設定したCトレンチ表土からの出土である。2は瓦当面に「戒壇」の2文字を入れた鳥衾である。書体から古期の「戒壇」銘軒丸瓦に対応する瓦と思われるが、瓦当笵は一回り小さく鳥衾用の瓦当笵を作っている。瓦当裏面では円筒を取り付けるためにささら状の工具でかいたような痕を残している。淡橙色で胎土に細かい砂を混じるが、焼き上がりはよい。石組溝SD4185の西側裏込めから出土した。

棟さし込み瓦（第33図3～5、図版41）

花巴とか菊丸と呼ばれる瓦である。小さな瓦当に普通の丸瓦の半分の大きさと長さのさし込み部が付き、さしこみ部の先端は細く作られている。大棟ののし瓦部分の飾りや築地用の丸瓦として使われている例もある。3は径11.0cmの巴文の瓦当に幅7.5cmのさし込み部がつく。ヘラ磨きされ燻し仕上げで、瓦当面にも光沢がある。表土からの出土であり、近代の資料である。

4は径9.5cmの巴文の瓦当に幅8.5cmのさしこみ部がつく。灰褐色で砂を多量に含む粘土を用いるが、焼きはよい。4は3よりもやや古いようで近世のものか。表土からの出土である。5は径9.5cmの菊花文の瓦当に長さ12.0cm、前幅9.0cm、先端幅4.0cmのさし込み部がつく。灰色で砂混じりの粘土を用いるが、焼き上がりもよい。瓦当は1cm程の厚さであるが、笵につめた粘土とその後の成形のために盛りつけた粘土とが剝離した痕が認められる。2点とも石組溝

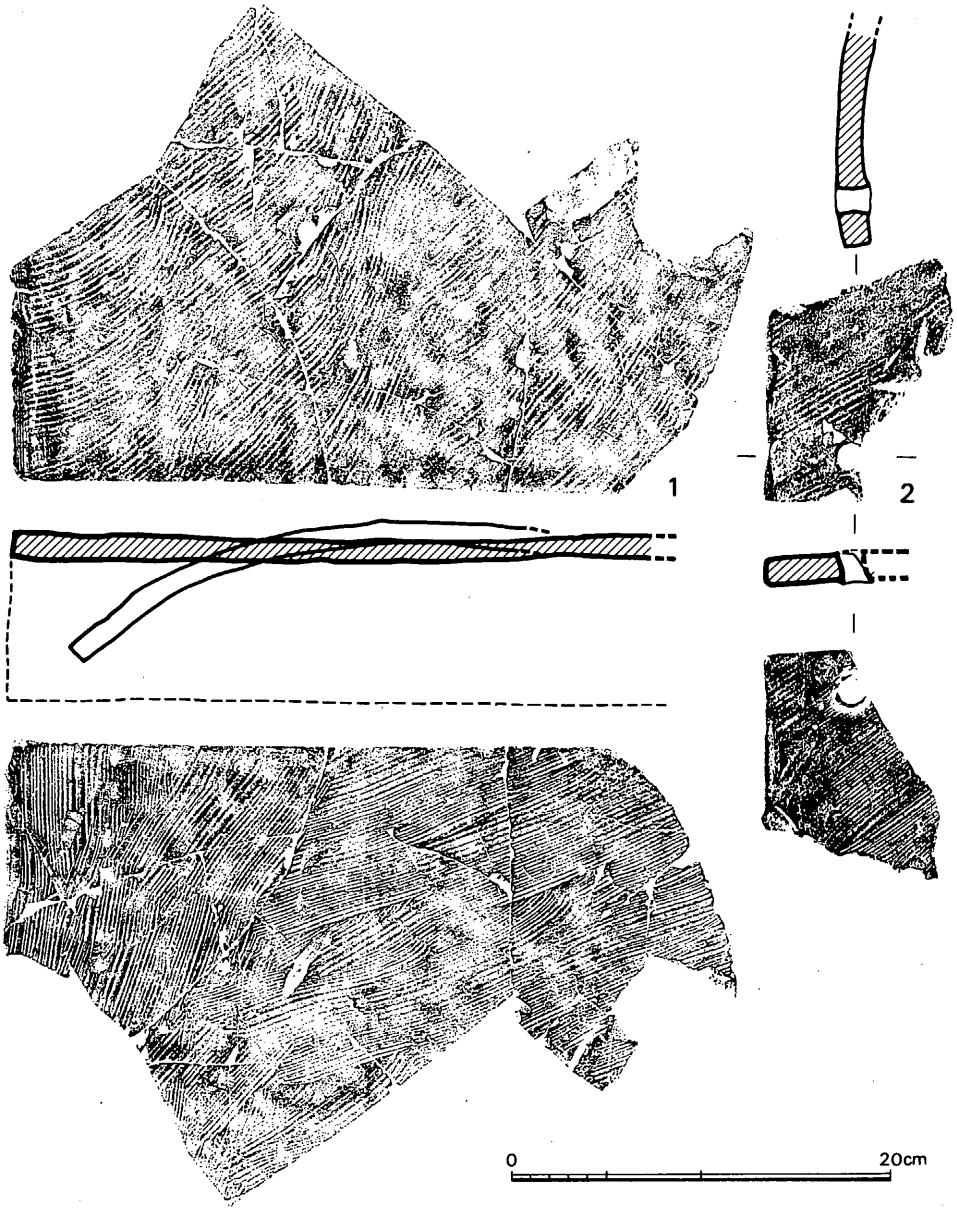


第33図　道具瓦拓影・実測図

SD4185の掘形上面からの出土である。

鬼瓦（第33図５、図版41）

鬼瓦の鼻・左顎から上歯と下歯左の牙を残す破片である。手づくりされた鬼瓦である。大きな鼻の頂部は欠けている。鼻は横に広く張り、頬との間は指で谷状に彫られている。鼻孔は裏

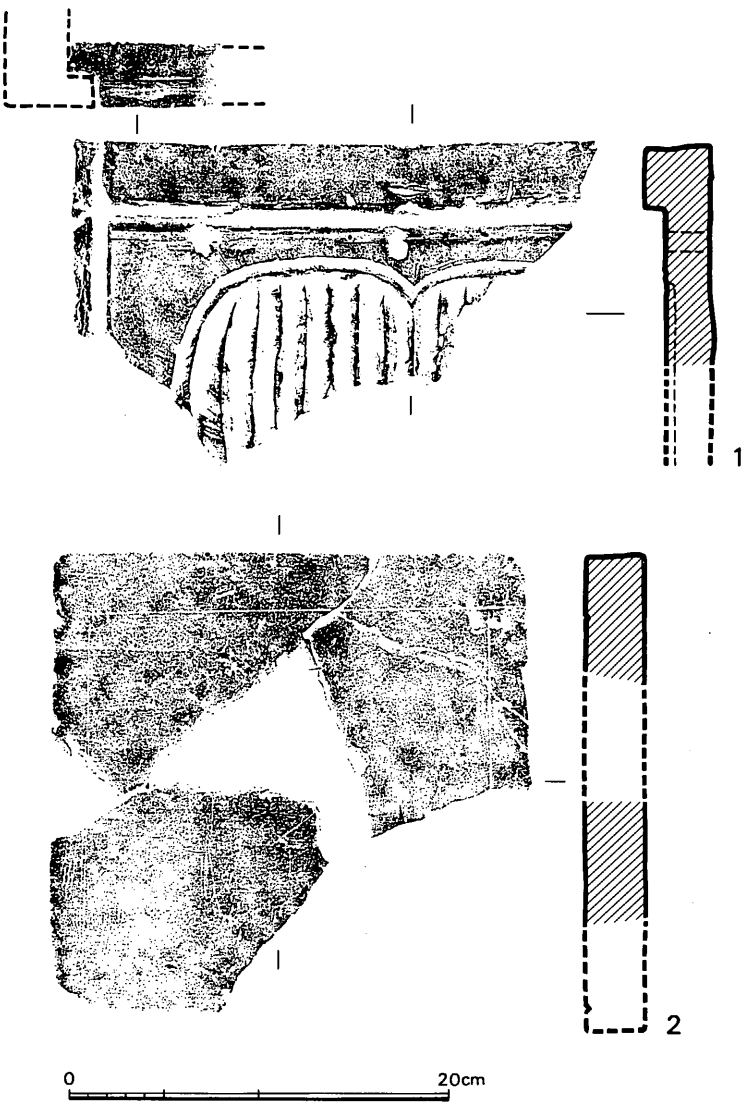


第34図　雁振瓦拓影・実測図

面に貫通する。鼻・頬の部分は指でナデて仕上げているが、上歯以下の部分にはヘラによる彫刻の痕が残っている。裏面は粗いヘラ削りで平坦面をつくり、棟に留めるためのえつりを彫り込んでいる。粗い砂粒を粘土に混ぜているが、黒色で硬く焼き上げられている。庫裡の建物以前の南北溝SD4186下層のSD4189から出土している。出土状況からは江戸時代以前と推測され、金光寺出土例よりも江戸期の鬼面に近いものと考えている。

雁振瓦（第34図、図版42）

茅葺屋根の大棟をおさえる雁振瓦と考えたが、普通の平瓦として用いた可能性もある。この瓦は土師質の焼き物工人によって作られたようで、淡橙色に硬く焼き上がり、胎土にも良質の粘土を用いる。凹凸両面ともに土器の成形に用いる柾目板状の整形痕を残すが、凹面はより丁寧に仕上げている。凸面には粘土を輪積みした痕が波状に残る。側面と端面はヘラで切りそろえている。図には最も大きな破片1と焼成前に穿孔された穴を残す破片2を掲載した。1は残存長39.5cm、残存幅24.5cm、厚さ1.0cmである。近世の通常の平瓦よりは長さ・幅ともに大きなものと推定できる。2～3枚分の破片が出土している。石組溝SD4175・4189の西側の出土。



第35図　伏盤・塼拓影・実測図

伏盤（第35図１、図版43）

方形造りの頂部に据えられる露盤の一部、伏盤にあたるものであろう。伏盤の側面４枚のうちの１枚の破片である。伏鉢を乗せた痕跡が残っていない。破片の頂部が１cm程張り出している。この下には、猪の目の中に蓮子格子を配した飾りを配置している。猪の目・蓮子格子の文様は手彫りである。伏盤の大きさは、横方向で猪の目から１間とすれば35cm、２間とすれば70cm程である。縦方向の長さが30cm程あるので、横方向に２間あったと考えたほうが良いだろう。頂部の張り出し部の下に焼成前に穿孔された釘穴がある。脇の組合せは、付図のようであろうか。瓦質製品である。石組溝SD4185の西側裏込めから出土している。元禄14年以降のものである。

塼（第35図２、図版43）

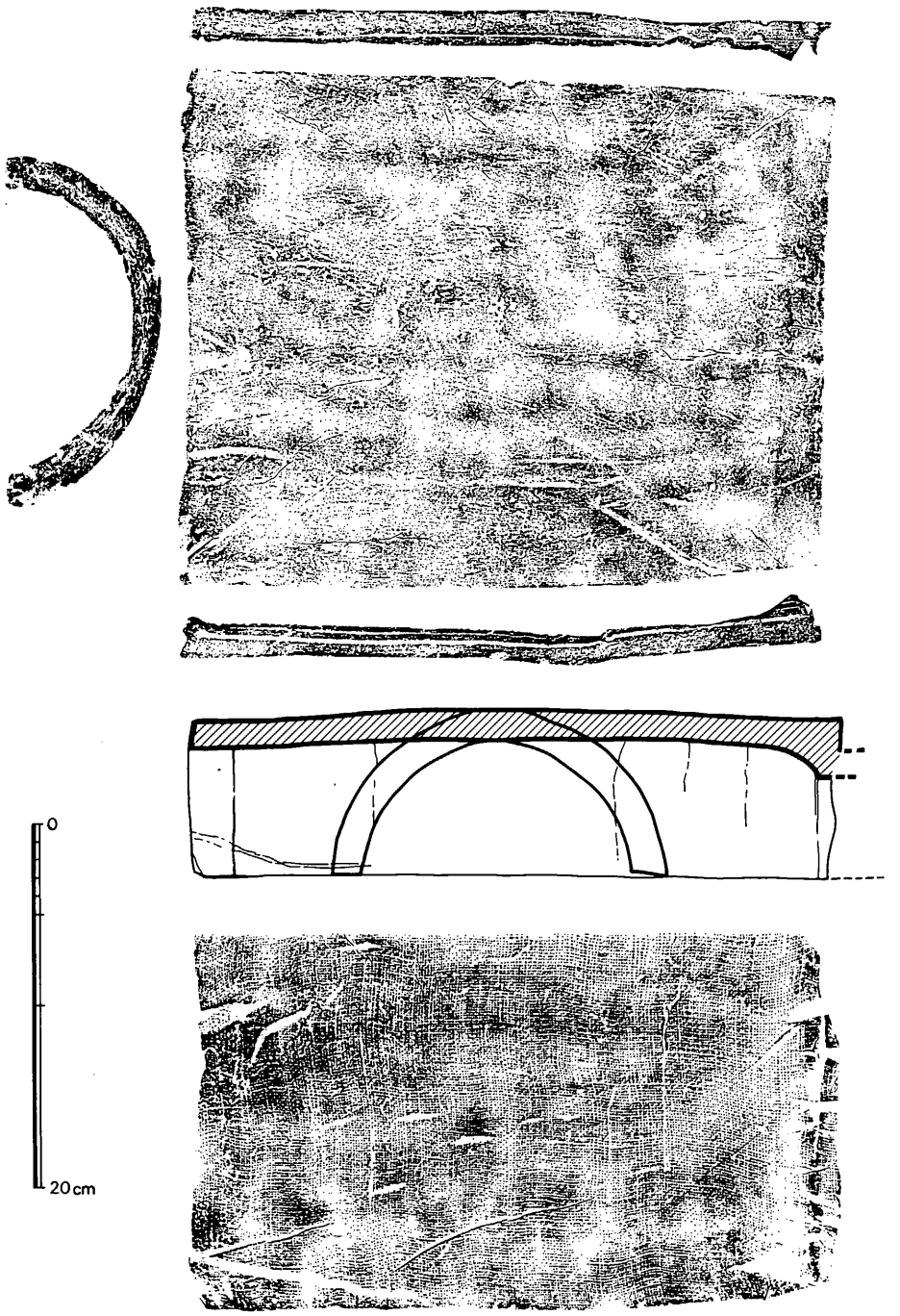
縦24.7cm、横25.2cm、厚さ3.0cmの大きさである。縦･横の長さが異なるから敷塼とも思われない。一方の面に罫線を引いている。罫線は横方向2本を先に引き、縦方向2本の罫線は横罫線の内側で納まっている。罫線と塼の縁との間隔はふぞろいで、上辺では左端で3.2cm、右端で2.8cmあり、左辺では1.5cm、右辺では1.8cm、下辺では1.2cmである。罫線に囲まれた部分は横21.2cm、縦20.1cmである。罫線があることから瓦経用の粘土板とも想定したが、厚さ・大きさとも通常の瓦経より大きいようだ。裏面にはベンガラが塗布された痕跡があるから、図示した部分が裏である可能性も考えられる。石組溝SD4175から出土した。

暗渠SX4191に使用されていた丸瓦

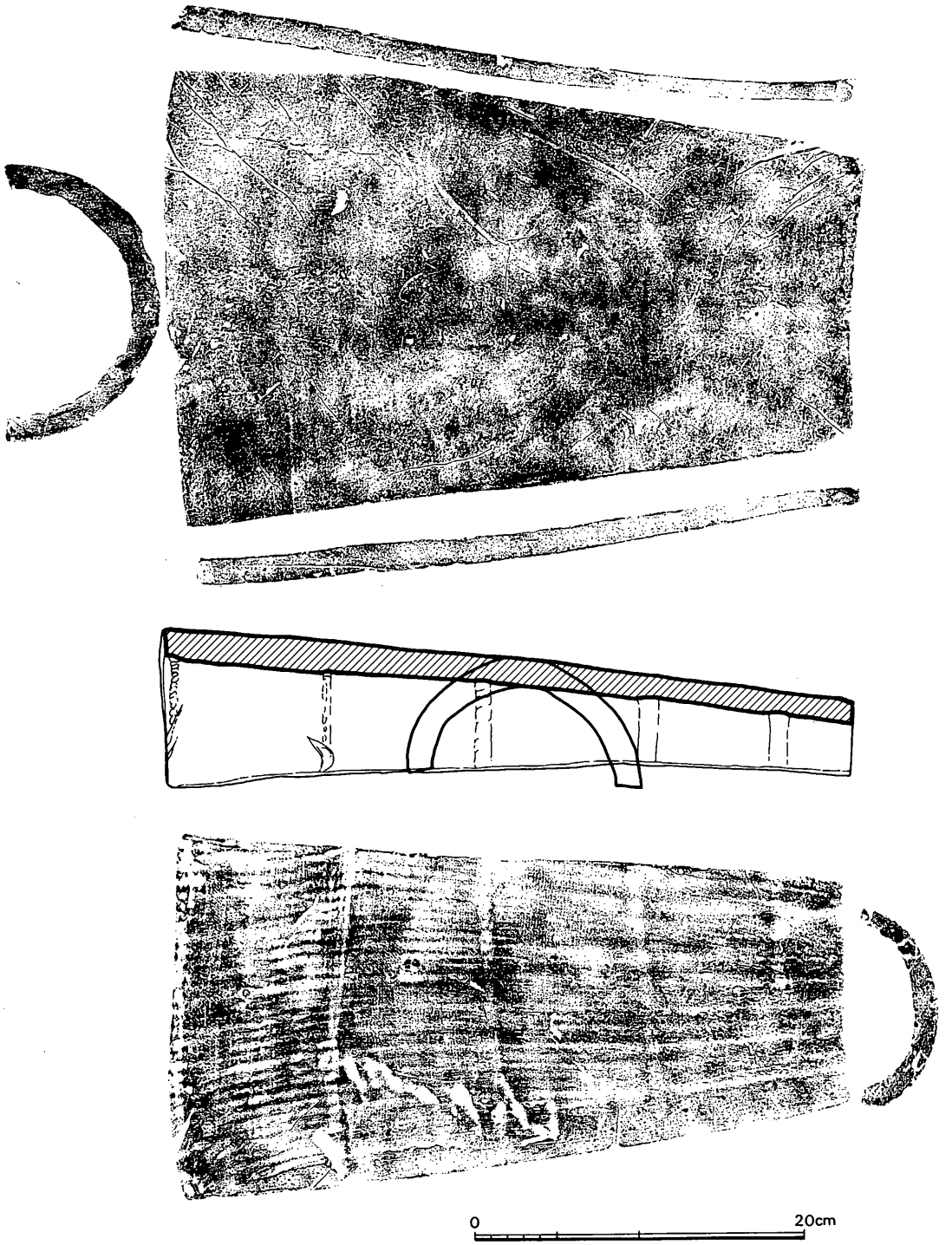
礎石建物SB4180の西で、江戸時代の建物検出面より深い場所に丸瓦を利用した暗渠SX4191が埋設されていた。この暗渠排水に使用されていた丸瓦は4点であるが、いずれも古いもので戒壇院の創設期、或いはそれ以前に遡る資料である。4点の埋設された状況により、西から順に①～④と番号を付けて取り上げている。①は玉縁式丸瓦の玉縁部を打欠いたもの。②～④は行基式丸瓦である。

丸瓦①（第36図、図版44）　玉縁部を欠くが、丸瓦部37.8cm、広端径19.4cm。凸面は縦方向に削った後、両端部をヨコナデする。凹面では布目痕の下に粘土紐巻き上げ痕跡がある。模骨は玉縁に移行する肩の部分が丸く、玉縁部で明瞭な段となっている。玉縁部は打ち欠かれているが、その痕から大脇潔氏のＡ手法によって玉縁が形成されたものと判る。灰白色で焼きはやや軟質である。胎土には砂を混じている。丸瓦①に認められる粘土紐巻き上げ手法は、大宰府では老司式軒瓦に並行する丸・平瓦である。

丸瓦②・③（第37図、図版44・45）　②・③の行基式丸瓦は、竹状模骨を使用して作られたものである。図は竹状模骨痕跡をよく残す③に代表させた。長さ42.5cm、広端径17.0cm、狭端径12.4cmの大きさである。凸面は全面横方向にナデ仕上げされ、叩打具の痕などは残っていない。凹面では竹管状のものを横方向に5段に結束した痕を残している。竹管の本数は広端部で約



第36図　SX4191出土丸瓦①拓影・実測図

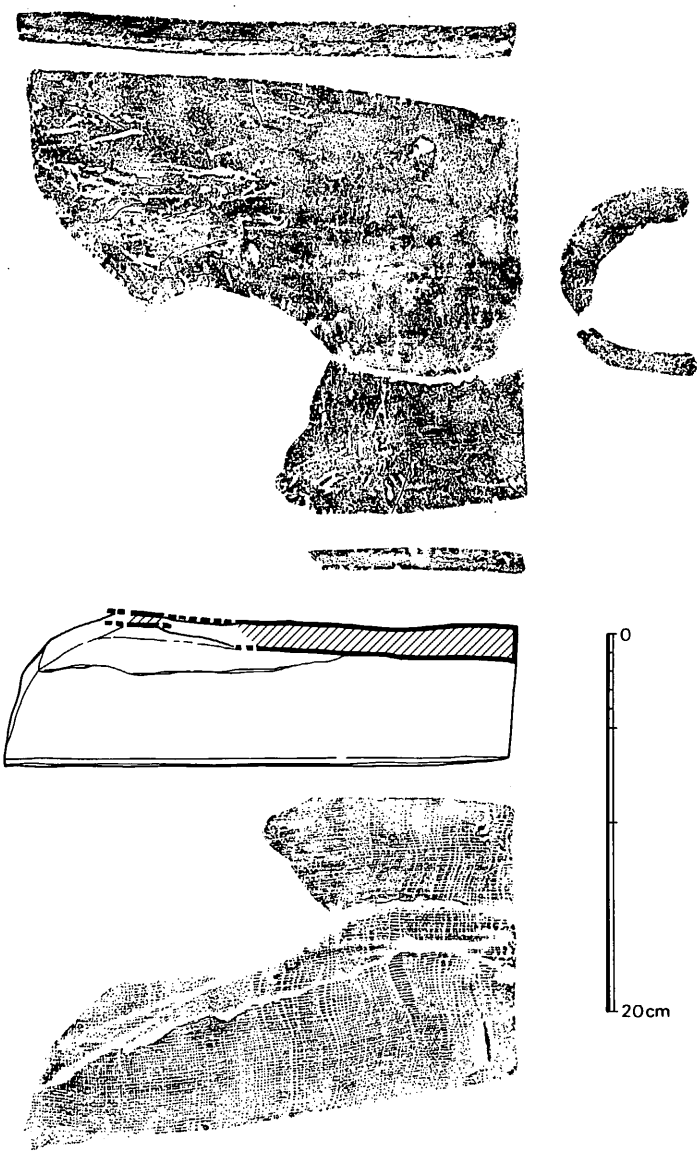


第37図　SX4191出土丸瓦③拓影・実測図

30本、狭端部ではかなり少なくなる様子が判るが、竹管の本数を数えることはできない。分割には広端から刃物を入れて焼成前に二分割を行っている。両端面とも刃物によって整形されるが、乾燥時には狭端面を下にしている。

大宰府跡では竹状模骨を使用して製作された丸瓦は、ごく希に観世音寺境内などから出土している。観世音寺南面築地東半部の調査で検出した井戸SE3680からも出土している。これは、百済系単弁軒丸瓦に伴うものと推測した。

大宰府周辺では、筑前で三宅廃寺（老司式軒瓦と共伴）・那珂遺跡・赤井手遺跡（百済系単弁軒瓦の丸瓦）などの例があり、筑後では薬師堂東遺跡（井上廃寺単弁六弁軒瓦と共伴）などが知られている。大宰府跡周辺部出土例のうち三宅廃寺出土例が戒壇院出土資料に近い感じがする。丸瓦の長さがやや短いことや竹管の数、結束する段の数など相違している。



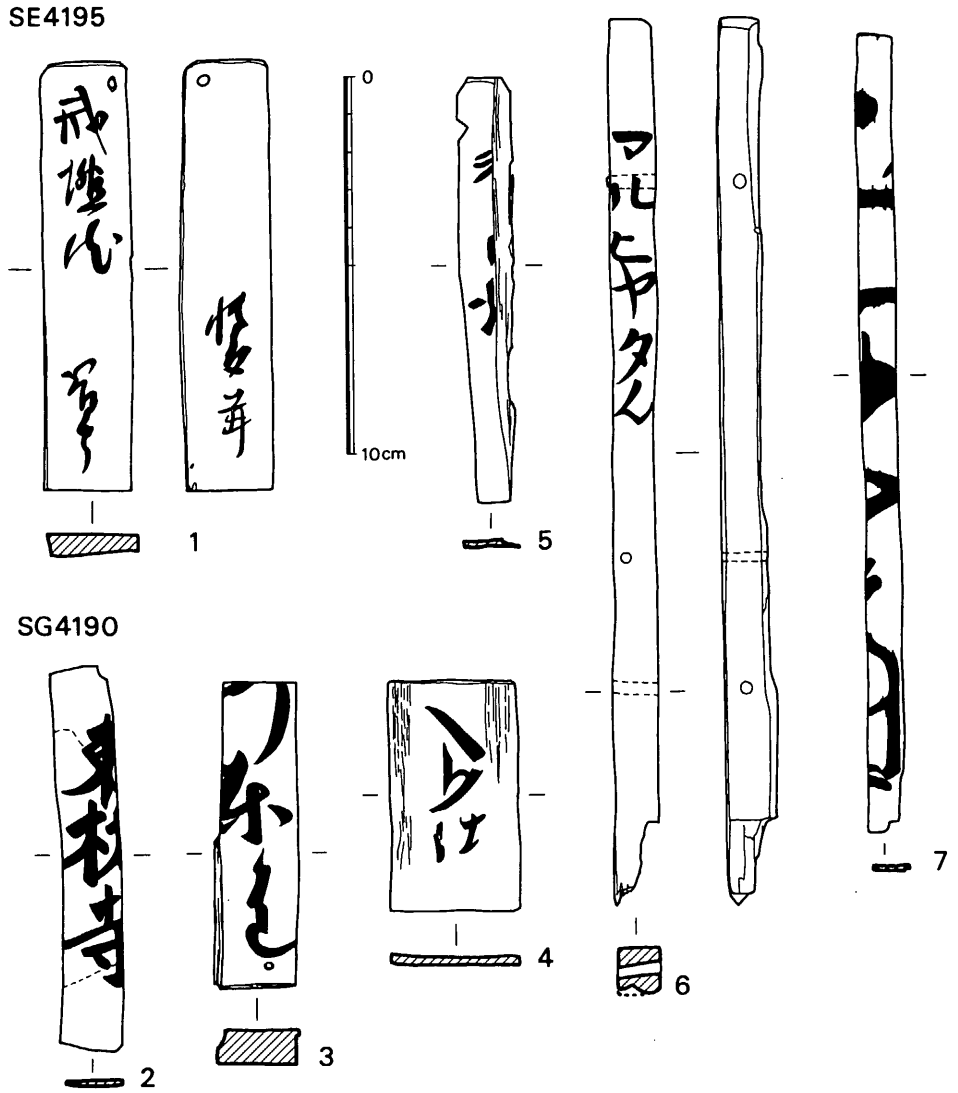
第38図　SX4191出土丸瓦④拓影・実測図

丸瓦④（第38図、図版45）　粘土板巻き付けにより製作された丸瓦である。上半部は欠損している。凸面は縦方向のナデ整形の後、端部のみヨコナデ仕上げを行っている。凹面には粘土の合わせ目がみられ、糸切り痕跡が合わせ目の中に潜る状況がみえる。丸瓦の分割は截線を狭端内側から入れており、分割面には截面と破面が残る。②・③の例と異なっている。

木製品

墨書木札（第39図、図版46）

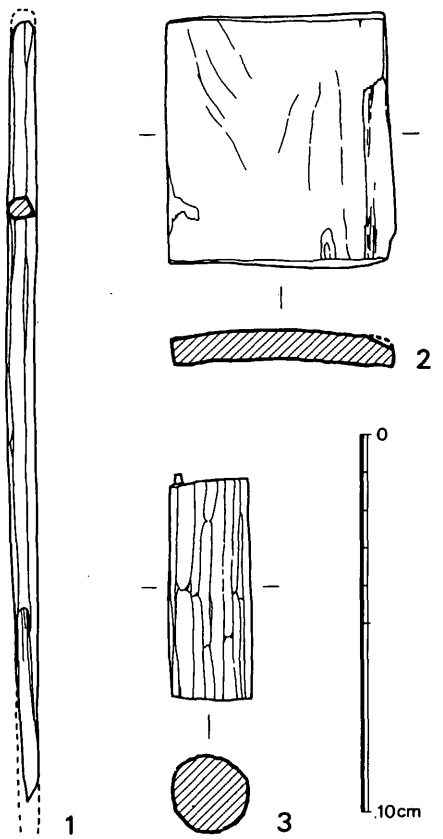
1は長さ11.4cm、幅2.3cm、厚さ0.5cmの板の表面に「戒壇院」・「智了」、裏面に「博多土井」の行書による墨書がある。墨書は残存状況も良好で鮮やかである。上部の右隅に径0.3cmの孔を穿つ。SE4195の出土。2は長さ10.2cm、幅1.7cm、厚さ0.1cmで、両側面は割れて原形を留めていない。文字は中心から約半分欠けているが、残存部から判読すると「東林寺」の可能性が強い。上・下端は削り調整しているが、平坦にはなっていない。裏面にも墨痕があるが、文字は不明



第39図　SE4195・SG4190出土墨書木札実測図

である。3は長さ8.1cm、幅2.0cm、厚さ0.9cmで、両側面は割れて欠損している。上部は削り調整しているものの文字は切断されており、再利用されたものと考えられる。3文字みられるが、最上部は切断されており判読できない。下の文字も明瞭ではないが、「東辺」の可能性が強い。下端部近くに0.3cmの穿孔がある。4は長さ6.1cm、幅3.4cm、厚さ0.3cm。上下と両側面とも削り調整しており、完形のものであろう。文字とみられる墨痕があるが、判読できない。

5は右半分が割れ、欠失しているため全体の形状は不明。上部は端部より1cm強の側面に切り込みを入れ、角を削り取って人頭状にしている。また、側面の中程以下は下方に向かってやや斜めに削り細くする。表面には文字様の墨痕が見えるが、判読できない。裏面は割れており、厚さについても不明。6は裏面の大部分が割れているが、断面の一辺が1.2cmのほぼ正方形のものである。下部は折れているため全形については不明。一面に「マルヒヤタム」のカタカナ文字が判読できるが、その意味については判らない。呪符的なものであろうか。径0.4cmの目釘孔が表面に1箇所、側面に2箇所穿孔されており、いずれも木釘が残存する。7は厚さ1mmの非常に薄い板材で、表面に文字らしき墨痕が見られるが、上部と両側面が割れて欠失しているため文字は判読できない。2～7は池状遺構SG4190から出土した。



第40図　SD4186出土木製品実測図

SD4186出土木製品（第40図、図版46）

箸状木製品（1）　残存長20.5cm、最大径0.7cmで、断面が不整円形のもので、上部は焼けて原形を失っている。下端に向かって細くなっているが、割れて欠失しているため全形は不明。全体に粗く面取りしているが、丸くなっていない。やや径が大きいが、箸の可能性が強い。

不明木製品（2・3）　2は縦6.5cm、横6.0cm、厚さ0.8cmの方形を呈し、緩やかな円弧をもつ。3は直径2.0cmの断面がほぼ正円の丸棒である。長さは6.0cmで、側面は縦方向の細かい削り調整を施す。上・下端は鋸状のもので切り、調整はしていない。

SG4190出土木製品（第41～45図、図版47～51）

漆椀（1・2）　1は内面を赤漆で、外面は高台内側まで黒漆を塗布する。約1/2の破片で、

高台は欠けている。口径9.8cm、残存高4.2cm。２は１より大型で、胴部がやや張っている。内外面とも黒漆を塗っているが、高台内側は漆が剥離している。口縁・高台端を欠く。口径10.7cm、器高8.5cm程の大きさになろう。高台はやや高めと推定され、2.1cm程になろう。

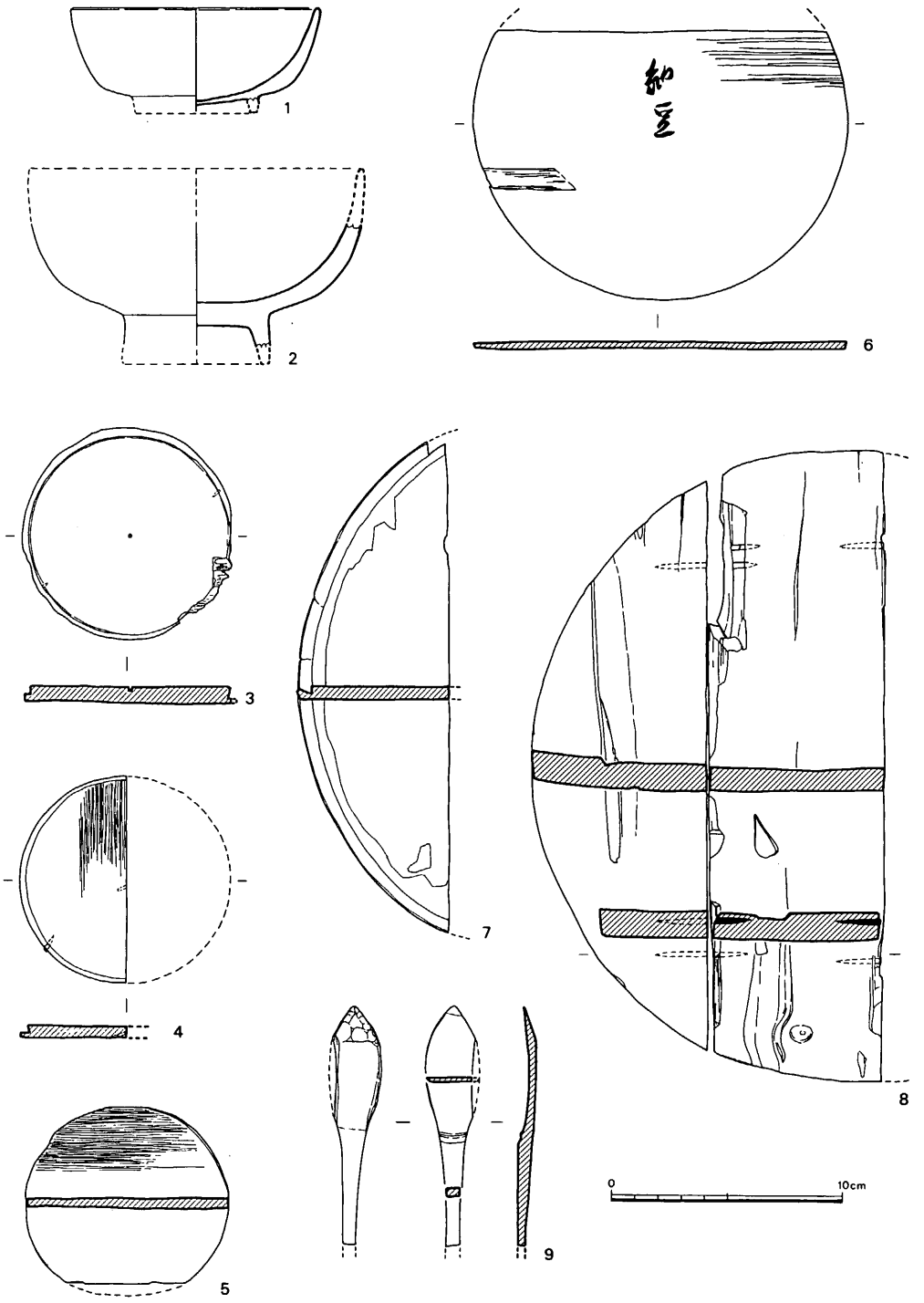
曲物（３～７）　３は小型の曲物の底板である。中心にはコンパスの針孔痕がある。円板の端部には側板の受けが彫り出され、側面には対応する位置に目釘と目釘孔がある。円板は内径8.6cm、外径9.1cm、厚さ0.7cmである。４も小型で半欠品であるが、３と同形・同大になろう。底板の半分を残すが、板の中央部には別の板を結合させるために打たれた目釘孔がある。端部には側板の受けを作り、目釘で止めた痕を残す。内径8.6cm、外径9.0cm、厚さ0.5cmである。５も３・４とほぼ同じ大きさの柾目板である。側板には刃物の削り痕がみられる。端部には側板の受けが作り出されていないが、曲物の底板であろうか。径8.7cm、厚さ0.4～0.5cmを測る。

６は柾目板を使った曲物の底板である。上面に「納豆」と墨書きされている。直径16.2cm、厚さ0.3cm。７も曲物の底板の一部である。外周には側板の受けを作り出している。内面には漆を塗っているが、端部には漆の痕跡がみられないことから側板は欠き込みをもったものと推定される。一部に膠ではないかと思われる付着物もあるから、側板は膠止めの可能性がある。内径で24.8cm、外径25.8cmに復原される。厚さは0.6cmである。なお、裏側は素地である。

樽材（８）　板目材を使用した樽の底板で、表裏とも粗い加工である。板を３～４枚合わせて底板としているが、板の接合には材質の硬い木か竹を目釘として用いたようで、大きな板の下半には釘が残る。また、断面でみるとおり、縁の部分は斜めに加工する。径27.5cm、厚さ1.4cmで、杉材か。

匙（９）　木質はさほど硬いものではない。柾目材を使用している。内側は丁寧に仕上げているが、裏面先端には工具痕を残している。匙の部分で長さ5.5cm、幅2.4cm、厚さ0.2～0.3cm。柄の先端を欠くが、幅0.6cm、厚さ0.4cmである。

小刀柄（10～13）　10は木の枝の部分を削り、楕円柱状の柄としている。茎を挿入する孔は、奥行き2.6cm、長さ0.8cm、幅0.3cm程である。全面に漆を塗っているが、小刀の取付部分はやや狭く削り込まれ、口金の痕がある。この部分には漆は残っていない。柄は茎の挿入部から二つに割れている。長さ12.7cm、柄の断面は1.3cm×1.6cm程であったろう。11は丸木を楕円柱状に削り出し形を整える。茎挿入孔が茎の痕跡を残していることから、刃は打ち込まれたものであろう。柄は長さ8.2cm、断面では1.1cm×2.0cmを測る。12は板を２枚合わせて柄としている。合わせた一端は削られた面が揃うが、他の一端は形状が揃わない。図では下の板に刀の痕が残っており、この形からは鞘ともとれる。鞘とすれば端部が不揃いなのが気になる。ここでは柄と考えておきたい。２枚の板は紐で縛って柄としていたのではなかろうか。長さ8.6cm、断面は1.4cm×1.9cmである。13も柄であろう。茎挿入の孔から割れた片側部分である。両端部は面取りされ、表面全体には細かい削り痕がある。柄の一端には小刀によると思われる陰刻文字がある。



第41図　SG4190出土木製品実測図（1）

文字は「堤」であろうか。茎挿入孔はくり込みで作られている。長さ7.1cm、幅2.0cm。

糊刷毛（14）　厚さ0.7cmの柾目板の一端に裂け目を入れ、この間に刷毛を挟み込み、板の表面に刻まれた罫線上に目釘を打ち込んで止めている。図の右半分には裂け目が進行したため板どうしを閉じ合わせるための目釘痕が残る。刷毛が挿入される部分で肩を丸く作り、肩の部分には削り痕が残る。本体の長さの1/3を柄としており、柄の中央には両面から穿孔した孔が空く。大きさは刷毛が挿入される部分で復原幅12.8cm。この部分から柄までの長さ11.9cmである。柄の側面は丸く加工され、長さ4.5cm、幅4.4cm、厚さ0.6cmである。

篦状木製品（15・16）　15は棒状のもので、一端は欠けている。断面は長方形で、先端の片側を薄く尖らせ篦状としている。側面は割れているが、上・下面には漆を塗っている。残存長13.5cm。16も一端を欠くが、残存長12.0cmを測る。側面の一方は木目に沿って割れており、ために断面の形が歪んだものとなっている。本来の表面には墨が塗られているが、先端の削り出した部分には墨はない。篦として転用したものであろう。中央の断面形は本来1.0cm程の方形と推定される。

耳掻（17）　柄の部分が折れているが、端部まで残っており、13.0cmの長さがある。柄の部分は断面菱形に作るが、耳掻の匙部分に近づくにつれ丸く削り込まれる。匙の部分は長さ0.6cm、幅0.3cmで、曲線状に折り曲げている。

棒状木製品（18）　側面を丁寧に削り込んだ棒状品で、用途は不明。断面は円形で、長さ21.5cm、上端径0.9cm、下端径0.7cmと図の下の方がやや細く作られている。

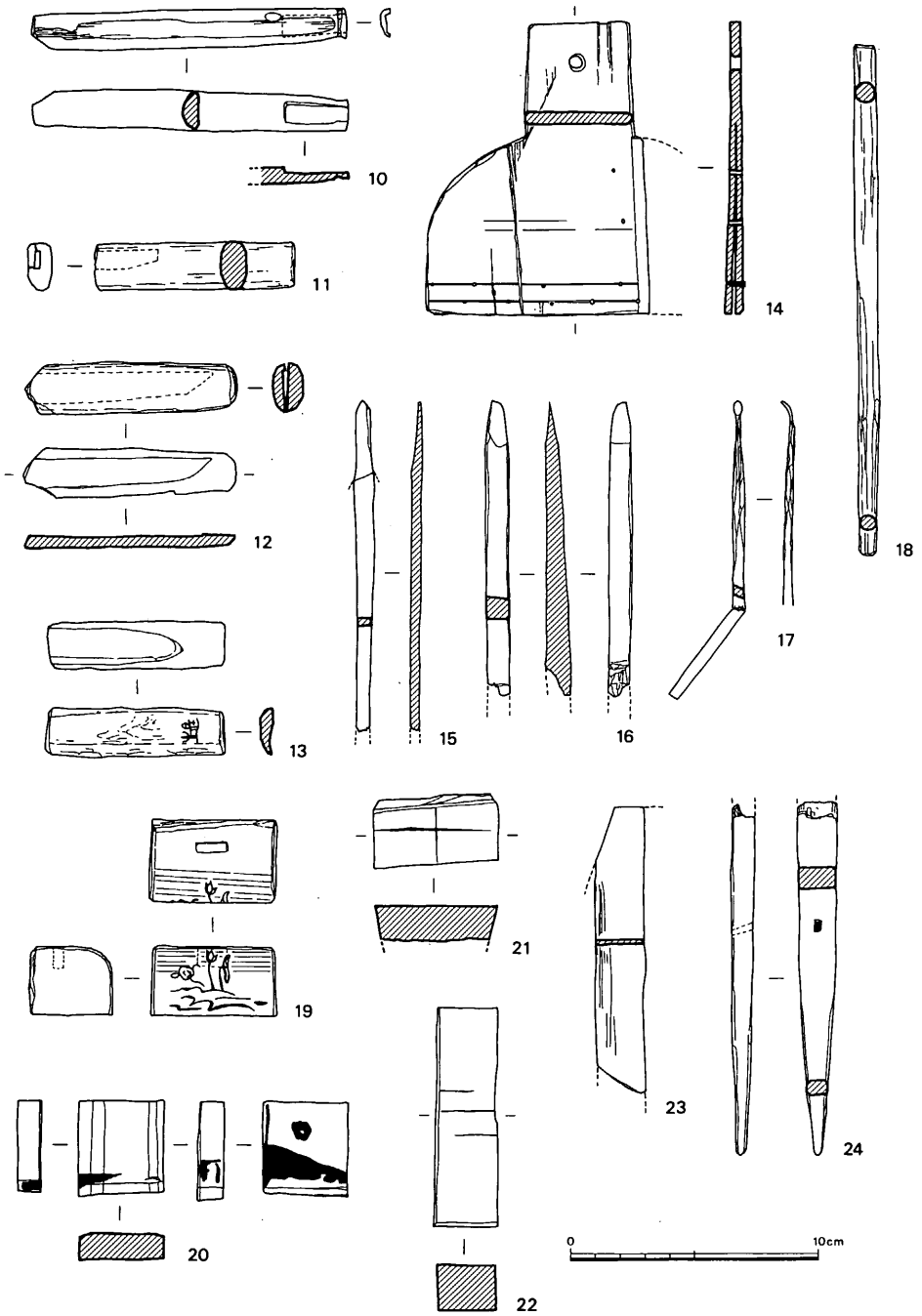
位牌（19）　位牌の台座である。正面から上面にかけて面取り状に仕上げする。側面・背面にも削り痕を残す。正面から上面にかけて墨で蓮華と葉・波が描かれている。裏面には「一」の墨書がある。上面の中央やや奥に位牌を立てる臍孔が穿たれている。臍孔は長さ1.4cm、幅0.4cm、深さ1.0cmである。台座の大きさは幅5.1cm、高さ2.8cm、奥行き3.3cmを測る。

用途不明品（20～22）　20の上方の面は鋸で切断されている。表面と思われる部分の側面は二面面取りされ、下端も一面面取りを施している。黒く塗りつぶした部分は墨の痕である。長さ3.8cm、幅3.4cm、厚さ1.1cm。21の図の上部は側面の割れである。表面に「十」字形の罫線と思われる墨痕がある。下面は割れている。長さ2.7cm、幅5.1cm、厚さ1.5cmを測る。22は直方体を呈し、上面に3本の罫線と思われる墨痕が平行につく。長さ8.7cm、幅2.5cm、厚さ1.9cm。

ヘギ板状木製品（23）　23は薄い柾目板で、用途不明品。両面及び下端は割れて欠損している。残存長11.7cm、幅2.0cm、厚さ0.2cmである。

杓杓（24）　上端を欠損しているが、下端は先細りに作られる。断面長方形をなすが、角は面取りされている。先端から9cmの部位に目釘が斜めに打ち込まれている。残存長14.3cm、上部の断面形は長方形で、0.9×1.5cm程である。杓杓の柄の先端部分になろう。

杓文字（25）　大型の杓文字である。硬質の木材を利用し、一枚の板から作り出している。



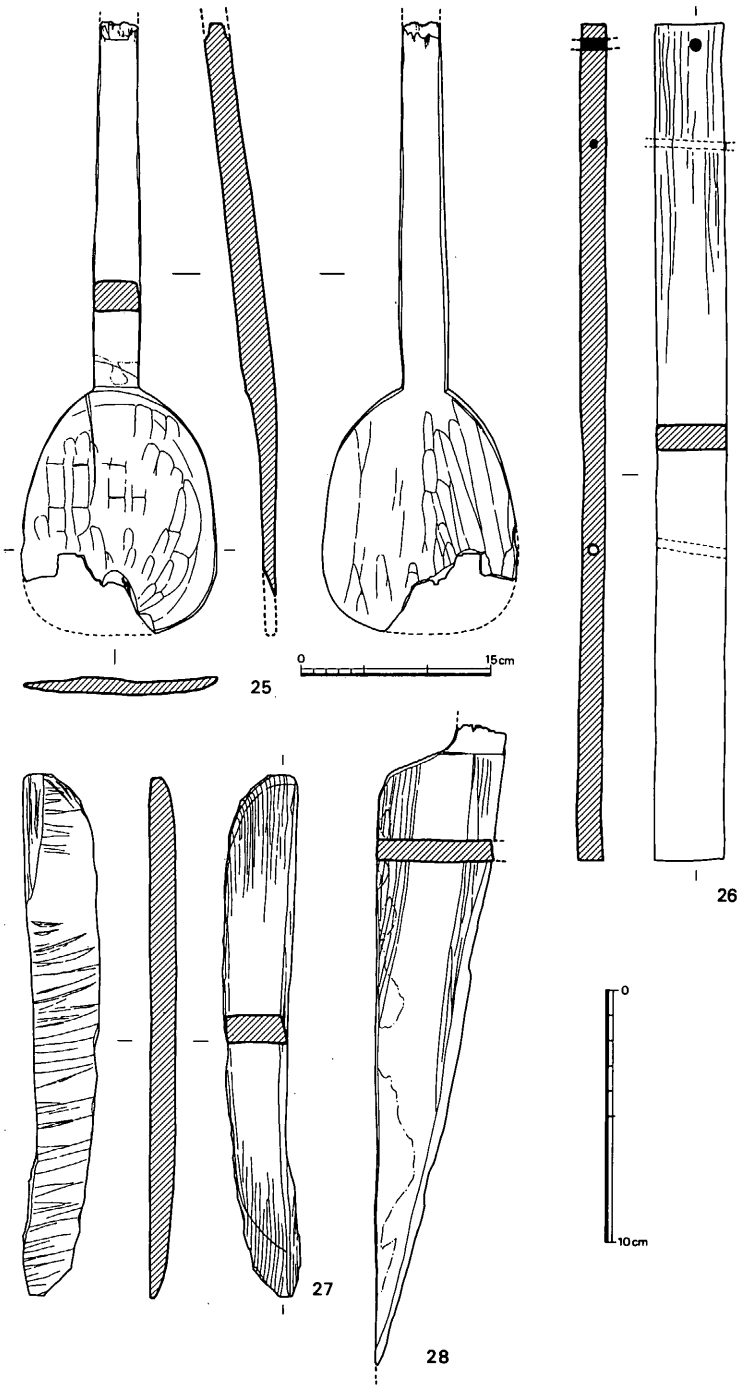
第42図　SG4190出土木製品実測図（２）

篦の部分と柄の部分とは13度程の角度である。柄の先端は欠損している。篦部分の先端も欠損するが、形状の推測は可能である。篦の部分は材木を柄の部分からくり込むように作り、内外面には丁寧な削り痕が残る。篦部分の大きさは長さ19.7cm、最大幅15.5cmである。柄は残存長29.0cmで、蒲鉾形の断面形に作られ、幅3.7cm、厚さ2.6cmを測る。

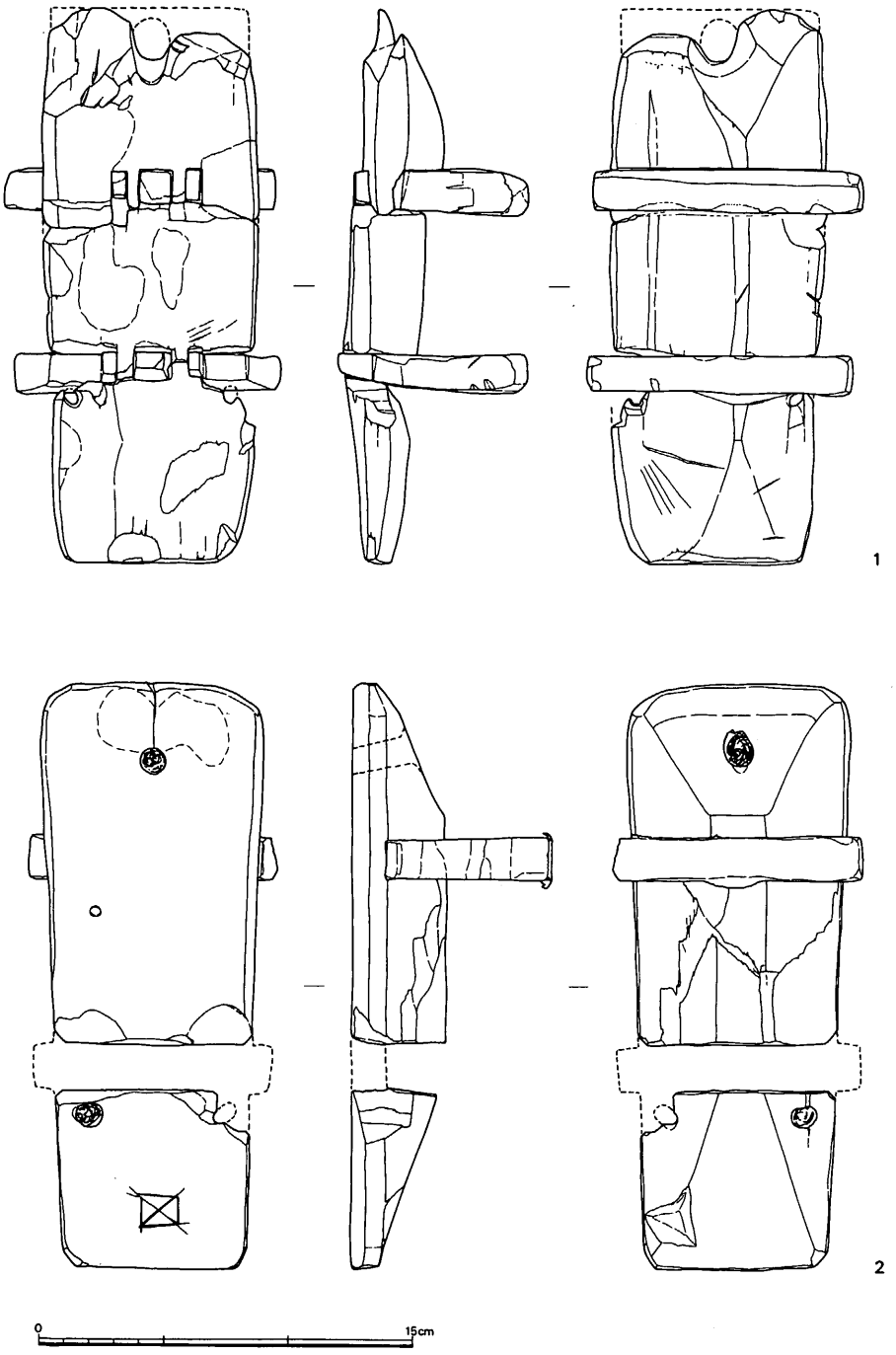
板状木製品(26～28)

26は断面長方形の細長い棒状の板で、側面には他の材と連結させていた目釘孔が2箇所貫通している。表面全体を調整した痕はなく、滑らかではない。頂部付近の孔には木釘が残っている。長さ33.3cm、幅2.8cm、厚さ1.1cmを測る。

27は工具の加工痕のある木片である。一面は手斧様の工具による粗い削痕を残す。他の一面は平滑に仕上げら



第43図　SG4190出土木製品実測図（3）



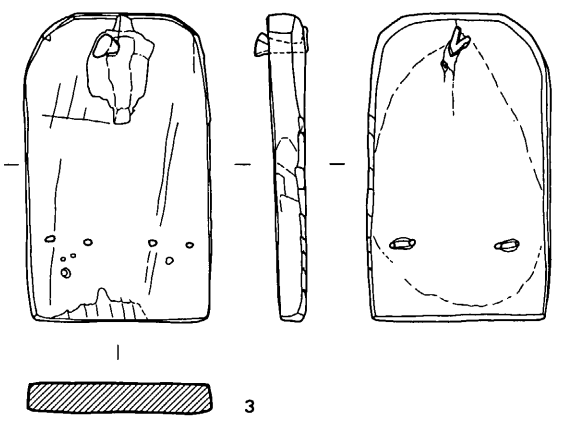
第44図　SG4190出土下駄実測図（１）

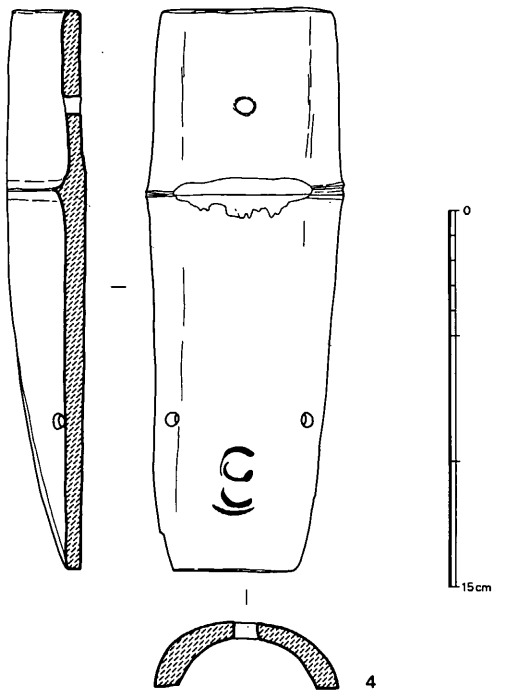
れていて、両端部には丸みを付けている。側面にも粗い削り痕の凹凸が残る。側面の片方は割れている。長さ20.7cm、残存幅2.5cm、厚さ1.1cm。用途は不明。

28は柾目材を使った木製品の破片である。破片からは全体の形状は窺えない。図の面が表であろう。角の部分を丸く作り、柄状に作り出される部分は一段低く削り込まれている。側面から表面にかけて墨痕を残している。片方の側面は割れである。残存長25.4cm、最大幅5.0cm、厚さ0.9cm。用途不明の木製品。

下駄（1～4）　1・2は差し歯の下駄である。1の台部は頭部を一部欠失しているが、長方形を呈する。台の裏面は山形で、最大厚3.2cmである。台幅は頭部が8.0cm、尻部が7.0cm、長さ27.4cmで逆台形となる。前後とも歯を固定するための臍孔3個がそれぞれ空けられている。臍孔は中央が大きく1.3cmの正方形で、両端が1.3cm×0.6cmの長方形を呈する。歯は台形をなし、台に差し込むために出臍がある。

2の台部も1と同じ形状を呈し、後歯の差し込み部分で折れているが、長さ23.5cm、頭部幅8.9cm、尻部幅7.9cm、最大厚3.8cmである。1の様に歯を固定する臍孔はなく、ただ溝に歯を差し込むだけのものである。尻部に「⊠」の線刻マークを付しているが、意味不明。





第45図　SG4190出土下駄実測図（2）

3は小型のもので、台の長さ12.2cm、幅7.0cm、厚さ1.0～1.5cm。全体的に擦り減って薄くな

っているが、歯の痕跡はみられず、本来歯がなかったのであろう。頭部には鼻緒孔はなく、先端が二股に分かれる釘を打ち、尻部には左右に3個孔を空けて鼻緒の孔としている。頭部の鉄釘が鼻緒を止めるためのものか疑問であるが、やや特殊な使われ方をした下駄であろう。4は竹製の下駄で、孟宗竹をほぼ半裁し台とする。節の部分と上面を若干削り平滑にしている。また、下端は尻部に向かって斜めに削り落とす。そのために台部の幅が頭部で7.0cm、尻部で5.0cmと尻部に向かって狭くなっている。鼻緒孔は3箇所に穿孔する。尻部には焼き印もしくは墨書とみられるマークがかすかに残る。

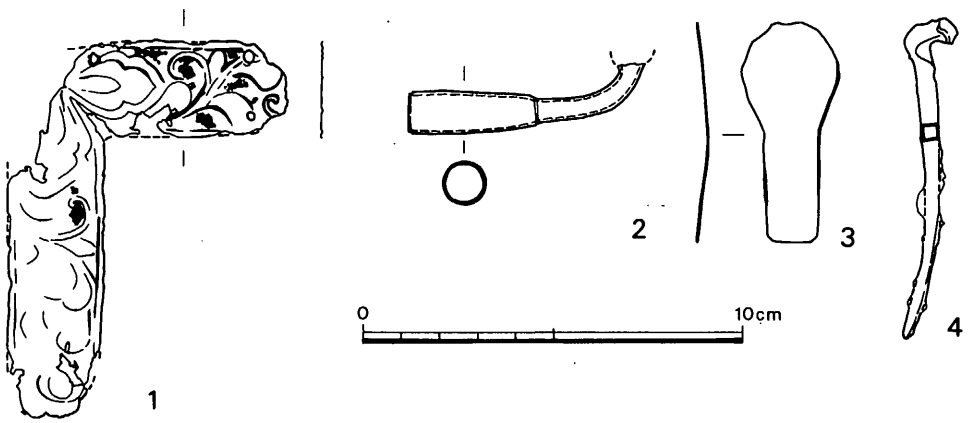
金属製品（第46図、図版51）

飾り金具（1）　真鍮製の飾り金具である。L字状になっており、角部に打たれた金具と思われる。厚さ1㎜にも満たない極めて薄い金属板であるため破損が著しく全形は知りえないが、目釘孔の位置からみて両端はほぼ原形に近い残存状況とみられる。全体に大柄の唐草文を型打ちし、空間には細かい鱗様の円文を密に打ち出す。部分的に腐食があるが、大部分に金色の光彩を留めている。

煙管（2）　真鍮製の煙管の雁首である。火皿部は折れて欠失している。羅宇の差し込み部の径は1.1cm、長さ6.3cm。

匙形製品（3）　匙形を呈する厚さ0.5㎜の金銅製のものである。完形品で部分的に金メッキが残っている。上部の縁部は凹凸があり、丸くはなっていない。

釘（4）　鉄製の角釘である。断面の最大幅が5㎜で、上部は曲がっているが、ほぼ完形に近い。いずれもSG4190の出土である。

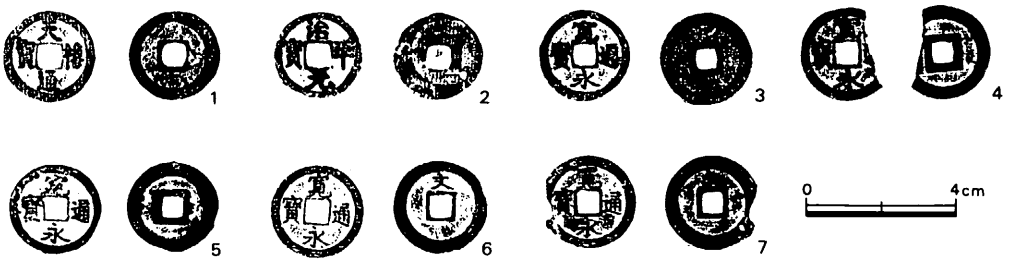


第46図　SG4190出土金属製品実測図

銭貨（第47図、図版51）

1・2は宋銭である。1は北宋第三代真宗の天禧年間（1017～21）に鋳造された。鉄鋳のも

のもあると言うが、出土例は銅銭。2は北宋第五代英宗の治平年間（1064）に鋳造された。二種類あって、出土例の他に篆書体のものがある。3～7は寛永通宝で、初鋳は寛永13(1636)年と言う。以後、寛永14年・承応2(1653)年・明暦(1655～57)年・元禄4(1691)年・元禄13(1700)年・享保20(1735)年・元文元(1736)年・文政8(1825)年・天保6(1835)年・安政6(1858)年・萬延元(1860)年・文久元(1861)年と江戸時代を通じて鋳造され、幕府ばかりでなく諸藩においても鋳造されている。銅銭・鉄銭の二種類がある。3～5は裏に文様や文字のないのが特徴であるが、これとて寛永年間から文久年間まで40数種があり、にわかに鋳造年代を見きわめ難い。6・7は裏面に「文」が鋳出されている銅銭である。「文」のある寛永通宝は、寛文江戸亀戸銭と呼ばれており、鋳造年代には寛文元年・3年・8年の諸説があるという。奥平昌洪は諸説中『寛永銭録』の諸説考証極めて正確として、「右寛文8（1668）年本所亀戸村銭座にて鋳る所にして天和3（1683）年に至りて止む。…（後略）」と記している。



第47図　銅銭拓影

出土銭貨一覧表

No.	銭　貨	径（穴）cm	出土遺構	初鋳年代	備　　考
1	天禧通宝	2.45（0.65）	遺構検出時	北宋天禧元（1017）年	本例は銅銭、鉄銭あり
2	治平元宝	2.4（0.65）	SD4175	北宋治平元（1064）年	二種あり、他は篆書体
3	寛永通宝	2.45（0.55）	SD4175	江戸寛永13（1636）年	
4	〃	2.55（0.65）	SD4186	〃	
5	〃	2.45（0.65）	SG4190	〃	
6	〃	2.5（0.65）	SX4179	江戸寛文8（1668）年	文銭、江戸亀戸銭座
7	〃	2.55（0.65）	江戸整地層	〃	〃

参考文献

1　奥平昌洪　『東亜銭志』第1巻・第3巻・第4巻　歴史図書社　1974

2　中橋掏泉編『古銭大鑑』　大文館　1969

石製品（第48～50図、図版52）

石臼（１～３）　1は上臼で約1/8が残る。目は擦減り、よく使い込まれている。厚さ7.0cm。調査区北端の出土。２は下臼で1/4が残る。中央に円形の心棒穴を有する。目は６分割型であろう。復原径23.0cm、厚さ5.9cm。SX4174の出土。３は上臼で1/4残る。下面はかなり磨滅しており、上面の縁も擦れている。厚さ7.0cm。SX4174から出土した。石材はいずれも花崗岩。

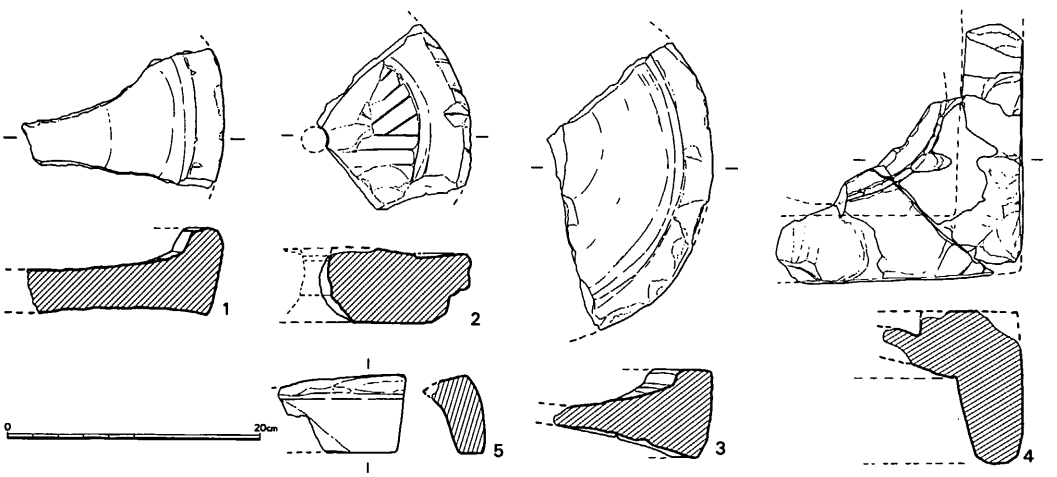
五輪塔（４）　４は五輪塔の地輪で、隅部が残る程度。上面には水輪を安定させるためであろうか穴が空いている。高さ12.0cm。凝灰岩製で、SD4175の出土。

不明石製品（５）　５は用途不明の石製品で、上面・下面・端面に加工痕がみられる。高さ6.3cm。花崗岩製で、調査区北端の出土。

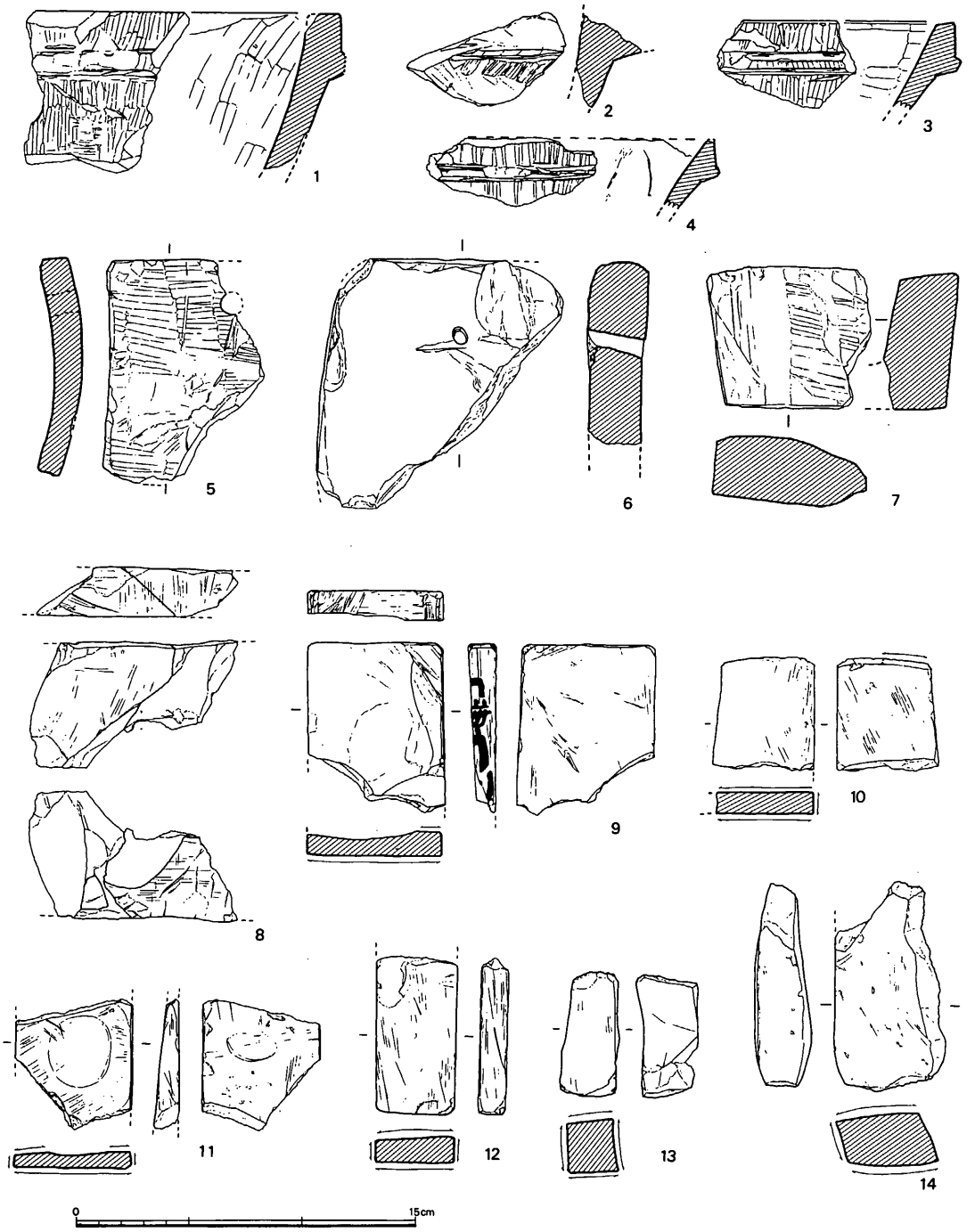
碁石（13）　第50図13は碁石で、径2.3～2.6cm、厚さ0.5cm。SX4174の出土。

滑石製石鍋（１～４）　１は鍔の削り出しが弱いタイプで、器面は工具による削り調整。SD4175掘形の出土。２の鍔は大きく突出するが、口縁部は欠損する。SB4180の掘形Ｐ19の出土。３の口縁端部は内傾する。器面調整後、鍔部の調整を行うが、鍔は突出が弱い。ＳＥ4186出土。４も口唇部を欠損する。鍔の突出は弱い。SD4175の出土。

板状石製品（５～７）５は石鍋の再利用品で、上端付近に径１cm程の円孔がある。長さ10.0cm、残存幅7.2cm、厚さ2.1cm。SB4180Ｃの掘形Ｐ29から出土した。６はほぼ一定の厚さを示すもので、上部寄りに穿孔を有する。長さ11.1cm、幅10.0cm、厚さ2.7cmを測る。SB4180Ａの掘形Ｐ２から出土した。７は厚さが３cmとやや厚いが、外底面に煤が付着しており、石鍋を再加工したものであろう。長さ6.1cm、幅7.2cm。ＳＧ4190から出土した。



第48図　石製品実測図（１）



第49図　石製品実測図（２）

砥石（８～14）　８は大きく欠損するが、側面には線状の削痕がつく。幅5.7cm、厚さ2.2cmの砂岩製。SB4180Cの掘形P35の出土。９は長方形をなすもので、硯の転用品か。側面に墨書がみられるが、割れており判読不明。残長7.5cm、幅6.1cm、厚さ1.3cm。粘板岩製で、SB4180Cの掘形P35から出土した。10も側面に墨痕がみられ、硯の転用品であろう。上面は欠損後再利用している。残長5.0cm、幅4.5cm、厚さ1.0cm。粘板岩製で、SG4190の出土。11は両面に円形の浅い窪みを有する。残長5.8cm、幅5.2cm、厚さ1.2cm。粘板岩製で、SX4174の出土。

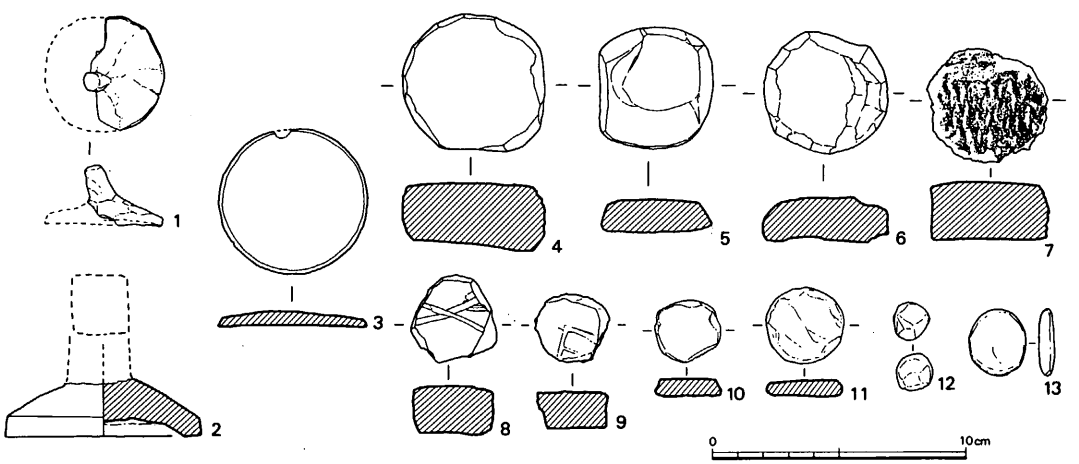
12は上部を欠損しているが、４面を砥面とする。残長7.1cm、幅3.5cm、厚さ1.2cm。粘板岩製。近世以降の建物掘形の出土。13も４面を砥面とする。長さ5.5cm，幅2.5cm，厚さ2.8cm。花崗岩質砂岩製で、SD4184の出土。14は上面の一部を欠損する。右側面は自然面で、砥面は３面。残長9.3cm、幅4.9cm、厚さ2.5cm。石材は13と同じで、SD4185掘形の出土。

土製品（第50図、図版52）

不明土製品（１・２）　１は径4.5cm程の円盤に捻り出された摘みが付く。内外面に指頭圧痕・ナデがみられる。SD4184上層の出土。２は瓦質の土製品で、径7.8cm、高さ2.4cmを測る。上部は方形の支柱が剝落している。外面と底面は削りにより、内面はヨコナデ調整。

円盤形土製品（３～11）　３は径5.8cm、厚さ0.7cmの陶製の円盤で、窯道具として使用したものであろう。器面はナデによる調整。SX4178掘形内の出土。４～９は瓦を打欠いて円盤状に整形したもの。４～７は径4.5～6.0cm。８・９は外面に格子目の叩痕がみられる。径は８が3.3cm、9は3.0cm。10・11は土師器の転用品で、10は径2.5cm、厚さ0.7cm。11は径3.0cm、厚さ0.7cm。３はSX4178、４はSD4175、５はSB4180Cの掘形P38、６・11はSD4185、７は表土、８・10はSD4186、9はSX4174の出土。

土玉（12）　12は土玉で、径1.5cm。SX4181の出土。



第50図　石製品・土製品実測図

小　結

今回の戒壇院の調査は、庫裡建物の全面改築に伴うものであったが、戒壇院の境内地内における本格的な調査であり、古代の戒壇院に関わる遺構の検出が期待された。調査の結果、検出された遺構は、江戸時代の礎石建物３棟、建物に伴う排水施設（石組溝・暗渠遺構）、井戸１基、池状遺構１基、溜枡１基、埋甕３基、埋桶１基などである。古代の遺構には瓦組み暗渠、南北溝、中世の遺構として東西溝が検出されたが、江戸時代の遺構は元禄期における戒壇院復興に関わる重要なものであり、遺構の保存を前提として調査を行ったため古代の遺構に関しては部分的な調査とならざるをえなかった。以下、検出した遺構を時期ごとに記し、まとめとする。

古代Ⅰ期（８世紀代）

この時期の遺構には、調査区の西側で検出した暗渠遺構SX4191がある。丸瓦4点を繋げて西側に排水したことが窺えるが、瓦列は途中で終わっている。類例の遺構として、観世音寺北面築地跡（第70次調査）で検出されたSX1831・1832・1833・1834・1835がある。８世紀後半の東西溝SD1830・1850に排水する暗渠施設で、北面築地に関する遺構と考えられている。

また、西端部の黄褐色整地層からは８世紀後半代の土師器杯が出土した。天平宝字５（761）年に戒壇院が設置されるが、延喜５（905）年の『観世音寺資財帳』によれば、戒壇院には檜皮葺堂と板葺禮堂があったとされ、SX4191は戒壇院創建期の整地に関わる遺構とみなせよう。

古代Ⅱ期（９・10世紀代）

調査区の西側で検出した南北溝SD4188がある。埋土中には瓦類が多量に入っていた。

中世（12世紀代）

当該期の遺構として東西溝SD4189がある。

戒壇院は観世音寺の南西の一角を占め、『資財帳』によれば、戒壇院には北・東の二面の築垣があり、東側は「貳拾壹丈柒尺」、北側は「壹拾丈柒尺」とある。戒壇院の南面築地塀の東側で、それに直交してトレンチを入れたが(第155次調査)、地表下１mまで江戸時代の攪乱を受けていた。その東側には観世音寺の築地跡と推定されている土塁状の高まりがあり、第130次調査でもトレンチを設けて掘り下げたが、積極的に築地とし得る状況ではなかった。しかし、この高まりから北に217尺（65.1m；単位尺0.30m）をとるとSD4189の南肩部にあたる（第51図参照）。南面築地推定線Ａの南７mには第115次調査のSD3340、第109次調査のSD3149があり、両者は一連の東西溝と考えられるが、この溝を境にして北と南とでは状況が大きく異なる。即ち、この溝より北側は遺構がまばらであり、遺構築造に際し強い土地規制が働いていたとみることができる。今次調査検出のSD4189は、戒壇院の北縁を限る区画溝として捉えられるが、築地塀がこの付近に存在したからこそ中世期まで強い規制を維持し得たものと考えられよう。

近世（17世紀後半～19世紀）

今次調査の検出遺構の主体は当該期にあり、礎石建物・井戸・排水施設・池・埋甕などが検出された。礎石建物SB4180A・B・Cの3棟は、ほぼ同じ場所に重複して築造されており、A→B→Cへと新しくなる。SB4180Aとその北面の石組溝SD4175Aが17世紀末～18世紀前半代で、SD4175Aは元禄14（1701）年銘の平瓦を使用した溜枡SX4177に切られることから、SB4180Cは18世紀後半～19世紀後半代に比定される。SB4180BはSB4180Aの焼失後に建てられた建物で、時期的には両者間に収まるものである。

池状遺構SG4190には17世紀後半～18世紀前半の遺物を多く含むことからSB4180Aに伴うものと考えられる。池状遺構からは豊富な木製品に混じって「東林寺」銘墨書木札が出土した。観世音寺の子院の一つに東林寺の名がみえるが、『筑前国続風土記拾遺』には「東蓮寺と云古刹の跡なり」とあり、既に廃寺となっていることが判る。現在、東林寺は福岡市と久留米市に所在するが、福岡市の東林寺は曹洞宗で、元禄9（1696）年、祖忠（明光禅寺積峰の弟子）と黒田光之（福岡藩3代藩主）の創建であるという。久留米市の東林寺は真言宗で、元禄15（1702）年、久留米4代藩主有馬頼元の建立によるものである。元禄以後の戒壇院と博多禅宗寺院との関係からすると墨書木札の「東林寺」は、福岡市の東林寺とみた方が妥当であろう。

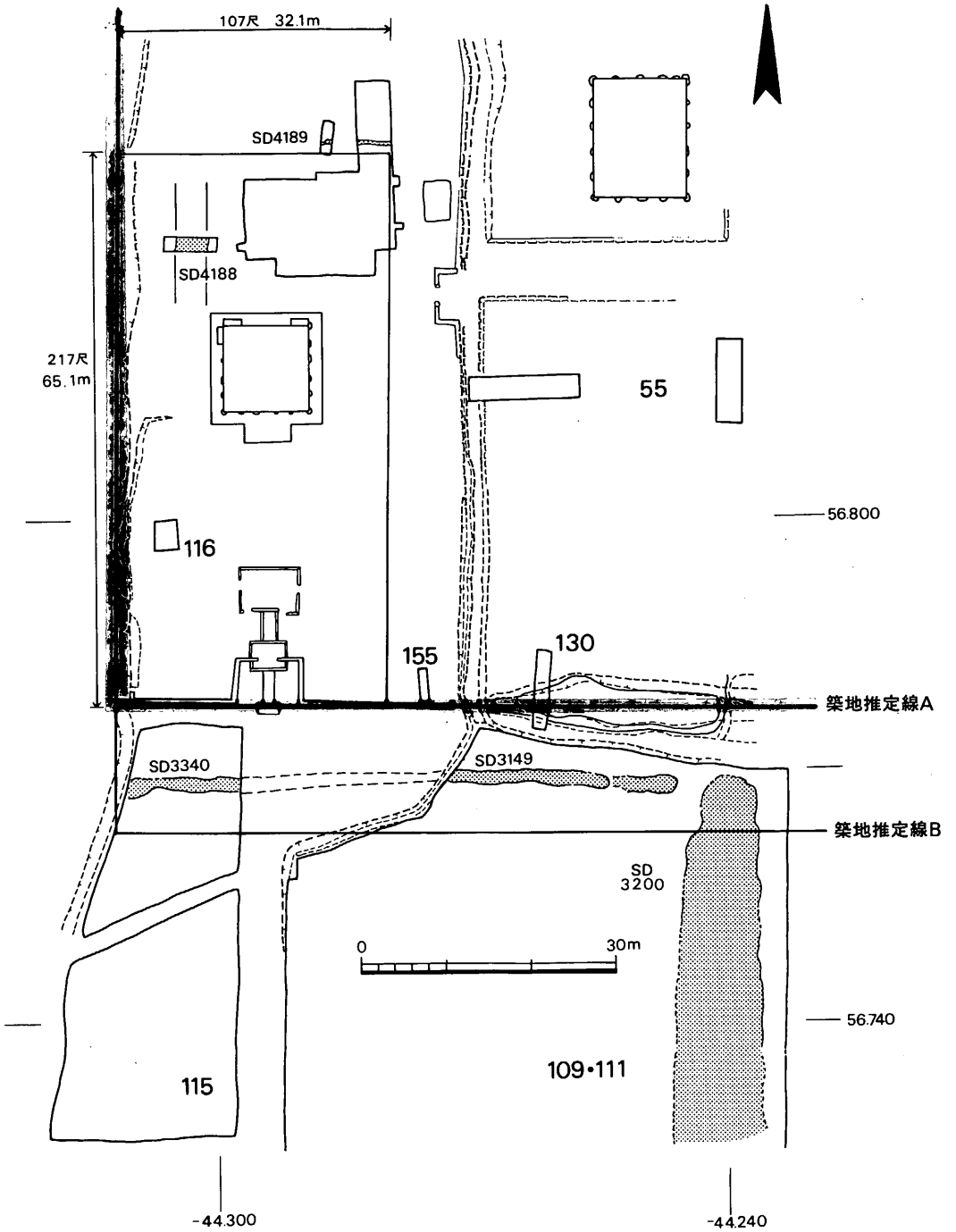
近世における戒壇院の復興は、寛文9（1669）年に崇福寺の僧智玄が本尊の修理を行い、黒田藩の宰臣鎌田昌勝が方三間の戒壇堂を建立したのを契機としてなされる。元禄年間には運照律師によって元禄13（1700）年に文殊・弥勒の両菩薩像が作られ、翌年の元禄14年には楼門が建立され、銅鐘も鋳造されるなど華々しい復興期を迎える。

また、近世の戒壇院周辺を描いたものには、①東長寺戒壇院関係文書（17世紀末頃）、②『筑前国続風土記付録』の挿絵（18世紀後半頃）、③『筑前名所絵図』の挿絵（19世紀前半頃）がある（参考文献註2参照）。今回検出した建物を絵図から検討すると、先ず①では戒壇堂・常住・隠居庵・井戸・塔・ちゃしず石が描かれ、池の位置には「比ノ木」（ひのき）が描かれており、池はまだ掘られていないことが判る。②・③の絵では、山門と戒壇堂の後ろに建物が二棟描かれている。今次調査では東西棟の礎石建物を検出したのみであるが、SB4180Cに伴うと考えられる石組溝SD4185には排水施設SX4173が接続しており、東側からも排水したことが窺われる。SD4158から観世音寺との境になっている道までは8m程の空間があり、もう一棟建物を想定することも十分可能である。以上のことから、SB4180Aが①の絵が描かれた後の元禄年間頃の建物で、SB4180B・Cが②・③の絵の状況を示すものと考えられよう。

参考文献

註1　児玉真一他　『中野上の原古窯跡』　小石原村教育委員会　1990

註2　『筑前太宰府戒壇院』　九州の寺社シリーズ13　九州歴史資料館　1994



第51図　戒壇院築地関係図

付記

戒壇院の庫裡新築工事に伴う発掘調査で最も新しい遺構は、取り壊された庫裡のコンクリート基礎である。この庫裡建物は太宰府天満宮の有力な子院であった浦之坊の書院を移築したものと伝えられている。

この建物について記述されたものに、

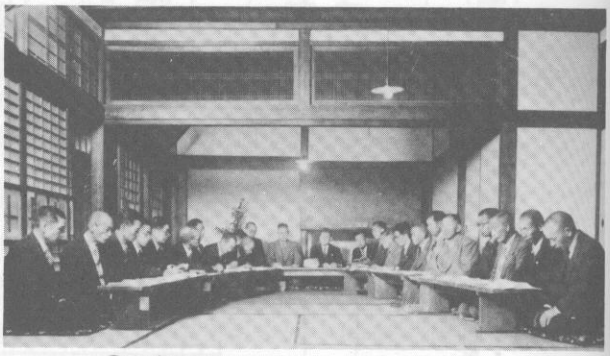
1．澤村仁「戒壇院の建築」『都府楼』第15号　財団法人古都大宰府を守る会　1993

2．佐藤正彦「戒壇院の建築」『筑前太宰府戒壇院』―九州の寺社シリーズ13―　九州歴史資料館　1994

があり、建築学的位置づけや重要性は、上記の著作に記されている。以下は、旧浦之坊の書院建物の変遷について、太宰府市文化財管理指導員大隈和子氏が調査されたものである。

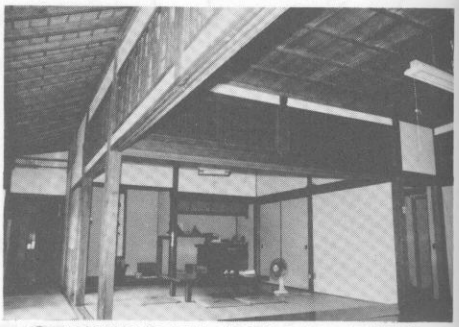
戒壇院の前庫裡は、町村合併前の太宰府町役場の建物であり、その前は材木商の杉村家の住居、そしてそれ以前は太宰府天満宮の社家の一つ浦之坊の建物であったといわれている。浦之坊の建物がどの様にして戒壇院の庫裡になったのか、ここではその変遷を追い、後世の資料として記録に残しておきたい。

戒壇院の前庫裡の書院・座敷部分は太宰府町役場の建物を前住職大西真応師が譲り受け、戒壇院に移築したものである。写真①（註１）と②を比較して頂くと、太宰府町役場の会議室と戒壇院庫裡の書院とは同じ建物であることがお分かりになるだろう。



①太宰府町役場会議室（昭和28年頃）

太宰府町役場は、昭和30年3月1日の太宰府町と水城村の合併によって現太宰府市役所前庭部分（観世音寺1丁目1番1号）に新築・移転するまでは、太宰府天満宮そばの通称小鳥居小路（大字太宰府字馬場・現宰府３丁目）にあった。そこが浦之坊の屋敷地といわれる所である。新庁舎が落成するのは昭和34年1月で、昭和35年9月末に太宰府町と戒壇院との間で旧役場の本館と町長室部分の売買契約が取り交わされている。その後、



②戒壇院庫裡書院（平成６年９月撮影）

解体・移築しているので(註2)、戒壇院の庫裡として完成するのは昭和36年になってからであろう(註3)。

では、町村合併前の町役場はいつから浦之坊の屋敷といわれる場所にあったのであろうか。『太宰府』「太宰府のあゆみ」によると昭和17年2月に役場建物を売却処分し、6月に移転するという記事があり、その後は移転記録をみない。正確な年はわからないが、聞き取り調査により町役場は小鳥居小路を挟んで斜向いにあったのが、浦之坊の跡地に移転したということと、移転時の町長名がわかった。その町長は「太宰府のあゆみ」によると昭和17年当時の町長である。これらから、合併前の町役場は昭和17年に浦之坊の屋敷地に移転して来たと考えてよいであろう。

他に浦之坊の屋敷地は役場になる前、しばらく杉村さんという材木商の住居と材木置場などに使われていたということも聞き取ることができた。ところで、役場建物は昭和17年の移転時に新築されたものではなく、以前からあった古い建物を利用したということである。

以上から、戒壇院の庫裡は昭和17年から昭和33年まで太宰府町役場として使われた建物を昭和35年に移築したものであることが判明した。

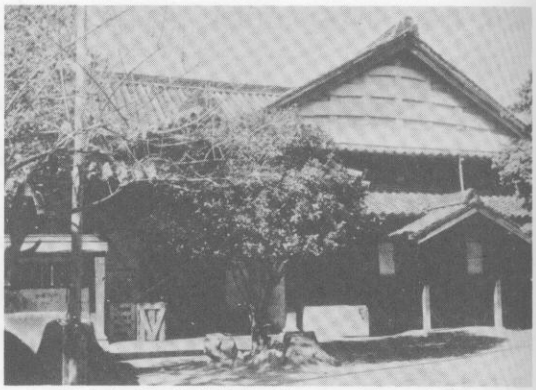
次に、杉村材木店（当時の当主は杉村治八郎）については、ご子孫によると店が小鳥居小路に来るのは大正時代になってからということである。大正6年生まれの次男誠氏は小鳥居小路では生まれておらず、大正9年生まれの三男重夫氏は小鳥居小路で生まれたということなので、この間に動いたと考えられる。そして昭和12年頃、小鳥居小路から転居したとのことであった(註5)。小鳥居小路の家は杉村家が新築したものではなく、移り住んだ時には既に古めかしい建物であったとのことで、言い伝えの浦之坊の建物の可能性が濃くなってきた。

さて、浦之坊であるが、浦之坊は神仏分離前の天満宮安楽寺（註7）の社家の一つで（註8)、江戸時代末には小鳥居小路の西並び、真ん中あたりに屋敷を構えていた(註9)。その場所は合併前の太宰府町役場があった場所と一致すると考えて間違いないものと思われる。

これで大きく社家浦之坊→杉村材木商→太宰府町役場という流れがあったことが判る。浦之坊から杉村家へ直接か否か、また杉村家から町役場へも4～5年のブランクがあるが、その間の所有者については風聞がないことを考慮すると小さな変遷はあったかも知れないが、概略はこの流れでよいのではないかと思う。そして建物自体は建築学的には江戸時代末まで遡り得ること、明治時代の可能性があるとしても浦之坊以外杉村家が取得するまでに「簡素ながら格式の高い座敷」(註10) を建てることができる者はいなかったのではないかと考える。もう少し推測するならば、建物の新造は神仏分離以後の浦之坊よりも以前、つまり江戸時代の社家として経済的基盤が確かであった頃の浦之坊の方が可能性が高いと思われるのである。

以上は戒壇院庫裡の変遷であるが、実は庫裡の玄関部分は浦之坊の建物ではなく、やはり社家であった十境坊(註11)の玄関を持って来たものである。昭和17年に浦之坊の建物が太宰府町

役場の建物になった時に、元十境坊の建物から玄関部分を役場の玄関として移築したと考えられる（註12）。写真③で植え込みの奥にわずかに見えている玄関は、戒壇院でみた庫裡の玄関である（写真④）。これで戒壇院の庫裡建物は、太宰府町役場時代に一応の形が整ったものを移築したことが判る。庫裡には玄関の上に白壁の二階があったが、これは故大西和尚が昭和35年の移築後に増築したのではないかということである（註13）。

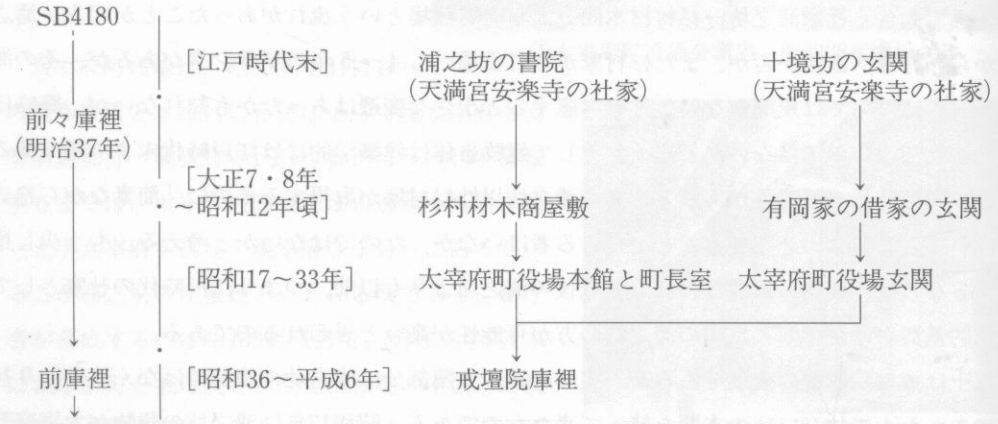

③太宰府町役場庁舎（向って左側が玄関）

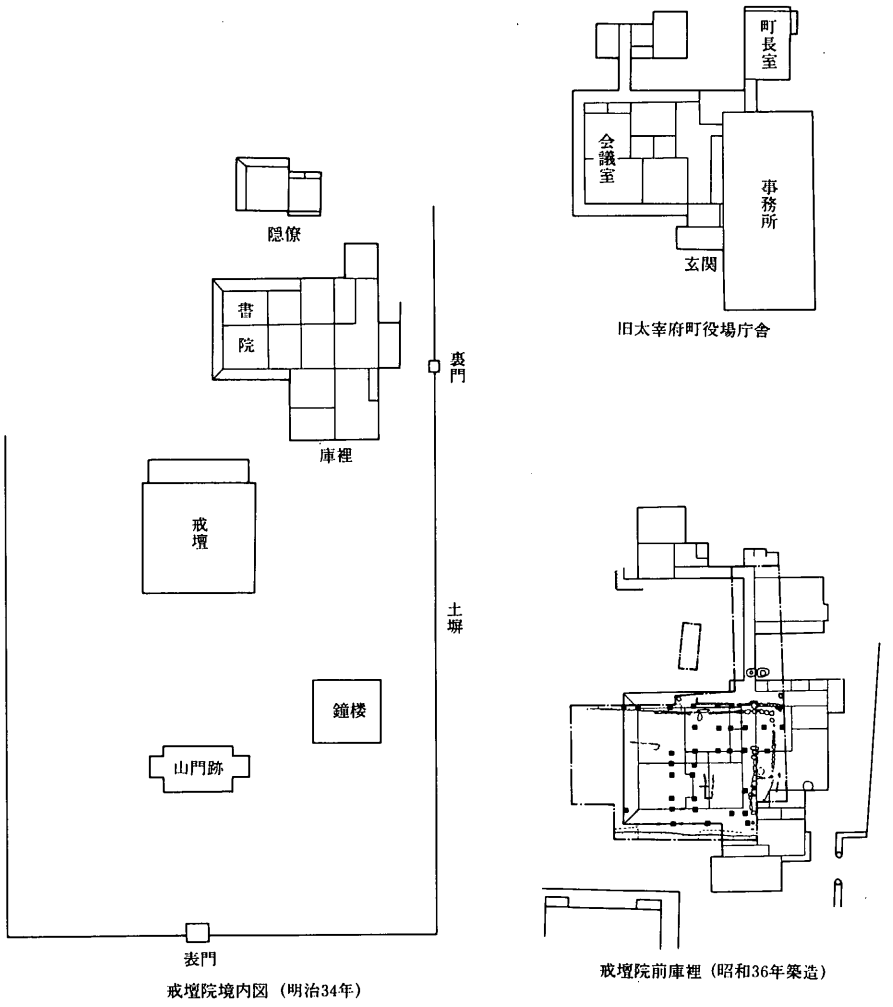
最後に、戒壇院の前庫裡は以上のような経緯をたどって庫裡として収まるが、その前の庫裡についても簡単にふれておこう。

前々庫裡は明治37年に完成している。明治37年は聖武天皇と鑑真和上の1150年忌を祈念して戒壇院の復興事業が行われた。庫裡もその中で建てられている（註14）。その庫裡が60年近い歳月を経て傷んだのであろう。昭和36年に前庫裡に改築されるのである。以上をまとめて図式化し、散漫な報告を終わりたいと思う。


④戒壇院庫裡玄関（平成６年９月撮影）

前庫裡の建物変遷





第52図　旧太宰府町役場・戒壇院建物図

追記

戒壇院の庫裡が元は浦之坊の建物で、太宰府町役場にも使われたことを耳にして以来、興味を持ち心当たりの方に尋ねたりしていたが、町役場の時のことでも、まして浦之坊時代のことなどは歴史の彼方で、だんだんと知る人も少なくなっている。そこで今の内に記録に残しておかなければと考えていた矢先、九州歴史資料館調査課のご好意により、その機会を与えられ、不完全ながらもこのような報告をする事ができた。聞き取り調査では、本当に色々な方にご迷惑をおかけした。心より感謝し、お礼を申し上げる次第である。

また、この建物についてご存知のことがありましたら情報をお寄せください。

註１　町制施行六十一周年記念誌『太宰府』（昭和28年９月13日発行）より。写真の撮影時期は、写っている人物から推測すると、この記念誌発行とそう隔たらない頃と思われる。

註２　昭和35年９月29日提出の太宰府町議会第39号議案「町有財産の売買契約締結について」によると、９月21日付けで太宰府町と大西勇氏（戒壇院住職）との間で売買契約書が締結されている。代金は50万円で、10月末日までに解体搬出することなども記されている。

註３　昭和36年は開祖1200年忌として、他に茶室の改装や土塀の修理をしている。

註４　註１前掲書。

註５　故杉村治八郎氏四男昭二氏（昭和２年生まれ）の談。

註６　同氏次女古賀ぎん子氏（大正12年生まれ）の談。家は古くて、十畳や八畳の大きな座敷があり、廻り縁があったとのこと。

註７　現在の太宰府天満宮は、明治の神仏分離前は神仏習合で、天満宮安楽寺とか安楽寺天満宮と呼ばれていた。

註８　浦之坊は菅原氏の子孫で、天満宮安楽寺の第18代別当善昇の三男信円の子孫の家である。菅原氏の子孫といわれる家は五別当と称し、大鳥居・小鳥居・浦之坊・御供屋・執行坊の５家であった。

註９　江戸時代末の文政４（1821）年に著わされた『筑前名所図会』（奥村玉蘭著）の「太宰府天満宮境内細図其四」による。他に慶応３年に描かれた「天満宮境内絵図」（吉嗣梅仙画）も参考になる。

註10　佐藤正彦「戒壇院の建築」『筑前太宰府戒壇院』―九州の寺社シリーズ13―　九州歴史資料館1994

註11　社家の中で衆徒と呼ばれた家の一つで、天満宮安楽寺に近い山上町（後の三条・現宰府３丁目８番）に屋敷を構えていた。

註12　十境坊の跡地に住んでいる有岡善雄氏（昭和17年生まれ）の談。子供の頃、役場の玄関は以前、有岡家の借家にしていた家から持っていったと聞いていたということと、善雄氏自身は十境坊の玄関だった頃は見たことがないが、祖父が戒壇院庫裡の玄関を見て「うちの玄関だ」と言ったということである。

また、前掲の「太宰府のあゆみ」を検討すると、昭和17年に町役場が移転した後、昭和18年７月に「役場建物改築中の処竣工」という記事があり、浦之坊の建物に手を加えたということが知られる。

註13　博多聖福寺から建物を移築したのではないかとの説もあったが、聖福寺ではその様な話は聞かないということであり、ある人は「二階は自分の書斎にする」という話を故大西和尚から聞いたので、そこは大西和尚が新築したのではないかと言うことであった。

註14　戒壇院に当時の復興計画の図面や、稟告・寄付の奉加帳などが残っている。

3．第165次調査

本次調査は住宅建設に伴う事前の発掘調査として実施した。当調査地は政庁の西方約450mの所に位置し、北方約50mの来木丘陵では瓦窯跡や製銅工房跡が発見され、大宰府組織の「匠司」との関連で注目されているところである。また、第96次調査では北辺部地域において８～11世紀の建物・井戸・溝などを検出しているが、本調査地に隣接する北辺部においては弥生期の溝などを検出している。本次調査の主な目的は、広丸地区における官人居住区（掘立柱建物群）の拡がりについて、その知見を得ることを主たるものとした。そして、当該地は平成７年度（1995）調査として実施した第157次調査の南側に隣接し、さらに西側隣接地を第148次調査、南側を第132次調査として実施しており、空閑地はこの第165次調査部分が僅かに残っている状況であった。このことから、当該地を調査することによって、この地域の遺構の概況はほぼ把握できたことになる。

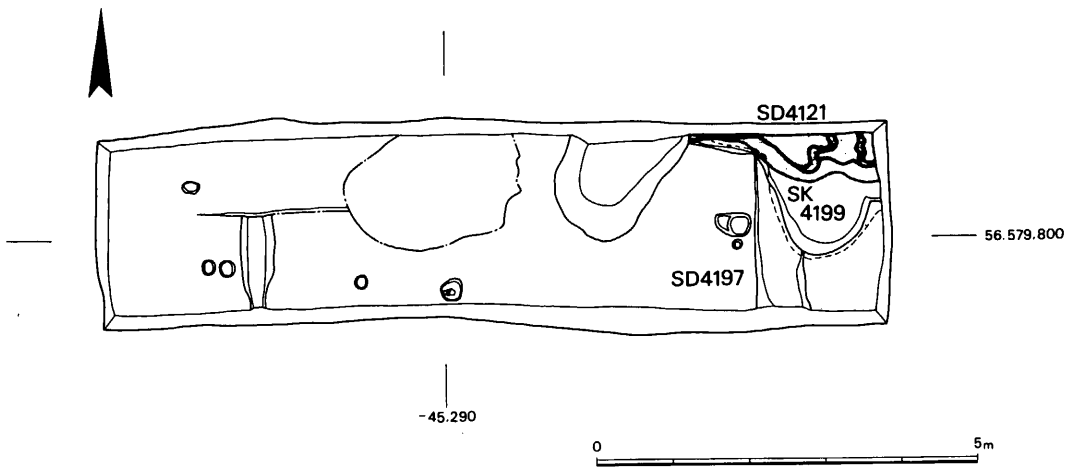
調査地番は太宰府市観世音寺3534-６・９番地で、調査面積は45.5㎡である。調査期間は平成６年12月12日～同年12月19日である。

検出遺構

本次調査で検出した主な遺構は、トレンチ東端に位置する土壙２基と溝２条である。

溝

SD4121　第157次調査で検出した東西方向の蛇行する溝に連続する溝である。出土遺物も極



第53図　第165次調査遺構配置図

めて少なく、古墳期の自然流路と思われる。トレンチの東北隅部でその一部を検出したのみである。この溝は南流するのではなく、この地域を横切り東へ流路をとっている。第157次調査の結果では、蛇行が著しいこと、遺物が少ないことなどから人為的なものではなく自然流路との判断をしており、今回の調査結果でもそれを否定しうるものではなかった。

SD4197　南トレンチ東端部を南北に流れる浅い溝である。幅80cm、深さ10～17cm前後である。出土した遺物も少なく年代的には不明。北側隣接地の第157次調査でもこれに連続する溝は検出されておらず、その性格については明かでない。

土壙

SK4199　SD4121・4197の上層で検出した浅い土壙である。一部を検出したのみで、全体の形状については不明である。埋土中には炭化物が混入しており、ここからは比較的まとまって土器片が出土した。これらは年代的に10世紀中頃～後半代に考えられるものである。先に調査した第157次調査で検出したSD4118・4123出土土器と年代的に同時期のものである。

出土遺物

SK4199出土土器（第54図、図版53）

土師器

杯（1）　内外面をヨコナデ調整し、底部外面はヘラ切り調整で板状圧痕が残る。底径7.2cm。

椀（2～4）　高台が「ハ」字形に開くもの（2・3）と直立するもの（4）がある。3点とも底部外面はヘラ切り未調整。

皿（5～21）　5～20は「ハ」字形に開く高台を貼付する。口径は9.8～12.9cm、器高2.4～2.7cm、高台径5.9～7.4cm。内外面ヨコナデ調整で、外底部はヘラ切り未調整。8・12・17には板状圧痕がみられる。21は脚付皿の脚部で、脚高1.5cm。脚部貼付部分の周辺には、ヘラ状工具の痕が残る。

その他の出土遺物（第54図、図版53）

中国陶磁器

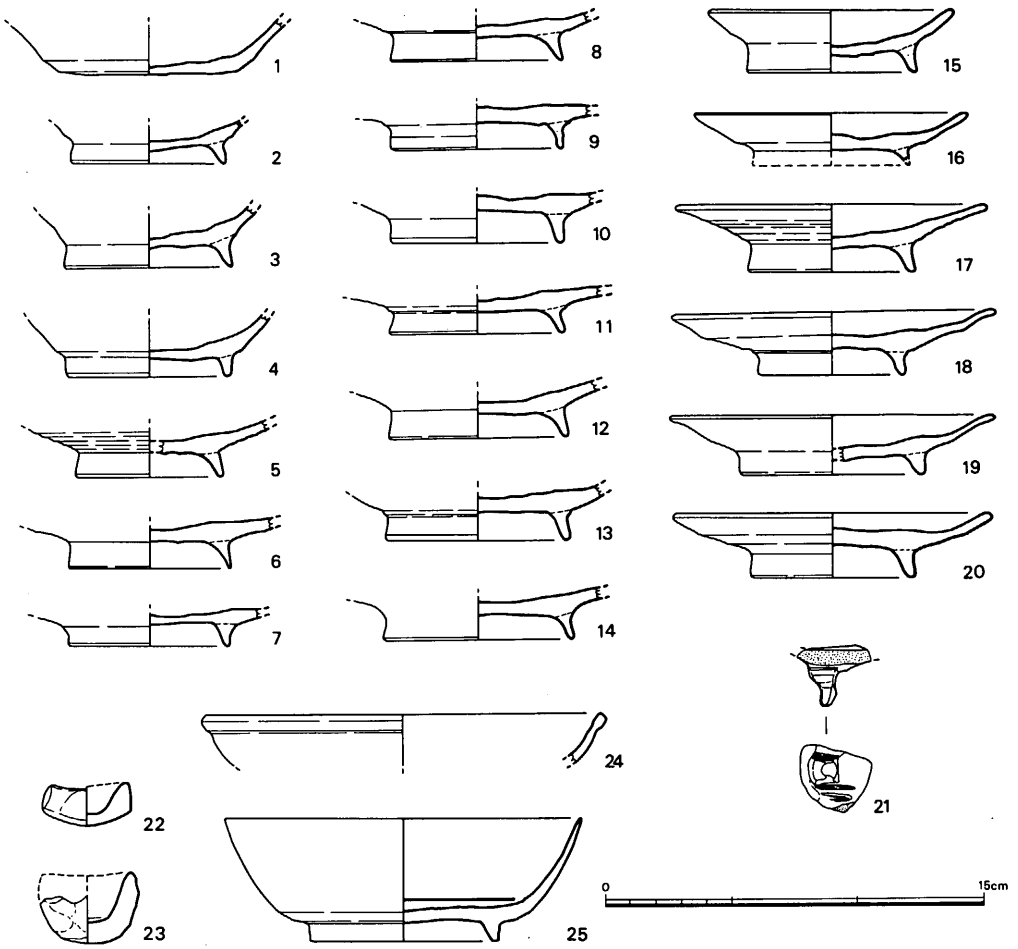
青磁

皿（24）　小さな玉縁状の口縁部をもつ。胎土は灰色で、釉はオリーブ色がかった乳白色を呈する。復原口径16.1cm。

椀（25）　越州窯系の青磁椀である。体部は丸みをもち、内面の体部と底部の境には段を有する。胎土は灰色、釉はオリーブ色。底部外面には目跡が残る。復原口径14.2cm、器高4.9cm、高台径7.5cm。

土製品

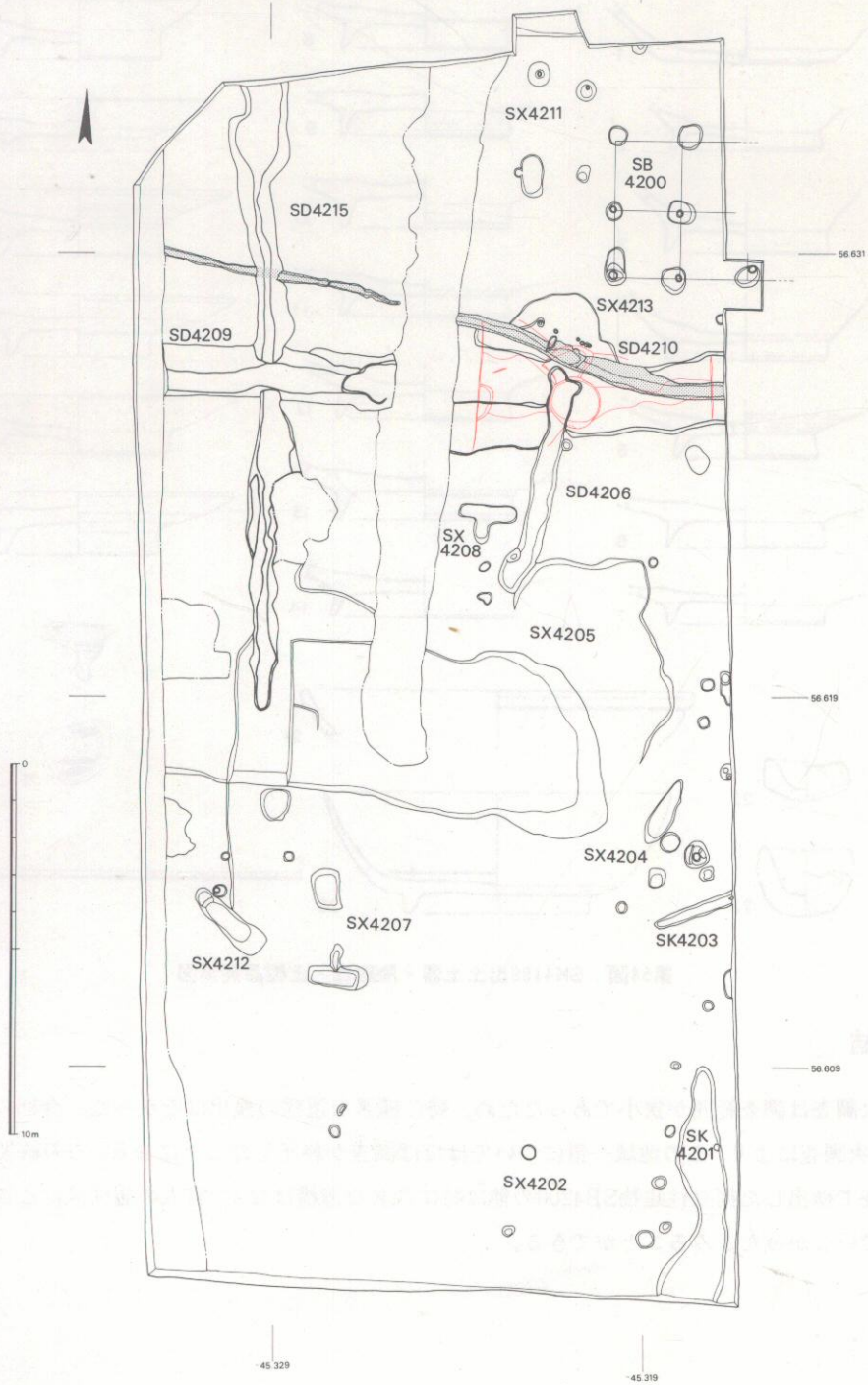
手捏ね土器（22・23）　外面はナデ調整。22の内面には指頭圧痕がある。



第54図　SK4199出土土器・陶磁器・土製品実測図

小結

本次調査は調査範囲が狭小であったため、特に顕著な遺構の検出はなかった。今回の調査と第166次調査により、この地域一帯についてはほぼ調査が終了したことになる。この結果、第166次調査で検出した掘立柱建物SB4200の他は特に顕著な遺構はなく、官人の居住区はここまでは及んでいなかったとみることができる。



第55図　第166次調査遺構配置図

4．第166次調査

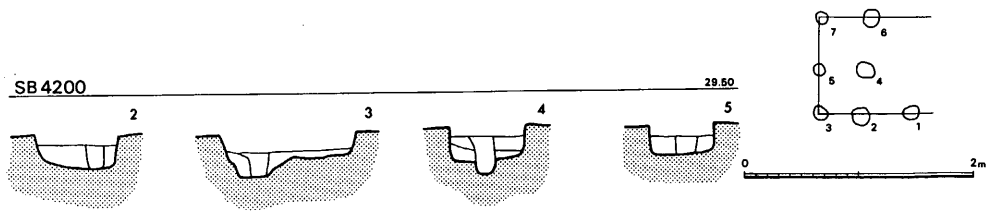
本次調査は住宅建設に伴う事前の発掘調査として実施した。当調査地は第165次調査地の北西約15mの所に位置し、昭和60年度に実施した第142次調査地の約10m西側にあたる。第96次及び第142次調査では、８～11世紀の掘立柱建物11棟・井戸１基・溝２条などを検出している。この２箇所の調査結果では、建物の規模・柱の形状・大きさから官衙ではあるものの官人の居宅の可能性が考えられることを指摘していた。この建物群が西側へどれくらいの拡がりを有するのか、今後の課題として残されており、今回の調査の目的もこの範囲を確認することにあった。調査の地番は太宰府市観世音寺478番で、調査面積は550㎡である。平成6年12月16日から調査を開始し、１箇月後の平成７年１月17日に終了した。表土の除去と埋め戻しには重機を用いた。

検出遺構

検出した主な遺構は、掘立柱建物１棟・溝４条・浅い落ち込み状の遺構、それに小ピット群である。表土を除去すると発掘区の北側では地山面となり、遺構が検出される。遺構面は全体になだらかに南へ傾斜している。発掘区の南端では表土下75cmで、遺構面上に堆積する埋土も50cmと厚くなる。

掘立柱建物

SB4200　発掘区の北東隅部で検出した２×２間以上の東西棟の総柱建物である。桁行２間分を確認したが、さらに東側の発掘区外に延びている。東側については隣接して既存建物があり、これ以上拡張調査ができず、全体の規模については明確にできなかった。梁行の柱間総距離は3.6mで、柱間寸法は1.8m（６尺）、桁行３間分の柱間距離は5.4mで、柱間寸法は1.8m（６尺）である。検出した掘形７個のうち柱穴が残存するのは１～５の５個である。柱掘形は径0.5～0.7mのほぼ円形を呈するもので、必ずしも整円形とはなっていない。柱根の径は18～25cmである。方位は5°45′東偏する。



第56図　SB4200柱掘形断面図

溝

SD4209　SD4210の下層にある東西方向の溝である。溝幅は必ずしも一定ではなく、溝肩も不整形である。溝幅は1.4～2.0m、深さ0.5m前後であるが、中央部では広くなり、幅約3.8m、深さ0.6mである。所々に深い窪みがあり、そこには多量の細砂が入っている。この部分の溝肩は流れにより抉られた状況がみられる。溝の年代は出土した土器から弥生期のもので、検出した溝の中では最も古期に属する。

SD4210　発掘区の北側、掘立柱建物SB4200の南側で検出した東西方向の細い溝である。方向的にはやや斜行しており、SD4209の上層に位置し、この溝より新期の溝となる。溝幅は0.25～0.3m、深さ10cm前後の細い溝である。削平のため部分的に消滅している所もある。検出した溝の中では、時期的に最も新しい。出土した土器から9世紀後半代と考えられる。

SD4215　発掘区の西側を南北に流れる溝である。溝幅は0.5～1.6mで一定しておらず、溝肩も不整形で一定していない。深さは12～30cmである。SD4209との先後関係は、この溝が新期になる。

不明遺構

SX4205　発掘区の中央部にある深さ15cm程度の浅い落ち込みである。南半部は削平されており、全体の平面形は不明。ここからは若干の土器と瓦片が出土している。年代としては、8～9世紀代のものである。

SX4208　発掘区の中央部に位置し、東西に長い落ち込みである。深さ20cm前後で、出土遺物はほとんどない。

出土遺物

SD4209出土土器（第59図）

弥生土器

甕（1）　器壁は薄く、口縁部は「く」字状に屈曲する。胴部径は口径を上回る。内外面にはハケ目調整を施す。

壺（2）　胴部は球形で、底部は小さく平底である。外面の中位はハケ目調整の後ナデ調整、胴部下位と内面はナデ調整で仕上げる。

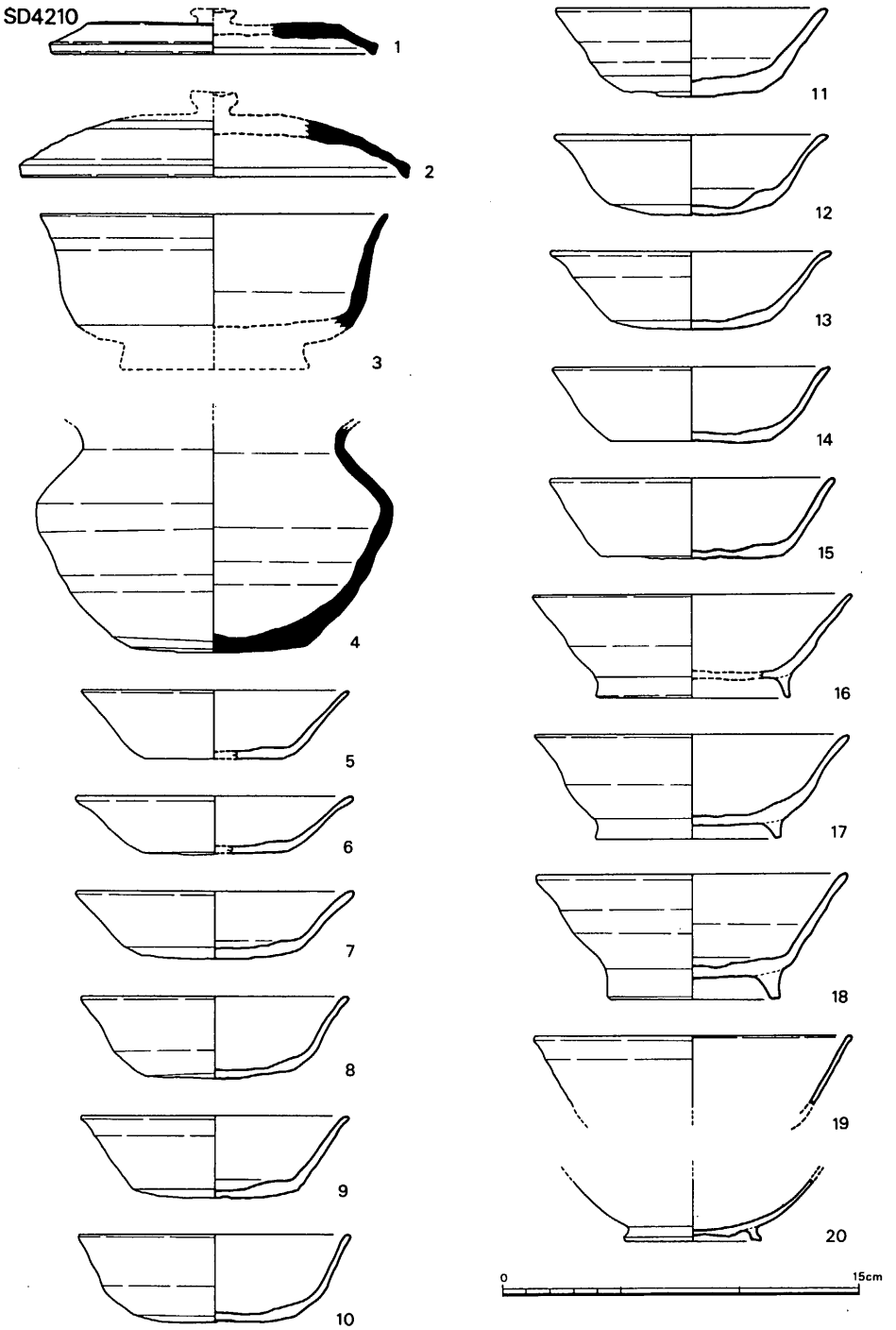
土師器

高杯（3）　杯部と口縁部との境で微妙に屈曲し、内面に段をもつ。外面はナデ調整、内面にはハケ目が残る。

SD4210出土土器（第57図、図版53・54）

須恵器

蓋（1・2）　1・2とも端部を僅かに下方に折り曲げる。天井部外面は回転ヘラ削り、内



第57図　SD4210出土土器・陶器実測図

面はナデ、体部はヨコナデ調整を施す。

杯（３）　体部と底部の境は緩やかで、体部はＳ字状に立ち上がる。体部はヨコナデ調整、底部外面は回転ヘラ削り調整。

壺（４）　体部の最大径は上位にあり、肩の張った形状となる。白灰色を呈し、胎土には砂粒の混入が少なく精良である。

土師器

杯（５～15）　口径11.2～12.0cm、器高2.5～3.7cm。15が底部を糸切りする他はすべてヘラ切りである。６・９・10・12・15の底部には、板状圧痕がみられる。体部はヨコナデで仕上げるが、11のみは体部下半にヘラ削りを行う。

椀（16～18）　ほぼ直線的に立ち上がる体部に若干裾広がりの高台を貼付する。口径13.2～13.4cm、高台径7.3～8.2cm。器高は15・16が4.4cmで、18は5.3cm。

緑釉陶器

椀（19・20）　２点は同一個体の可能性がある。器壁は薄く仕上げ、底部外面は粗いヘラ切り未調整で、その他は丁寧にヨコナデを行う。釉は淡灰緑色を呈し、高台畳付から内側を除いて全面に施釉されているが、剥離している。また、胎土は精良で、須恵質である。口径を復原すれば13.3cmになる。

SD4215出土土器（第58図、図版54）

須恵器

杯（１）　体部は丸みをもち、口縁部で若干広がる。底部はヘラ切り未調整で、それ以外はヨコナデを施す。底部外面にはヘラ記号がある。

土師器

杯（２）　口径12.0cm、器高3.1cmで、口縁部内面の一部に油煙が付着する。灯火器として使用されたもの。

椀（３）　体部は器壁が薄く、下位で若干丸みをもち、幅広の高台を貼付する。

SK4201出土土器（第58図）

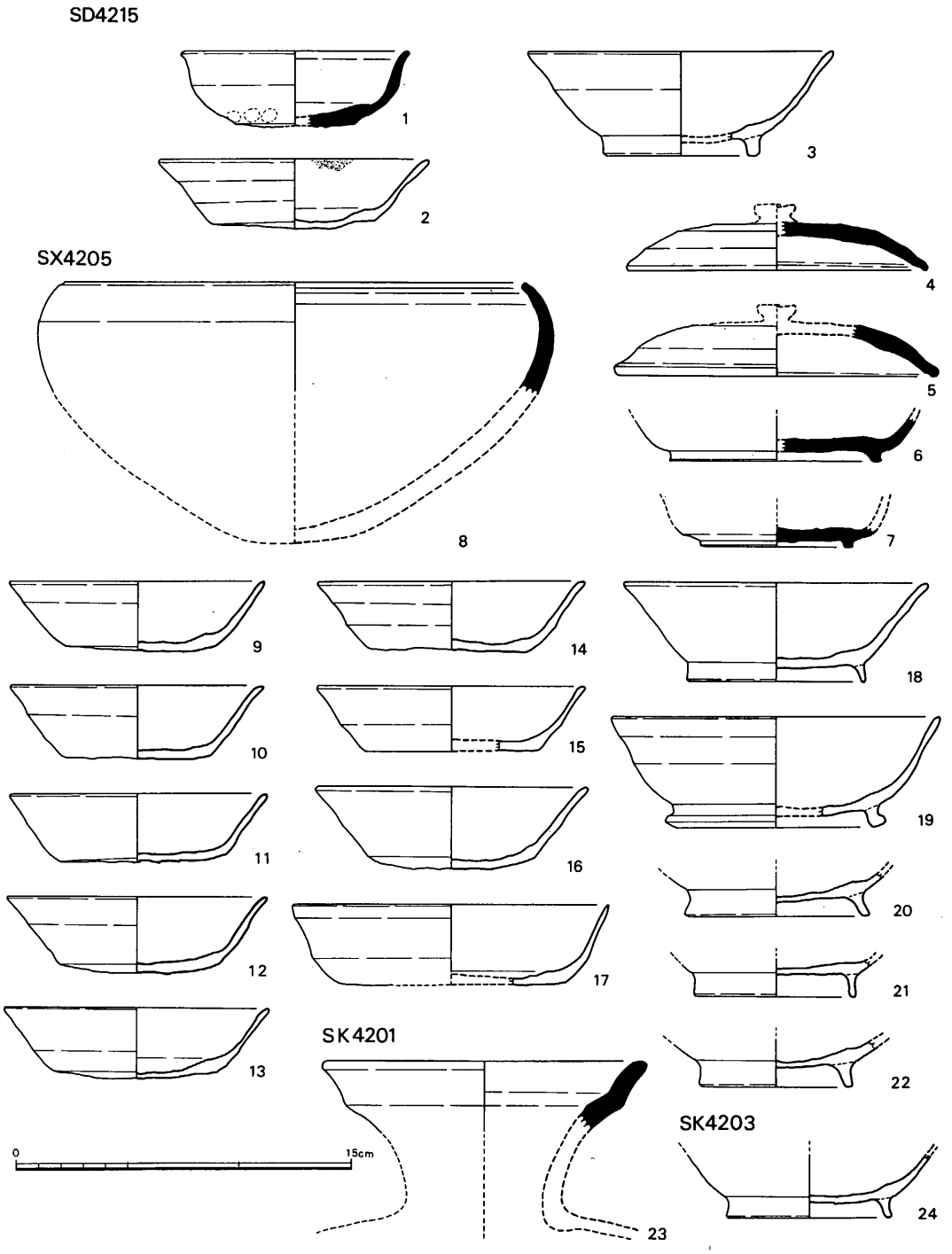
須恵器

壺（23）　口縁部の破片である。口縁部は外方に屈曲し、複合口縁状となる。器壁は厚く、胎土には砂粒の混入が目立ち粗い。

SK4203出土土器（第58図）

土師器

椀（24）　器壁は薄目で、体部は下位で僅かに丸みをもつが、ほぼ直線的に立ち上がるものであろう。底部外面には板状圧痕がみられる。



第58図　SD4215・SK4201・4203・SX4205出土土器実測図

SX4205出土土器（第58図、図版54）

須恵器

蓋（4・5）　2点とも口縁端部は丸く、口縁部内面に僅かな段をもつ。天井部外面は4がヘラ切り未調整、5が回転ヘラ削りである。

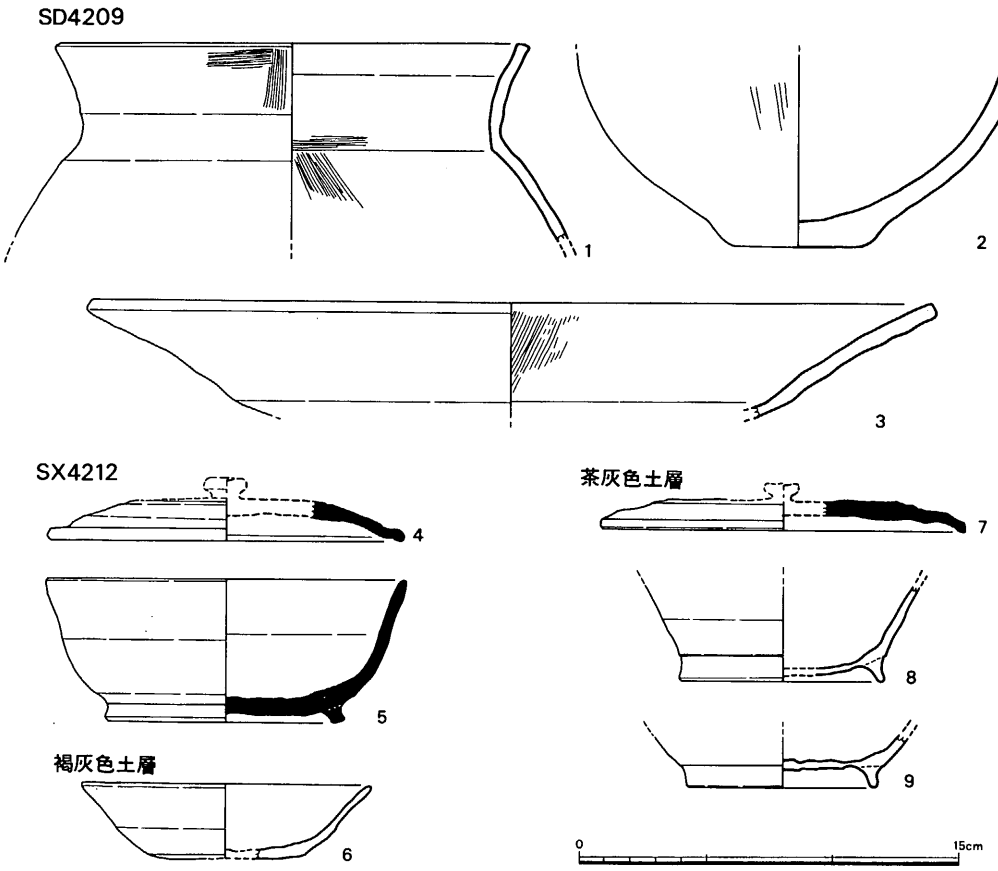
杯（6・7）　大小2種がある。胎土は6が精良で、7は砂粒の混入が目立つ。

鉢（8）　鉄鉢形の鉢である。胎土には砂粒の混入が少なく、内外面に丁寧なヨコナデ調整を施す。口縁部小片であるが、口径は20.6cmに復原した。

土師器

杯（9～17）　9～16は口径11.4～12.2cm、器高3.0～3.7cm。底部はすべてヘラ切りで、9・10・11・14・16には板状圧痕が残る。17は底径が大きいタイプで、復原口径14.2cm。

椀（18～22）　18は体部が直線的に立ち上がるが、19は丸みをもち、高台端部を外にはねる。18は底部外面をナデて仕上げる。20～22は底部破片。



第59図　SD4209・SX4212、褐灰色土層・茶灰色土層出土土器

SX4212出土土器（第59図、図版54）

須恵器

蓋（４）　口縁端部を下方に折り曲げる。

杯（５）　体部は下半に丸みをもつ。底部外面はヘラ切りの後ナデている。

褐灰色土層出土土器（第59図）

土師器

杯（６）　復原口径11.4cm、器高3.1cm。底部はヘラ切り。

茶灰色土層出土土器（第59図）

須恵器

蓋（７）　口縁端部は明確に折り曲げず、外側に平坦面をつくる程度である。天井部外面は回転ヘラ削り、その他はヨコナデ・ナデ調整。

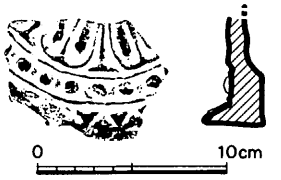
土師器

椀（８・９）　８は体部が狭く直線的に立ち上がり、9は若干丸みをもつ。

瓦類

軒丸瓦（第60図）

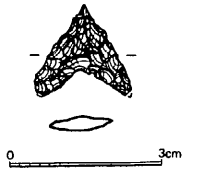
老司II式軒丸瓦小片１点が出土している。瓦当裏面に凸帯を有する。SX4205の出土。この他に若干の丸･平瓦片が出土している。



第60図　軒丸瓦拓影・実測図

SD4215出土石器（第61図）

石鏃　サヌカイト製の凹基式鏃で、長さ1.8cm、幅1.95cm、重さ3.5g。



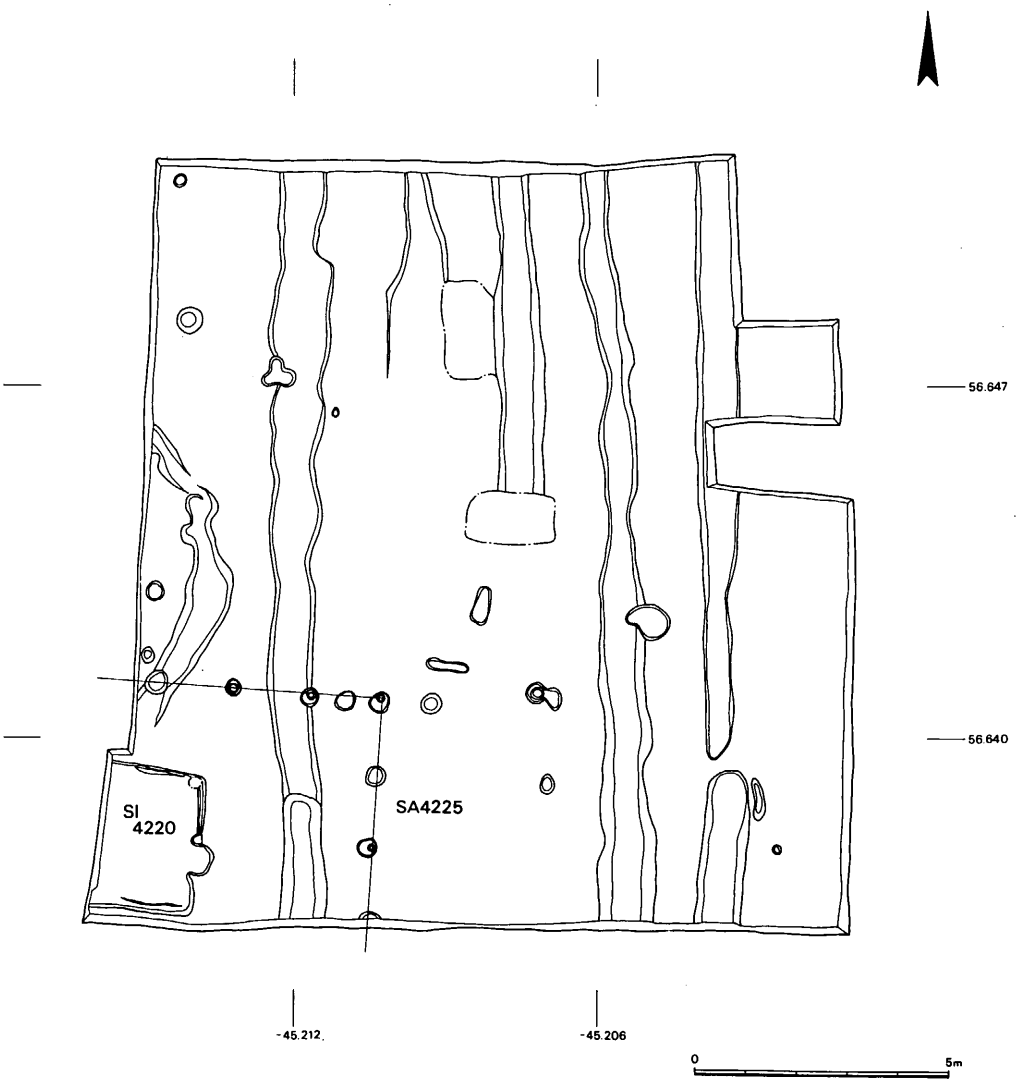
第61図　石鏃実測図

小結

今回、検出した顕著な遺構として掘立柱建物SB4200がある。全体の規模の確認はできなかったが、総柱の倉庫様の建物である。先に記したように、第142次調査（平成4年度）及び第96次調査（昭和60年度）では11棟の建物跡を検出している。この地域は広丸地区官人居住区として注目されているところである。この２箇所の調査地と本調査地との間には未調査地があるが、この倉庫様建物SB4200が広丸官人居住区と一連のものになるとみられる。そして、SB4200の西側には建物が検出されなかったことからすると広丸地区の西の境界は、この付近に求めることが可能である。

5．第167次調査

本次調査は住宅建設に伴う事前の発掘調査として実施した。当調査地は平成3年度に発掘調査を行った第137次調査地の西側隣接地で、大宰府政庁南門跡から西方約380mの距離にあたる。第137次調査では8世紀初頭～中頃の掘立柱建物4棟・井戸1基、建物廃絶後に掘削される南北溝などを検出している。大楠から広丸にかけての地区は、官人居住区に推定されている地区であ



第62図　第167次調査遺構配置図

るが、建物は官衙地区検出の建物と遜色のない大規模なものであり、また、大宰府政庁第II期の成立期に関わるものとして注目されていた。以上のことから、今回の発掘調査は、前述の建物に関連する資料を得ることを目的として行った。

調査は平成6年1月18日から開始し、翌年の2月2日に全景写真の撮影を行い、2月6日に実測を終了した。表土（約65cm）除去には重機を用いたが、埋め戻しは人力で行った。調査地番は太宰府市大字観世音寺350-6で、調査面積は約220m²である。

検出遺構

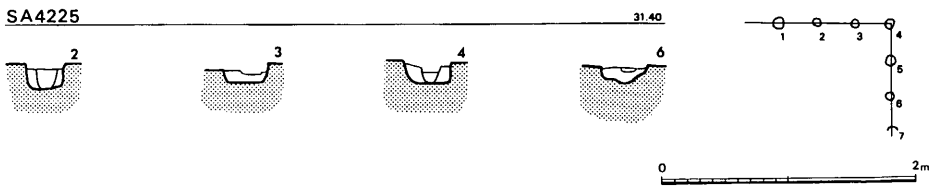
後世の整地層（マサ土約55cm）の下が旧表土（約10cm）で、それを除去すると黄褐色砂質土の地山となる。調査の結果、検出した主な遺構は調査区南西隅に位置する柵列1条と竪穴住居1軒であった。竪穴住居は深さが20cm程であり、全体として削平が著しい。また、南北方向の溝は後世の耕作に伴うもの。

柵列

SA4225　調査区南西部で検出した柵列であるが、北東コーナー部を確認したにすぎない。東西・南北とも3間以上で、大半は調査区外に延びている。柱間は柱穴3－4間が135cm（4.5尺）で、それ以外は150cm（5尺）間隔である。南北軸は東側に3°30′振れている。また、当柵列は竪穴住居を囲んでいることから、この他にも竪穴住居が数軒存在する可能性がある。

竪穴住居

SI4220　調査区南西隅で検出した竪穴住居で、西壁は調査区外にかかる。東壁長は2.7mで、床面に柱穴がみられないことから方形の小型住居になろう。カマドは東壁のやや南よりに付設される突出型で、焚口幅54cm、奥行き25cmの隅丸方形に掘り込む。袖は壁体掘込みの隅部に貼付され、長さ20cm、幅25cm程である。火床はそれほど焼けておらず、支脚・煙道も遺存していない。住居の埋土中からは土師器甕の小片の他に、鞴羽口の細片が出土したのみ。



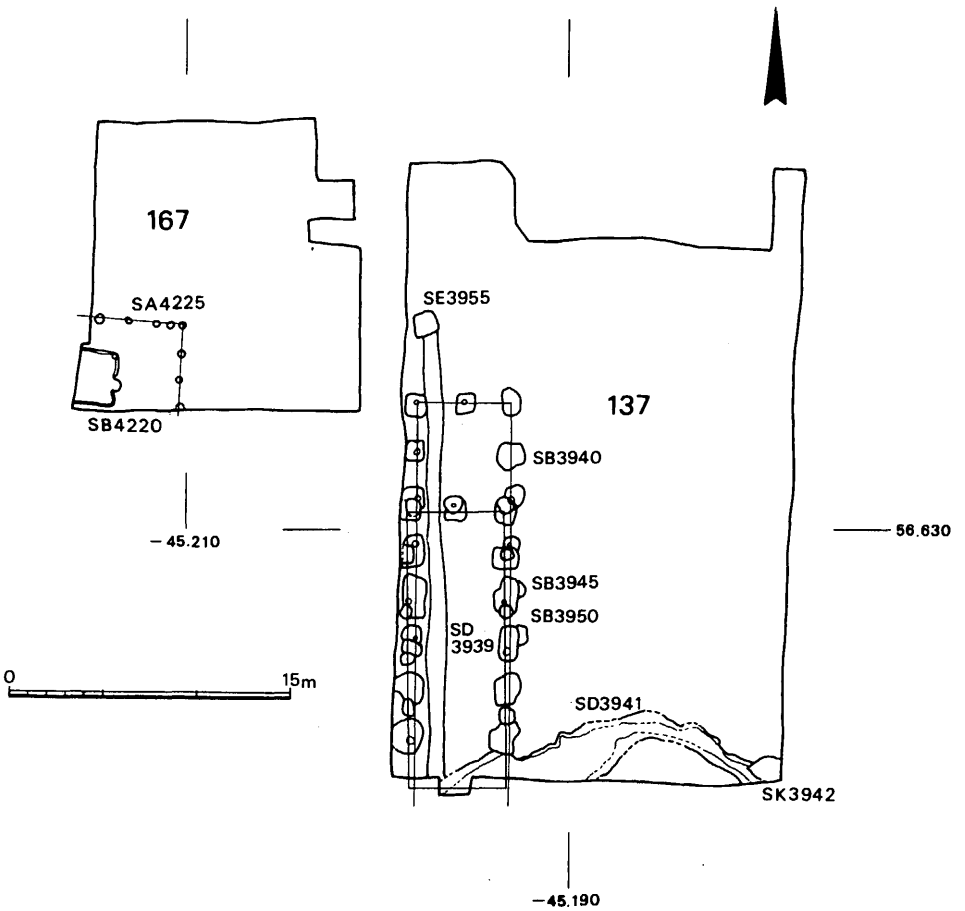
第63図　SA4225柱掘形断面図

小結

今回の調査では、竪穴住居1軒とそれを囲む柵列を検出したが、竪穴住居は大宰府政庁前面域では初めての検出例となった。竪穴住居は出土遺物に乏しいが、一辺2.7m程の小型無柱穴住

居で、突出型のカマドを付設する。北部九州においては、6世紀後半～7世紀前半頃から竪穴住居が小型化傾向を示すが、住居壁の長さが3m未満のものは8世紀代に多くみられる。第137次調査検出の掘立柱建物（8世紀初頭～中頃）は主軸を南北方向にとるが、柵列は3°30′東に振っている。大規模な建物と竪穴住居とが同時並存するとは考え難いこと、建物を切る南北溝SD3939は8世紀中頃以降に掘削された区画溝であることを考慮すると、竪穴住居及び柵列は8世紀中頃以降の築造と考えたい。

また、本跡から100m北側の第160次調査区では炉跡・竪穴が検出され、海獣葡萄鏡や鋳造関連の遺物が出土しており、金属生産にも関わった大宰府組織の「匠司」と推定されている。同区に隣接する第170次調査区（市教育委調査）では、8世紀前半代の掘立柱建物と8世紀後半の竪穴住居が検出されている。以上により本跡の住居の性格としては、埋土中から鞴羽口片が出土していることを考え合わせると金属生産に関連するものと推測されよう。



第64図　第137・167次調査主要遺構配置図

6．第170次調査

本次調査は、太宰府市立学業院中学校のグランド拡張工事に先立つものとして太宰府市教育委員会が発掘調査を行った。調査地番は太宰府市観世音寺３丁目363他で、調査面積は2,430㎡である。調査地は大宰府政庁跡から西へ約400mの位置にあり、調査成果として掘立柱建物７棟・柵９条・井戸３基の他に土壙やピットなどが検出された。調査主体は異なるが、調査地点が大宰府史跡第160次調査に隣接することから、調査次数を大宰府史跡第170次調査とした。発掘調査は、平成７年４月17日～10日19日まで実施した。

なお、ここでは主要な遺構と遺物の一部を略報のかたちで紹介することとし、正式な報告書は平成８年度に太宰府市教育委員会から刊行する予定である。また、調査で出土した遺物及び図面・写真などの資料は、太宰府市教育委員会が保管している。

検出遺構

調査地の北西隅部分は花崗岩風化土の地山を造成して平坦面を形成し、その上に遺構を構築している。それ以外の地点は、谷状地形を整地してから遺構が形成されており、北部分では複数の遺構面が確認された。

掘立柱建物

SB4160　第160次調査で検出した建物の西端を確認した。中間を調査できていないが、２×７間の東西棟建物と考えられる。

SB4260　２×３間の総柱建物と判断したが、掘形形状及び柱筋は不揃いである。

SB4265　２×２間以上の東西棟建物。

SB4280　２×２間の総柱建物である。井戸SE4290に切られている。東側の溝SD4276及び柵SA4303はこの建物と関連する可能性がある。

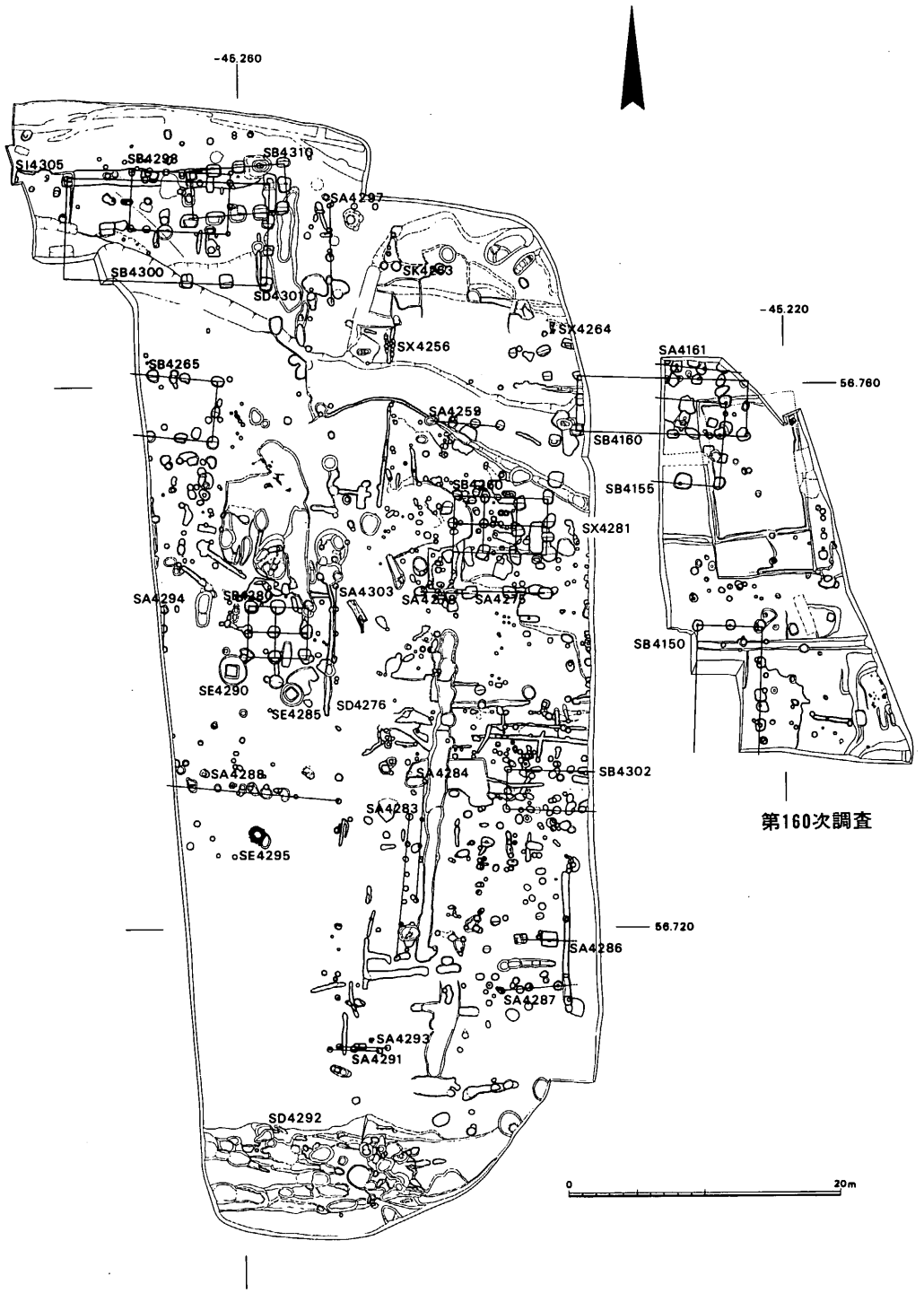
SB4298　２×３間の東西棟建物。他に検出した建物に比べ柱掘形が極めて小さい。SB4310より新しい。

SB4300　南北３間、東西５間で、柱間の平均は約３mである。一般的に知られる掘立柱建物の柱掘形とは異なり、一旦、幅1.1～1.5mの溝を掘り、その中に一辺約0.8～1.1mの柱掘形を再度穿っているもので、柱を建てた後に溝部分も含めて一気に埋め戻している。この状況は建物の南半分では確認できなかったが、遺構面の状況から当初は全体に行われていたものと考えられる。

SB4302　２×３間以上の東西棟建物。

SB4310　南北２間、東西４間で、SB4300より新しい。掘形内から鉱滓が出土している。

竪穴住居



第65図　第170次調査遺構配置図

SI4305　南側を後世の攪乱で破壊されているが、南北3.8m、東西4.3mを測る。北壁の中央付近にカマドが付設されているが破壊されており、形状は明かではない。主柱穴はその位置から4本存在したものとみられ、壁際には壁溝が断続的に認められる。

井戸

SE4290　掘形の形状は略円形を呈し、直径はおよそ2mを測る。井戸枠は一辺0.8m程度で、角材を立てて並べ横木で固定するものである。埋土は最上層の灰色土を除去すると枠のプランが検出され、枠内の大半は暗青灰色粘質土で埋まっていた。これ以下は腐食土層、青灰色砂層の堆積であるが、いずれも厚くはない。遺物の多くは暗青灰色粘質土層から出土した。なお、枠内底部には平瓦を敷き並べていた。

SE4295　瓦積みの井戸である。底部は平瓦を立てて囲むように配置し、その上部は主として平瓦の小口部を揃えて積み上げている。内径約0.8m。

その他の遺構

SX4256　石組の暗渠遺構で、長さ2.5m分を検出した。

今回、詳細な報告は割愛したが、SX4264・4281などからは生産関連遺物が出土し、土壙SK4263の周囲は焼けて赤変していた。

出土遺物

SE4290掘形出土土器（第66図）

須恵器

蓋（1）　天井部に回転ヘラ削りを施す。復原口径14.4cm、器高1.0cm、天井径7.2cm。

杯（2）　復原口径16.0cm、器高7.0cm。

土師器

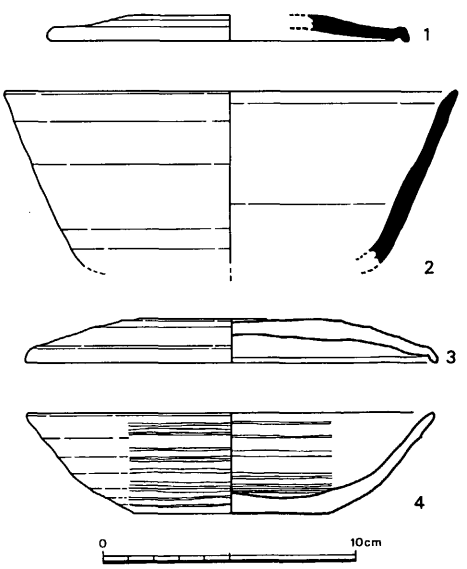
蓋（3）　天井部に回転ヘラ削りを施す。口径16.3cm、器高1.7cm、天井径7.0cm。

杯（4）　内外面に回転ヘラ削りを施し、底部を回転ヘラ切りの後に回転ヘラ削り調整をする。復原口径16.2cm、器高4.0cm、底径7.6cm。

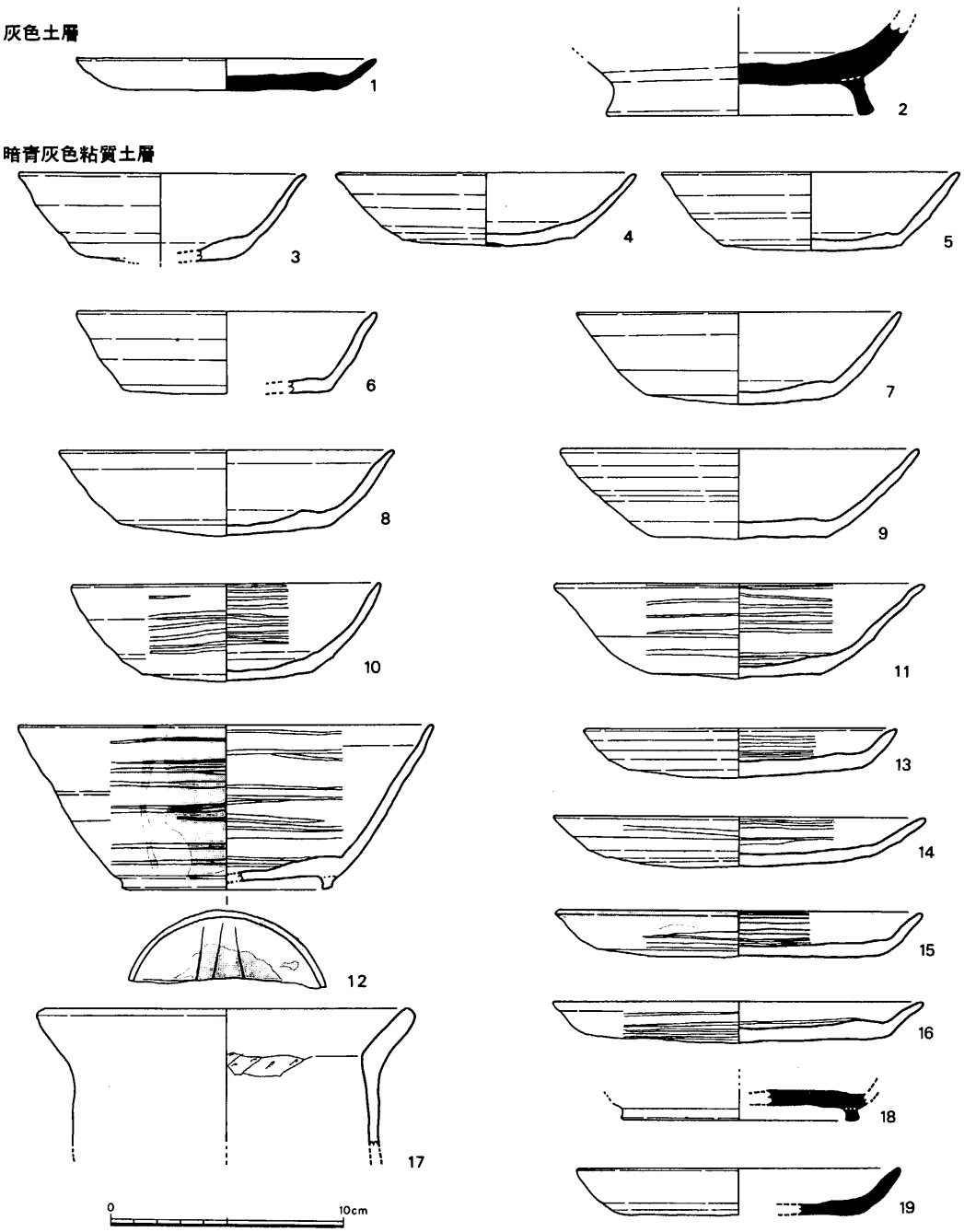
SE4290灰色土層出土土器（第67図）

須恵器

皿（1）　底部は回転ヘラ切りの後、未調整である。復原口径13.0cm、器高1.3cm、底径9.0cm。焼成は不良。



第66図　SE4290掘形出土土器実測図



第67図　SE4290出土土器実測図

壺（2）　高台は高く、外側に向かって張る。器高3.8cm、底径10.6cm。

SE4290暗青灰色粘質土層出土土器（第67図）

須恵器

杯（18）　底部から体部への立ち上がりに近接して高台が付けられる。器高1.8cm、復原底径10.2cm。

皿（19）　底部と体部の境に面取り状にナデが施される。復原口径14.0cm、器高2.0cm、底径10.0cm。

土師器

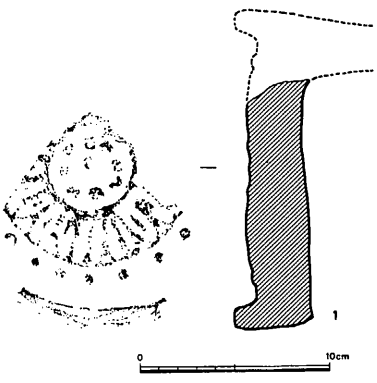
杯（3～12）　3～11は無高台のもので、口径12.4～15.4cm、器高3.2～4.0cm、底径6.0～9.2cm。底部を回転ヘラ切りした後に、未調整のもの（3・5～7・9）、不定方向のナデを施すもの（4）、板状圧痕のあるもの（8）、回転ヘラ削りを行い、内外面に回転ヘラ磨きを施すもの（10・11）に分類できる。

4は残りが良いため器面の調整手法が明瞭に観察できる。口縁端部から底部内面すべてにわたり回転ナデが施されるが、通常よくみられる内底面の横ナデは施されていない。6は底部から体部にかけての強いヨコナデと口縁部の回転ナデにより体部中位に明瞭な稜が認められる。8の底部外面はヘラ切り未調整だが、底部から体部下半にかけて回転ヘラ削りが認められる。全体的に黄白色を呈するものが多い。10は復原口径13.4cm、器高4.2cm、底径7.3cm。色調は暗灰色で調整は粗い。11は口径16.0cm、器高4.1cm、底径7.3cm。調整は丁寧に施されている。

12は有高台の杯で、口径18.0cm、器高7.1cm、底径9.0cm。底部から体部下位にかけて回転ヘラケズリが施され、内外面には回転ヘラ磨きが施されている。高台は底部の外側近くに付けられ、立ち上がり形態は直線的である。高台内に4条の線刻が認められる。この杯は底部外面と高台の一部に墨痕が認められ、それと連続するかたちで高台部から口縁部に向かって墨痕が連続していることから、逆さにして硯に転用された可能性がある。

皿（13～16）　口径13.5cm、器高2.0～2.2cm、底径10.0～12.3cm。皿は底部から体部中位まで回転ヘラ削りを施し、その後に回転ヘラ磨きを施す。回転ヘラ磨きは内面のみのものと内外面に行われるものがある。13は内底面に幅広の回転ヘラ磨きが施され、立ち上がり部には面取り状の回転ヘラ磨きが行われる。14は立ち上がり部に面取り状の回転ヘラ磨きを施す。15は口縁部のほぼ全周にわたって墨が付着している。16は底部が回転ヘラ切りのまま未調整である。体部の回転ナデは強く施される。

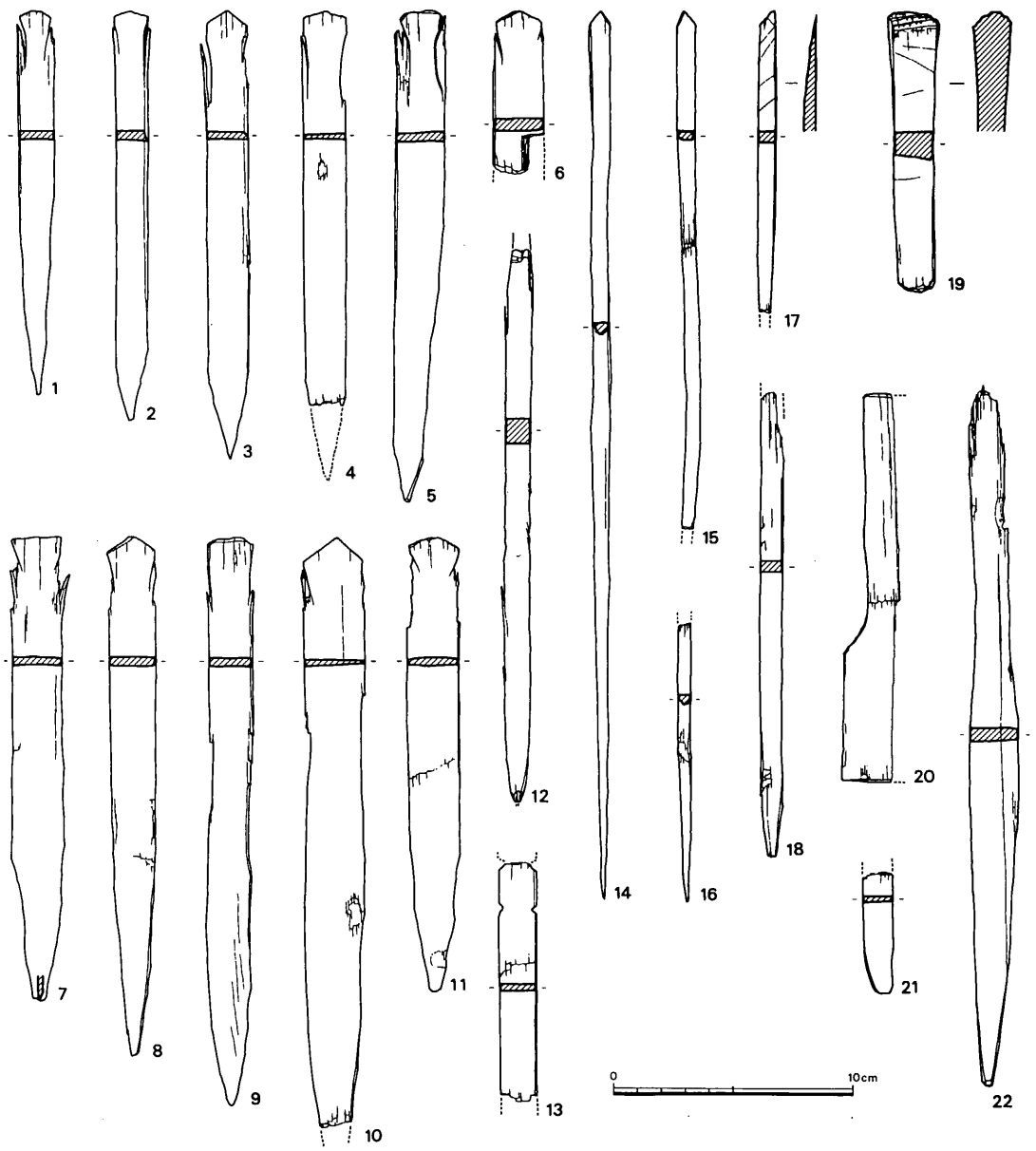
甕（17）　復原口径16.6cm、器高6.5cm。内面は削り調整。外面には炭素がタール状に付着している。



第68図　軒丸瓦拓影・実測図

瓦類（第68図）

軒丸瓦（1）　細単弁21葉蓮華文で、外区内縁には本来21個の珠文が配されるものと考えられる。外縁は素縁で高く、直立気味である。



第69図　SE4290出土木製品実測図

SE4290出土木製品（第69・70図、図版55）

以下の資料は、すべて暗青灰色粘質土層から出土した。

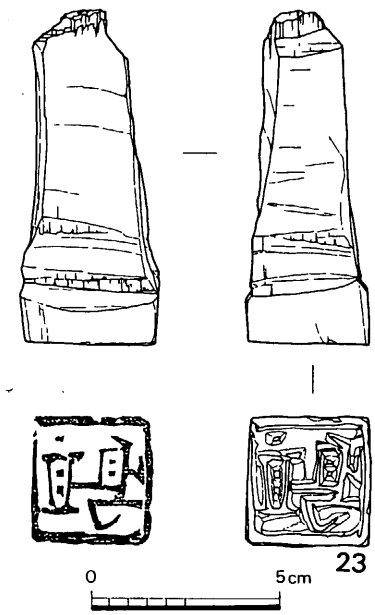
斎串（1～13）　長さ16.1～24.5cm以上で、頂部から両側面に各1箇所ずつ切り込みを入れるもの（1～6）、同じく各2箇所ずつ切り込みを入れるもの（7・8）、3箇所以上の切り込みを入れるもの（11）、上下両面から複数箇所切り込みを入れるもの（9・10・12）、両側面から三角形の切り込みを複数箇所入れるもの（13）がある。

角柱状木製品（14～18）　14・15は頂部を山形に成形し、先端を鋭利に削り出す形状を呈するもので、14の長さは37.0cmである。16も同様の製品の残欠とみられる。17・18は先端を鋭利に削る角柱状製品。

不明木製品（19～22）　用途不明ながら加工痕跡の認められる製品である。

印章（23）　印面は3.1×3.4cm。高さ8.9cmを測る。頂部は3面から削り込んで切断した痕跡を残したままで、すべての側面も印面に近い部分を除いて粗い削り調整のままである。印面は平滑で磨滅が少なく、文字の隙間にも印肉の残存は認められない。印面の文字は押印した状態で右から読むものとすれば「直嶋（なおしま／ただしま）」と判読でき、人名であることが窺える。この印章は未使用とみられ、鈕の成形がほとんどなされていないことを考えると未製品の可能性が高い。

また、SE4290からは、これら以外に鞴羽口が数点出土している。



第70図　SE4290出土木印実測図

小結

今回の調査で検出した遺構で最古期に属するものはSB4300で、最も規模が大きい。出土遺物に恵まれず年代は決定し難いが、主軸の振れが第160次調査で検出されたSB4150や4160に近く、概ね8世紀前半代と考えられる。これを切る竪穴住居は8世紀後半に位置づけられ、他の建物の時期もこの両者の範囲に収まる可能性が高い。また、今回の調査地からは金属生産関係の遺物が出土しており、第160次調査と併せてかなりの規模の工房が展開していた地区とみられる。

出土遺物ではSE4290出土の木器が注目される。なかでも木印は極めて珍しいものであり、当時の私印使用の実態を検討する上で重要なものである。また、同時に出土した斎串は、当時の祭祀形態の一部を復原できる可能性があり、貴重な資料といえる。いずれも共伴する土器から8世紀末から9世紀初頭のものと考えられる。

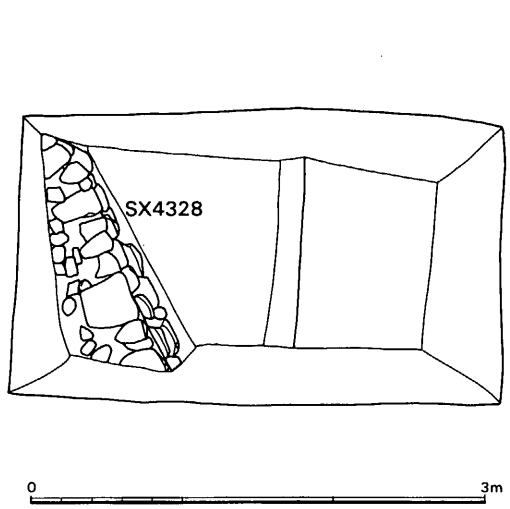
7．第172次調査

本次調査は住宅増築に伴う事前の発掘調査である。当調査地は政庁の北方約350mの所に位置する。『筑前続風土記』によれば、筑紫観世音寺には49院の側寺・別院（子院）があったという。それら子院については、ほとんどその実態を知られていないのが現状である。今回の調査地付近は旧小字名を「花の屋敷」と呼び、大宰少弐武藤資頼の館跡との伝承がある。49院の中には記録の上から花蔵院・安養院など武藤氏と関連があるものがみられる。この様なことから、当調査地も子院の有力な推定地とされている。

対象地に既存建物を避けて２×３mのトレンチを設定し、発掘調査を行った。調査地番は太宰府市坂本３丁目277-２で、調査面積は６㎡である。調査期間は平成７年６月21日～６月27日。

調査の結果、トレンチの西端付近で護岸用の石垣（SX4328）を検出した。石垣の上面は現地表下約90cmの所であるが、南側では現地表下近くまで残っており、近年（昭和50年代）の整地がなされるまで一部露出していたようである。この石垣は高さ70cm程が残存しているが、現在の建物を築造する際に整地し、埋められたと考えられる。石垣の外側は東の谷部に向かって傾斜しており、一部確認した所では地表下約2.2mであり、トレンチ東端部では更に下がるものと考えられる。この石垣が築造された年代については、出土遺物からみると遡っても江戸末～明治期とみられる。現在の地形をみるとトレンチの約６m東側は谷状の流れになっており、この石垣が築かれた時点では現在よりも約10m程西側が谷の西岸であったようである。

今回の調査では、古代・中世の遺構の確認には至らなかったが、谷の地形とトレンチ内の埋土の状況からして、その遺構へ到達するには３m以上の深さになると思われ、その確認には今回の調査の対象範囲では困難であり、今後の調査に俟つところが大きい。



第71図　第172次調査遺構配置図

別　表

器種		挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
							ヘラ	糸		
SD 4175 掘形上面（第 163 次調査）										
須恵器	長頸蓋	13	1	11.1						
土師質	鉢	〃	2	(15.2)	9.0	3.7				
陶器	椀	〃	6	11.2	4.7	5.5				
		〃	7	9.0	3.3	5.8				
SD 4175										
土師器	小皿 a	〃	8	7.8	5.2	1.0		○		
		〃	9	7.6	4.0	1.3		○		
		〃	10	7.7	4.0	1.2		○		
白磁	椀	〃	12	8.5	3.6	5.4				
		〃	13	9.2	3.6	5.4				
		〃	14	8.9	5.8	3.6				
		〃	15	(10.0)	3.8	4.7				
		〃	16	8.7	3.8	5.7				
		〃	17	9.3	5.2	5.7				
		〃	18	9.8	4.3	8.7				
	香炉	〃	20	10.8	4.3	4.6				
染付	蓋	14	1	10.1		4.3				
	小杯	〃	2	(7.2)	3.6	5.0				
	椀	〃	3	(10.6)						
		〃	8	10.2	3.5	5.5				
		〃	9	10.5	3.3	5.1				
		〃	10	10.8	6.4	6.5				
		〃	11	12.3	6.8	6.9				
陶器	壺	〃	14		4.5			○		
SD 4185 掘形上面										
土師質	盤	15	2	(23.3)	(20.0)	4.2				
SD 4185										
土師器	小皿 a	11	1	8.4	5.3	1.1		○		
陶器	土瓶	〃	6	(10.1)	7.4	11.2				
SD 4186										
土師器	小皿	〃	8	9.6	7.0	1.0	○			○
陶器	椀	〃	10	(12.4)	4.5	5.1				
SD 4187										
土師質	壺	〃	12	(24.0)						
染付	椀	〃	13	11.6	5.1	6.1				
SD 4188										
土師器	小皿	〃	14	10.0	7.6	1.1	○			
		〃	15	11.0		1.4	○			
	杯	〃	16	(12.0)	(7.5)	3.0	○			

器種		挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
							ヘラ	糸		
SD 4189										
土師器	杯	20	1	12.8	8.0	2.9		○	○	○
須恵器	皿	〃	2	(24.8)						
SG 4190										
染付	小杯	16	1	7.3	3.1	4.9				
	椀	〃	2	8.9	3.5	5.1				
		〃	3	9.8	3.5	5.8				
		〃	6	11.2	4.2	6.3				
	皿	〃	7	14.2	8.1	3.7				
陶器	椀	〃	9	9.8	4.1	4.8				
		〃	12	11.2	4.7	6.6				
		〃	13	14.5	5.6	5.0				
	甕	〃	15	(33.8)						
土師質	壺	〃	14	7.6	5.5	5.9				
SX 4176										
瓦質土器	甕	18	1		20.5					
SX 4177										
染付	椀	20	4	9.8	3.4	4.6				
		〃	5	9.2	4.8	4.6				
SX 4178										
瓦質土器	甕	18	2		21.8					
SX 4179										
陶器	甕	〃	3		27.6					
SX 4184										
土師器	小皿c	〃	6	8.2	5.7	2.7		○		
染付	高杯	〃	7	8.2						
上層										
土師器	小皿a	〃	8	8.2	6.1	1.2		○	○	
	小皿c	〃	9	9.2	6.0	2.5		○	○	
須恵器系	鉢	〃	10	16.0	7.3	7.5				○
褐色土層										
土師器	杯	〃	12	12.8	8.8	3.7	○			
		〃	13	(14.8)	(9.4)	3.0		○		
陶器	皿	〃	15	14.1	5.3	3.0				
黄色整地層										
土師器	椀	〃	17	13.2	6.5	3.7	○			

器種		挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
							ヘラ	糸		
土師器	杯	20	18	13.0	6.8	3.5	○			
		〃	19	13.8	6.8	3.1	○			
	皿	〃	21	17.4	13.8	2.0	○			
須恵器	皿	〃	20	(16.3)		2.9	○			
SK 4199（第 165 次調査）										
土師器	杯	54	1		7.2		○		○	○
	椀	〃	2		6.2		○		○	
		〃	3		6.7		○		○	
		〃	4		6.6		○		○	
	皿	〃	5		(5.9)		○		○	
		〃	6		6.5		○		○	
		〃	7		6.5		○		○	
		〃	8		6.8				○	○
		〃	9		6.7					
		〃	10		7.0					
		〃	11		7.0					
		〃	12		7.2					
		〃	13		7.3					
		〃	14		(7.6)					
		〃	15	(9.8)	(6.8)	(2.5)	○			
		〃	16	10.9	6.2		○		○	
		〃	17	(12.4)	6.7	2.7			○	○
		〃	18	12.8	6.0	2.6			○	
		〃	19	(12.9)	(7.4)	(2.4)			○	
		〃	20	(12.7)	6.8	2.6			○	
その他										
青磁	皿	〃	24	(16.1)						
	椀	〃	25	(14.2)	7.5	4.9				
SD 4210（第 166 次調査）										
須恵器	蓋	57	1	(13.4)						
		〃	2	(16.1)						
	杯	〃	3	(14.6)						
	壺	〃	4		7.4					
土師器	杯	〃	6	(11.6)	(6.0)	2.5	○		○	○
		〃	7	11.6		2.9	○		○	
		〃	8	11.2	6.1	3.5	○		○	
		〃	9	(11.2)	(7.0)	3.5	○		○	○
		〃	10	(11.4)	(6.8)	3.7	○		○	○
		〃	11	(11.4)	5.9	3.8	○		○	
		〃	12	(11.6)	(6.8)	3.4	○		○	○
		〃	13	(11.8)	(6.8)	3.3	○		○	
		〃	14	(11.8)	(6.7)	3.2	○		○	
		〃	15	(12.0)	(7.7)	3.5		○	○	○

器種		挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
							ヘラ	糸		
土師器	椀	57	16	(13.4)	(8.1)	4.4				
		〃	17	13.2	7.8	4.4			○	
		〃	18	13.2	7.2	5.3			○	
SD 4215										
須恵器	杯	58	1	12.0	(5.0)	3.4	○			
土師器	杯	〃	2	(12.0)	(7.3)	3.1	○		○	
SK 4203										
土師器	椀	〃	24		7.1				○	○
SX 4205										
土師器	杯	〃	9	11.4	6.8		○		○	○
		〃	10	(11.4)	(6.5)		○		○	○
		〃	11	11.6	7.5		○		○	○
		〃	12	(11.6)	(7.2)		○		○	
		〃	13	(11.8)	(7.2)		○		○	
		〃	14	(12.0)	7.0		○			○
		〃	15	(12.0)	(7.7)		○			
		〃	16	(12.2)	(7.5)		○		○	○
		〃	17	(14.2)	(10.7)					
	椀	〃	18	13.5	8.0				○	
		〃	19	14.8			○		○	
		〃	20		8.3		○			
		〃	21		6.8		○			
		〃	22		6.4		○		○	
SX 4212										
須恵器	杯	59	5	14.2	9.0	5.7				
土師器	杯	〃	6	(11.4)	(6.2)	3.1	○		○	
		〃	9		7.3		○		○	○

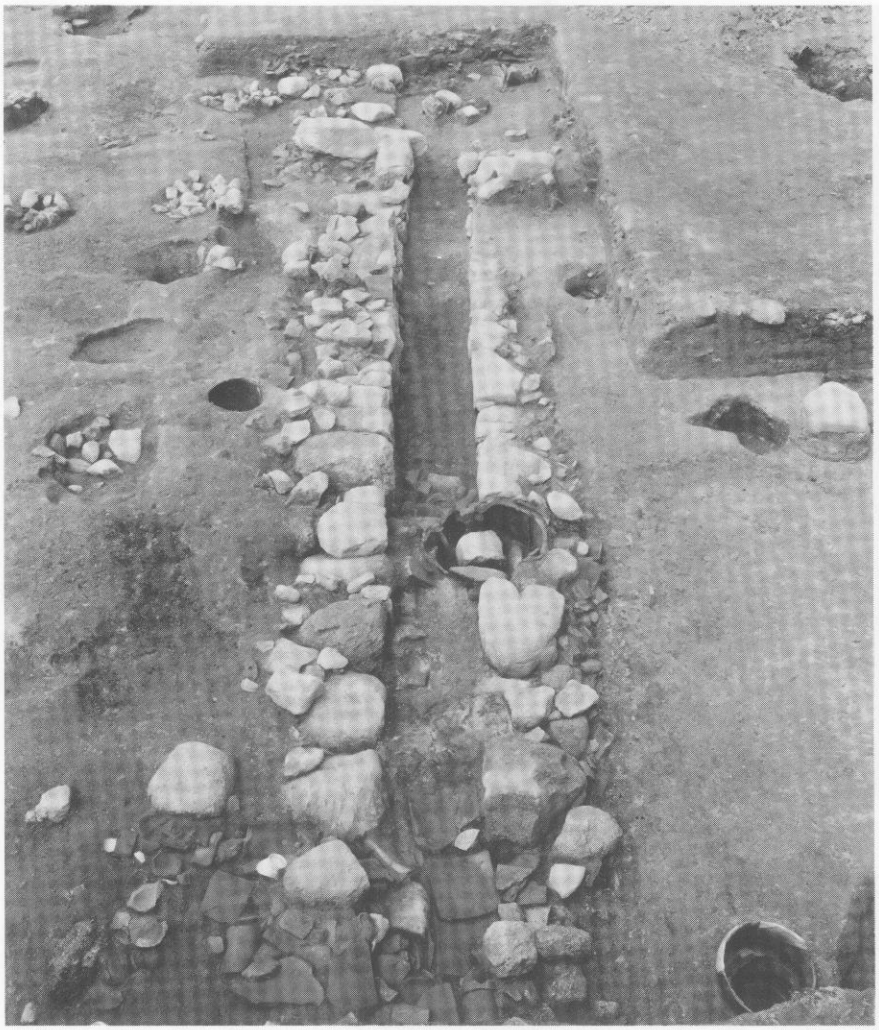
図　　版



第163次調査区全景（南から）



第163次調査区全景（東から）



溝 SD4175（東から）



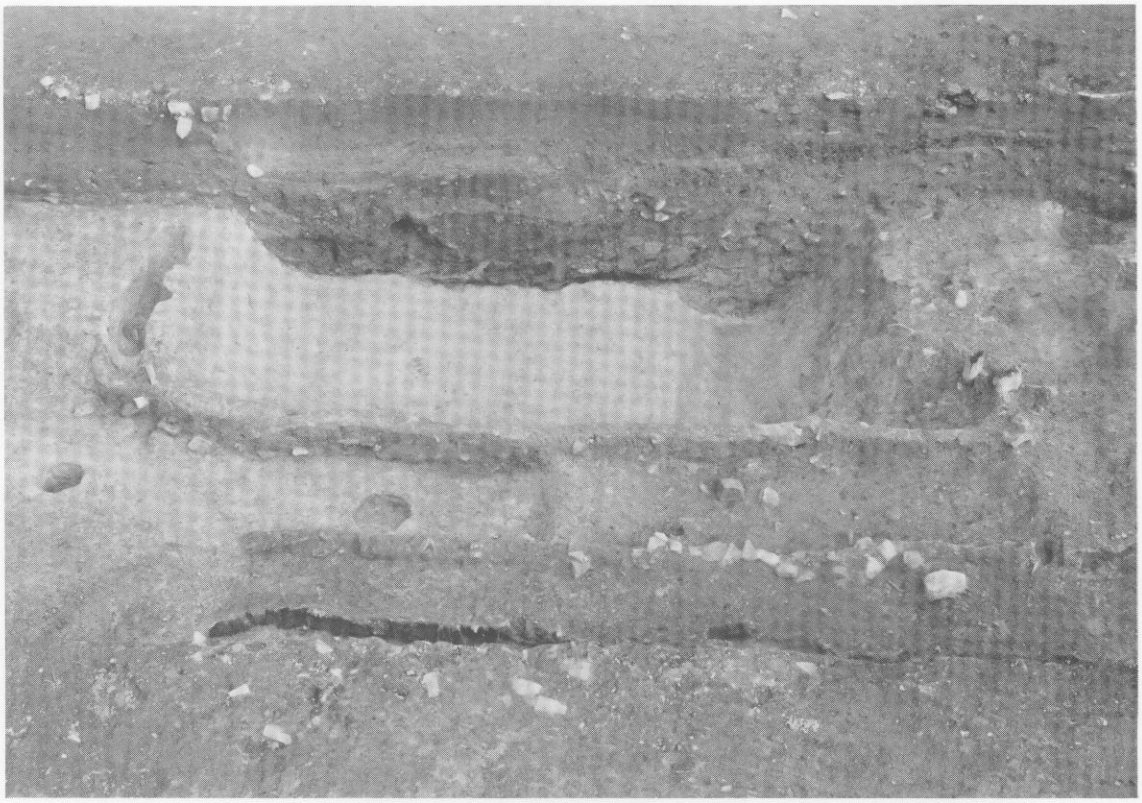
溝 SD4175裏込め状況（東から）



溝 SD4185・溜枡状遺構 SX4172（東から）



溝 SD4185（北東から）



溝 SD4186・池状遺構 SG4190（西から）



溝 SD4188（東から）



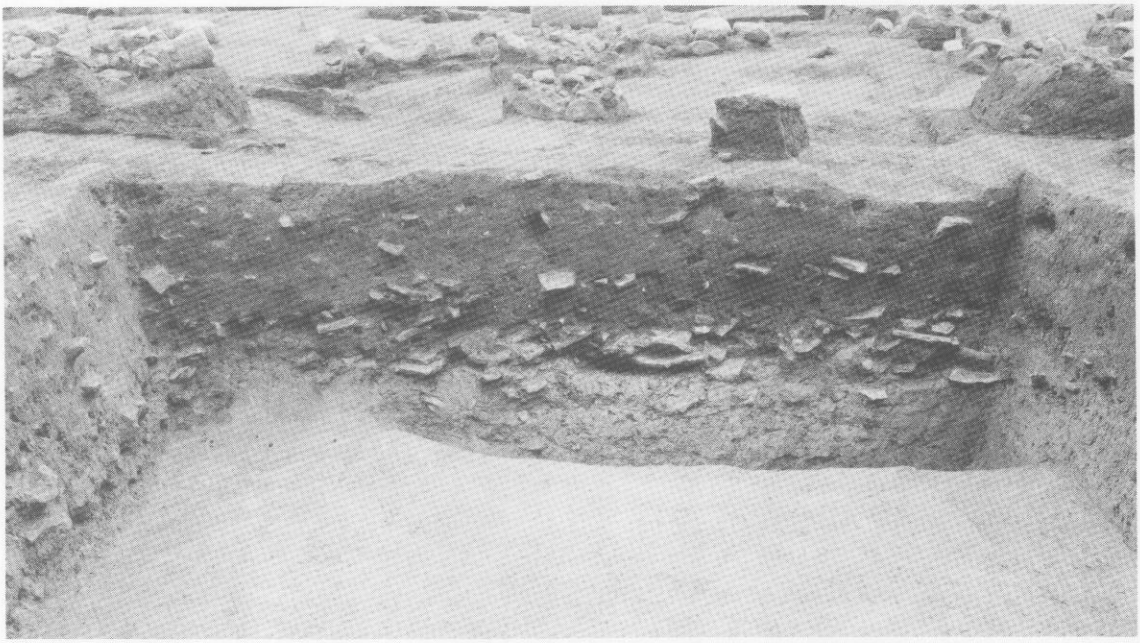
溝 SD4189（東から）



排水施設 SX4174（西から）



暗渠施設 SX4191（東から）



A トレンチ中央部土層断面（西から）



埋甕遺構 SX4177



埋甕遺構 SX4178



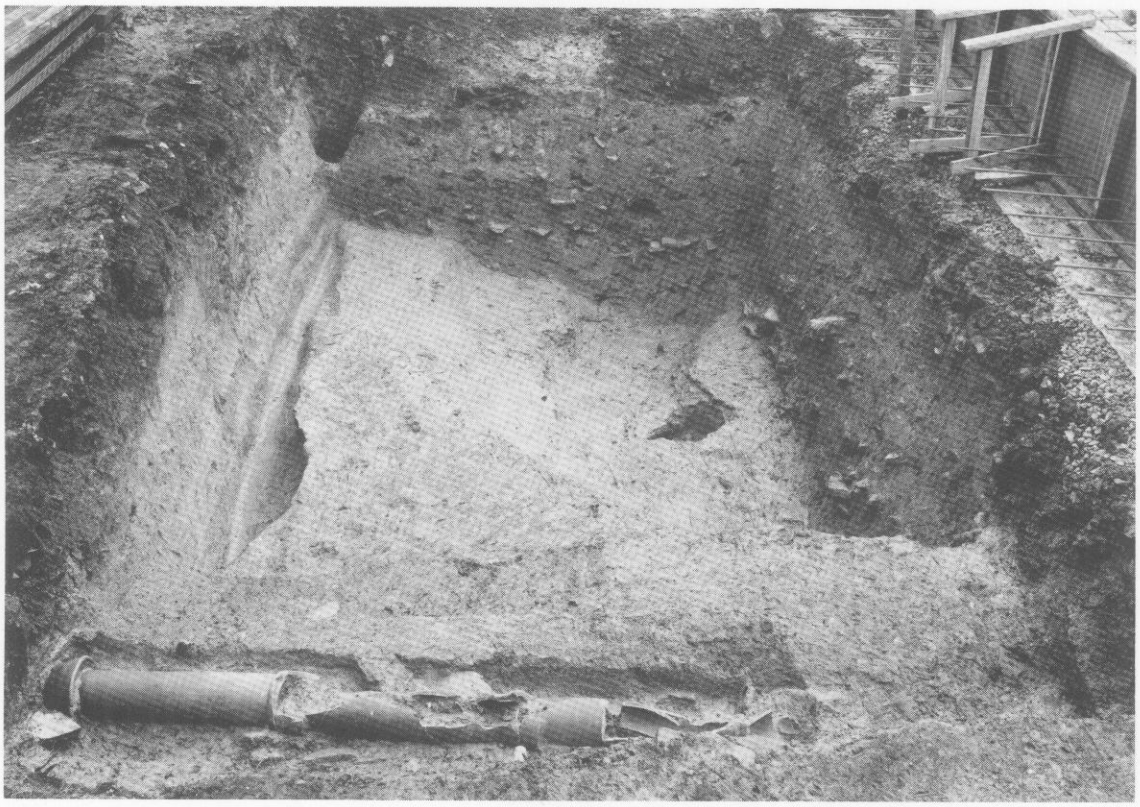
埋甕遺構 SX4179



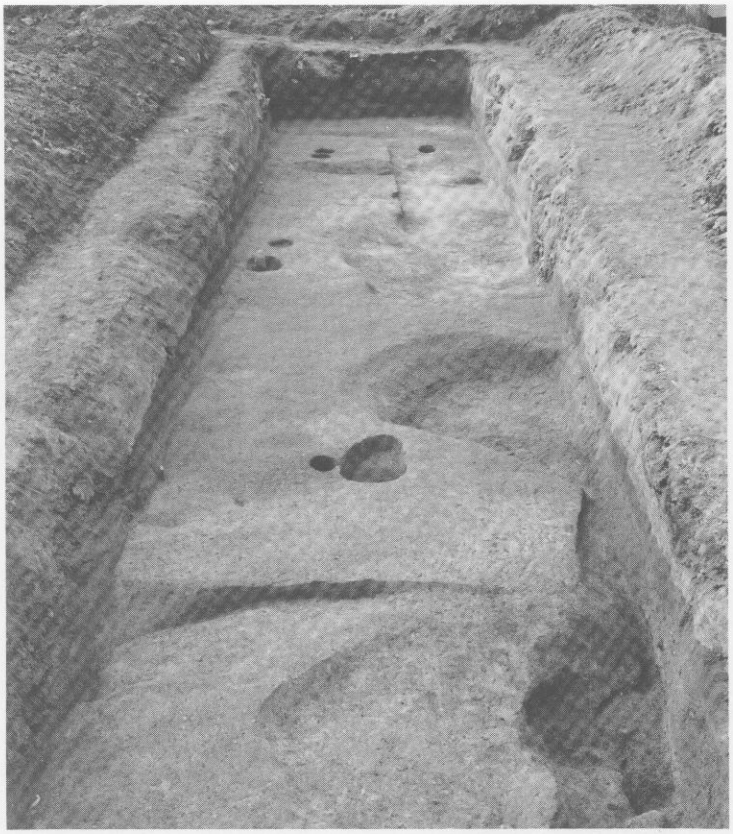
埋甕遺構 SX4181



Dトレンチ全景（南から）



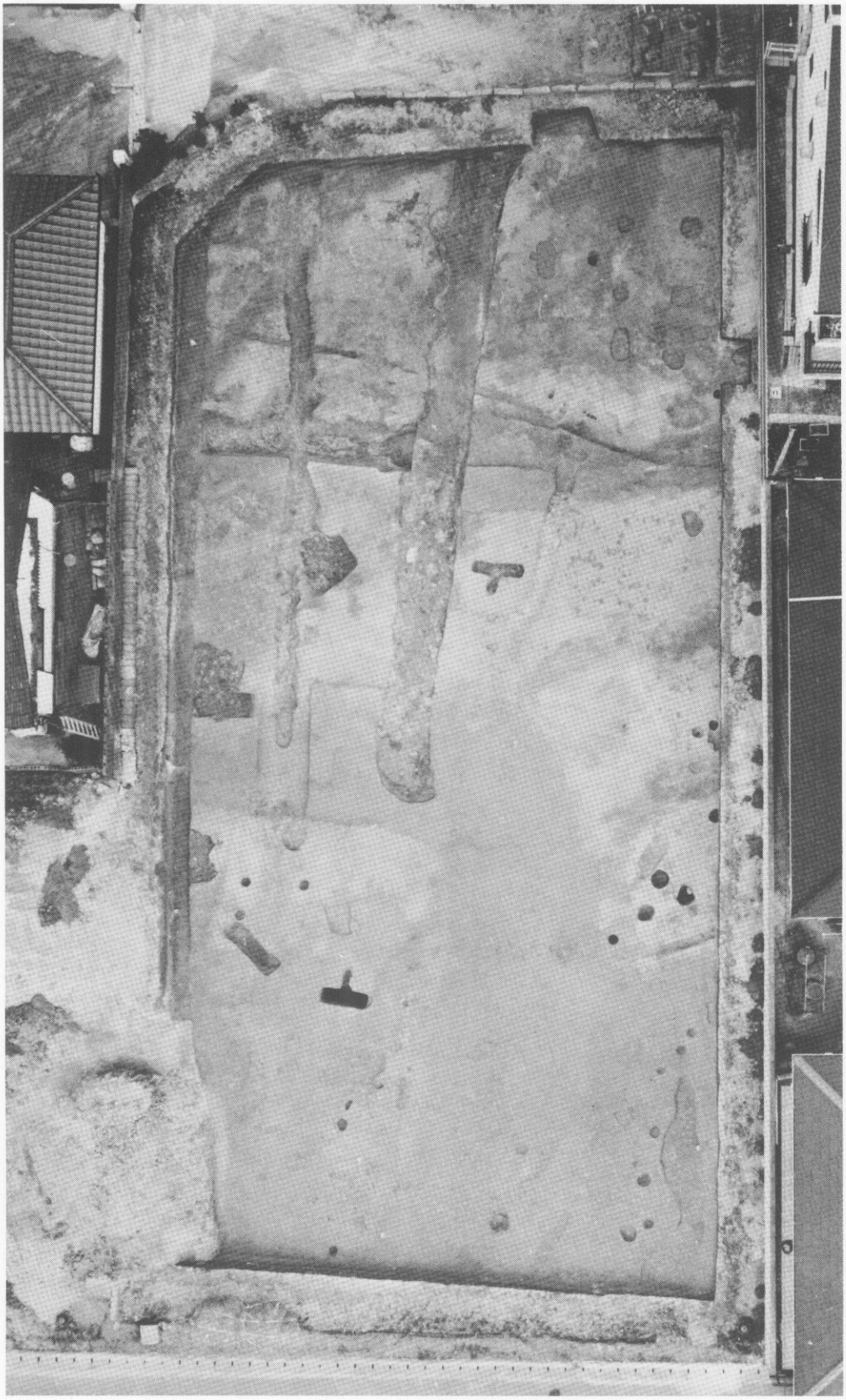
Dトレンチ全景（北から）



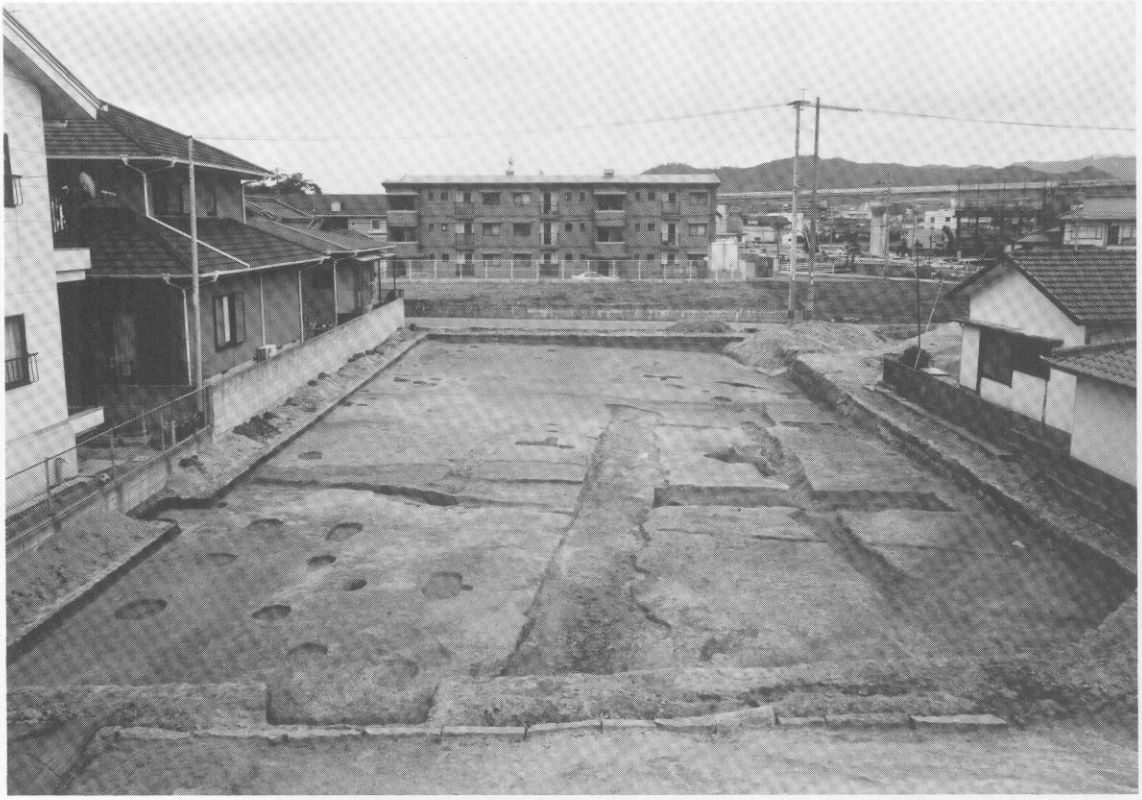
第165次調査区全景（東から）



第165次調査区全景（西から）



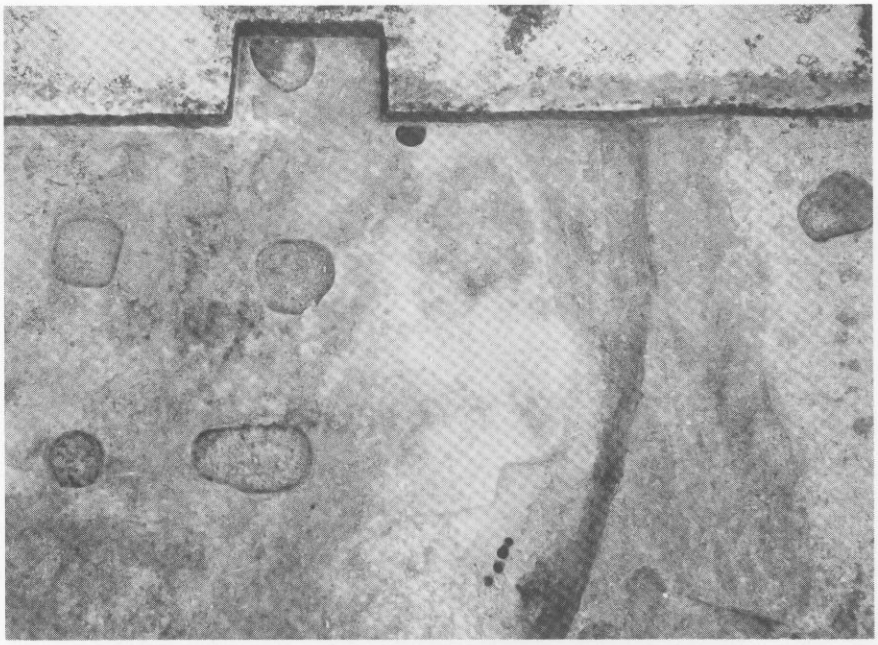
第166次調査区全景（空中写真、図版上部が北）



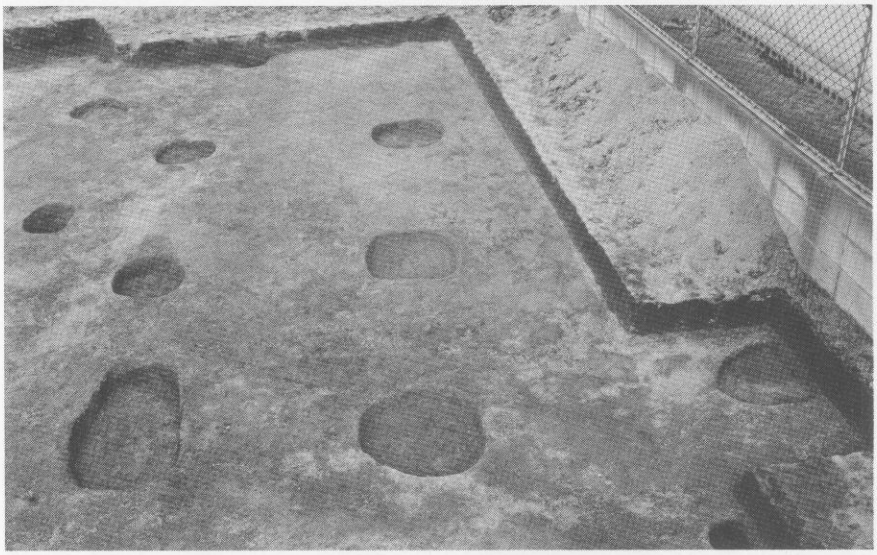
第166次調査区全景（北から）



第166次調査区全景（南から）



掘立柱建物
SB4200（空中写真）



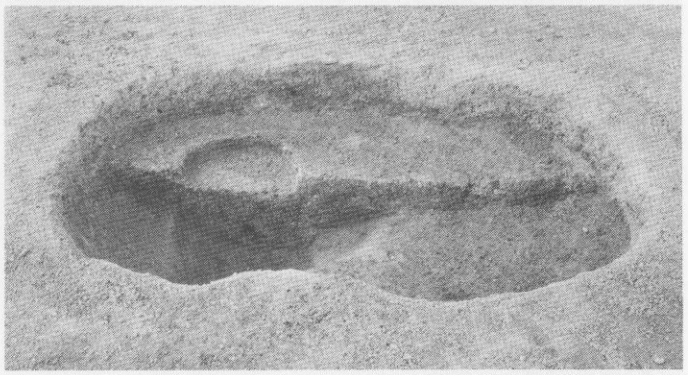
掘立柱建物
SB4200（南から）



掘立柱建物
SB4200（西から）



（2）



（3）



（4）



（5）

掘立柱建物 SB4200柱掘形



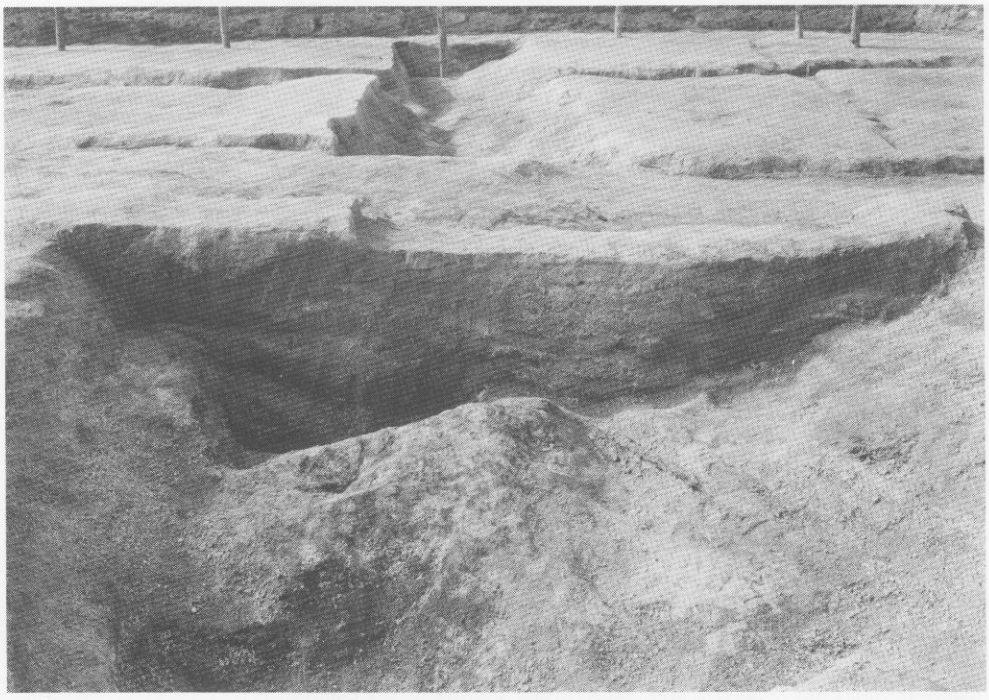
溝 SD4209・4215（北から）



溝 SD4209（西から）



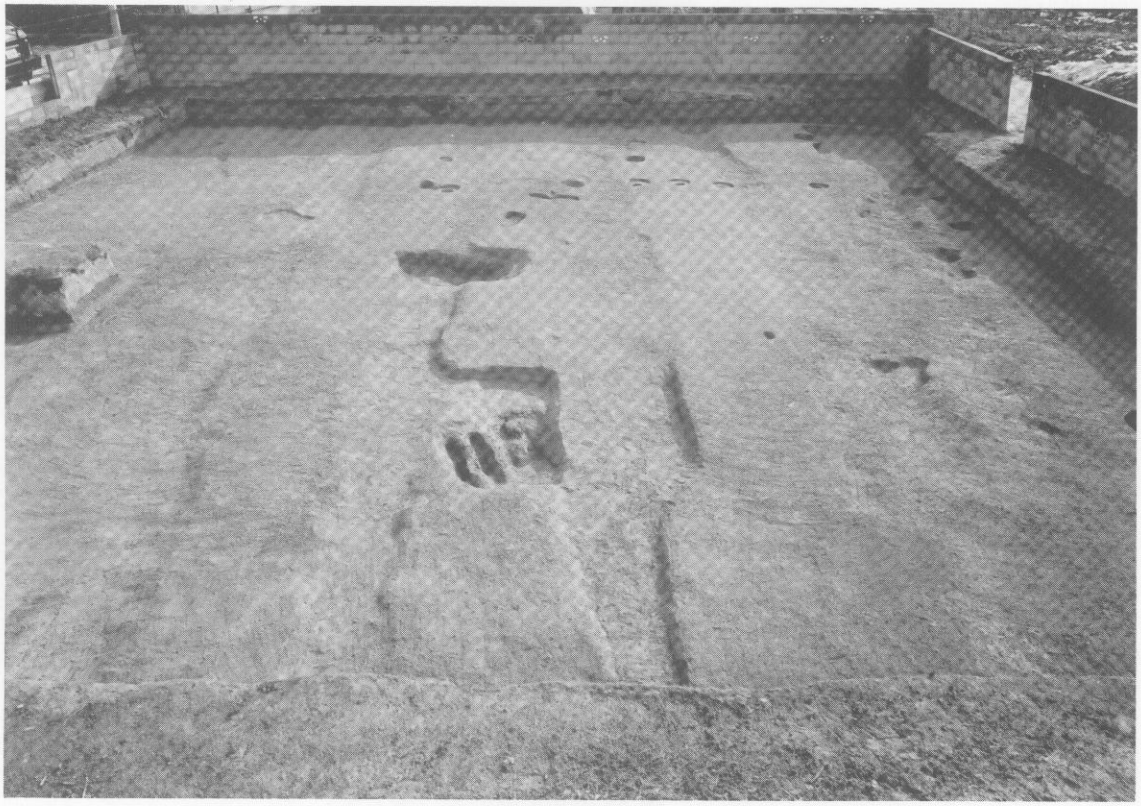
溝 SD4209（東から）



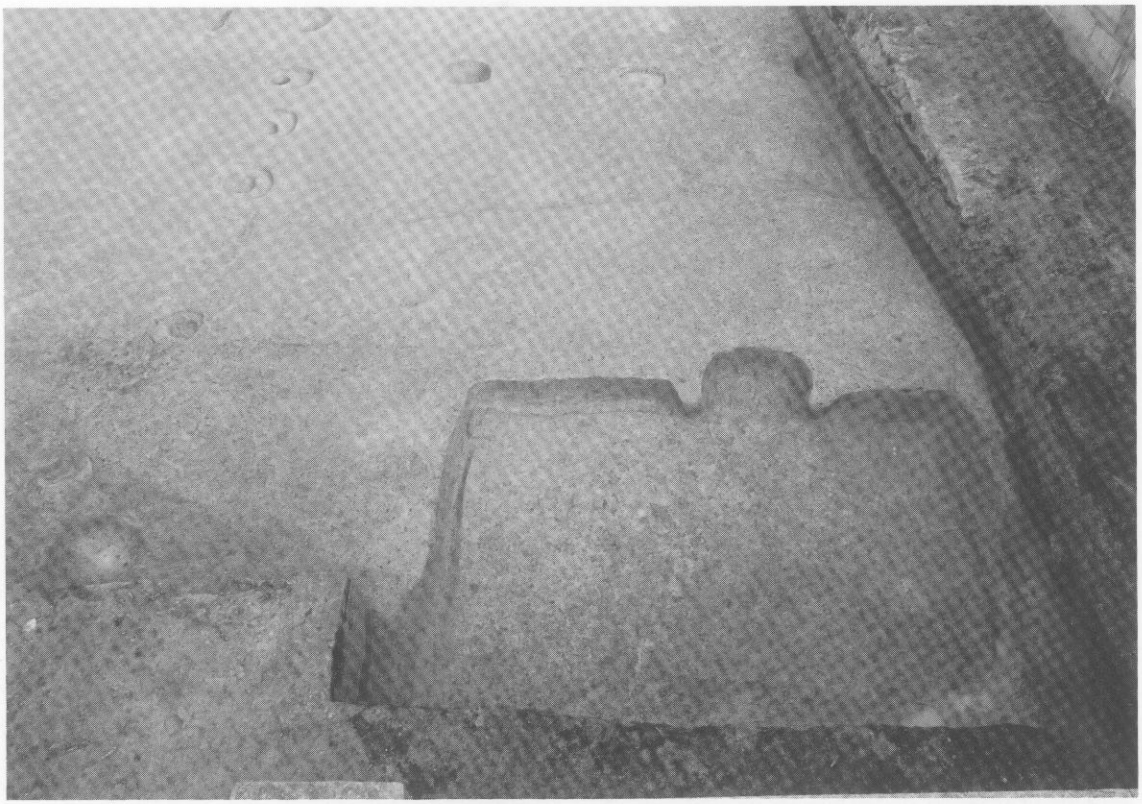
溝 SD4209土層断面（東から）



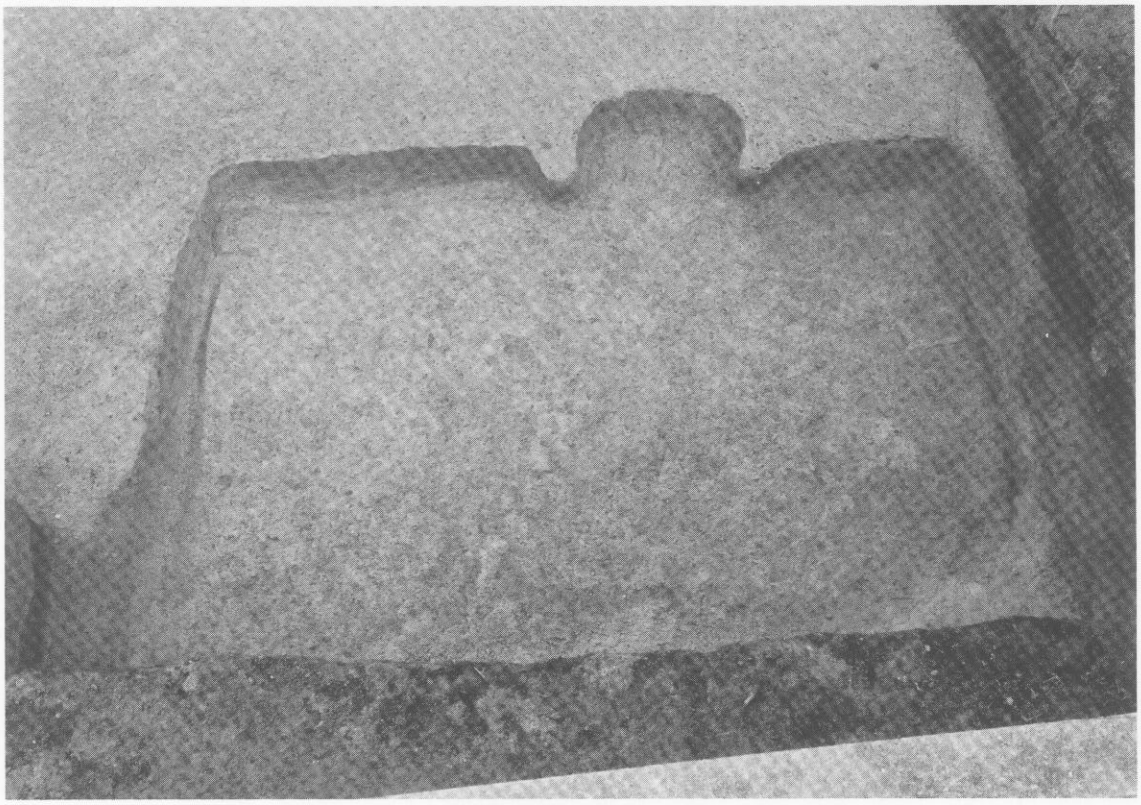
第167次調査区全景（東から）



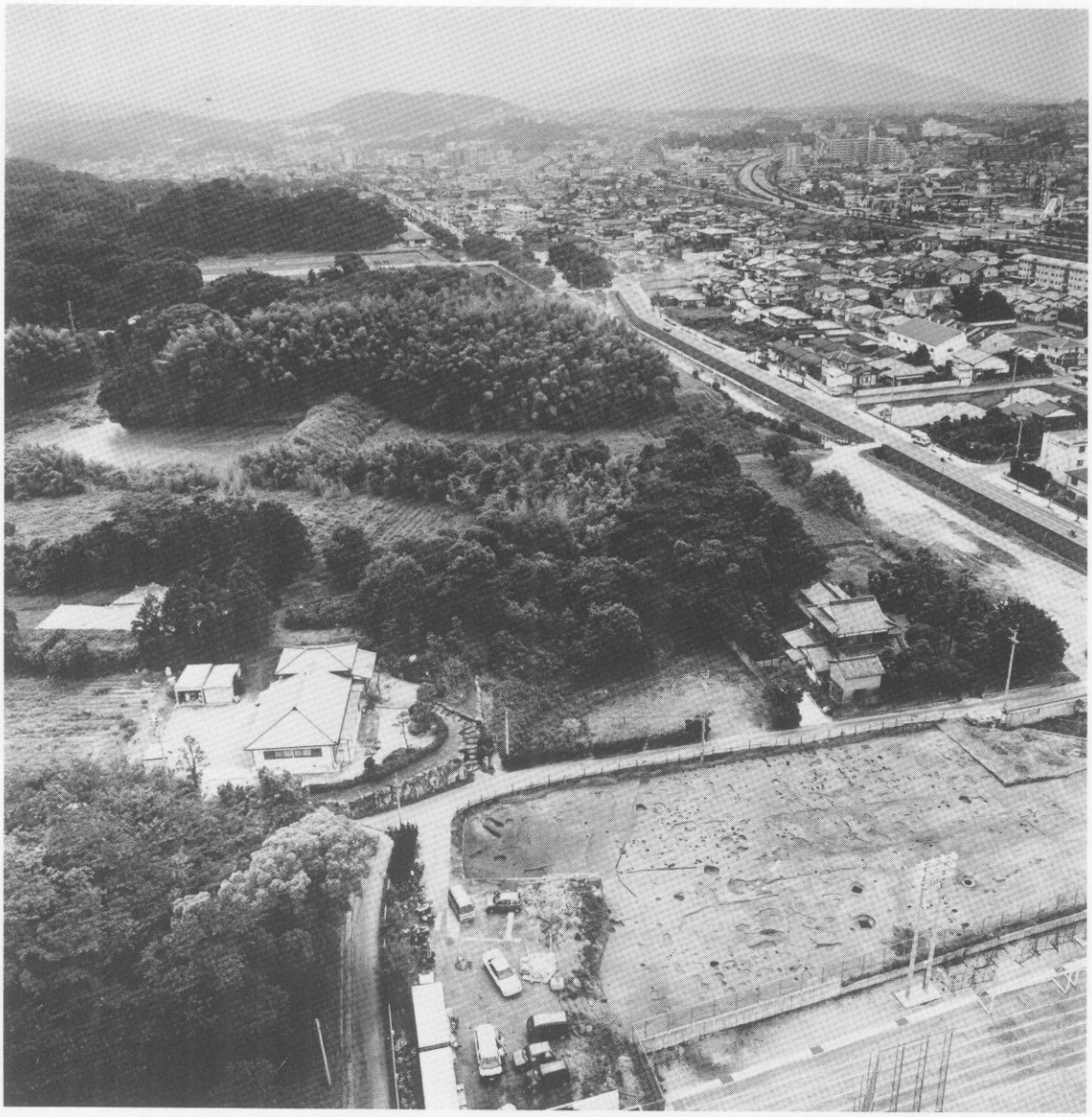
第167次調査区全景（北から）



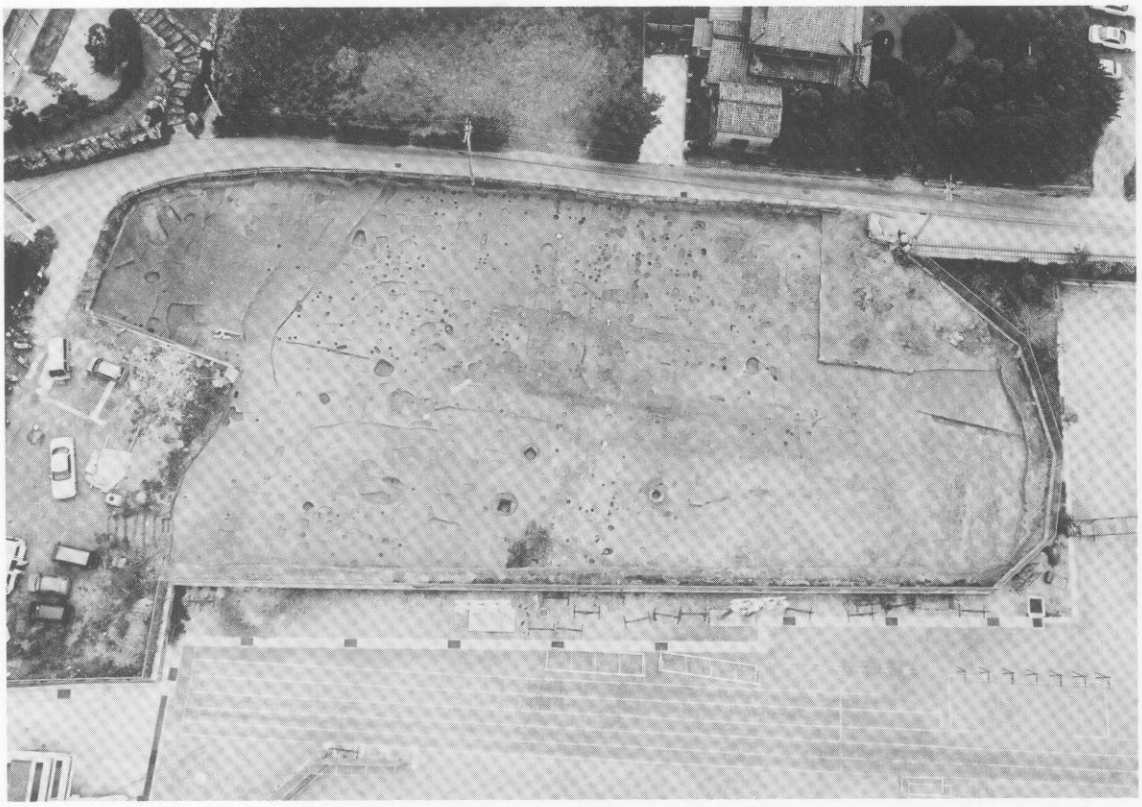
柵 SA4225・竪穴住居 SI4220（西から）



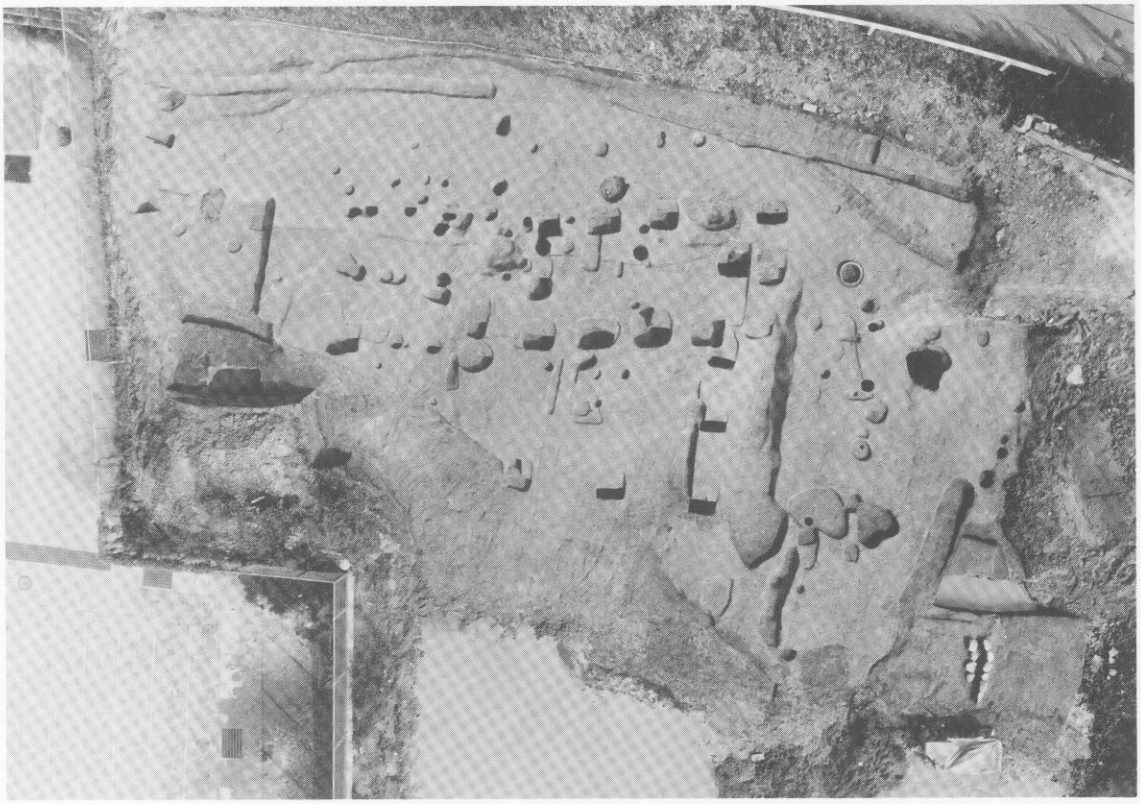
竪穴住居 SI4220（西から）



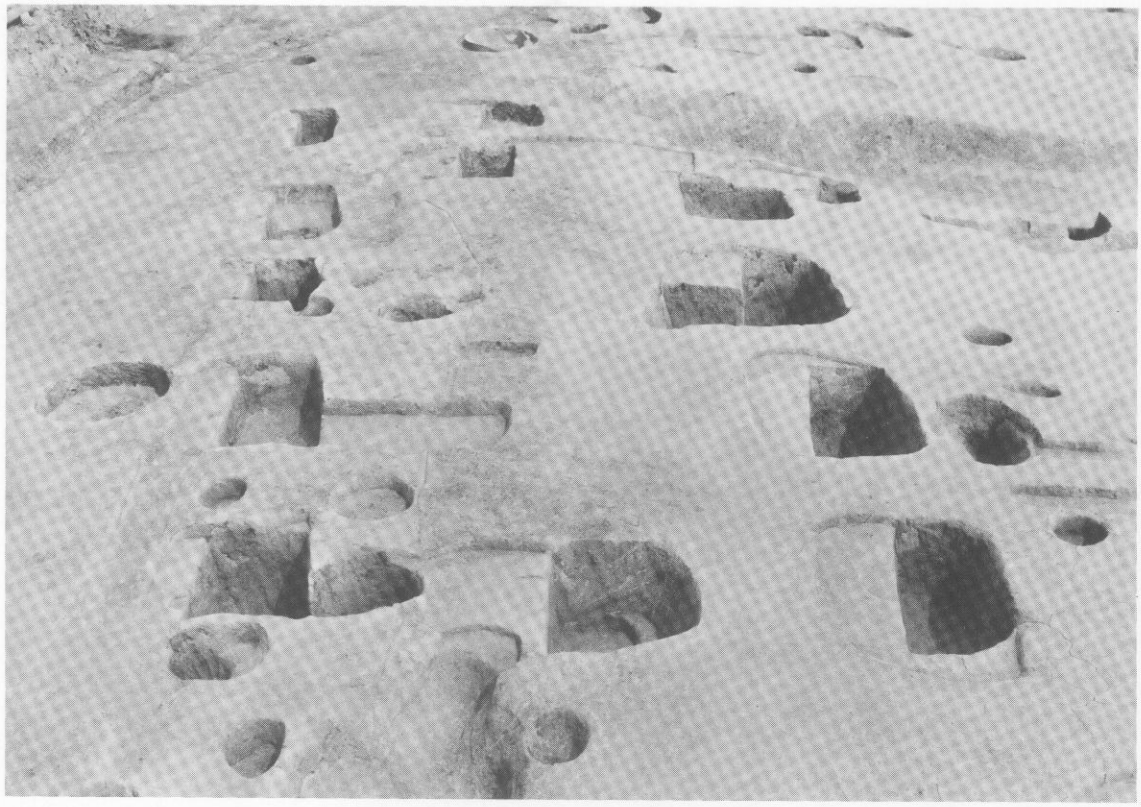
第170次調査区上空から大宰府政庁跡を望む（図版左が北）



第170次調査区全景（空中写真、図版左が北）



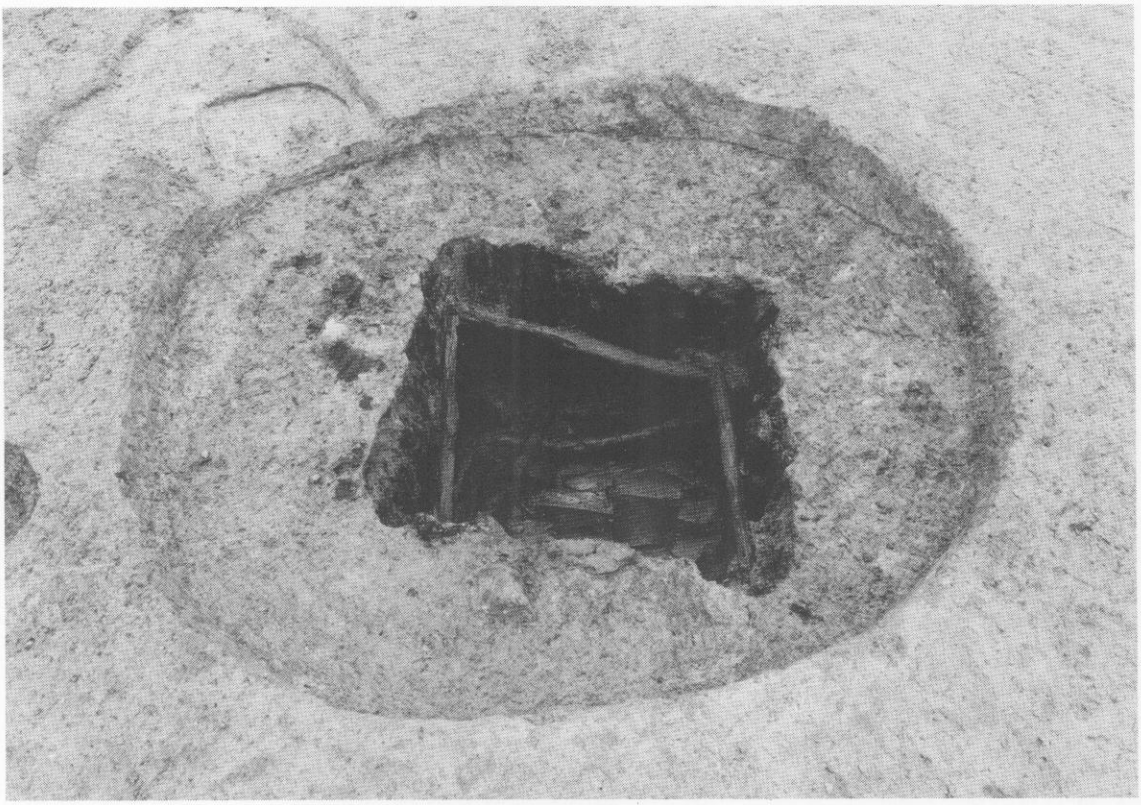
北半掘立柱建物群（空中写真、図版上部が北）



掘立柱建物 SB4300（西から）



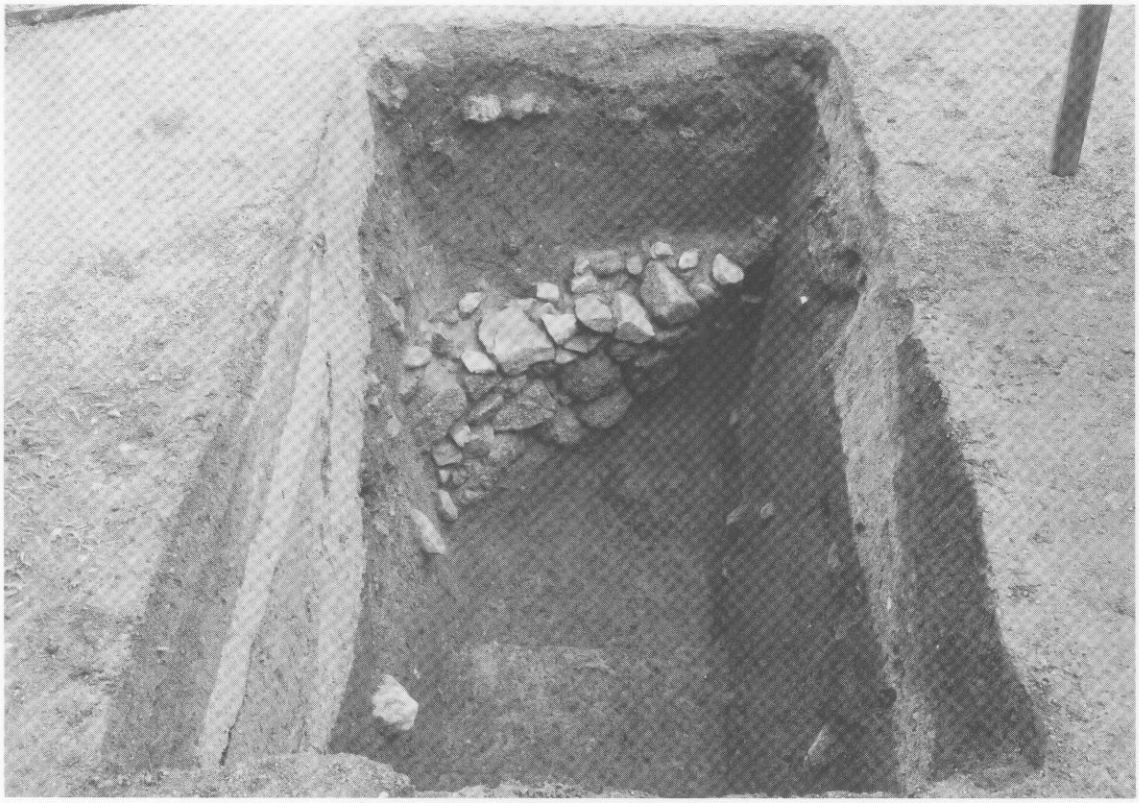
竪穴住居 SI4305（北から）



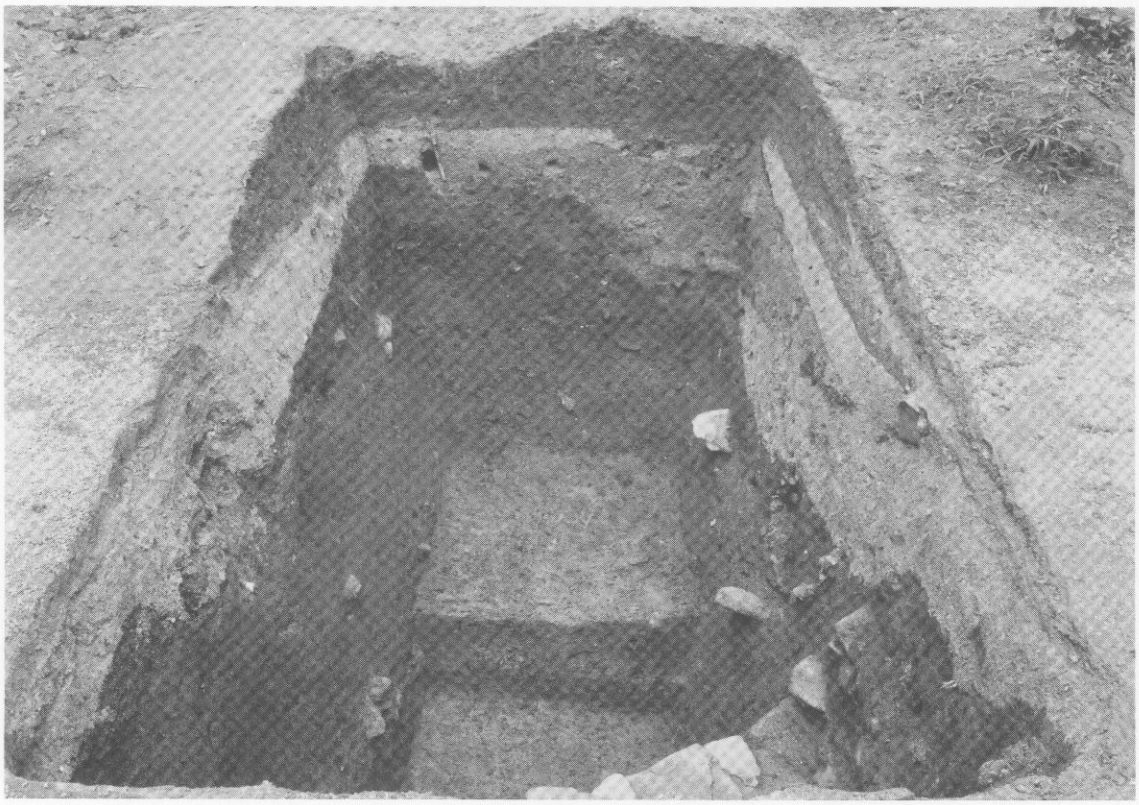
井戸 SE4290（西から）



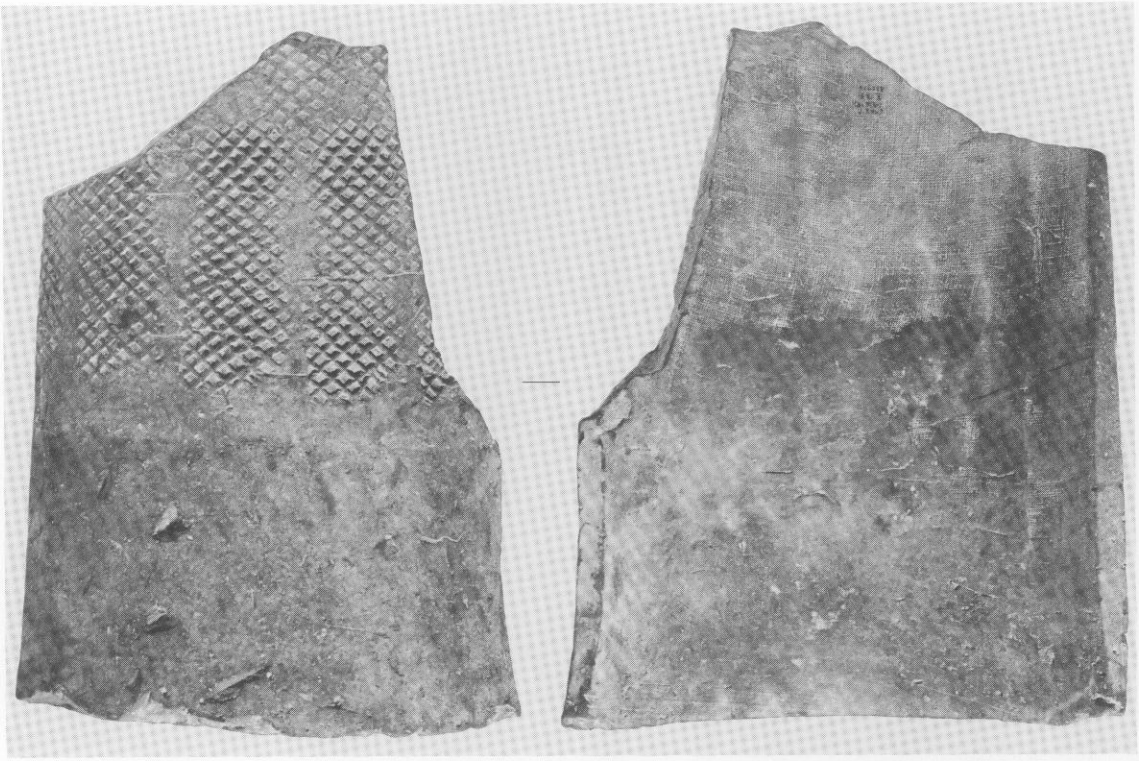
井戸 SE4295（南から）



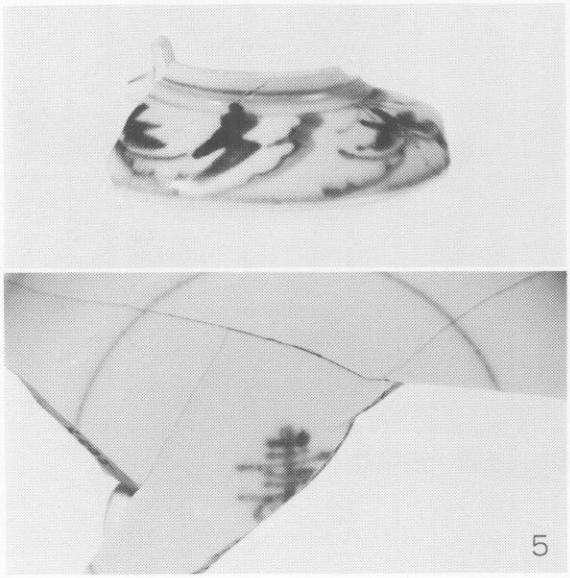
第172次調査区全景（東から）

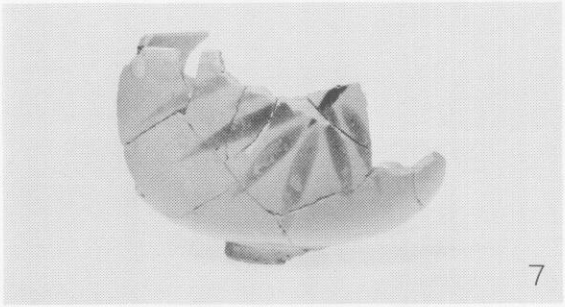


第172次調査区全景（西から）

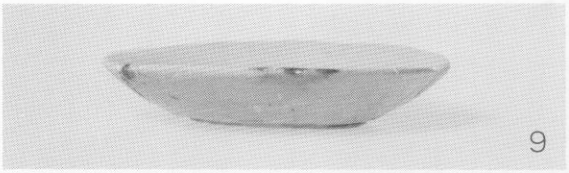


第116次調査　戒壇院出土軒平瓦

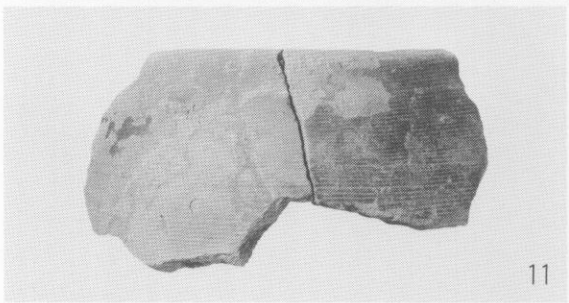




第163次調査　SD4175掘形上面出土陶磁器


9

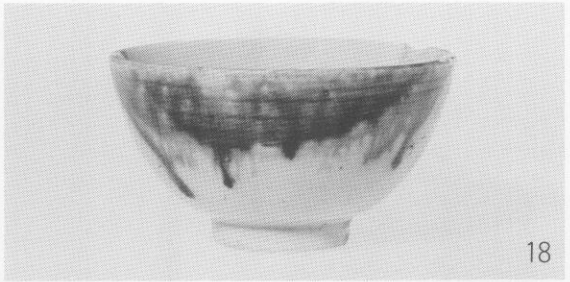

10

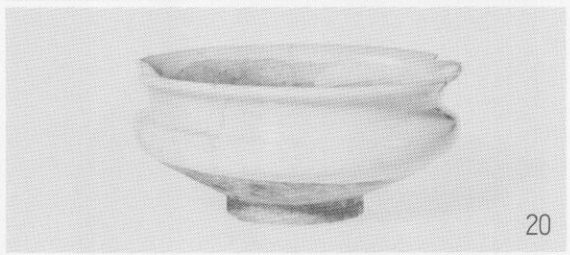

11

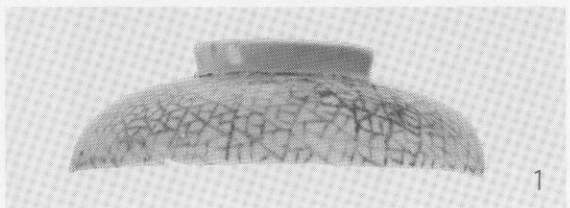

13


15

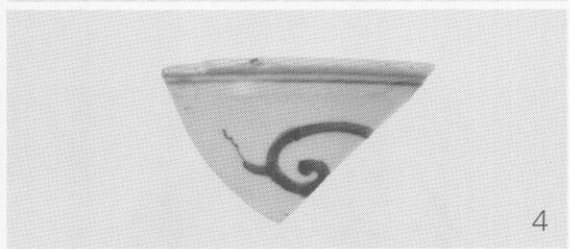

17

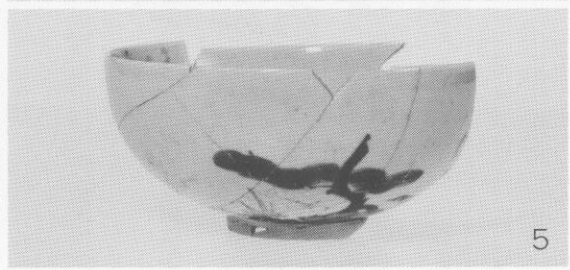

18


20

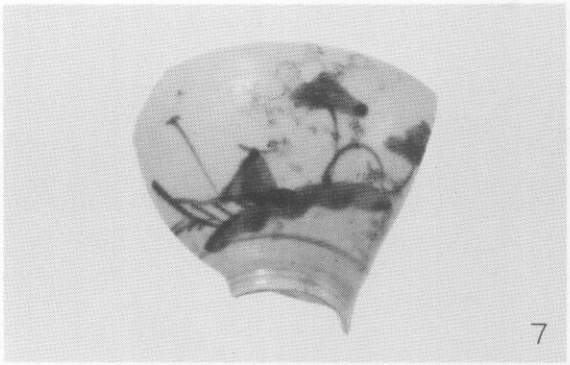

1

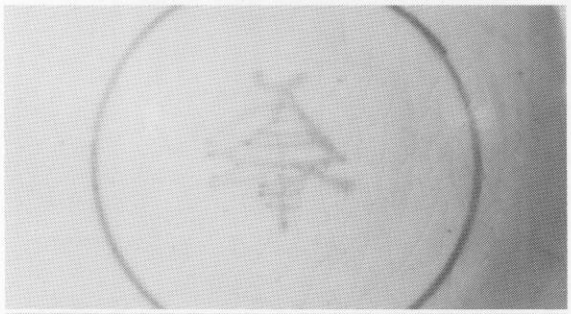

2

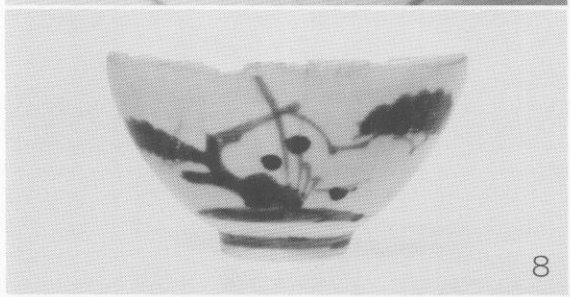

4

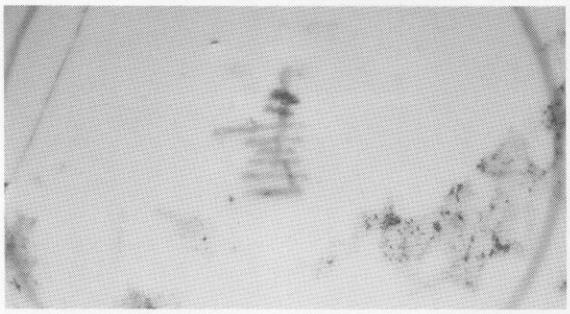

5

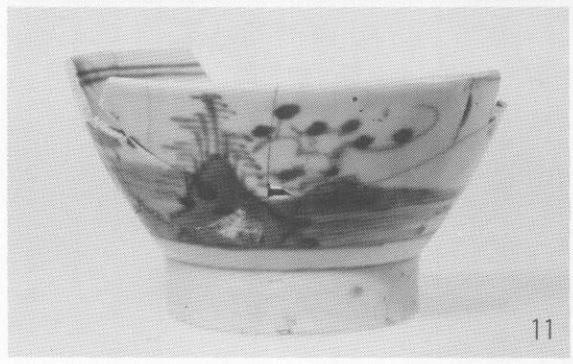
第163次調査　SD4175出土土器・陶磁器(1)

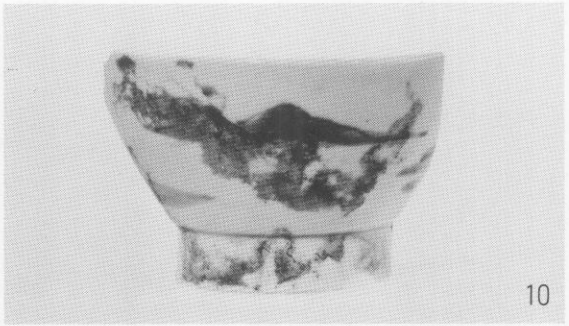

7

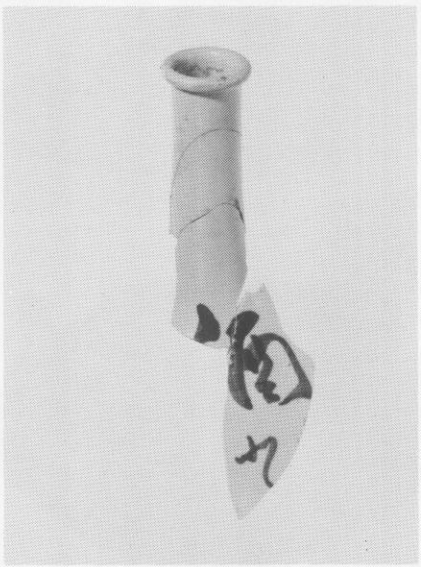


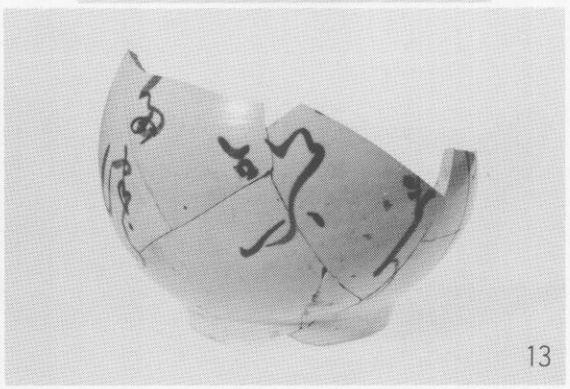

8

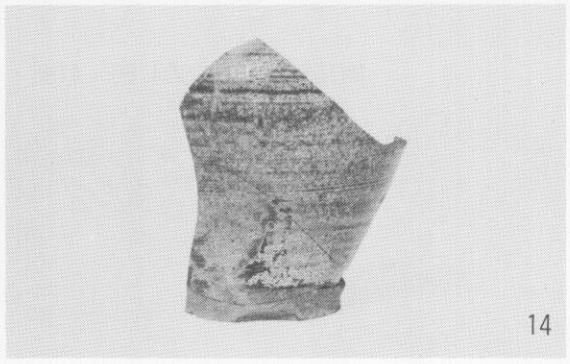



11


10

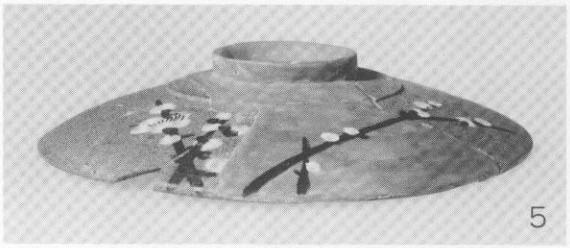



13


14

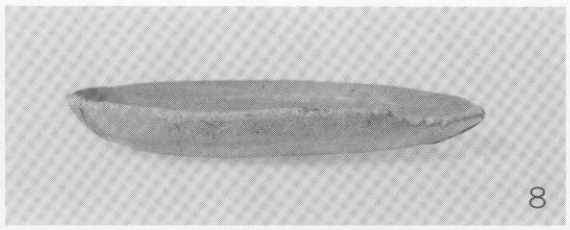
第163次調査　SD4175出土陶磁器(2)

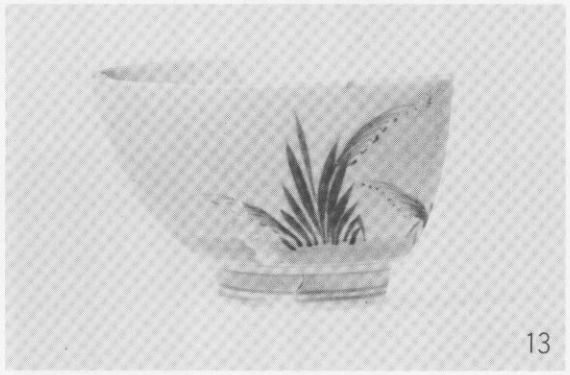

3

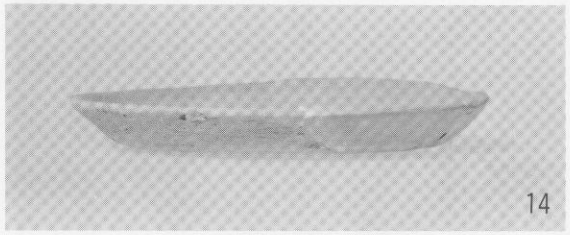

5

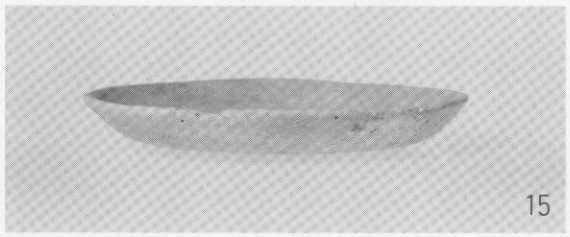

6


7


8

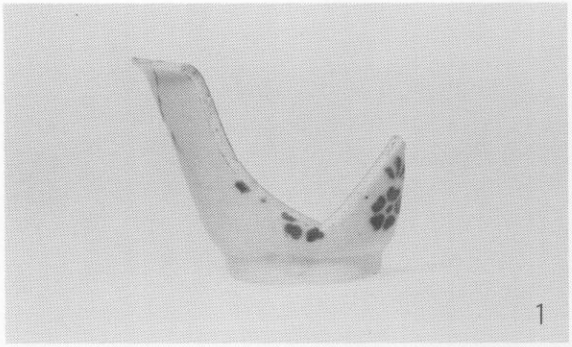

13


14


15


16

第163次調査　SD4185・4186・4187・4188出土土器・陶磁器

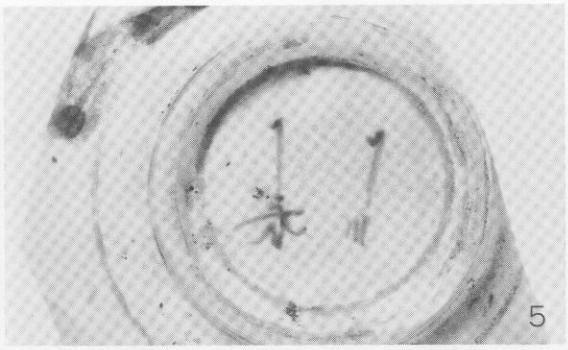

1

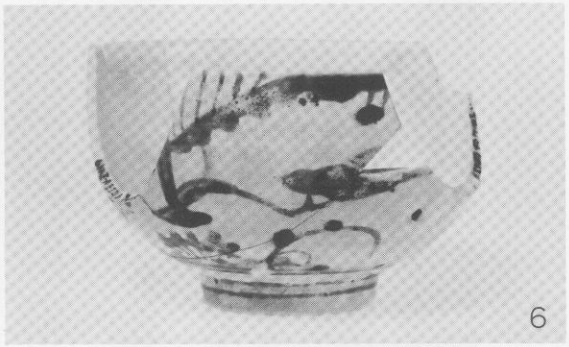

2

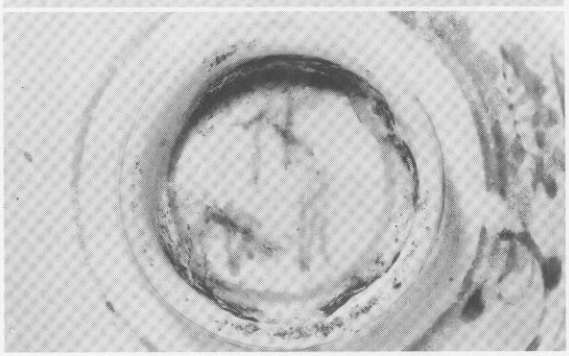

3

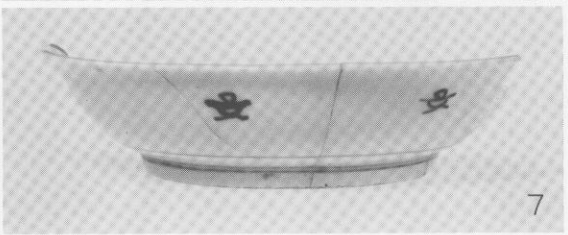


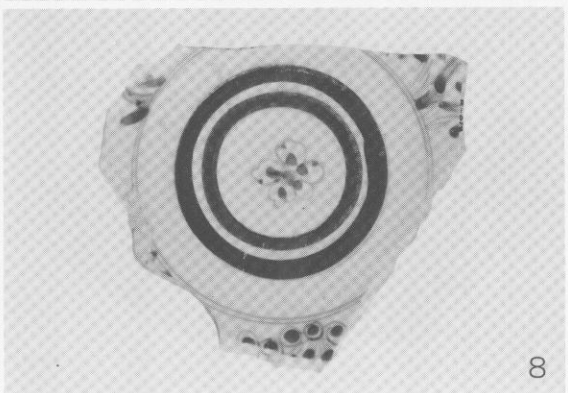

4


5

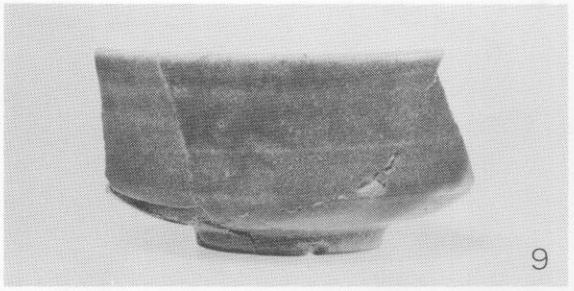

6




7

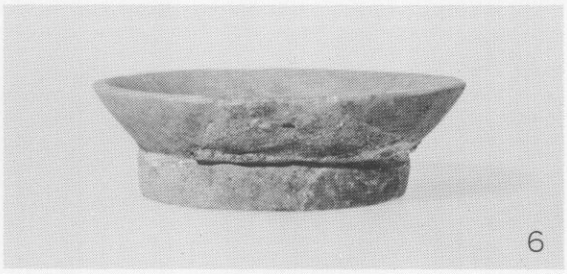

8

第163次調査　SG4190出土陶磁器

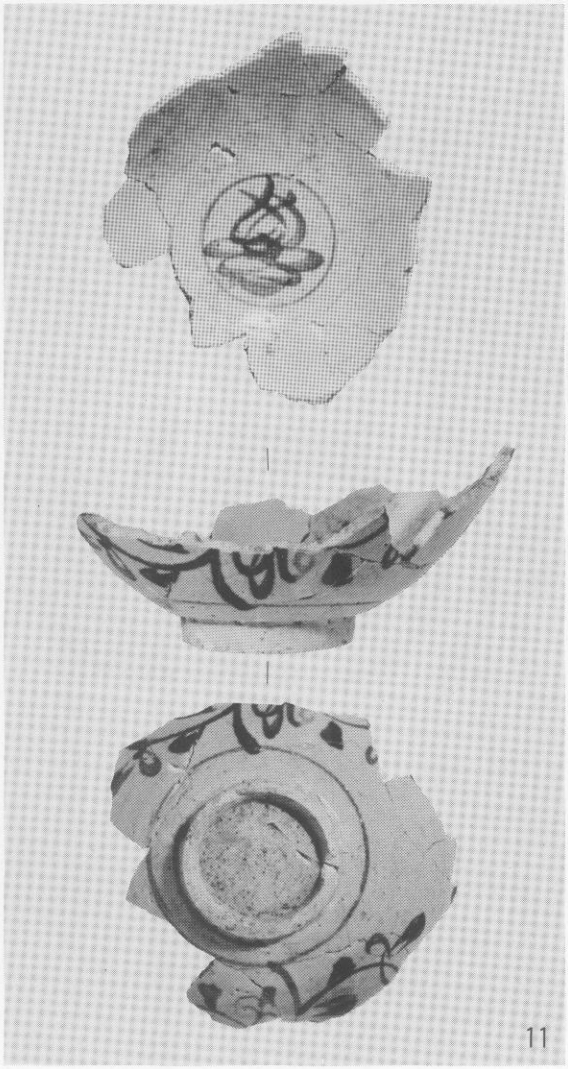

9

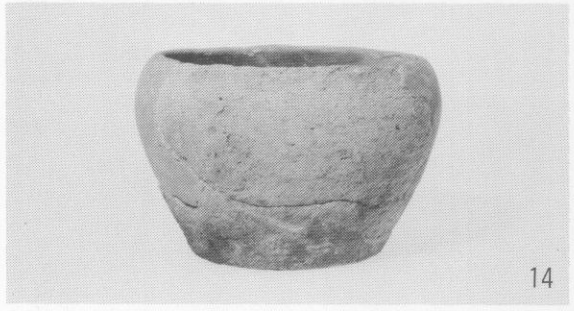

4


11


6

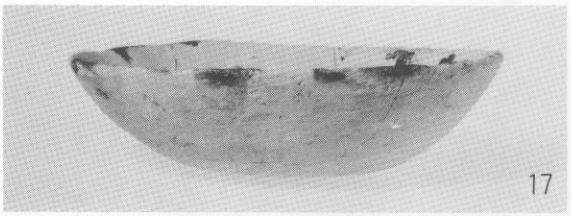

12


11

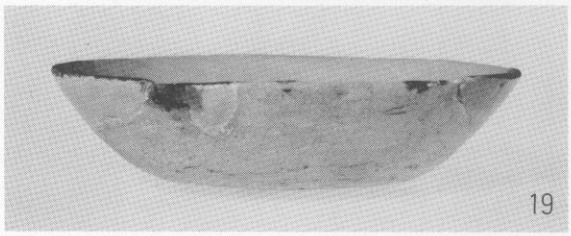

14

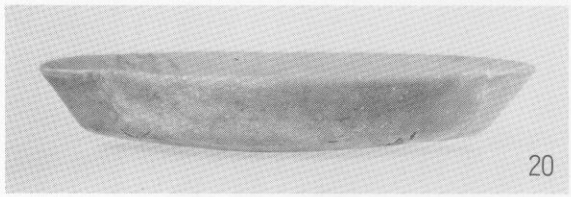

15

第163次調査　SG4190、SX4177・4184、層位出土土器・陶磁器

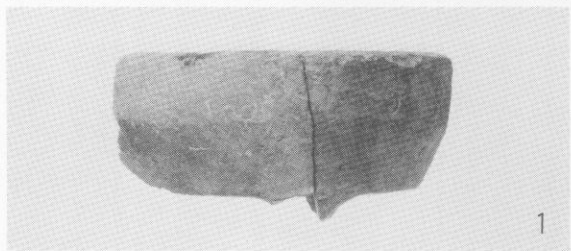

17


18

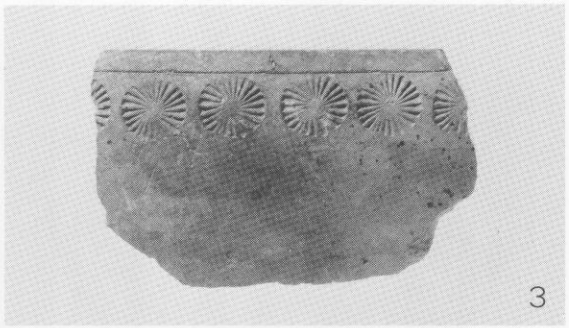

19

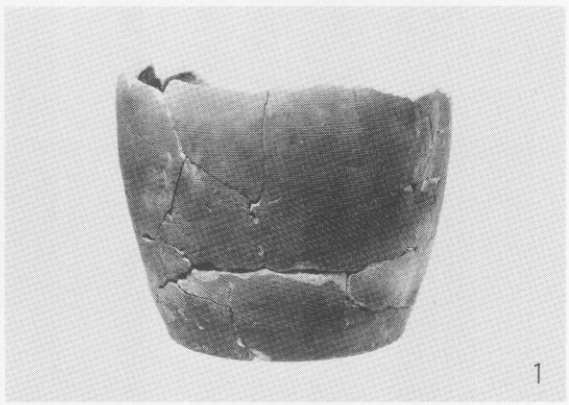

20


21

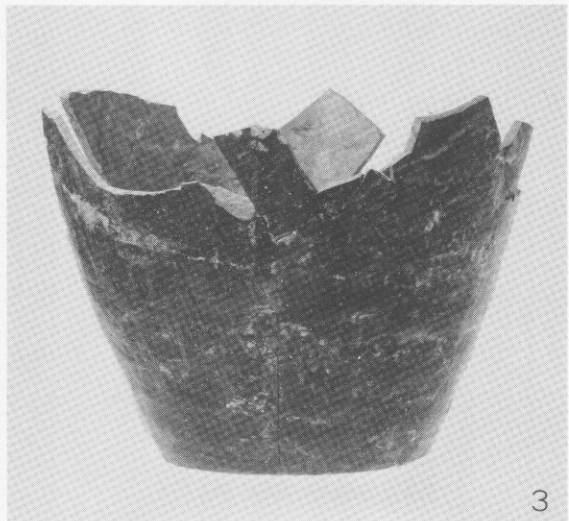

1


2

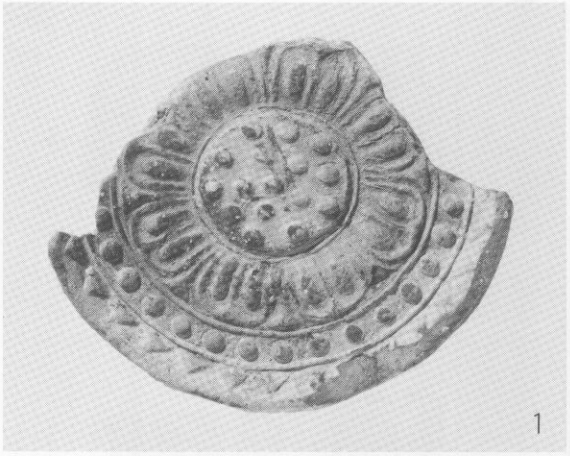

3


1


2

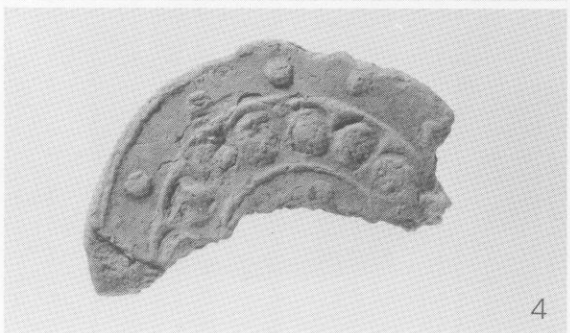

3

第163次調査　黄色整地層出土土器、瓦質土器、SX4176・4178・4179出土埋甕

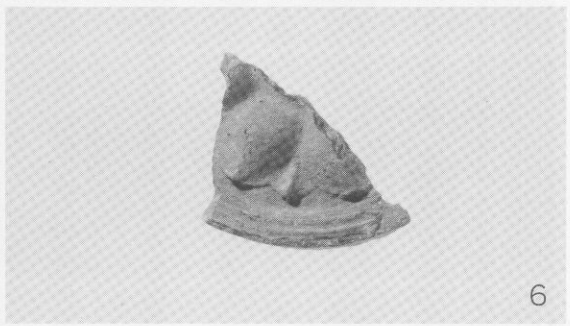

1

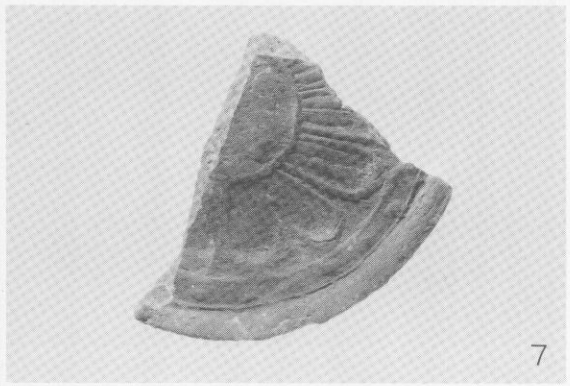

2


3

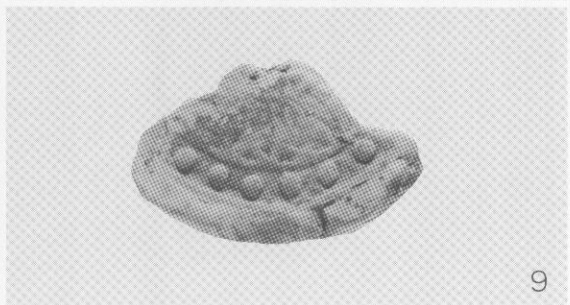

4


5


6

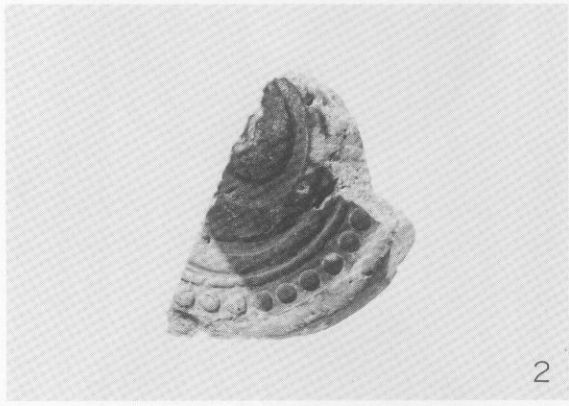

7


8

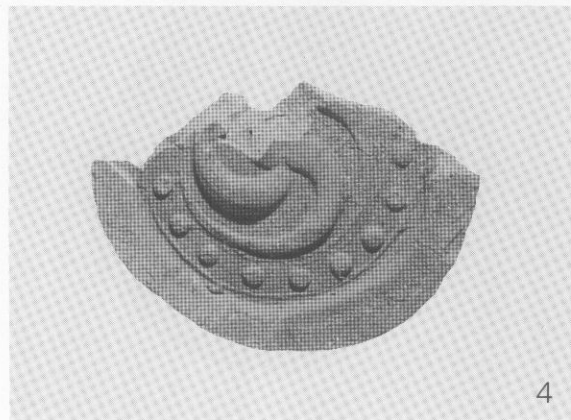

9

第163次調査　戒壇院出土軒丸瓦(I)〔挿図第21図〕

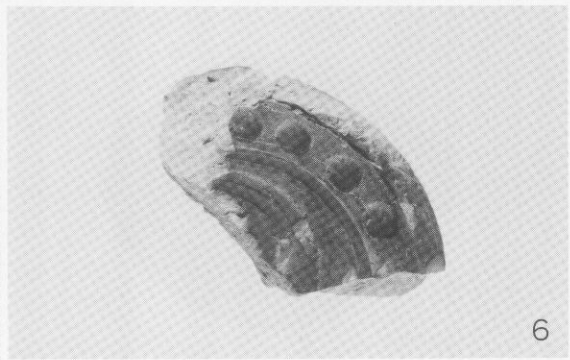

1

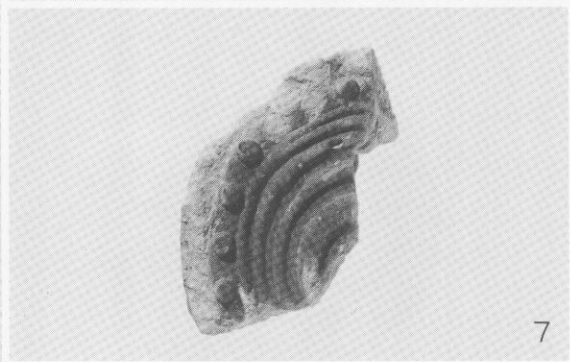

2


3


4


5


6

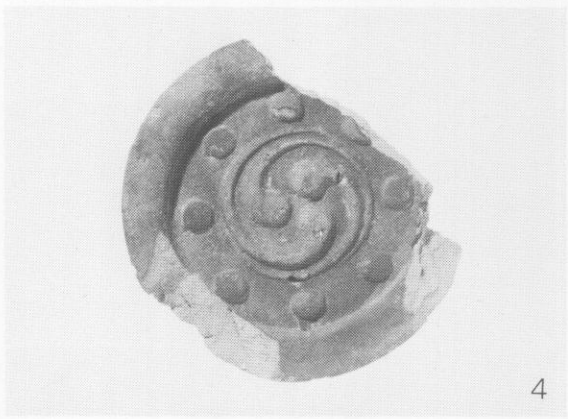

7

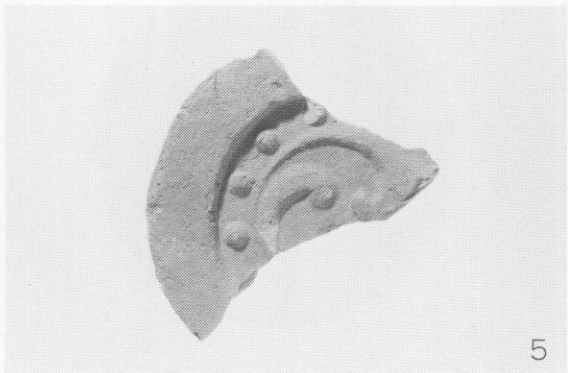

1

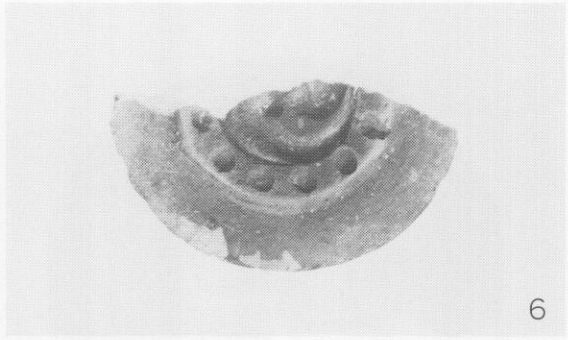
第163次調査　戒壇院出土軒丸瓦(2)〔１～７は挿図第22図、右下１は第23図〕

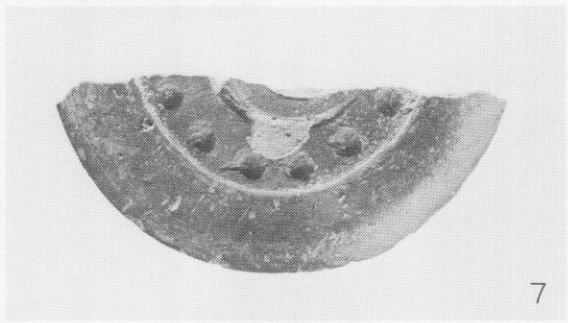

2


3


4


5


6


7

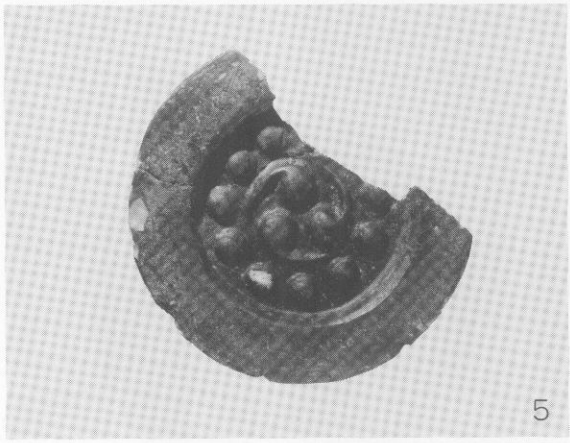

1


2

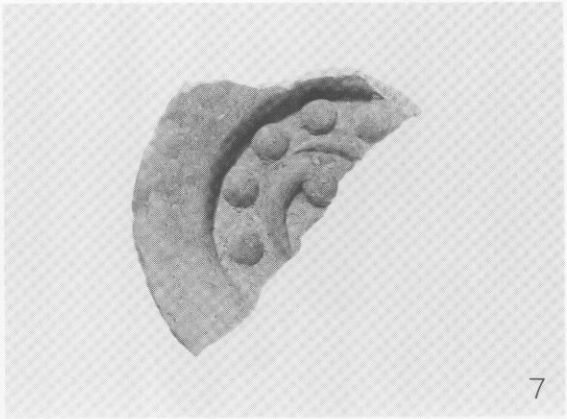
第163次調査　戒壇院出土軒丸瓦(3)〔２～７は挿図第23図、右１・２は第24図〕


3

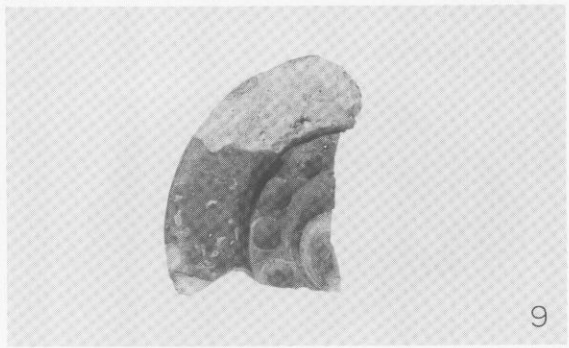

4


5


6

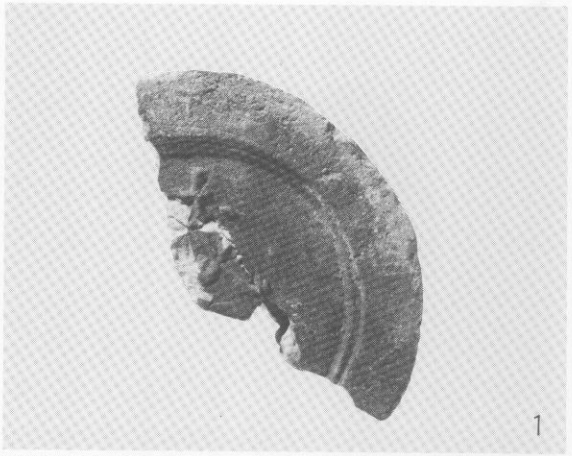

7

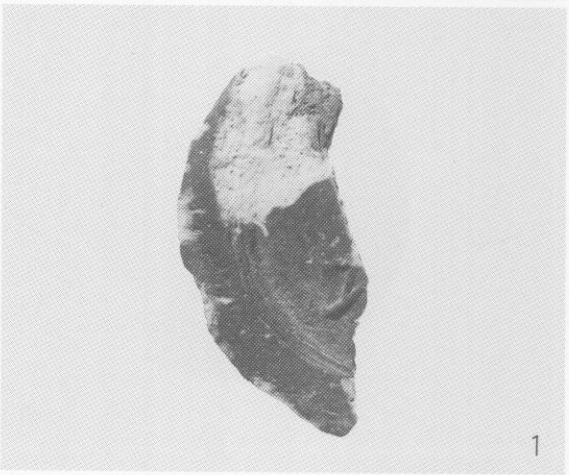

8


9


11

第163次調査　戒壇院出土軒丸瓦(4)〔挿図第24図〕


1


1


2


2

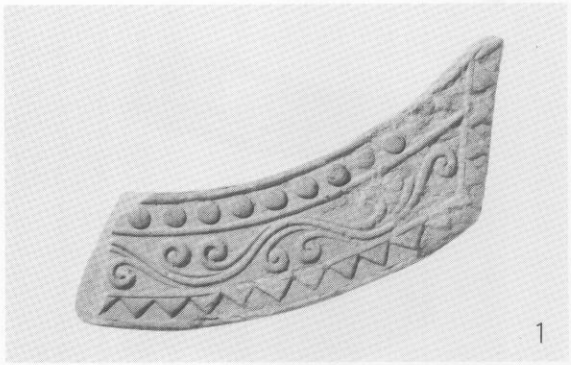

3

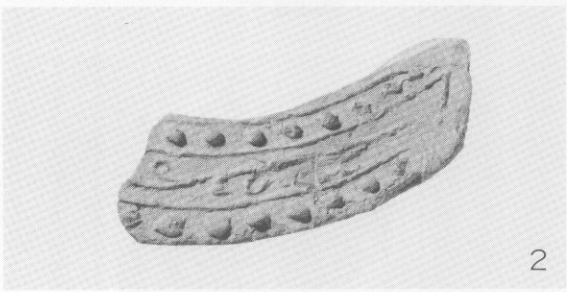

4


5


6

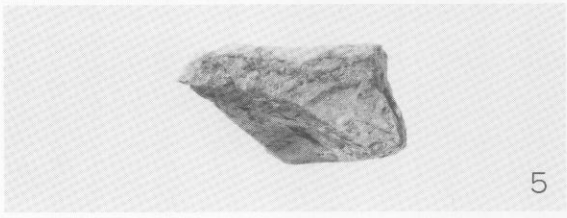
第163次調査　戒壇院出土軒丸瓦(5)〔挿図第25図〕


1


2

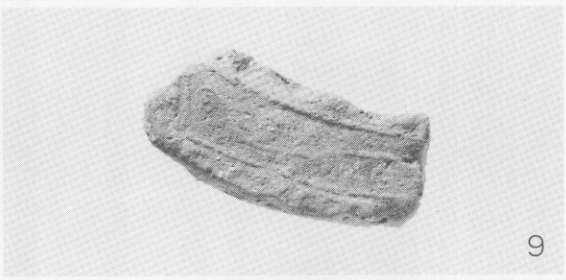

3


4


5


6

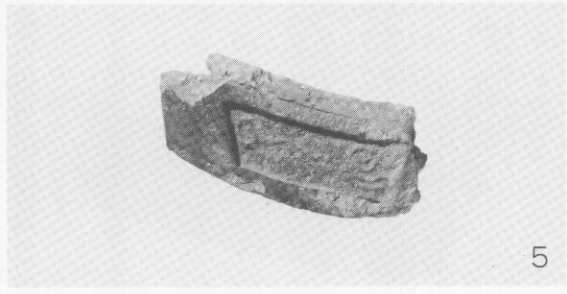

8


9


2


3

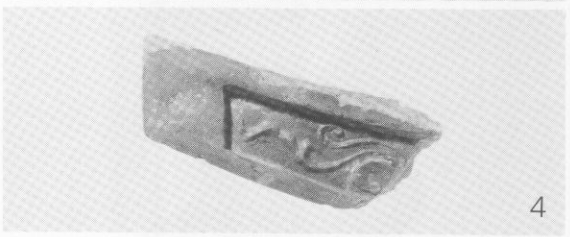

4


5

第163次調査　戒壇院出土軒平瓦(1)〔1～9は挿図第26図、右2～5は第27図〕


1


2


4

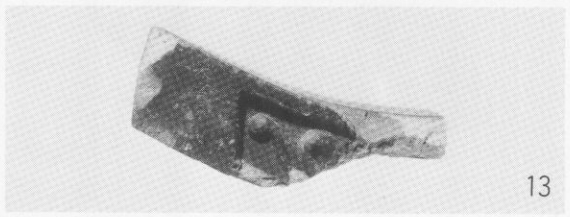

5

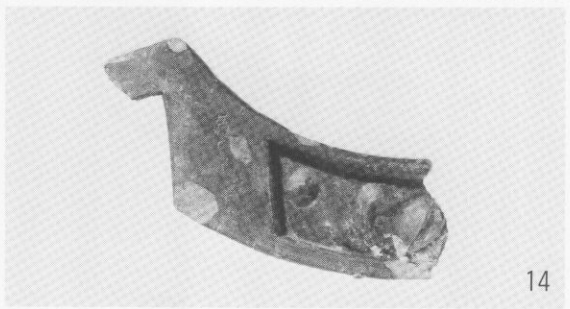

6

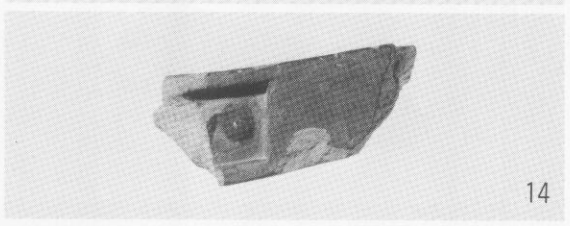

8

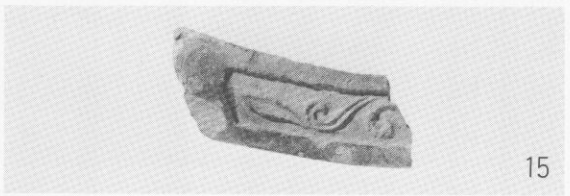

11


12


13


14


14

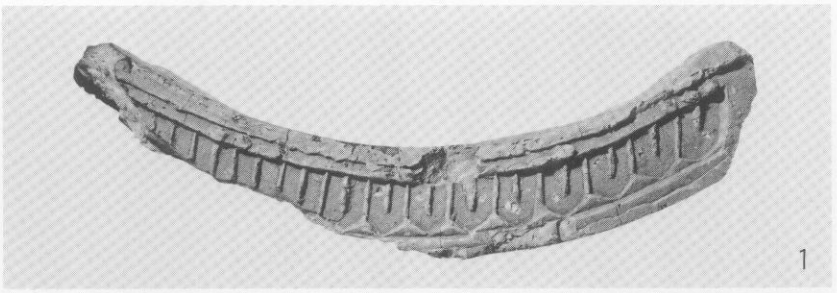

15


15


17


18

第163次調査　戒壇院出土軒平瓦(2)〔挿図第28図〕

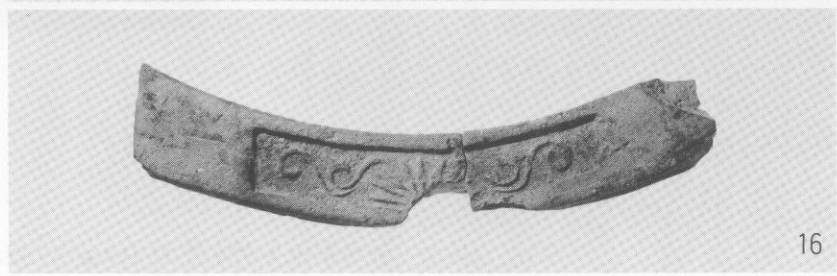




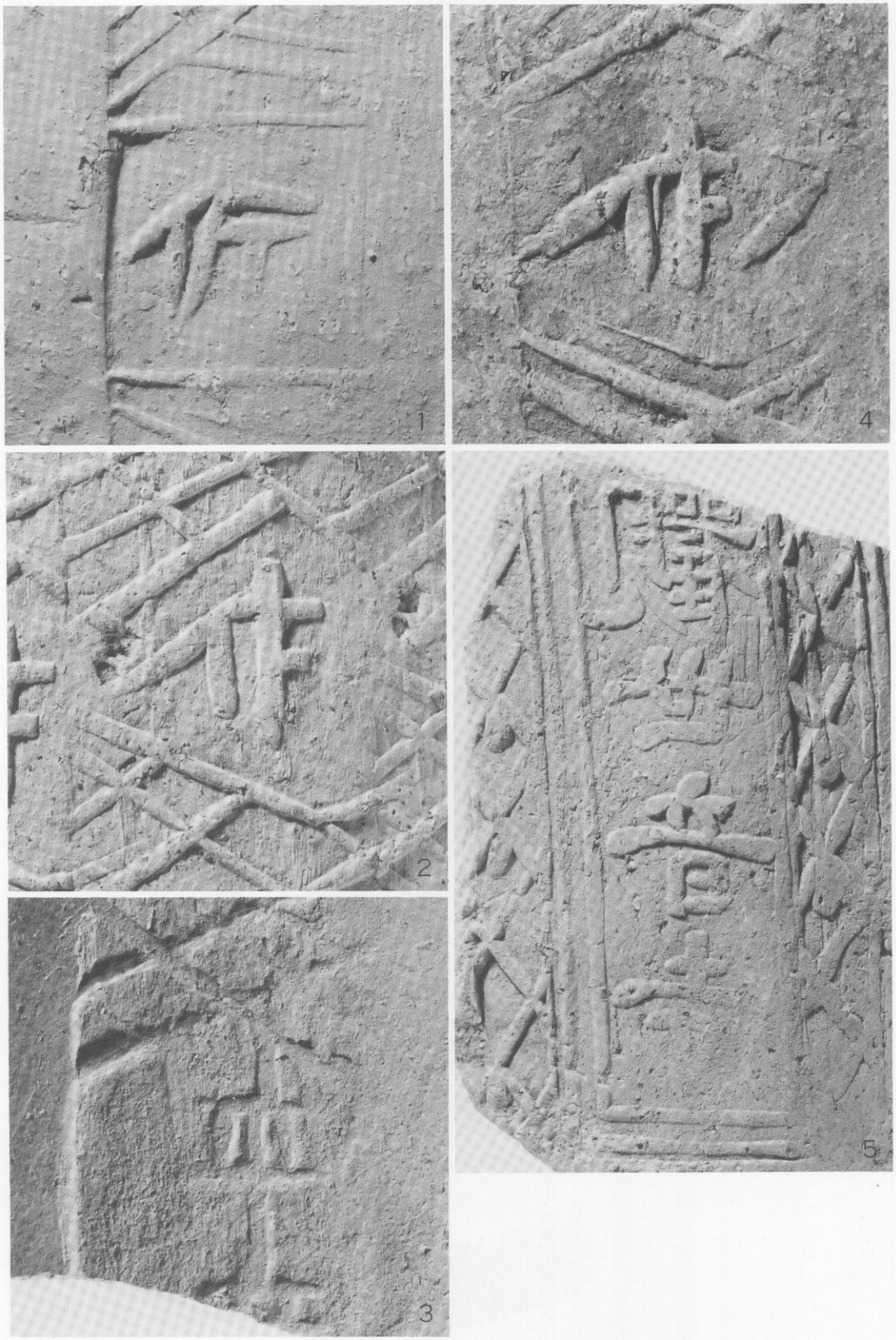








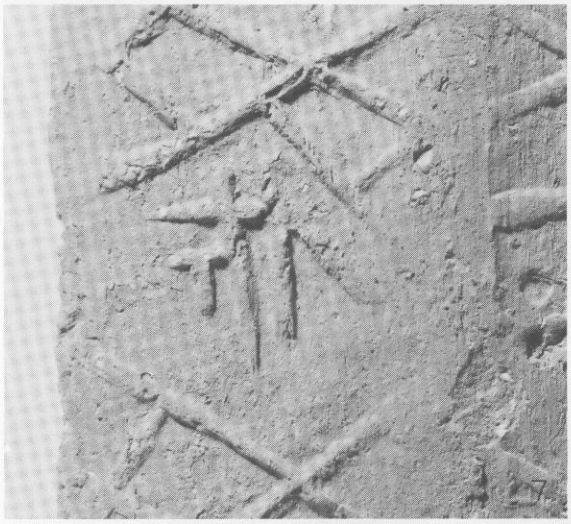
第163次調査　戒壇院出土軒平瓦(3)
〔1は挿図第27図、3～16は第28図〕



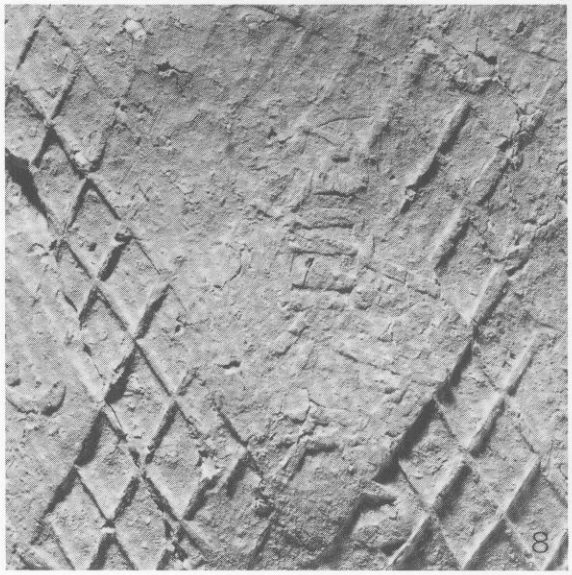
第163次調査　戒壇院出土文字瓦(1)〔挿図第29図〕







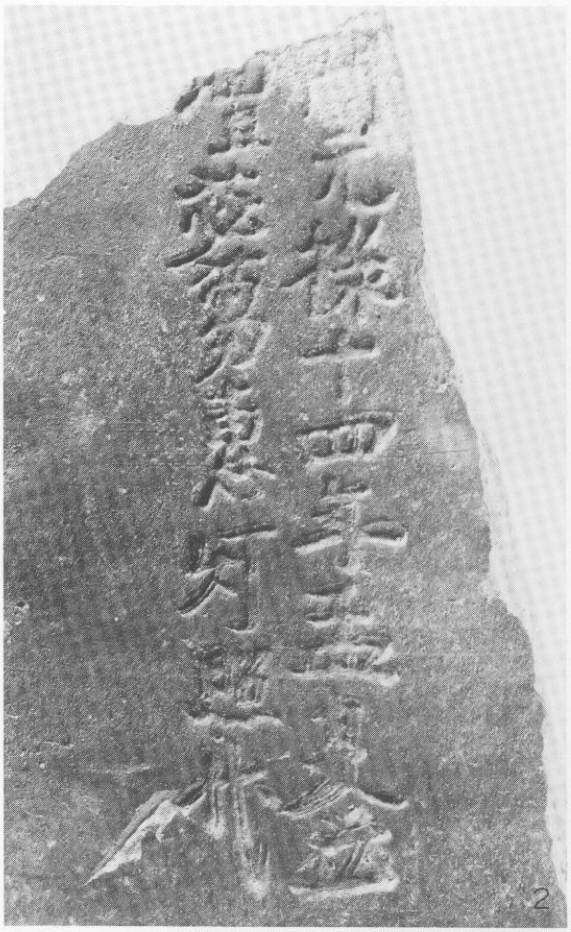




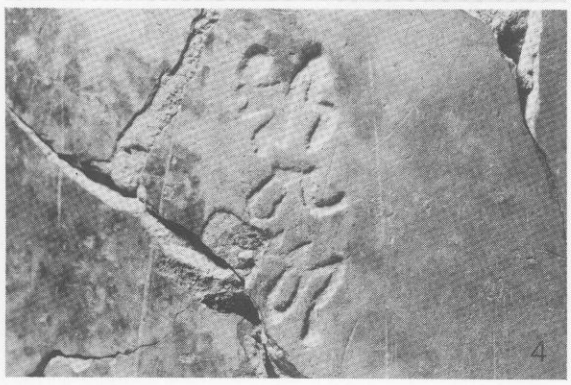


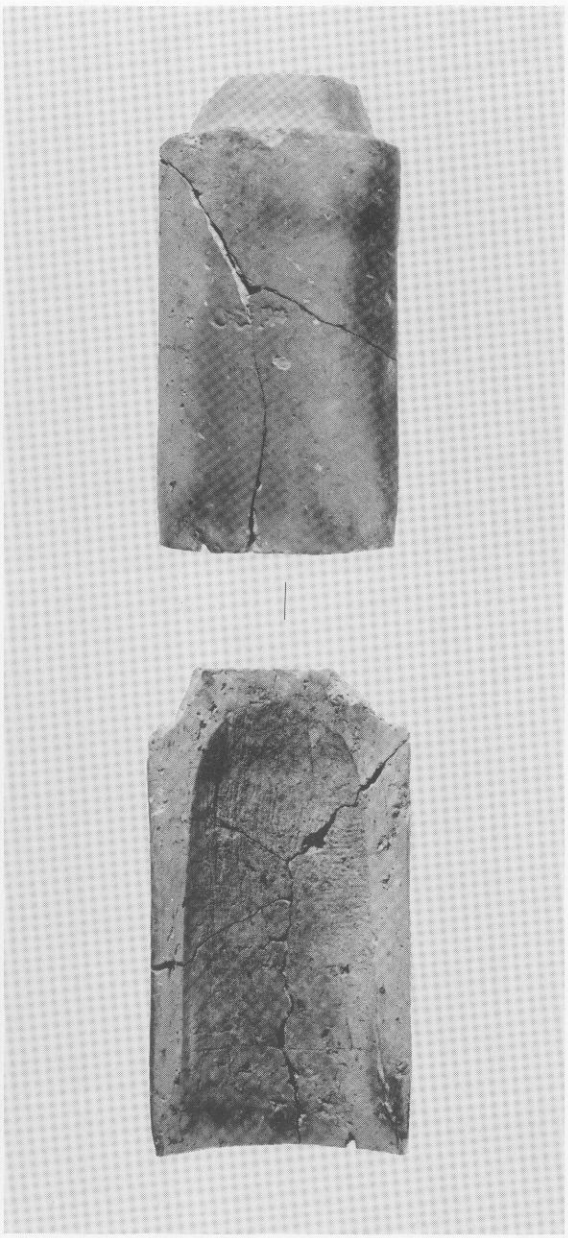


第163次調査　戒壇院出土文字瓦(2)〔挿図第29図〕

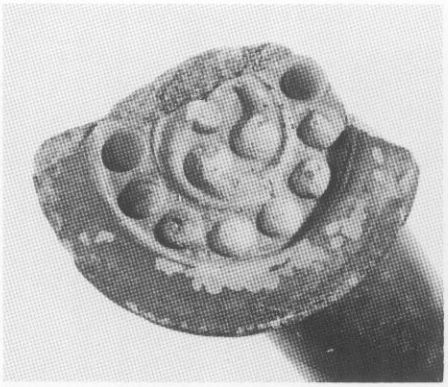






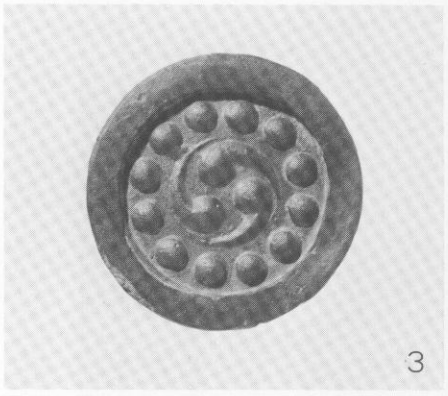


第163次調査　戒壇院出土文字瓦(3)・丸瓦〔２～４は挿図第32図、丸瓦は第30図〕

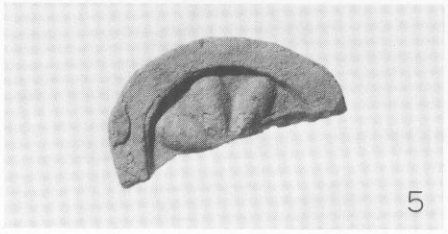


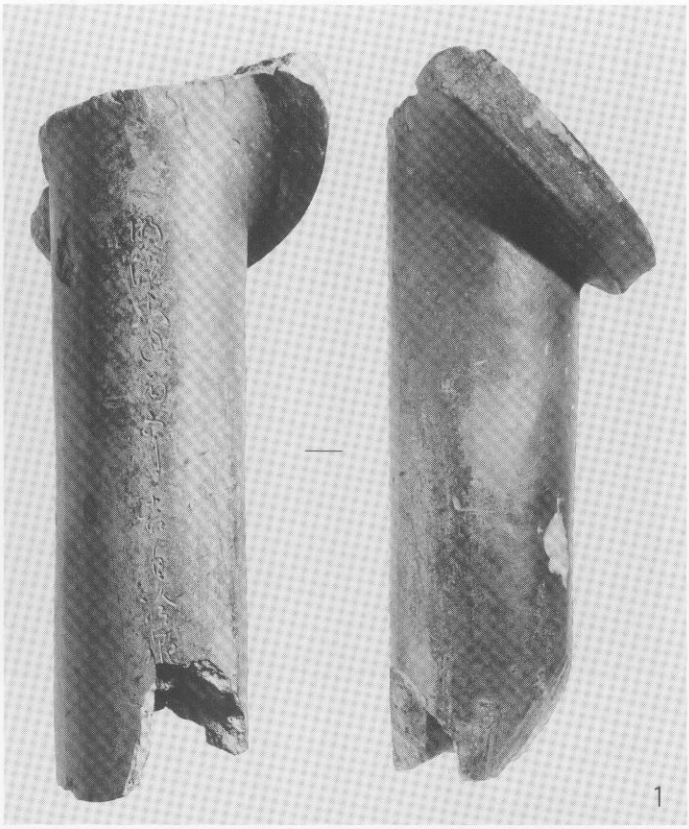


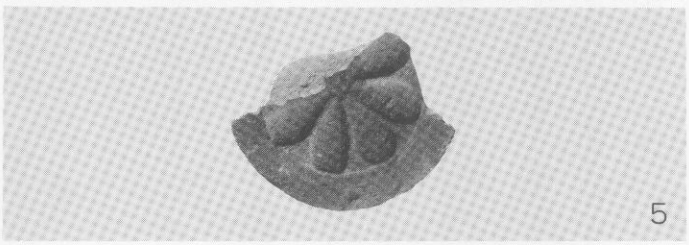
2

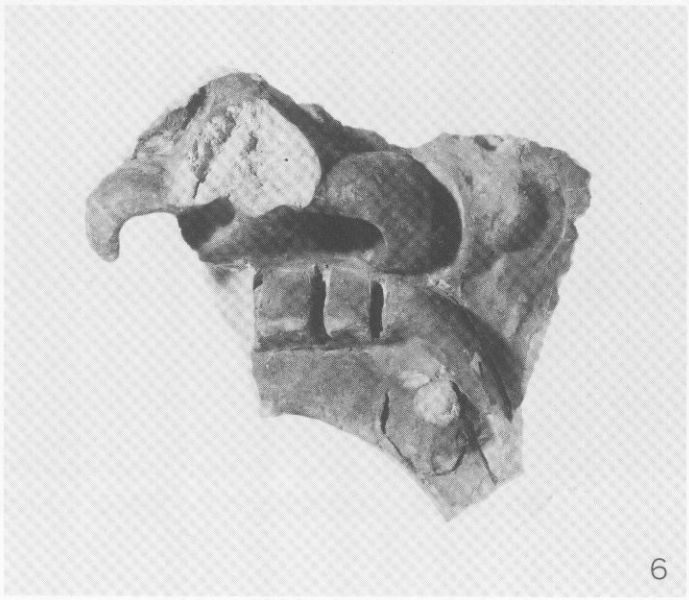

3


4

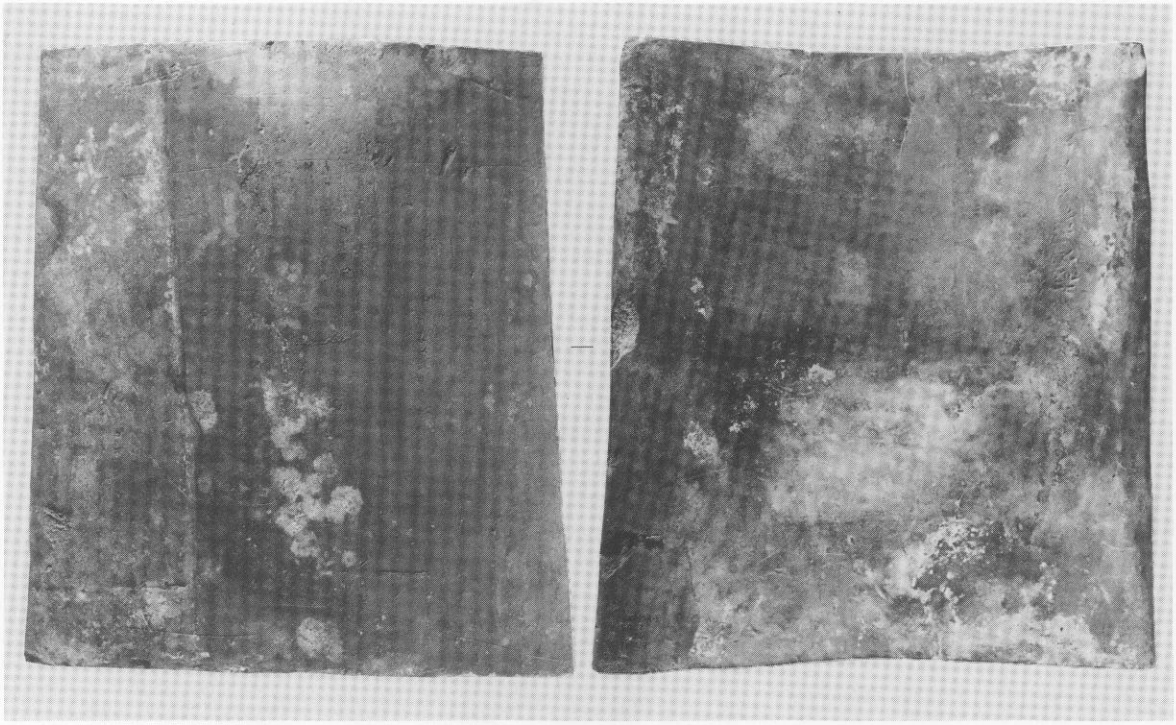

5

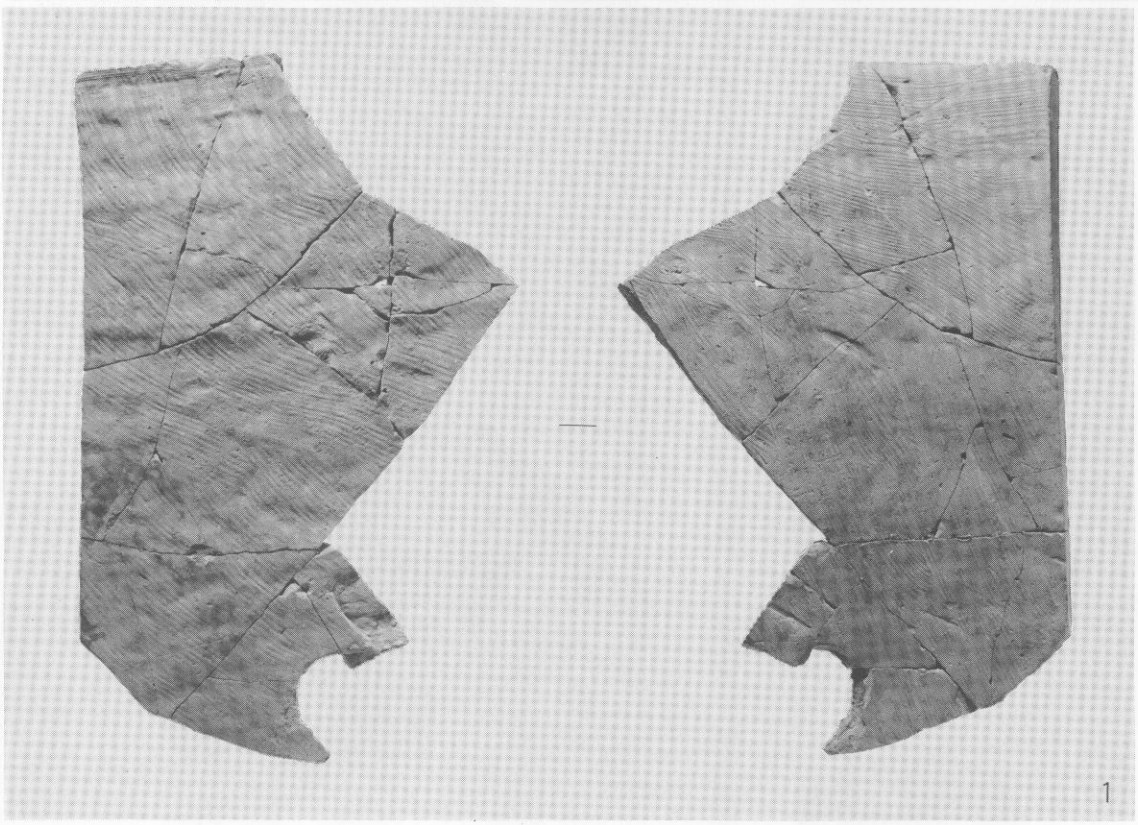

1


5

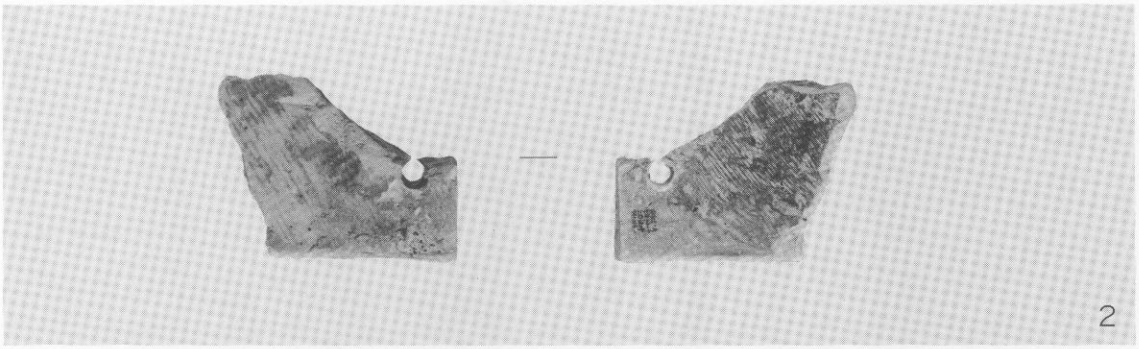

6

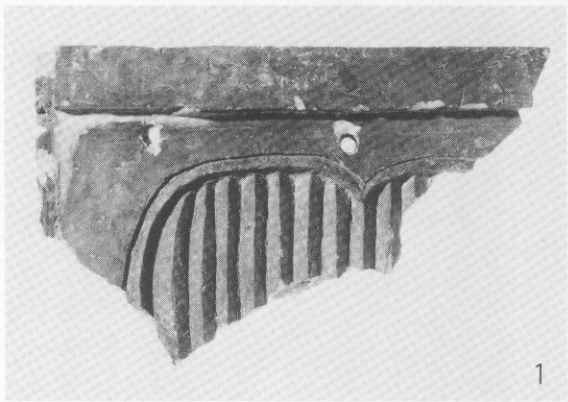
第163次調査　戒壇院出土道具瓦〔挿図第33図〕



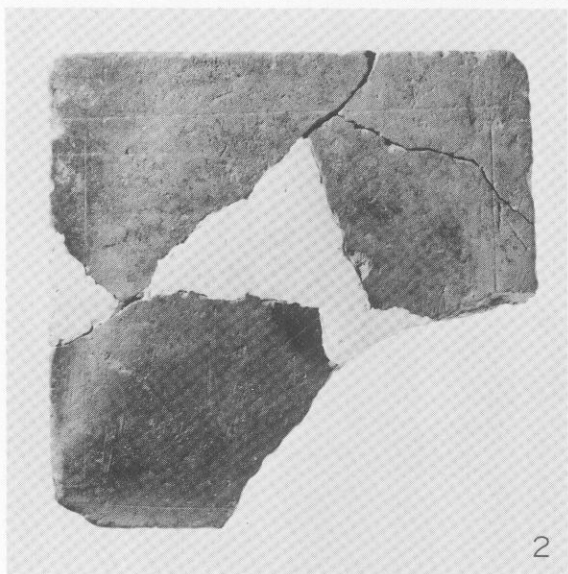


第163次調査　戒壇院出土平瓦・雁振瓦〔上は挿図第31図、１は第34図〕

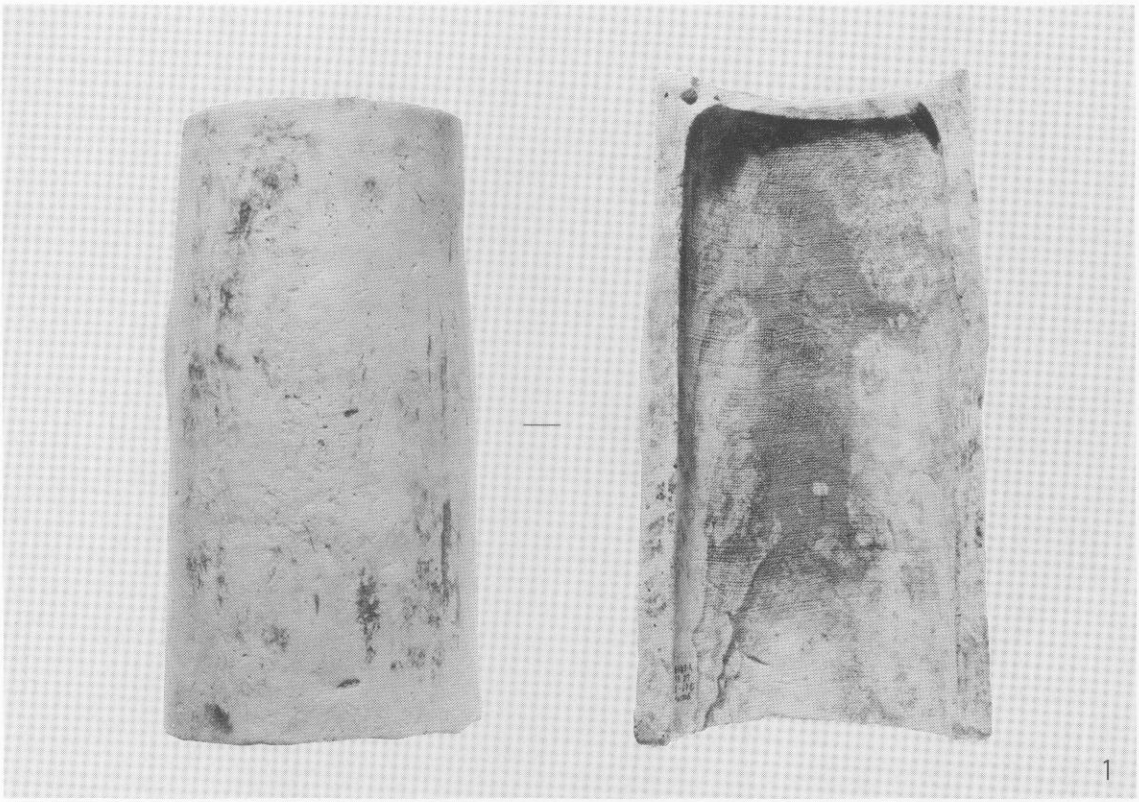






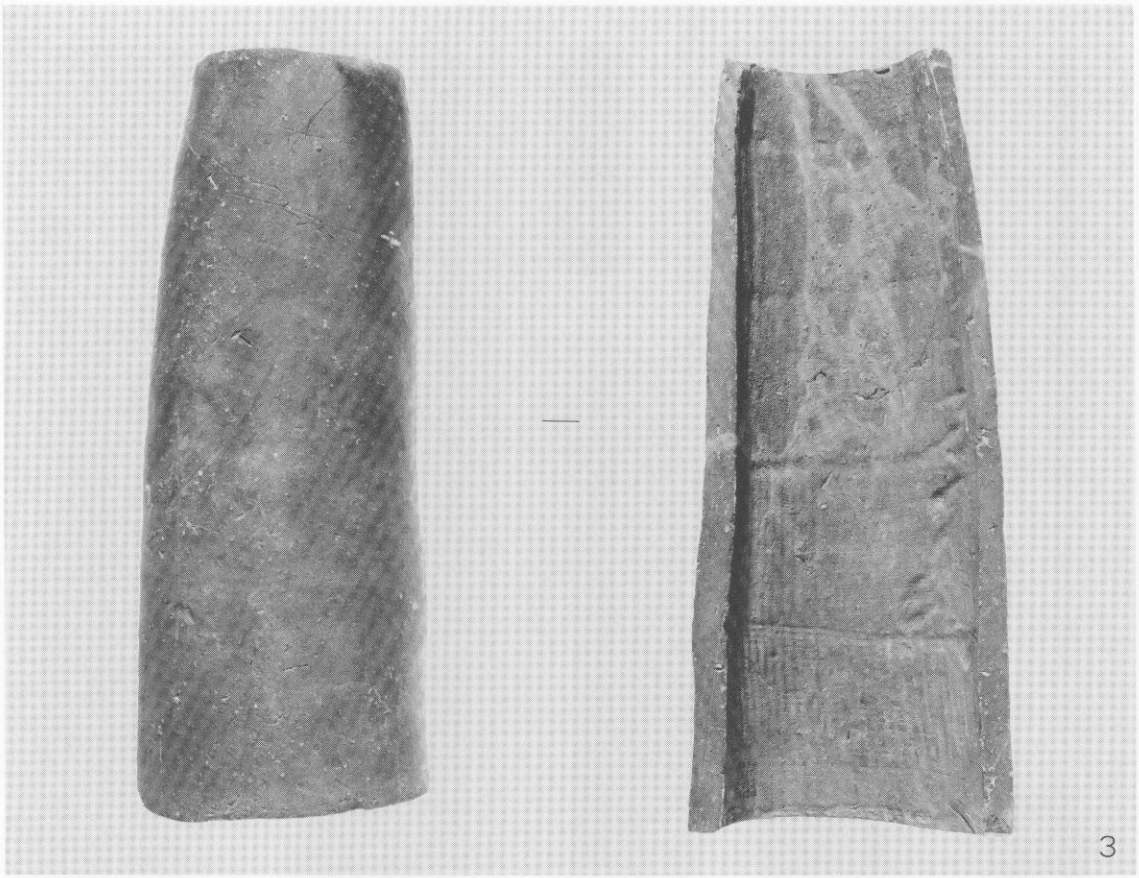


第163次調査　戒壇院出土雁振瓦・伏盤・塼・土管
〔２は挿図第34図、１・２は第35図、右下は第19図〕

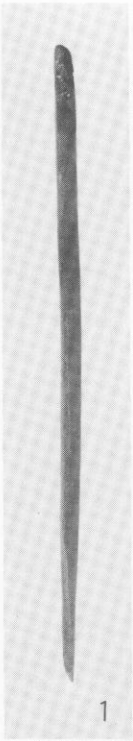


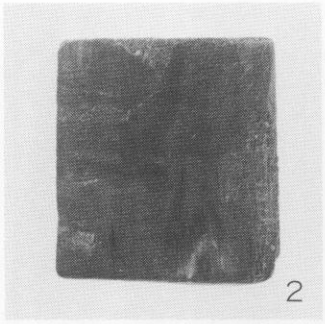


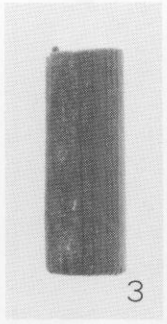
第163次調査　暗渠遺構 SX4191使用丸瓦(1)〔1は挿図第36図〕

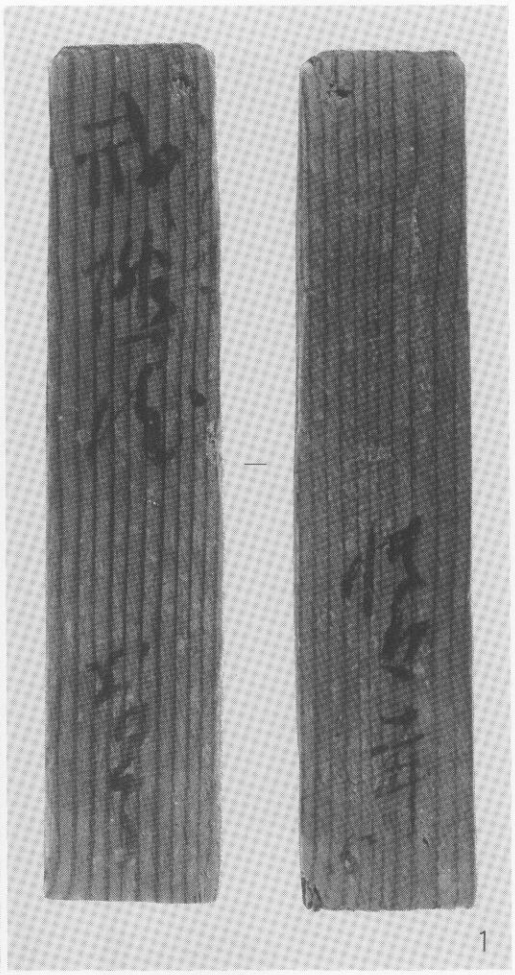


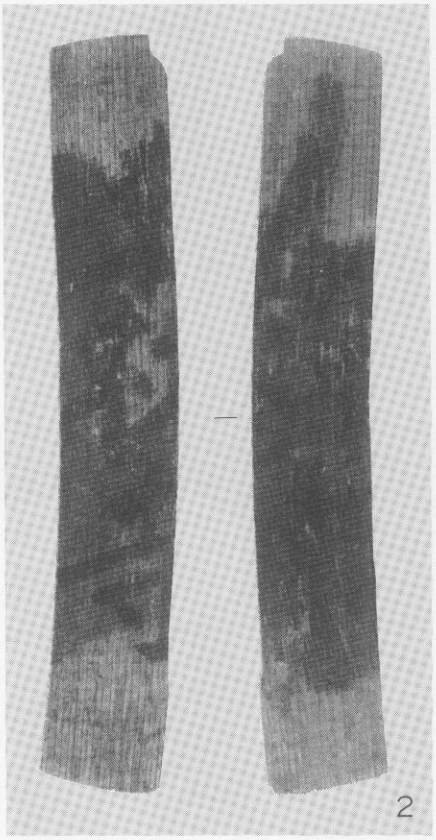
第163次調査　暗渠遺構 SX4191使用丸瓦(2)〔３は挿図第37図、４は第38図〕

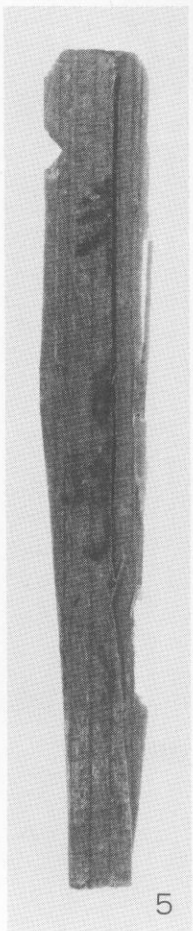

1

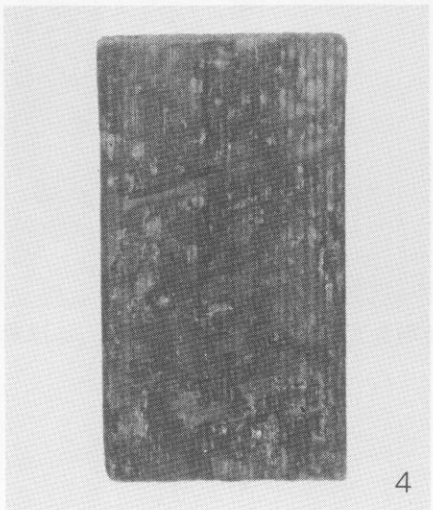

2

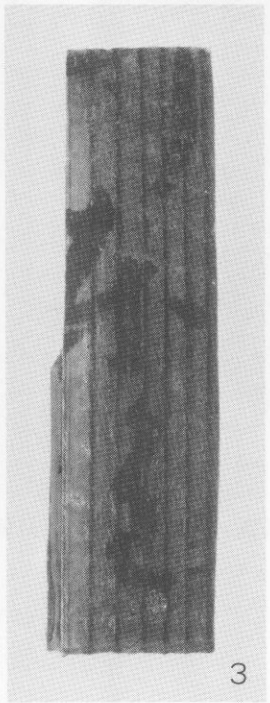

3


1

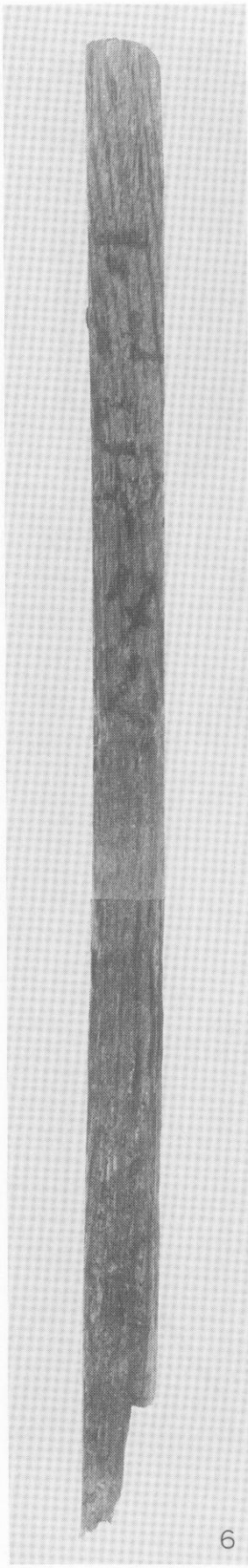

2

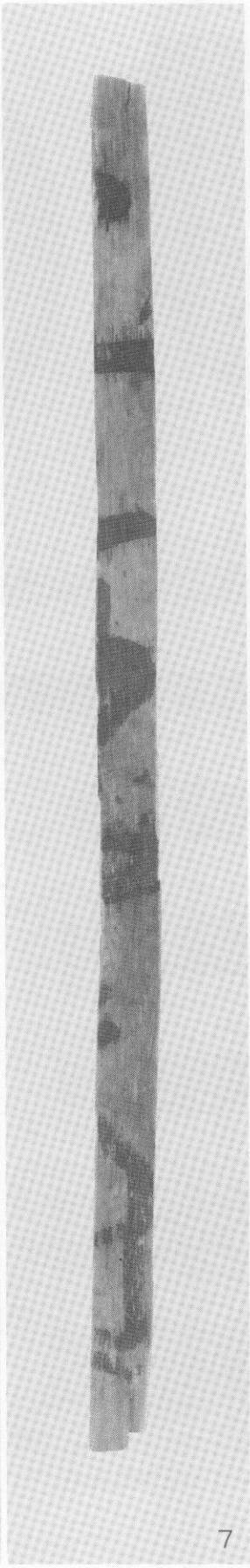

5

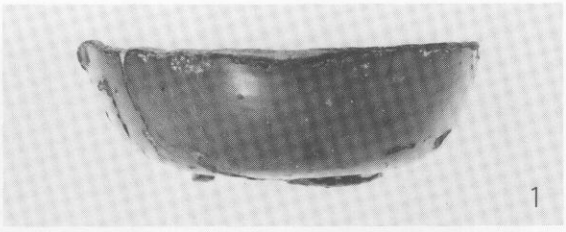

4

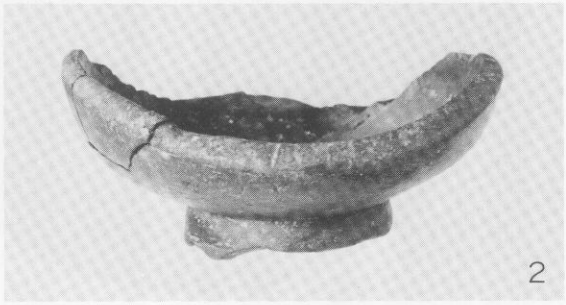

3

第163次調査　SD4186出土木製品、SE4195・SG4190出土墨書木札

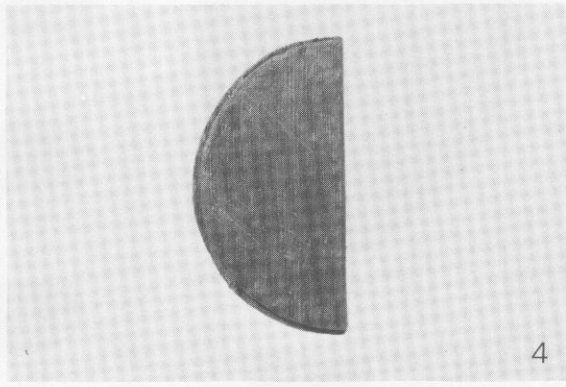

6

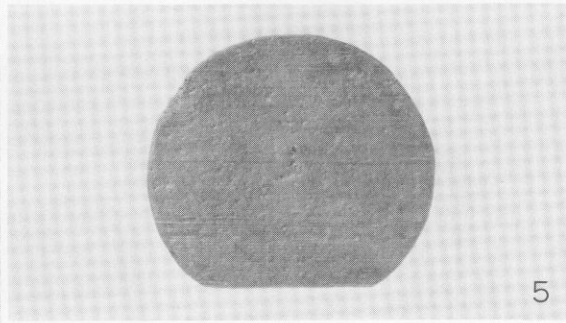

7


1

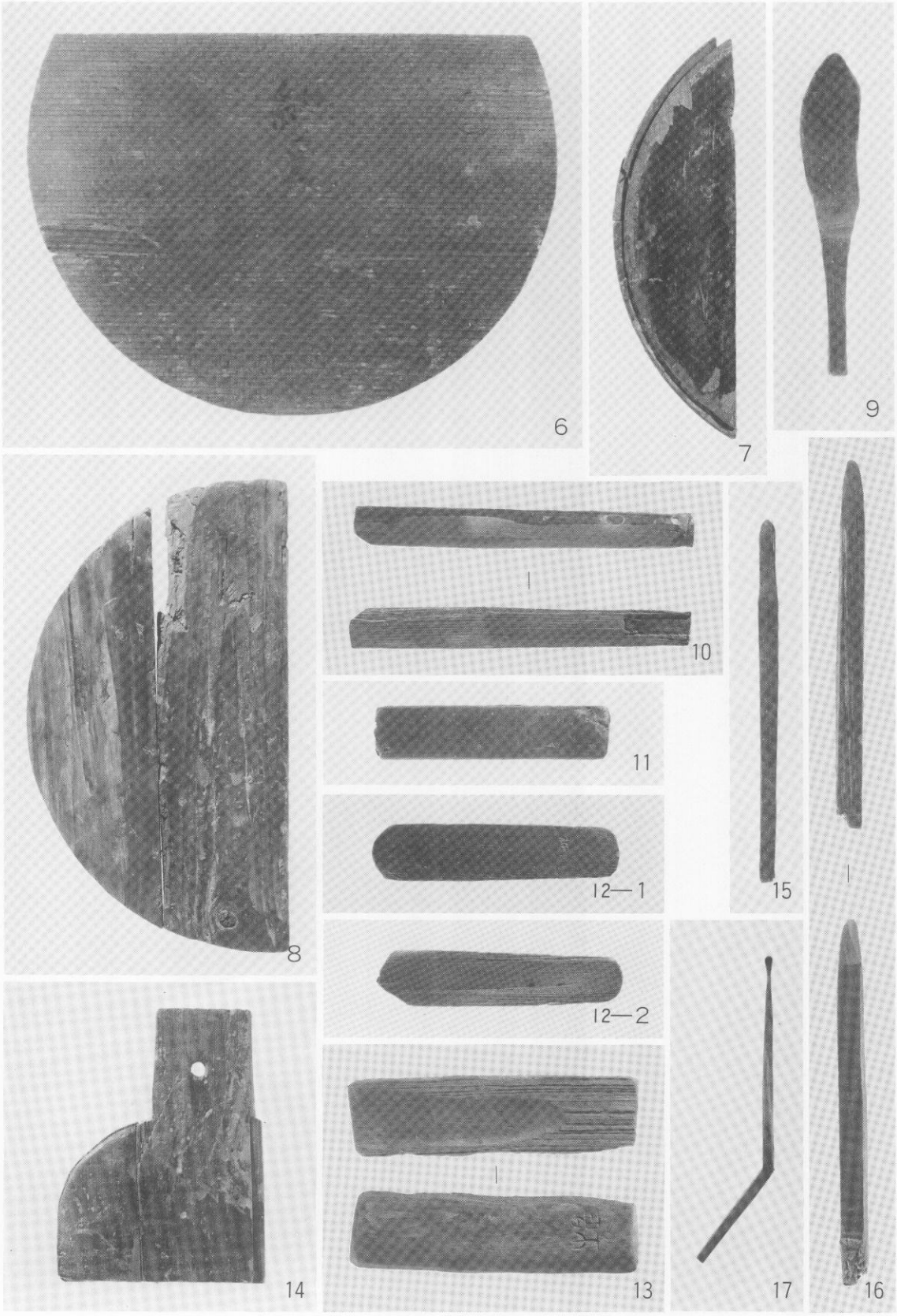

2


3

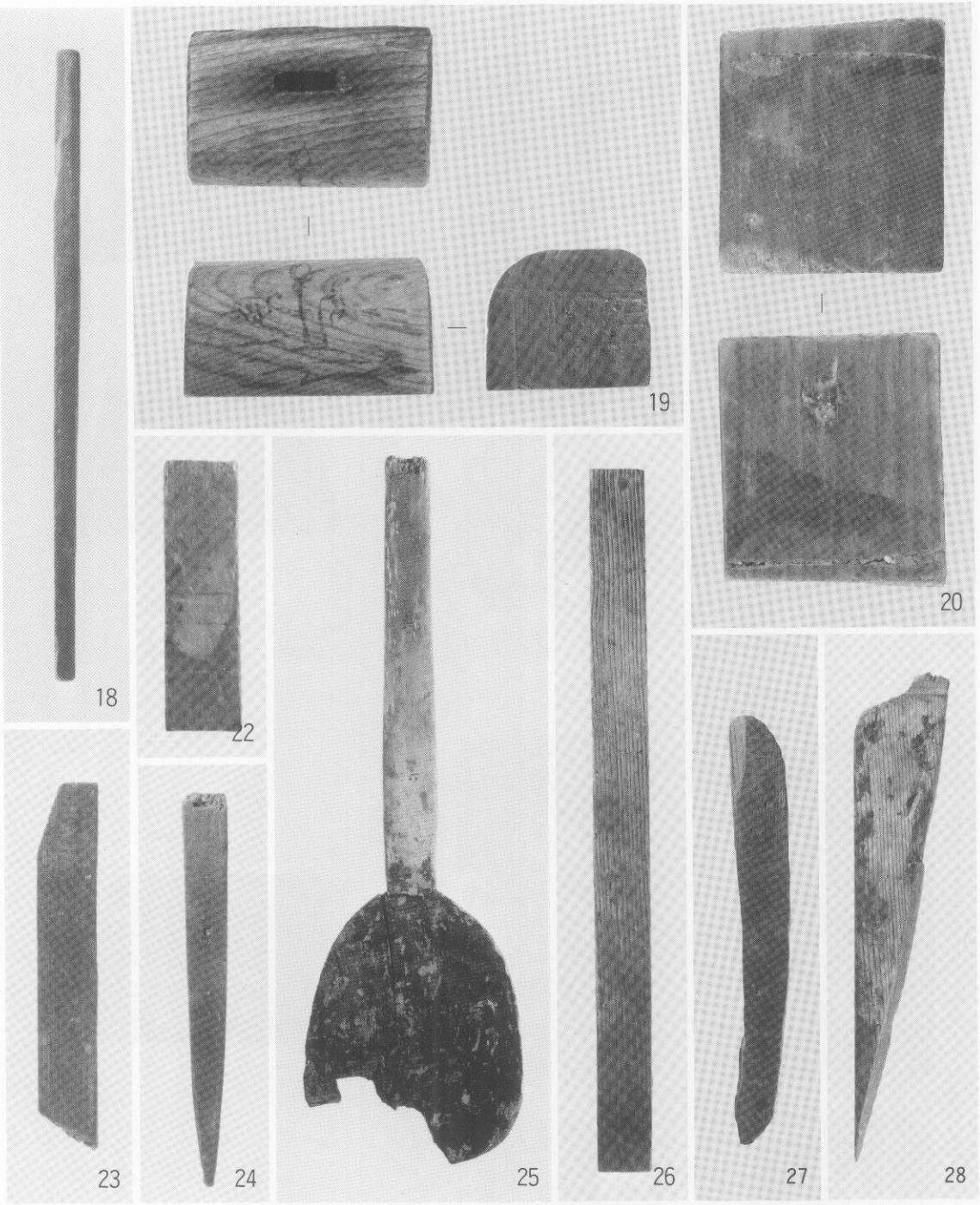

4


5

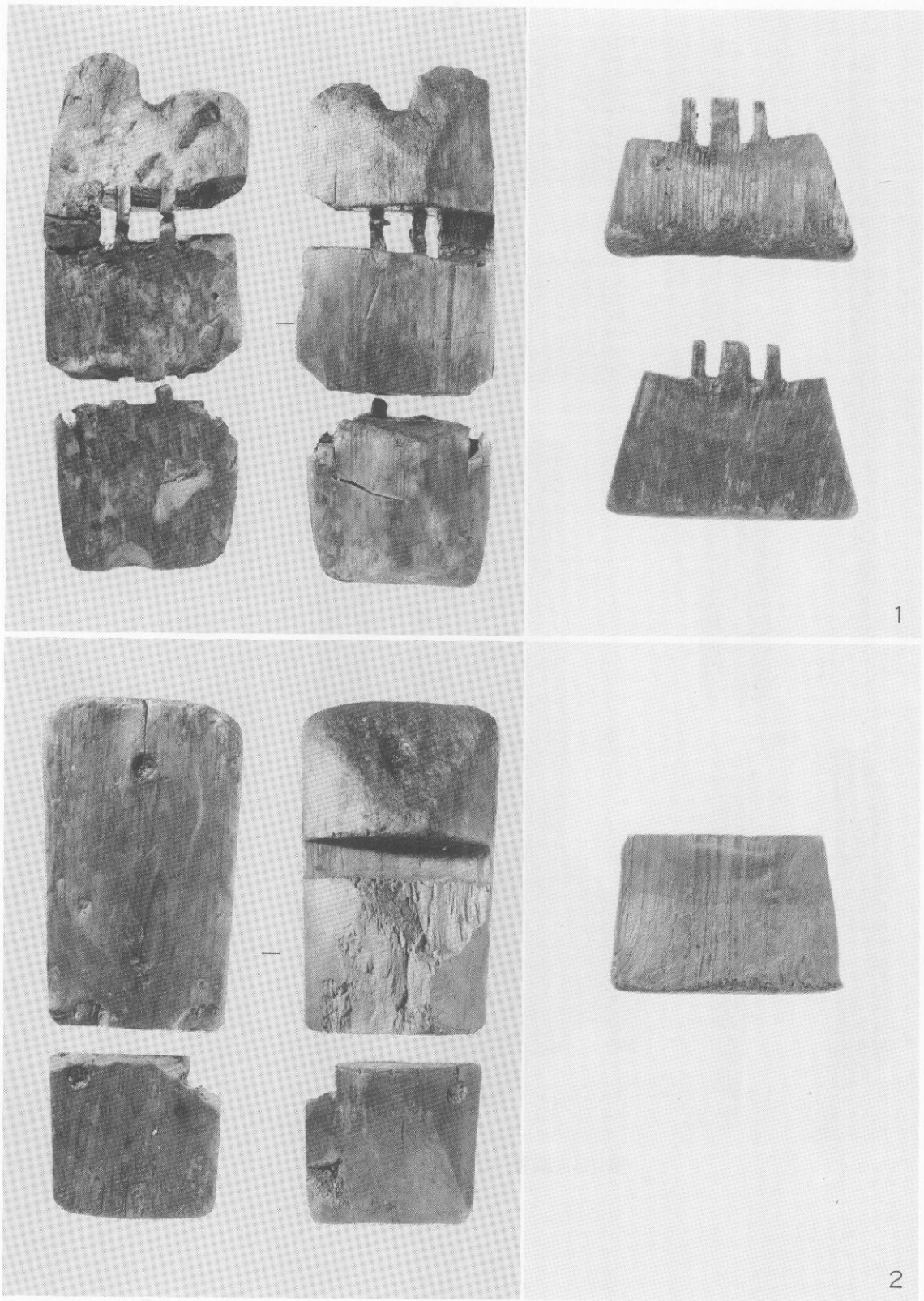
第163次調査
SG4190出土墨書木札・木製品(1)



第163次調査　SG4190出土木製品(2)



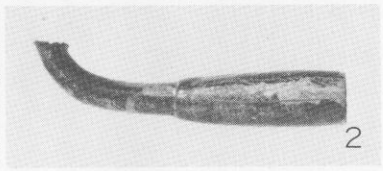
第163次調査　SG4190出土木製品(3)

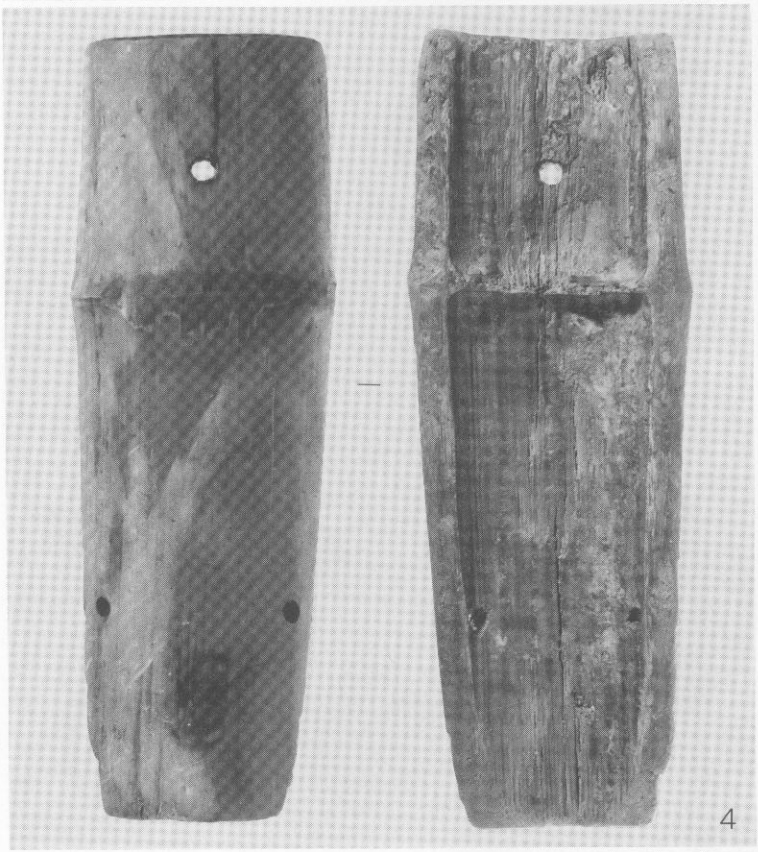


第163次調査　SG4190出土下駄(1)

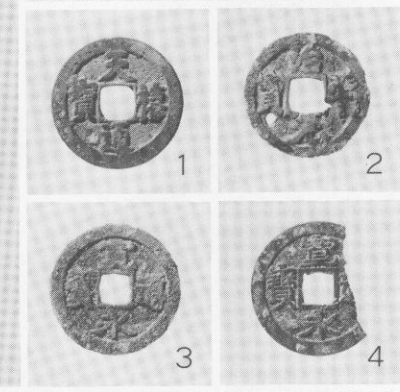

3

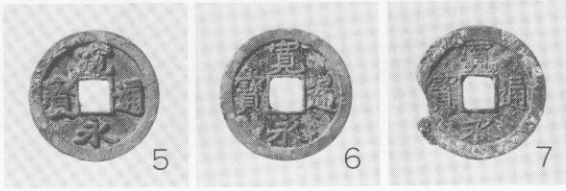

1


2

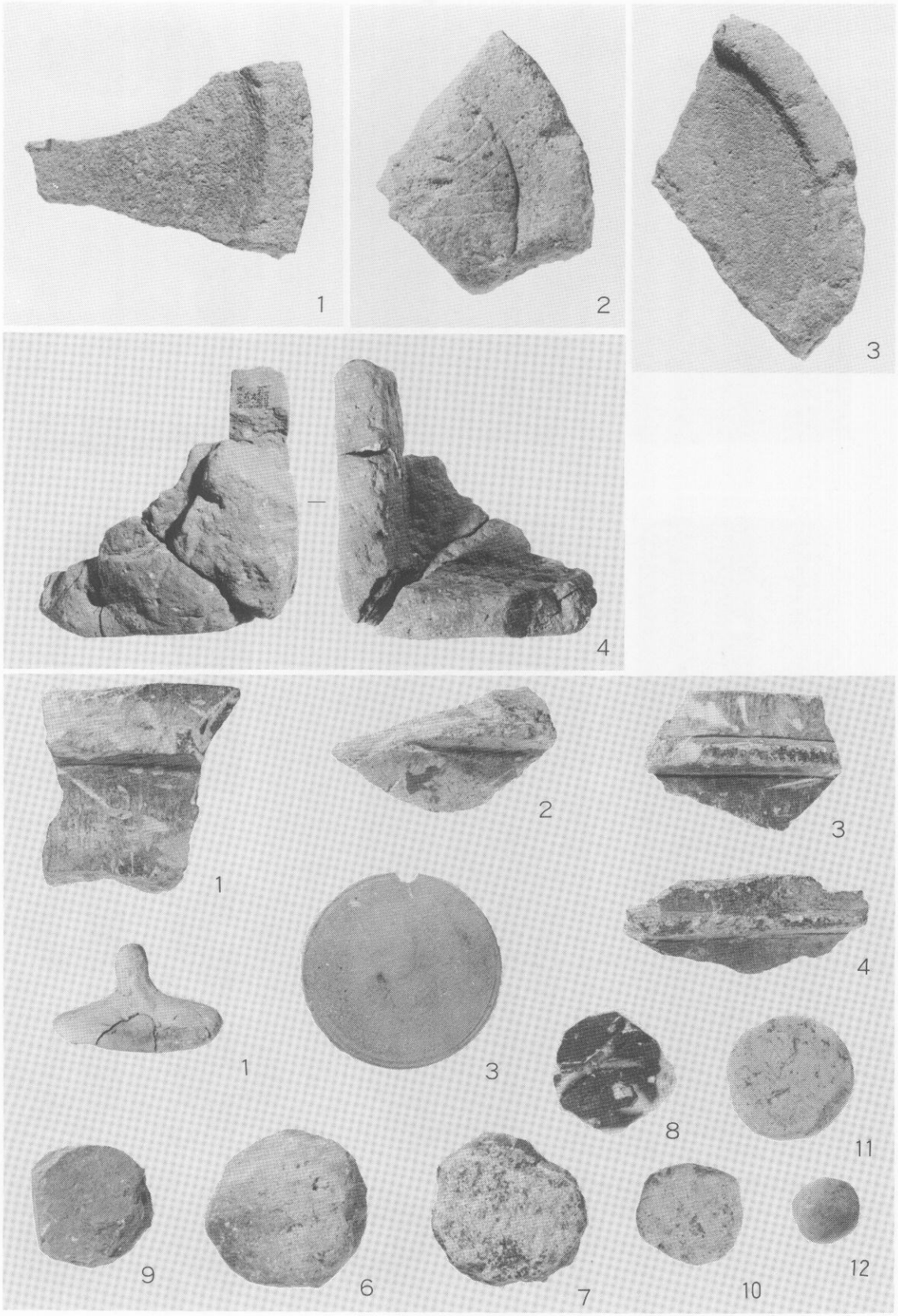

4


3　4

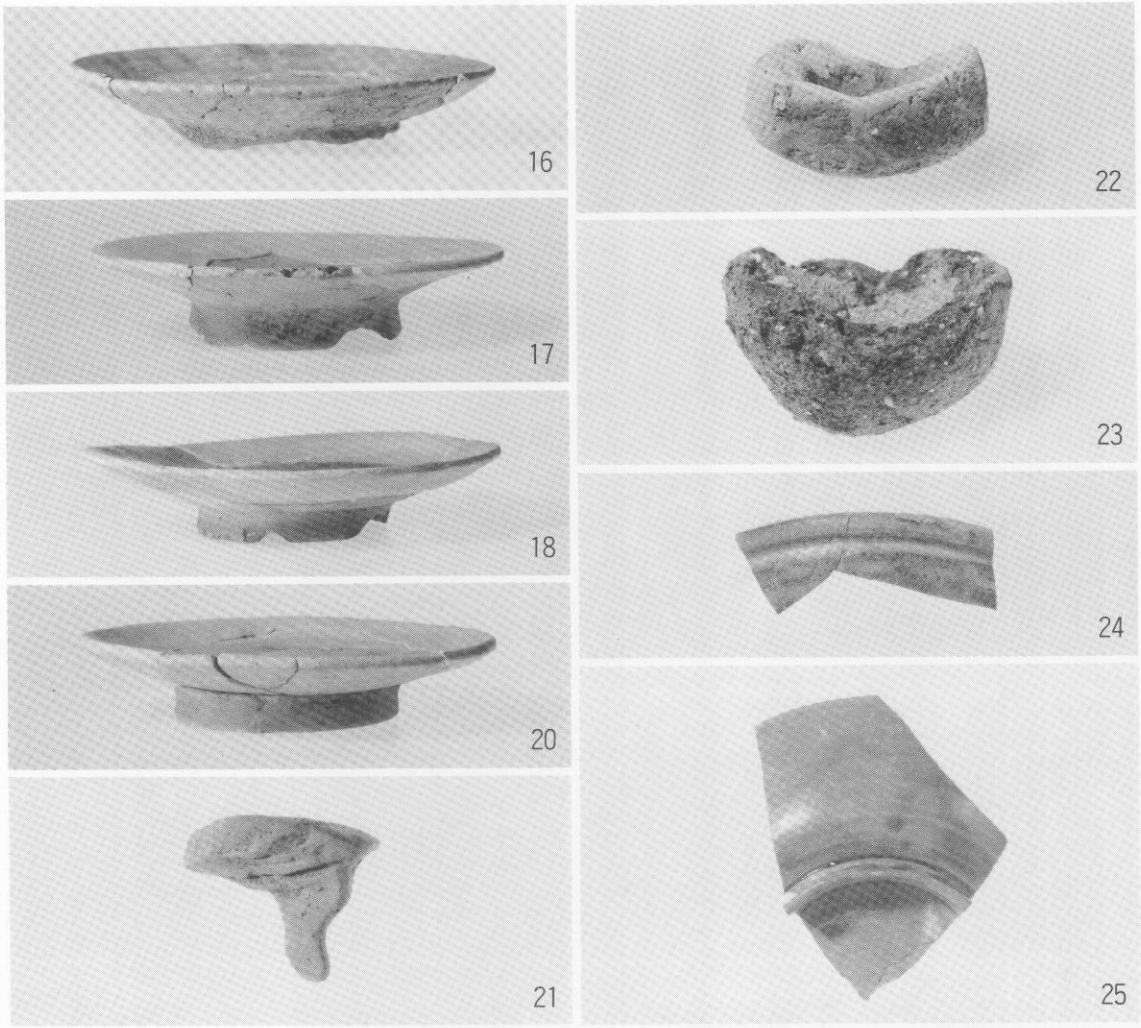

1　2　3　4


5　6　7

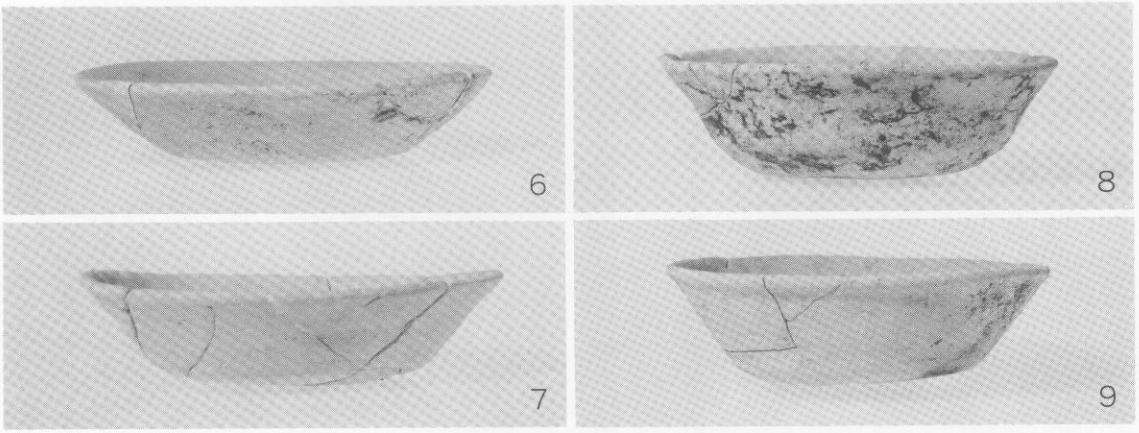
第163次調査　SG4190出土下駄(2)、
金属製品・銅銭



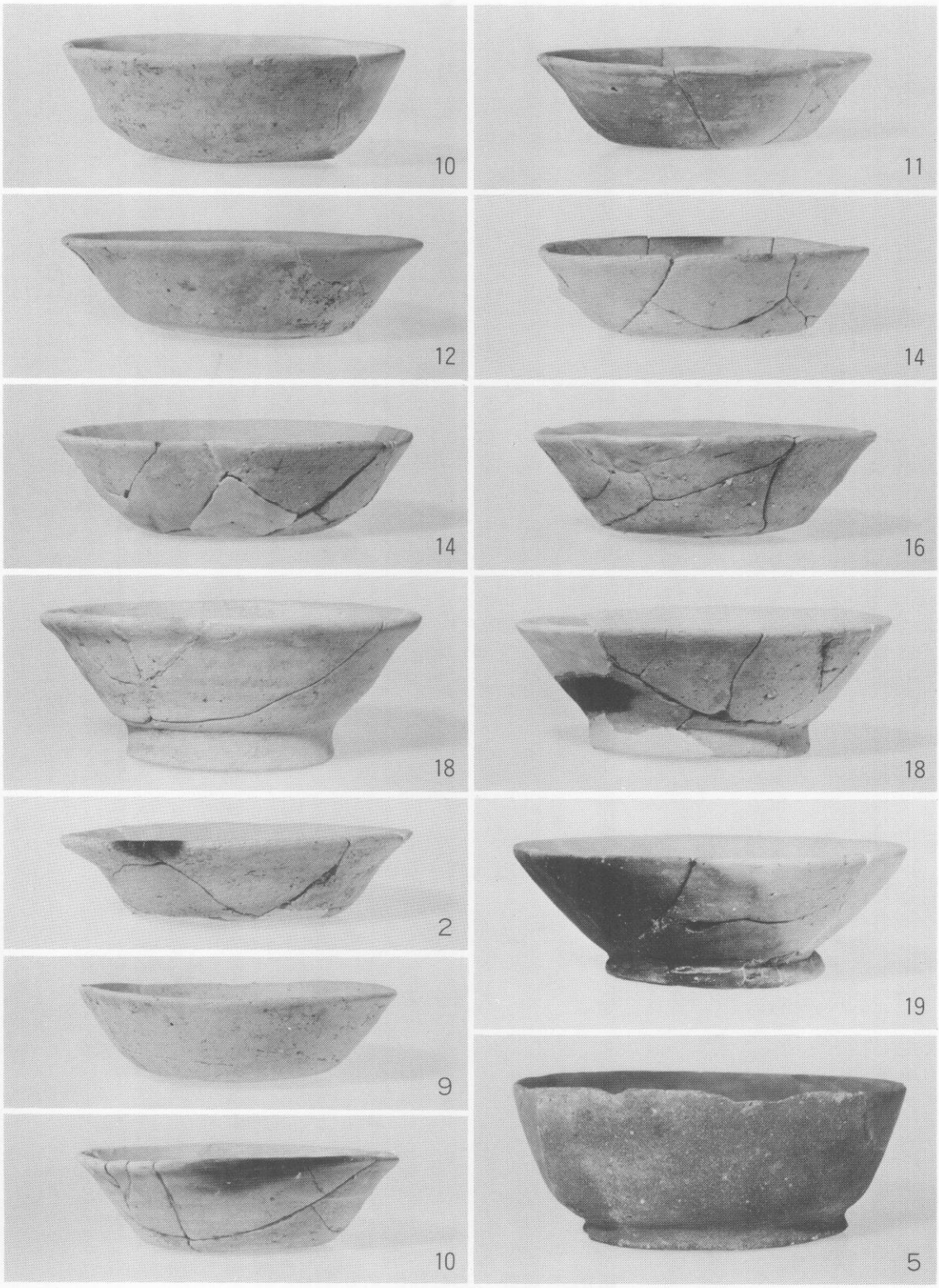
第163次調査　出土石製品・土製品



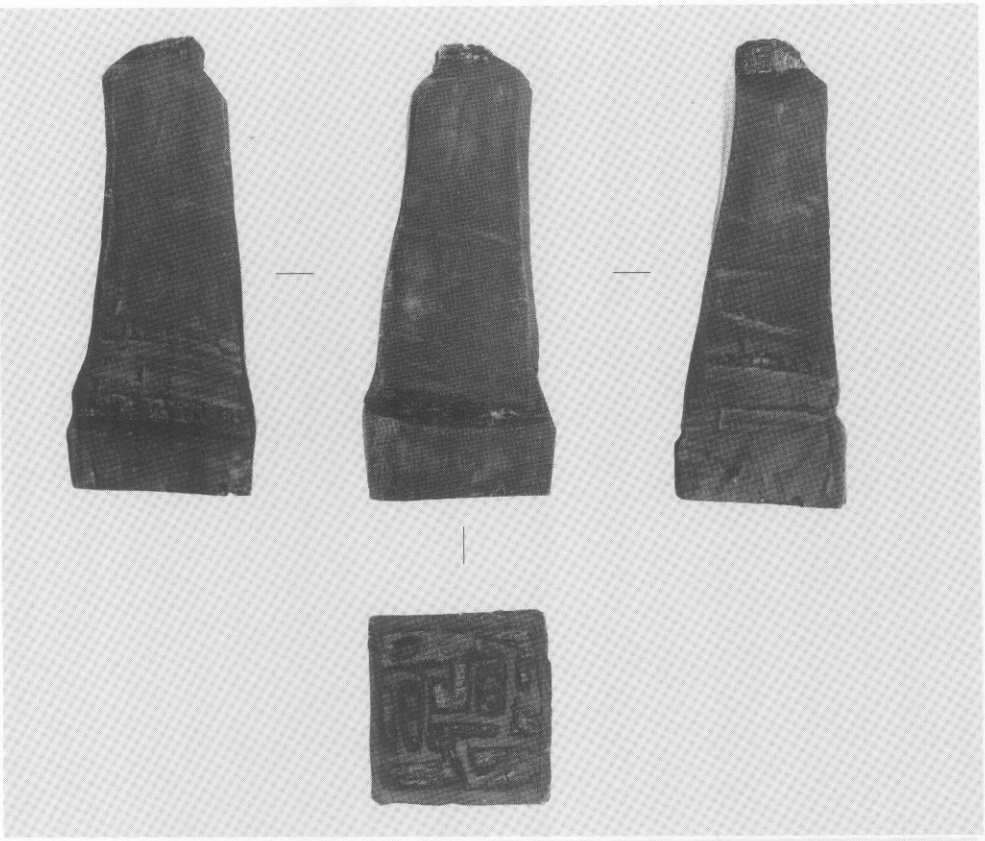
第165次調査　出土土器・陶磁器・土製品



第166次調査　SD4210出土土器(1)



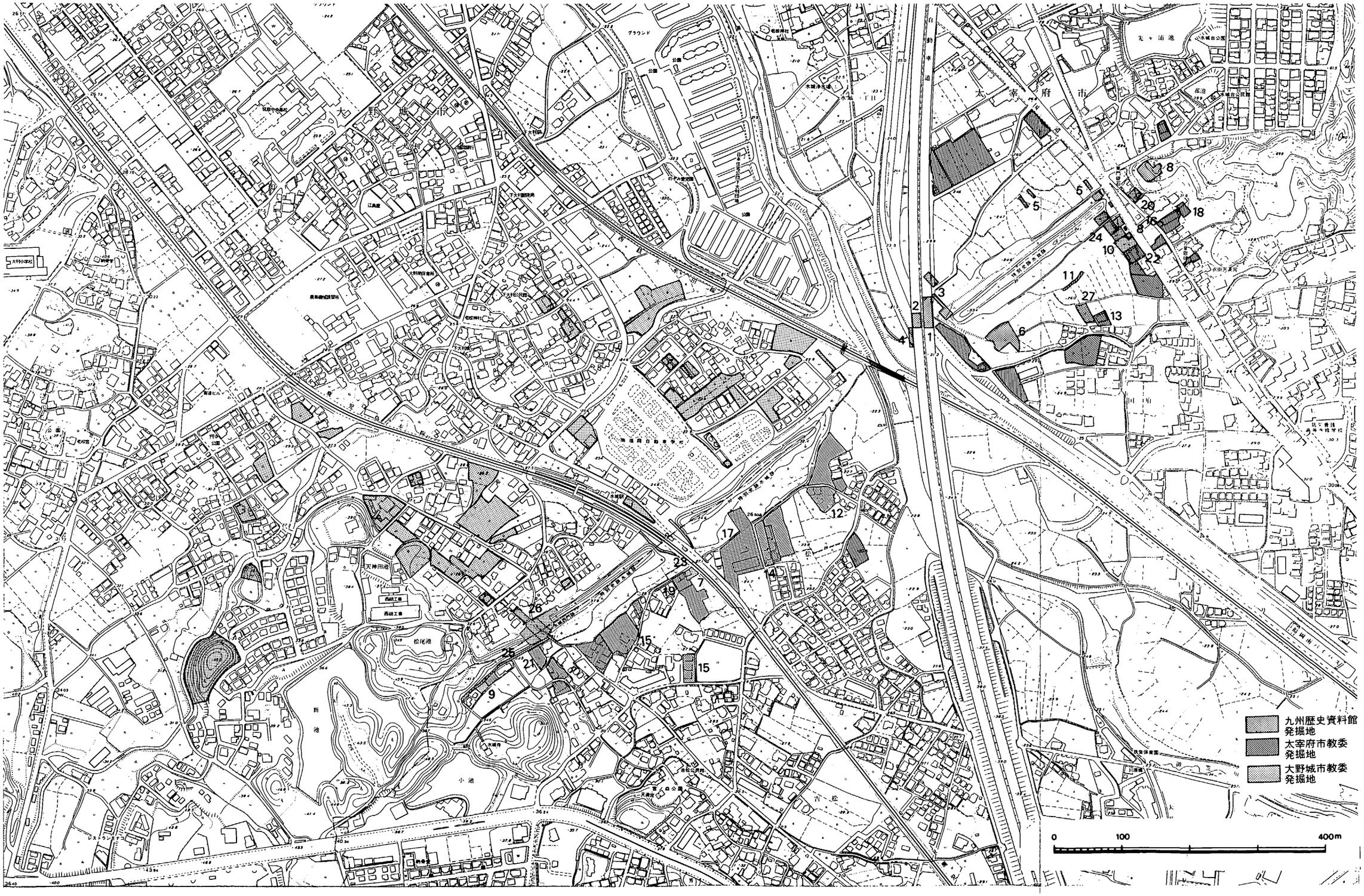
第166次調査　SD4210・4215、SX4205・4212出土土器



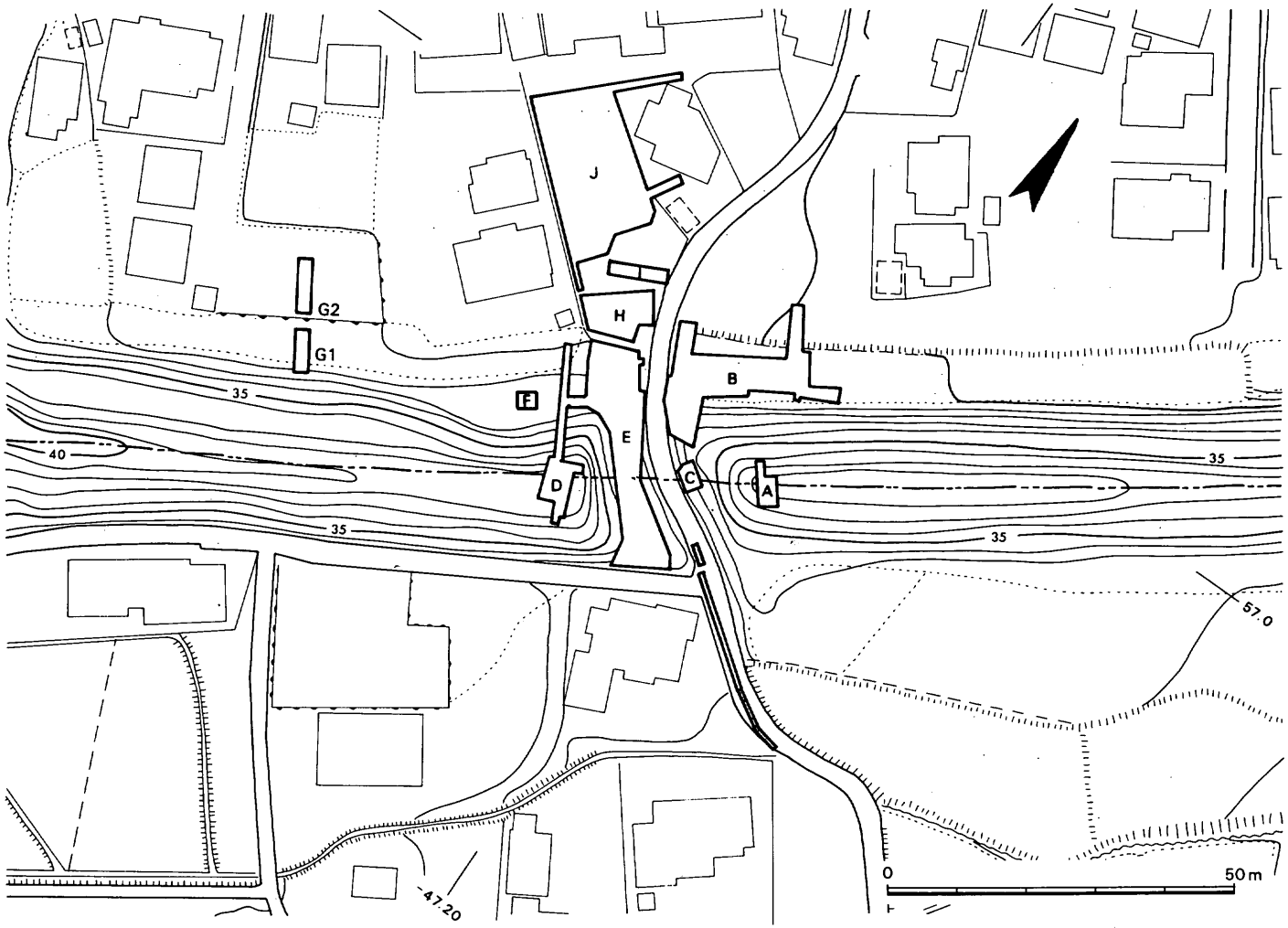


第170次調査　SE4290出土木印

水城跡の調査



第72図　水城跡発掘調査地域図



第73図　水城跡第26次調査トレンチ配置図

III　水城跡の発掘調査

1．第26次調査

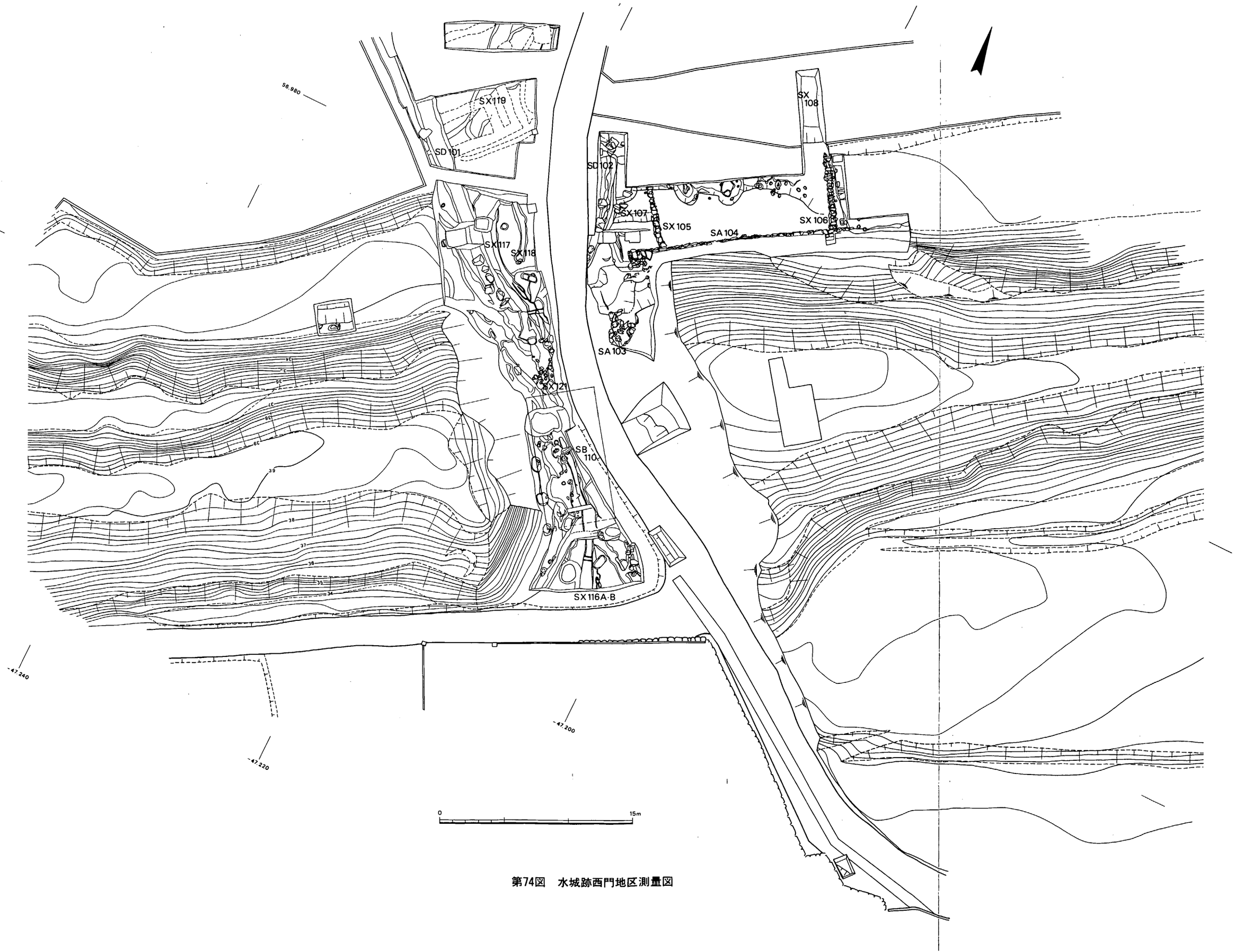
大宰府史跡発掘調査第５次５箇年計画は、特別史跡水城跡の諸施設の解明を調査目的として掲げた。初年度の平成５年度は、水城東門に関連する遺構の検出を目標として調査を行った。その結果、８世紀後半代と考えられる掘立柱建物２棟を検出した。また、大宰府側基底部の断ち割り調査において、土塁寄りの最下層には樹木の枝葉（粗朶）を敷いていることが確認され、水城の築堤工法に関する新たな知見が得られ、大きな成果を挙げることができた。

また、水城には東門（太宰府市大字国分の国道３号線側）と西門（太宰府市大字吉松の切通し部分）の二つの門があったことが、門礎石の発見により従来から知られていた。東門側は国道により大きく開削されているため、門遺構が良好な状態で遺存している可能性は期待できない。これとは反対に、西門跡推定地の切通し部分には幅３mの市道が通る程度であり、東門側に比較して門遺構が遺存している可能性が高いと考えられた。以上のことから、次年度の平成６年度は大字吉松の西門跡切通し部分における門遺構の検出を調査目標とした。

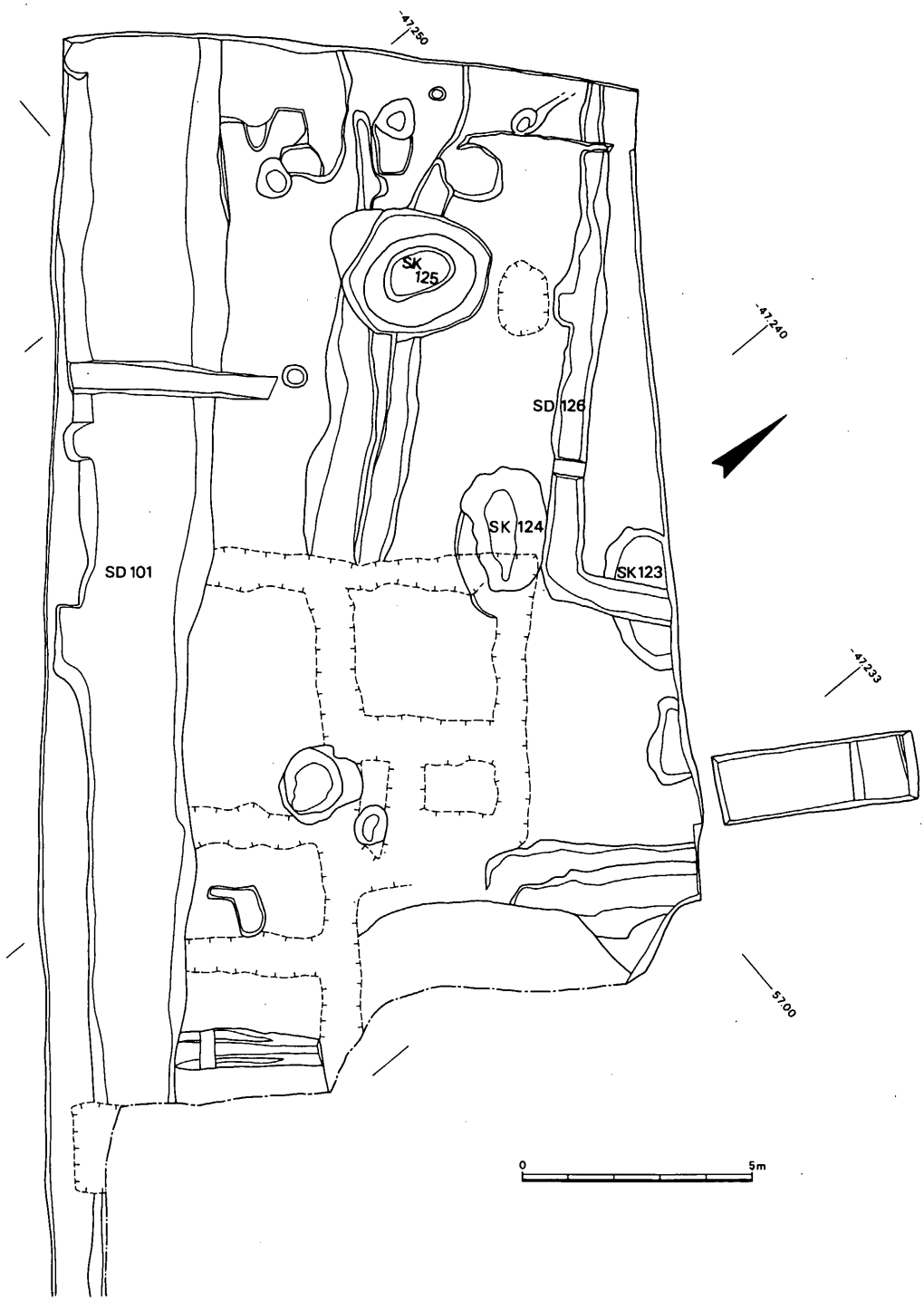
平成６年４月18日に調査地に機材を搬入し、翌日は樹木を伐採し表土剝ぎの下準備を行った。調査区の南側から表土除去を人力で行いながら並行して遺構検出を行ったが、思ったよりも攪乱・削平が著しく、調査区（Ｅトレンチ）南半分の市道側は、道路面まで攪乱が及んでいることが明らかとなった。Ｂトレンチでは土塁東壁面の石垣、基底部石列の一部と官道の東側溝を検出し、Ｅトレンチでは石敷溝数条と官道の西側溝を検出した。石敷溝は検出当初、古代官道の側溝と考えていた遺構で、官道幅をつかむため市道東側に調査区（Ｃトレンチ）を設定し掘り下げたが、路面レベルまで攪乱されており、対になる遺構は検出できなかった。７月中旬に調査は一段落し、実測にかかった。８月初頭に石敷遺構を埋め戻し、６年度の調査を終了した。

平成６年の指導委員会では、思った以上の成果が得られていないことから次年度も西門地区の調査を継続すべきであるとの委員の意見が大勢を占め、平成７年度も西門跡の調査を継続して行うことになった。７年度は門建物・基底部石列・官道・外濠などの関連諸施設の解明を目標として調査に臨んだ。また今回は、調査と並行して西門跡周辺の測量調査も行った。その結果、幅３mの土塁頂部が門側に向かって幅12mと広くなっていること、土塁は博多側に幅３mのテラスを有すること、上成土塁は太宰府側に張出し部を有することなどが判明した。

発掘調査は先年度のＥトレンチから開始した。先ず、西側土塁裾部において柱掘形４個を検出し、門建物が遺存していることが明らかになった。Ｂトレンチでは基底部石列が長さ17.5mで、２箇所に暗渠を付設していることが判明した。また、水城の博多側には土塁に平行して外濠が存在すると考えられていたが、Ｊトレンチの調査により門の前面には濠は存在せず、官道



第74図　水城跡西門地区測量図



第75図　水城跡第26次調査Ｊトレンチ遺構配置図

が貫いていることが確認され、濠は官道東側から始まると考えられた。平成７年の指導委員会では、今回の調査によりかなりの成果が上がってきているが、この際徹底的に調査を行うようにとの指導があり、土塁の断割りなどを行ったため調査は12月までずれ込んだ。しかし、土塁の断割り調査により、門付近は博多側土塁テラスを埋め戻し土塁の拡幅を行っていること、それは基底部石列に対応することが確認された。さらに、門建物の下層から８世紀代の土器・瓦片が出土したことにより門建物は８世紀の築造であることが明らかとなり、西側土塁の石垣及び石垣前面の溝は水城築造当初に遡る可能性が確実となった。

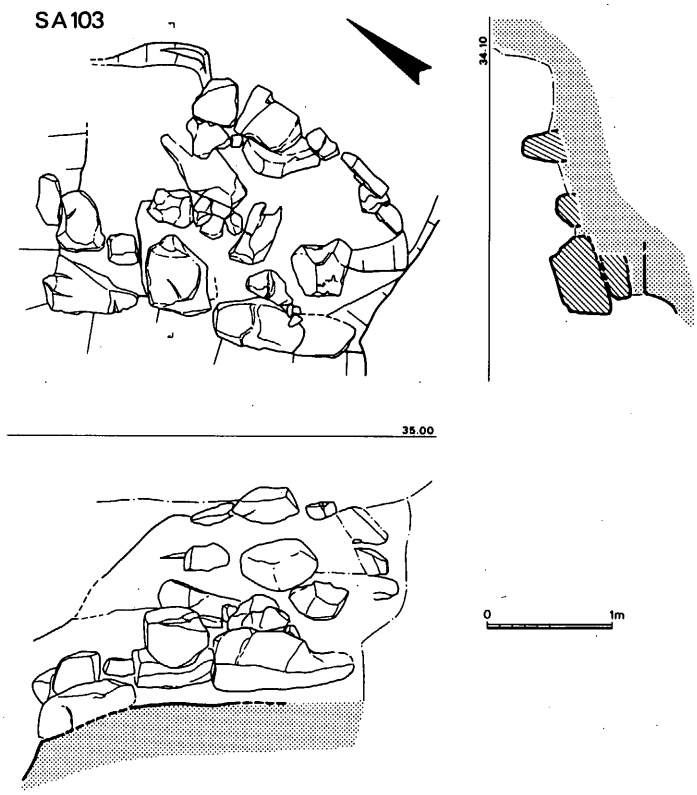
以上のように、平成７年度は多大な成果を挙げることができたが、水城築堤時に関わる石垣・溝に関しては次年度の調査に持ち越されることとなり、築堤時の遺構及び経塚に関しては８年度の概報で報告することとする。調査地番は太宰府市大字吉松字星ヶ浦447－１他、大野城市下大利２－１他で、調査面積は770㎡である。

検出遺構

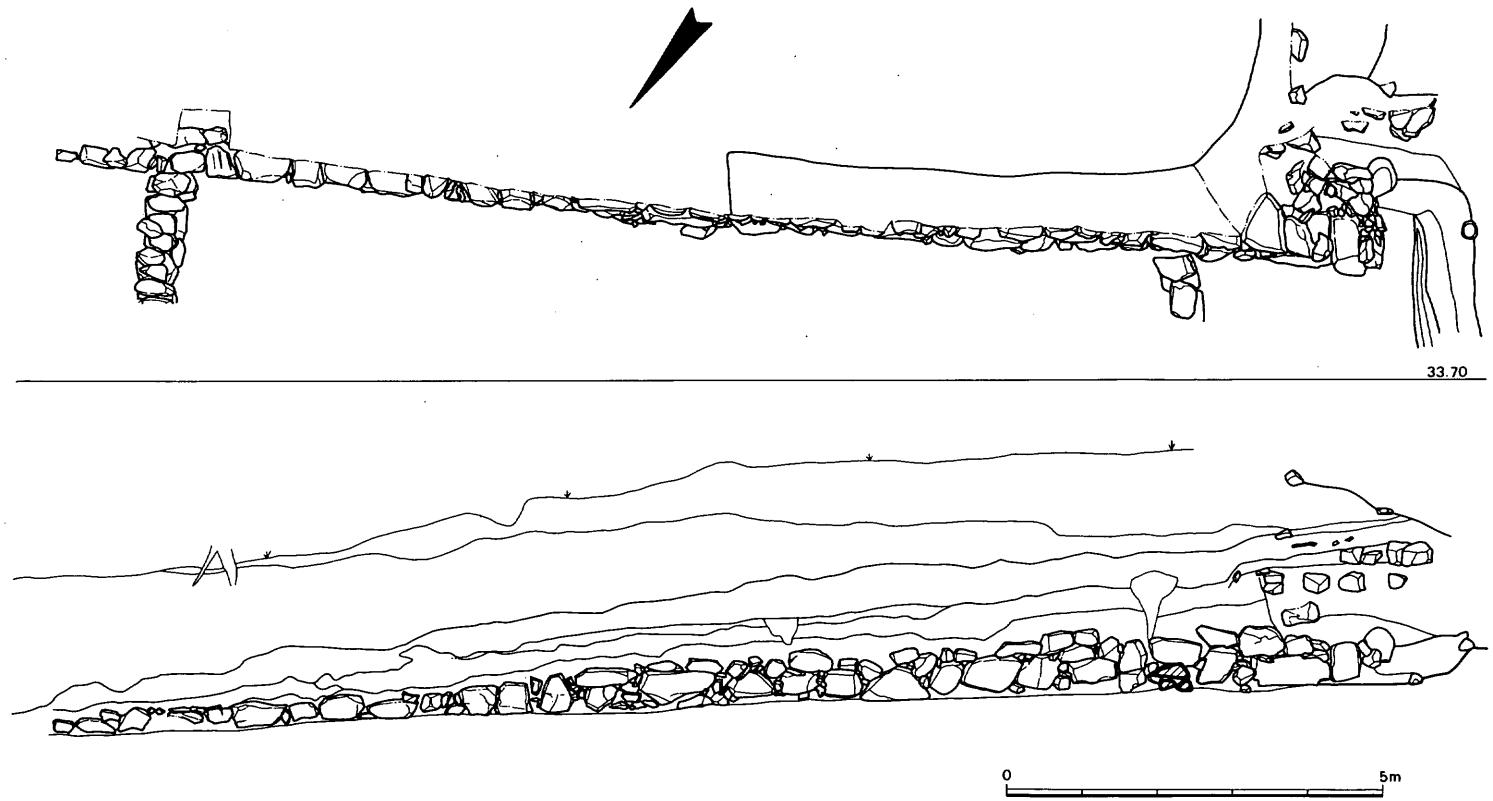
本次調査で検出した遺構には、門建物・土塁石垣・基底部石列・暗渠・外濠・官道の側溝及び石敷溝・方形溝・土壙・経塚・ピットなどがある。遺構の説明にあたっては、博多側を上にして東土塁・西土塁、土塁右壁面（Ｃトレンチ）・土塁左壁面（Ｅトレンチ）、官道西側溝・東側溝と記す。

石垣

SA103　Ｂトレンチ南東端で検出した土塁右壁面の石垣で、門建物に対してハ字形に開く。長さ60～110cmの割合大きな花崗岩切石を積んでおり、３列・２段分遺存する。最北端の石は地山に直接乗せており、標高32.6mの高さにある。



第76図　石垣ＳＡ103実測図



第77図　基底部石列ＳＡ104実測図

SA115A　Eトレンチ中央南側の西土塁コーナー部で検出した。8世紀の積土下層で検出された門建物の左壁面角部の石垣で、門建物に対してハ字形に開く。40～80cm大の花崗岩切石を積んでいるが、神籠石の水門の石垣に比較して石積みは雑である。現状で6段遺存する。

SA115B　SA115Aを埋めた後、その前面に築く。40～60cm程の花崗岩を平積みしており、2段・長さ3m分遺存する。積石の表面が焼けているものがあり、露出していた可能性が高い。

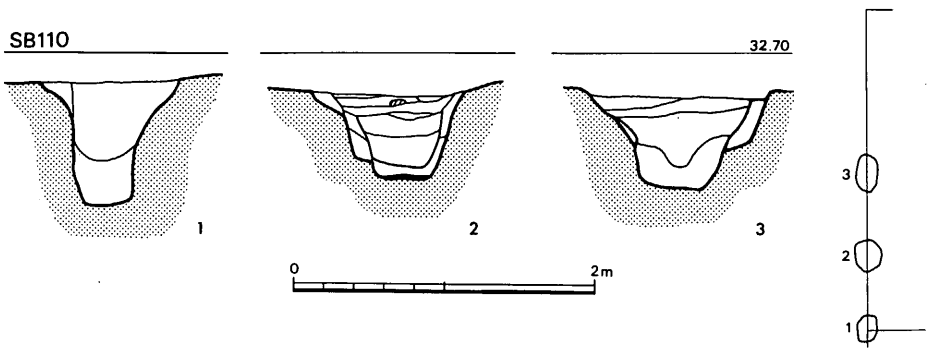
石列

SA104　東土塁博多側基底部で検出した。40～100cmの花崗岩の切石を長さ17.5mに渡り平積みしており、西端部で2段、東端部では1段数える。積みは粗雑で、基部に大きめの石を積み、隙間を小石で充填している。石列のレベルは西端部が29.7mで、東端部は29.0mで、両端部では0.7mの比高差がある。当石列を埋める積土には縄目叩きを有する平瓦が含まれており、門建物改築に伴うものと判明した。また、石列と直交させて暗渠SX105・106を付設している。林教授によると、石列は土塁のカウンターウェイトとしての機能を持つとされる。

門建物

SB110　Eトレンチ東側の土塁裾部で検出した。南側柱掘形4個を残す程度であるが、柱列に直交する形で土塁に入れたトレンチにより西土塁側奥には柱穴が存在しないことが確認され、一間一戸（柱間2.7m）の四脚門をベースとし、東側に控柱穴を有することから楼門形式に復原できる。また、北側柱列は削平により遺存しないが、柱穴レベルと石垣SA103とは同レベルにあり、それよりは拡がらないことが考えられるので控柱を含めた復原長は10.4mで、幅は柱間2間分の5.4mに復原した。土塁に対しては縦長となる。桁行方位は西側に35°30′振っている。

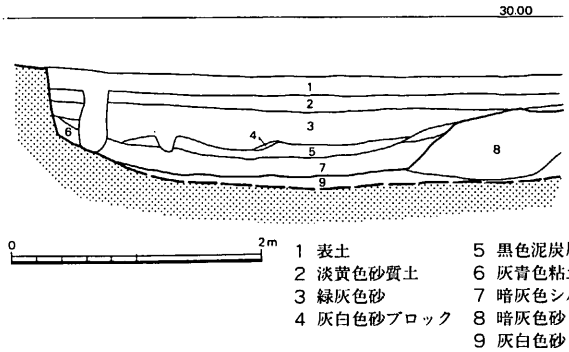
また、検出時は築造当初の掘立柱門建物と考えていたが、前述の如く下層から8世紀代の遺物が検出されたことにより築造当初のものではなく、8世紀段階の礎石門建物と考えられるに至った。8世紀のいつの時点で築造がなされたかについては、次年度の調査で明らかにしたい。



第78図　門建物SB110柱掘形断面図

溝

SD101　官道の西側溝で、長さ47m分確認した。南端は西土塁基部で止まり、門建物復原線から７mの位置である。基部幅2.1m、深さ1.1m、中央部幅1.8m・深さ0.54m、北端幅3.5m・深さ0.33mで、断面は逆台形を呈する。底面のレベルは基部側が29.8mで、北端側が28.75mと比高差は両端側で１m程ある。建物検出面からは北端側底面で3.6mの比高差となる。門建物に対しては13°西側に振れている。



第79図　SD101北壁土層図

また、北端部の埋土は上層から緑灰色砂・黒色泥炭層・暗灰色細砂層で、埋土上～中位には青磁椀・土師器糸切り小皿などの遺物を包含する。西端側には50～80cm大の花崗岩が７個落ち込んでおり、西土塁石垣から崩落したものと考えられる。上層には瓦類が多量に包含されていた。

SD102　官道の東側溝で、長さ9.2m分確認した。基部幅0.78m・深さ0.56m、北端幅1.4m・深さ1.0mで、北端は外濠に接続するも接続部分には花崗岩切石が4個置かれ、その部分は地山のクリーム色の土で埋められており、その下層から糸切り小皿が出土した。基部にはSD101同様、花崗岩が４個落ち込んでいた。さらに底面には瓦・小石が敷かれている。SD102の南端部は確認し得ていないが、SD101・102の南端幅は６m程で、SD102北端側での幅は11.2mになり、門建物に向かって極端に幅が狭くなる。

SD120　門建物の左壁面角部の石垣SA115Aの前面で検出した溝で、上面幅1.0m、底面幅0.3m、深さ0.8mで、断面形はロート状をなす。埋土下位より有高台の須恵器杯2点が出土した。詳細は次年度の調査に俟ちたい。

SD122　外濠の存在を確認するために西土塁北西側に設定したＧ２トレンチで検出した。上面幅3.2m、底面幅2.0m、深さ0.6mで、これを外濠とするには躊躇する規模である。トレンチ調査で幅・深さを確認した程度であるが、官道西側溝以西には外濠が存在しないことが確認された。埋土は上層から暗青灰色粘質土・灰色砂・植物遺体層・青灰色細砂層で、SD101北端部の状況に似ている。埋土上位からは、白磁・土師器椀・柱状土製品が出土した。

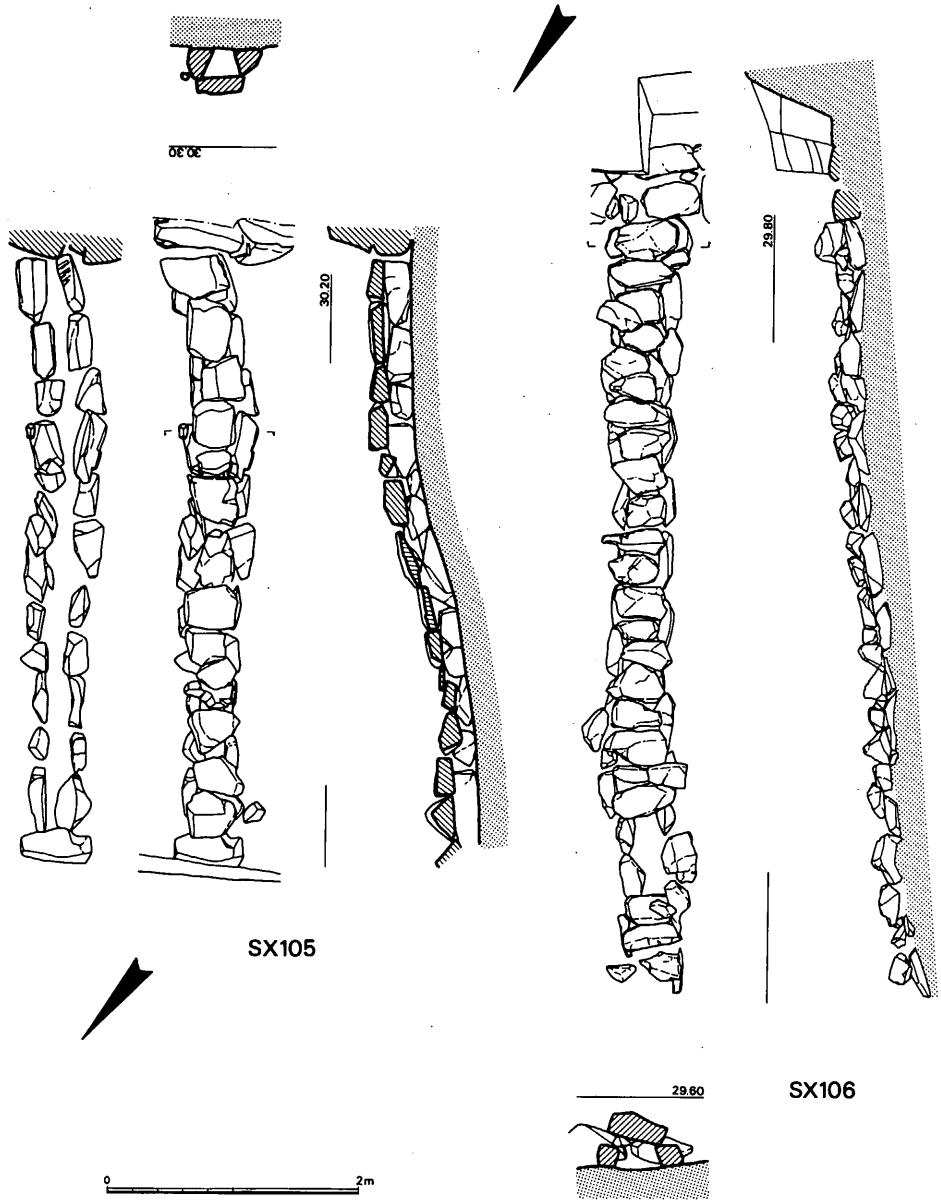
SD126　Ｊトレンチの北西端で検出したＬ字形の溝で、両端部は調査区外に延びる。東端幅0.8m、西端幅0.5m、深さ0.3mで、東側に向かって深くなる。溝底には灰色砂が堆積しており、流水の跡が窺われる。

土壙

SK123　Ｊトレンチの北側中央で検出した。方形溝SD126に切られる。楕円形の土壙で、長径3.1m、深さ0.44m。埋土は暗灰色砂質土で、土師器片が出土したにすぎない。

SK124　SK123の1.5m南西で検出した。楕円形を呈し、長径2.74m、短径1.9m、深さ0.74mを測る。埋土は暗青灰色粘質砂であった。

SK125　SK124の3m西側で検出した楕円形の土壙で、長径3.35m、短径2.85m、深さ0.7mを測る。埋土は青灰色粘質土で、瓦器椀・柱状土製品が出土した。



第80図　暗渠SX105・106実測図

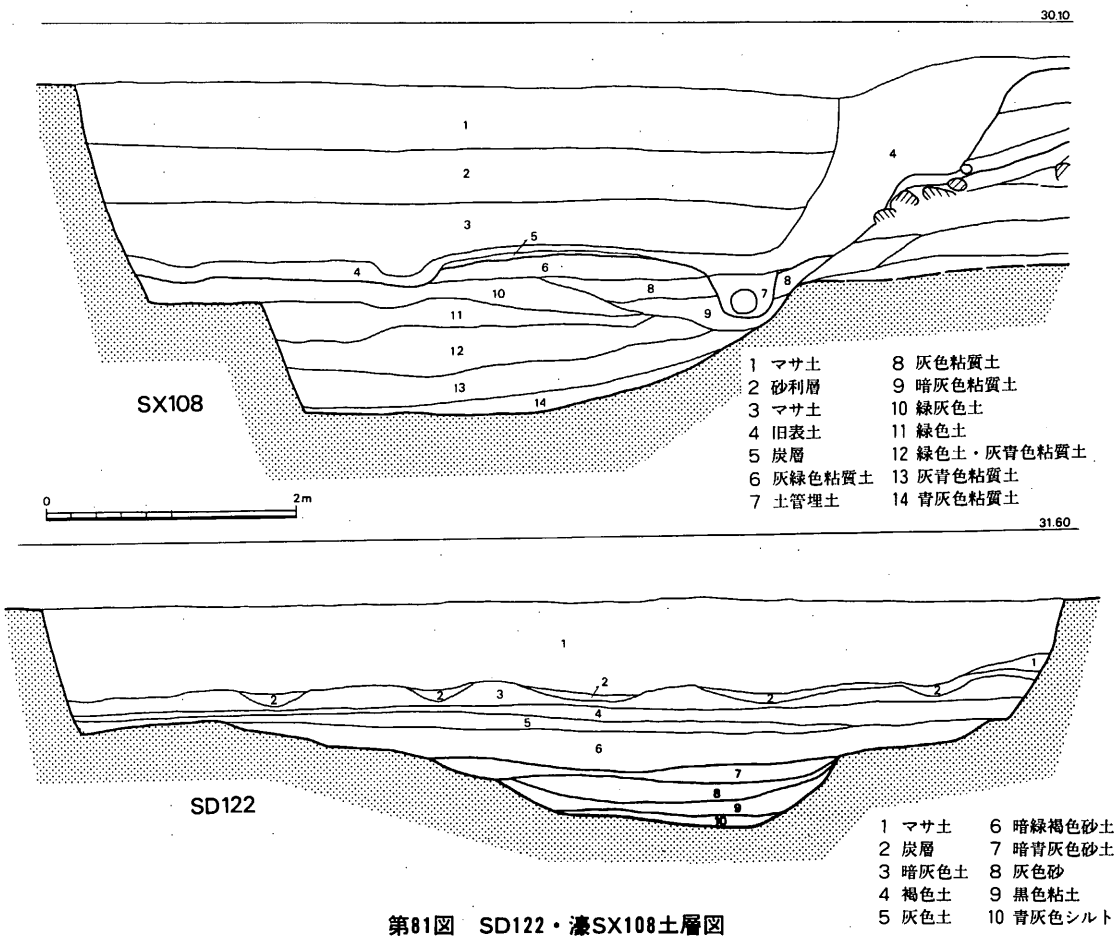
暗渠遺構

SX105　土塁基底部石列SA104に直交して西端から2.5mの位置に付設される。花崗岩を箱形に組み合わせたもので、長さ4.8m分検出した。蓋石は15個で、右側板は13個、左側板は11個数え、内法は20cmである。埋土は締まりのない褐色土であり、弱いながらも流水状況が確認された。当暗渠はSX107の上に構築されているため地形に沿って傾斜している。北端は確認できていないが、外濠に接続するものとみられる。

SX106　SA104の東端から1.3mの位置に石列と直交させて付設する。当暗渠は全体を確認したものの蓋石は外さず埋め戻した。長さ6.2m、幅0.57mで、蓋石は22個遺存する。北端は若干西に屈曲する。石列との交点部には掘り込みは存在せず、石列から滲み出した水を排水するための暗渠と考えられる。

濠

SX108　門建物前面には外濠が存在しないことが明らかになったため、外濠が何処から始ま



第81図　SD122・濠SX108土層図

るかを確認するためにBトレンチ東端で土塁に直交して調査区を拡張した。現地表面から1.6mまでが後世の盛土で、それから1.1m下層で検出した。北側に人家があるため幅は確認できないが、石列基底部からの深さは2.2mを測る。埋土は上層から緑色土・灰青色粘質土・青灰色粘土で、瓦・須恵器片が出土したのみ。なお、調査した範囲では護岸施設はみられない。

石敷遺構

SX116AB　Eトレンチを南北に縦断するかたちで検出した石敷溝で、北端はSD101に接続する。上部をSX116B、下部をSX116Aとした。西側溝に落込む花崗岩の下では玉石がみられないことからSD101と同時期もしくはそれより古いことが考えられる。SX116Aは下層に存在するため完掘できていないが、西土塁に対して〕形に屈曲し、断面形は逆台形をなす。また、トレンチ中央部の攪乱坑北壁での土層観察においては、地山を掘り込んで構築されており、その上に門建物の積土が乗っていた。敷石の中には瓦片が含まれていることから8世紀段階の門建物に伴う暗渠施設とも考えられる。この遺構の性格解明に関しても、次年度の課題としたい。

SX117　Eトレンチ北端で検出した石敷溝で、長さ12.5m分確認した。S字形に蛇行するもSD101とは重複していない。幅0.6m程で、底面には小指大の石を敷いていた。

SX118　SX117の東側1.7mで検出した石敷溝で、長さ4.9m分確認した。幅0.5mで、南側に緩くカーブする。底面は北側に下がり、瓦・小石片を敷いていた。

SX119　Hトレンチ北端で検出した石敷溝で、前者に比して幅1.35mと大きめである。長さは4.2m分確認した。底面には瓦・花崗岩の小石を敷いているが、割合まばらであった。

その他の遺構

SX107　SD102と暗渠SX105の間の段落ちで、基底部石列の2.2m北側から石列に平行して一段（0.6m）下がる。SD102に切られる状態で須恵器甕が出土した。暗渠SX105はこれを埋めた後に構築している。

SX121　Eトレンチ中央北側で検出したピットで、糸切り小皿が出土した。

出土遺物

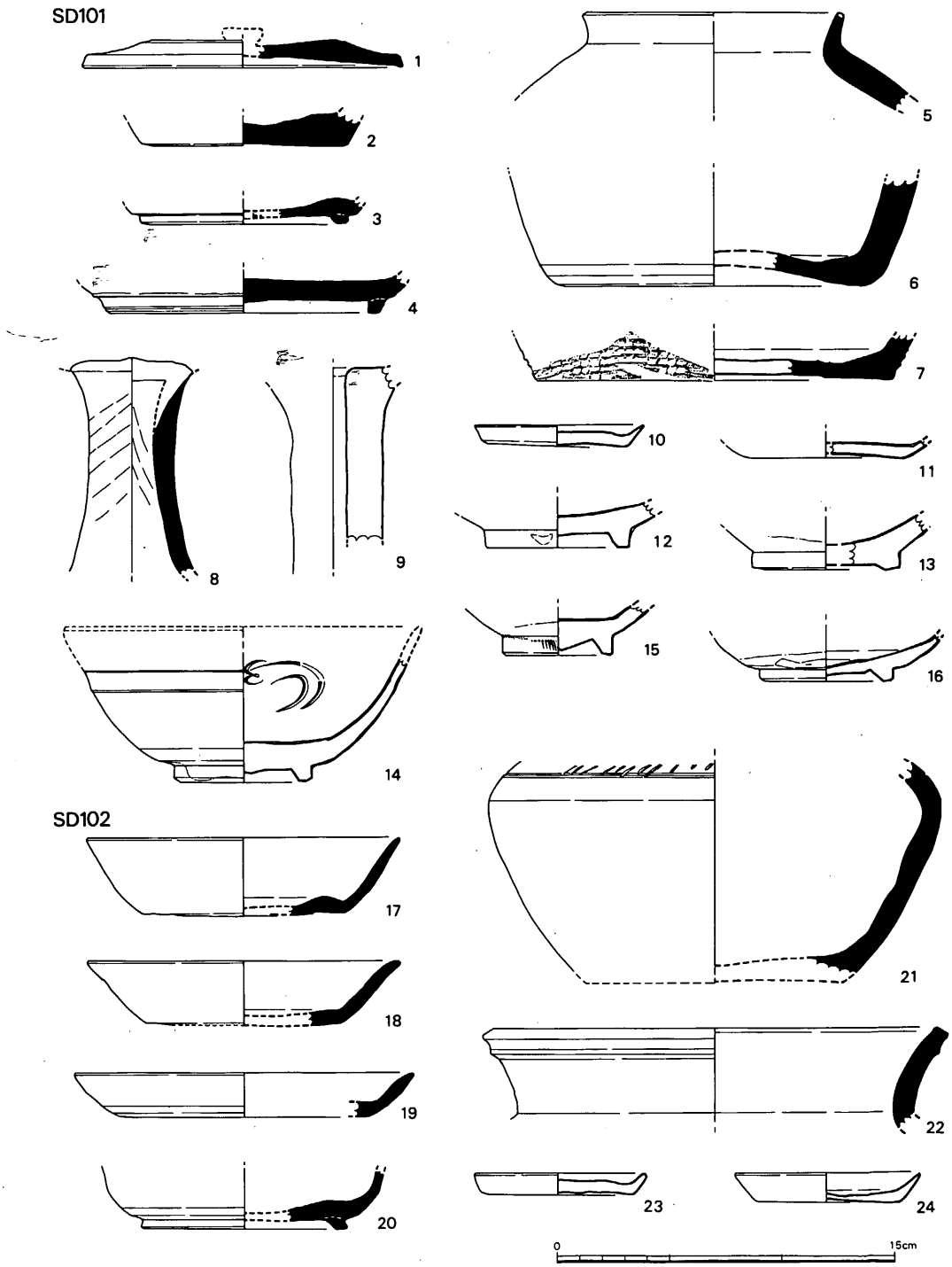
SD101出土土器・陶磁器（第82図、図版70）

須恵器

蓋（1）　口縁端部の立ち上がりが不明瞭な蓋で、天井部は低平である。口縁部ヨコナデ、外天井回転ヘラ削りによる。口径は14.2cmに復原した。南端部上層の瓦溜まりの出土。

杯（2・3）　2・3は杯の底部破片で、2は無高台。底部はヘラ切り離しによる。3は有高台であるが、高台は低く、端部寄りに貼付する。2はJトレンチ南半、3は南端上層の出土。

壺（4～7）　5は口頸部、4・6・7は底部破片。4は底部端に低めの高台を貼付する。復原高台径12.0cm。5は口唇部を欠くが、口径は11.8cm程になろう。胎土は精良で、砂粒を殆ど含まない。



第82図　SD101・102出土土器・陶磁器実測図

6は焼き歪みにより上底状をなす。底部下位は回転ヘラ削りによる。7は平底で、ヘラ切り離し後は未調整。外面格子タタキ、内面ナデ調整による。4・6・7は南端部、5はHトレンチ出土。

高杯（8）　脚柱部の破片。外面ナデ調整で、シボリ痕を留める。南端部上層の出土。

土師器

高杯（9）　9も脚柱部の破片。脚柱は径1.2cm程の棒に粘土を巻き付け成形している。Jトレンチ北西端の出土。

小皿a（10）　口径7.6cm、器高1.0cmで、底部は糸切りによる。

中国陶磁器

白磁

皿（11）　皿の底部破片で、口縁部を欠く。底部は若干の上底で、回転削りによる。全面に淡灰色の釉をかける。Jトレンチ南半部の出土。

椀（12・13）　12・13は底部の破片。12の高台は高いが、13は高台の削り出しが弱く、上底状をなす。12は畳付部から高台内が無釉で、13は外面下半から高台内にかけて無釉。また、12の高台外面には黄緑色の釉が数箇所みられ、高台を指で摘んで施釉したことが判る。12は高台径6.4cmで、ともにJトレンチ南半部の出土。

青磁

椀（14～16）　14は龍泉窯系で、口縁部を欠く。外面に2状の圏線、見込には片彫りの花文、内底部に圏線がある。底部は厚く、畳付部から高台内が無釉。高台径6.2cmで、器高は7cm程になろう。15は同安窯系で、外面には櫛目を有する。16の外底部は手持ち削りにより、見込は蛇の目状の釉剝ぎを施す。14・15が南端部で、16はJトレンチ南半部の出土。

SD102出土土器・陶磁器（第82図、図版70）

須恵器

杯（17・18・20）　17・18は無高台の杯で、口縁部は外方に開く。内外面ともヨコナデ調整による。20は有高台の杯で、口縁部を欠く。高台はハ字形を呈し、体部下位をヘラ削りする。

皿（19）　小片であるが、口径は15.2cmに復原した。19・20は上層の出土。

壺（21）　21は胴部破片で、肩部は丸みを有する。肩部には沈線と刺突文が施文される。

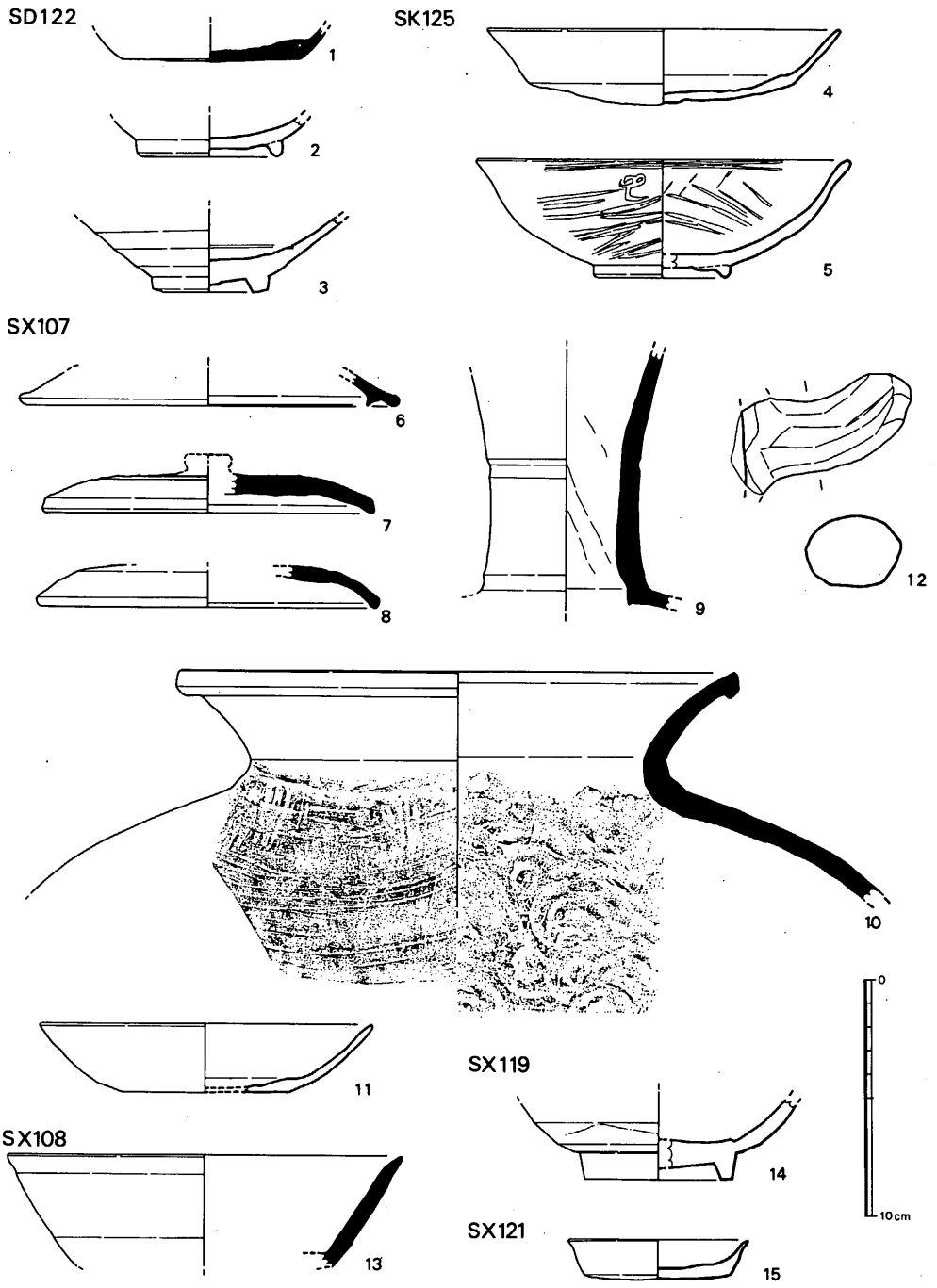
甕（22）　口頸部破片で、復原口径19.8cm。口縁部は直線的に開き、外面には削り出し凸帯を有する。口縁端部は面を持ち、口唇部は小さく突出する。

土師器

小皿a（23・24）　糸切りの小皿で、口径は23が7.7cm・24は8.2cm、器高は23が1.0cm・24は1.3cm。24の外底面には板状圧痕がみられる。

SD122出土土器・陶磁器（第83図、図版70）

須恵器



第83図　SD122・SK125・SX107・108・119・121出土土器・陶磁器実測図

杯（1）　無高台杯の底部破片で、復原底径は7.4cm。外底面はヘラ切り離し後未調整。

土師器

椀（2）　2は底部破片で、丸みを持った高台を貼付する。器面の磨滅が著しく調整不明。

中国陶磁器

白磁

椀（3）　底部は厚く、高台は太め。内面は施釉するが、外面は無釉。内底部には圏線を1条巡らし、体部との境とする。釉はやや灰味を帯びる。いずれも上層の暗灰色粘質土の出土。

SK125出土土器（第83図、図版71）

土師器

杯（4）　丸底の杯で、口径14.8cm、器高3.2cm、底径11.1cm。口縁部はヨコナデで、外底面には板状圧痕がみられる。

瓦器

椀（5）　5は1/2程の破片で、復原口径15.8cm、器高5.0cm、復原高台径5.4cm。器面調整は雑なヘラ磨きによる。内面には墨痕がみられ、口縁部のやや下位には「巴」の墨書がある。

SX107出土土器（第83図、図版71）

須恵器

蓋（6～8）　6は口縁部内面にシャープなかえりを有する。7・8は口縁端部の立ち上がりが不明瞭な蓋。いずれも天井部を欠く。7はSX107西側の上層出土。

壺（9）　長頸壺の頸部破片。頸部の中程にはヘラ沈線を1条巡らす。

甕（10）　口縁部は「く」字形に大きく開き、端部は肥厚する。口縁部ヨコナデ、外面平行タタキ→粗いカキ目、内面同心円タタキによる。底面に密着して出土した。

土師器

杯（11）　口縁部はシャープで、体部はやや内湾する。口縁部ヨコナデ、内底部は指頭による強いナデ調整。

取手（12）　器面はヘラによる削り状の面取り。甑の取手になろう。

SX108出土土器（第83図）

須恵器

杯（13）　体部の破片で、高台を欠く。器壁は厚く重量感のある杯。

SX119出土陶磁器（第83図）

中国陶磁器

白磁

椀（14）　底部破片で、復原高台径6.2cm。内底部には削り出しの段を有し、体部との境とする。外底部から高台内にかけて無釉。

SX121出土土器（第83図）

土師器

小皿ａ（15）　糸切り小皿で、口唇部は小さく突出する。復原口径7.6cm、器高1.7cm。

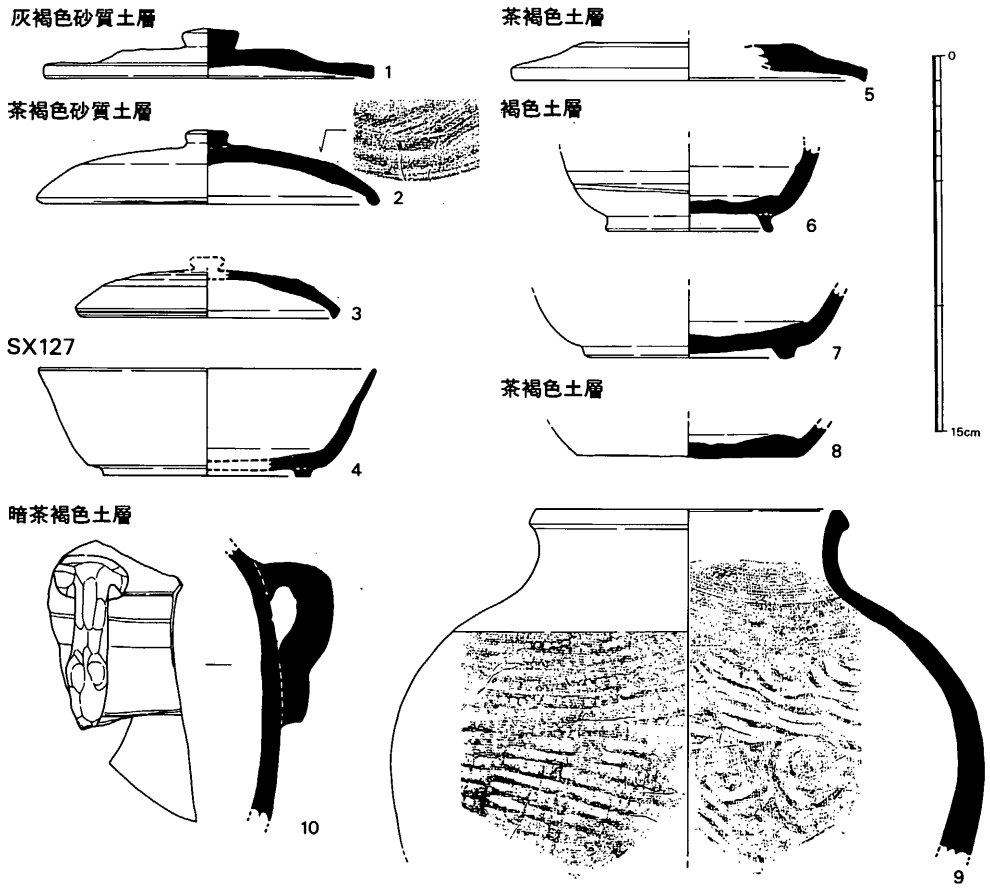
層位出土土器（第84・85図、図版71）

明確な遺構に伴わない土器を一括して報告する。第84図１～４、第85図１・２はＪトレンチ出土。第84図５・６はＥトレンチ、７～10はＢトレンチの出土。

須恵器

蓋（１～３・５）　１・５は口縁端部の立ち上がりが不明瞭な蓋で、天井部も低平。１は天井部中央に釦形の摘みを貼付する。２・３の口縁端部は小さく立つ。天井部は丸く、２は釦形の摘みを付す。復原口径は１が13.0cm、2は13.2cm。２は外面にタタキ痕が付く。

杯（４・６～８）　４・６・７は有高台の杯で、８は無高台。４・７の高台は低く太めであるが、６の高台は高く細身である。８の外底面はヘラ切り離し後未調整。



第84図　層位出土土器実測図（1）

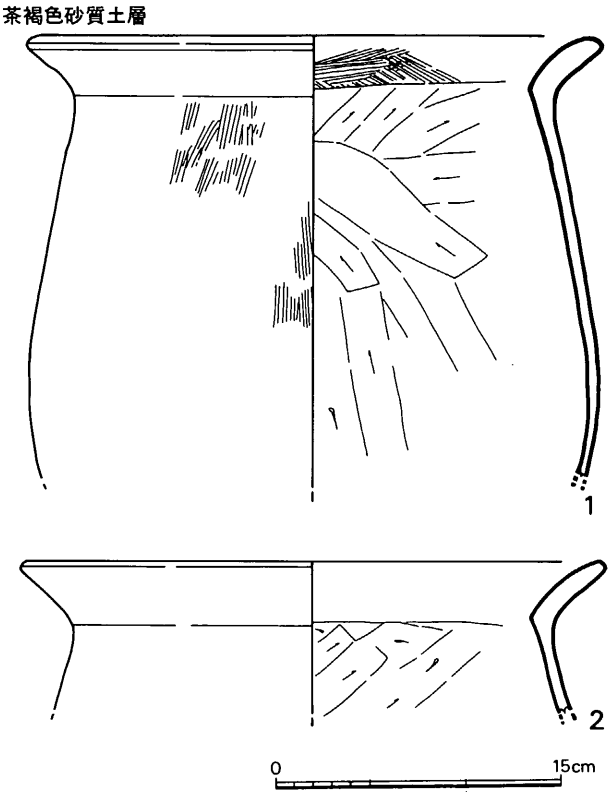
壺（9・10）　9は球状の胴部に緩やかに外反する口縁部を有する壺で、口縁端部は肥厚する。外面格子タタキ、内面同心円タタキによる。10は瓶子形の壺で、肩部には3状の沈線を施した後、取手を貼付する。下半部はヘラ削り調整。

土師器

甕（1・2）　「く」字形に屈曲する甕で、口縁部はやや肥厚する。外面ハケ目、内面ヘラ削りによる。3・4の須恵器とともに出土した。口径は1が30.4cm、2は30.8cmで、1は23.3cmの残存器高を測る。

瓦類

軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦（鬼瓦・面戸瓦）・文字瓦などの出土があった。

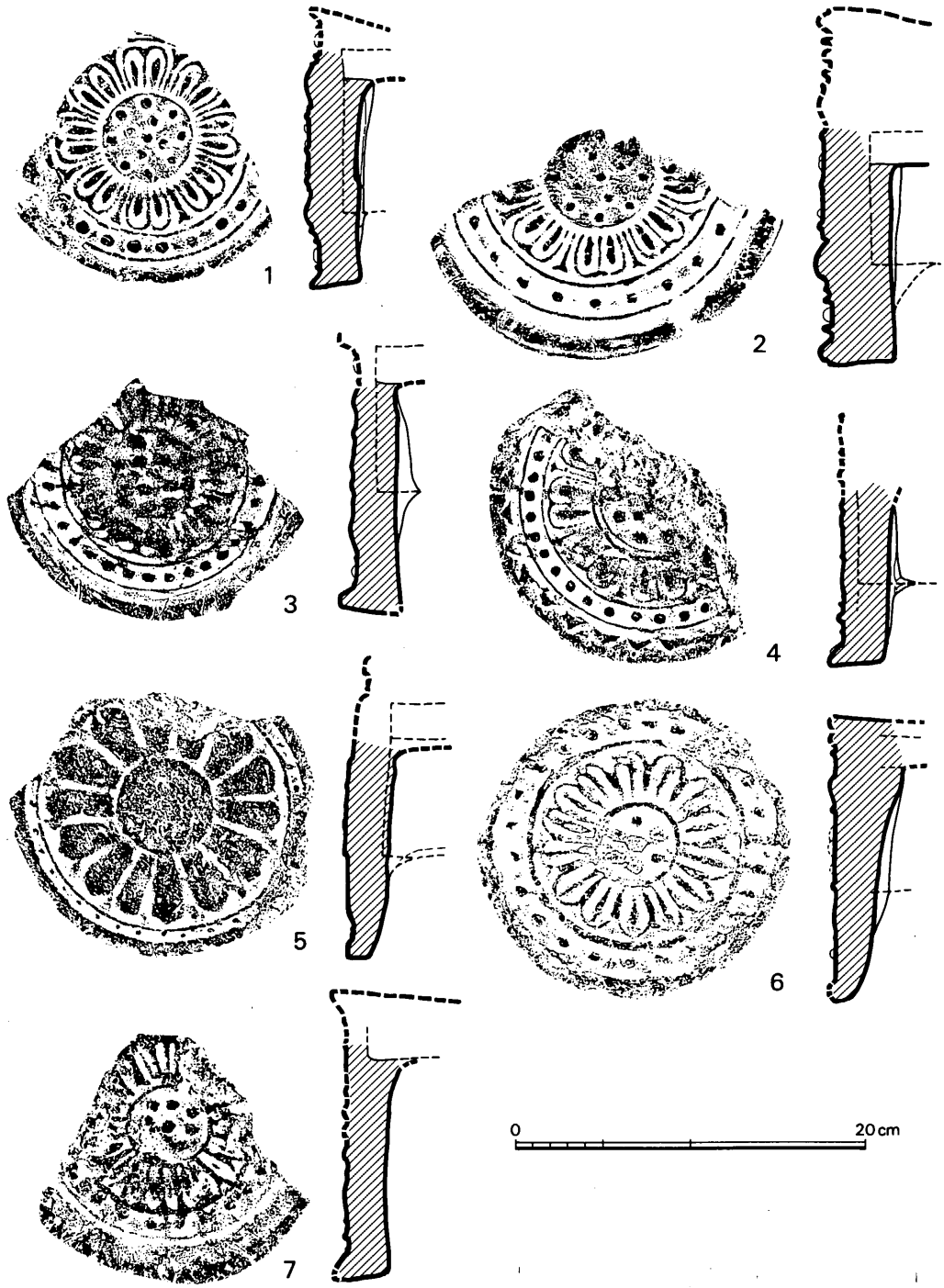


第85図　層位出土土器実測図（2）

軒丸瓦（第86図、図版72）

7種55点の出土があった。1は鴻臚館Ⅰ式軒丸瓦である。20点（36%）が出土している。大宰府史跡のなかでは、この軒丸瓦は観世音寺境内の調査では1%以下の出土率である。大宰府政庁地区では35%、筑前国分寺では22%、大野城跡太宰府口城門の調査でも最も多く出土している軒丸瓦である。今回の調査では、それを上回る出土率を示した。その出土傾向は、石列SA104と官道側溝SD102の北東部・大野城市側市道から下成土塁にかけての部分からの出土が最も多かった。2は鴻臚館式の大型の軒丸瓦である。1点（2%）が石列SA104の前の灰色積土の中から出土している。3は鴻臚館Ⅰ式に似る軒丸瓦である。一見して外区の連珠文の数が多いことがわかる。また、瓦当面の文様がつぶれたものが多い。今回の調査では5点（7%）が出土している。その出土傾向も鴻臚館式に似る。1・2・3の鴻臚館式軒丸瓦の数を合せれば28点（45%）となる。

4は老司系軒丸瓦の一種である。老司Ⅰ・Ⅱ式に比較して蓮華文の隆起が弱く、平たい瓦当文様となる。瓦当文様の特徴として中房と内区との間の界線が二重になっている。今回の調査では5点（9%）が出土した。出土傾向としては、大野城市側で市道の西から下成土塁部にか

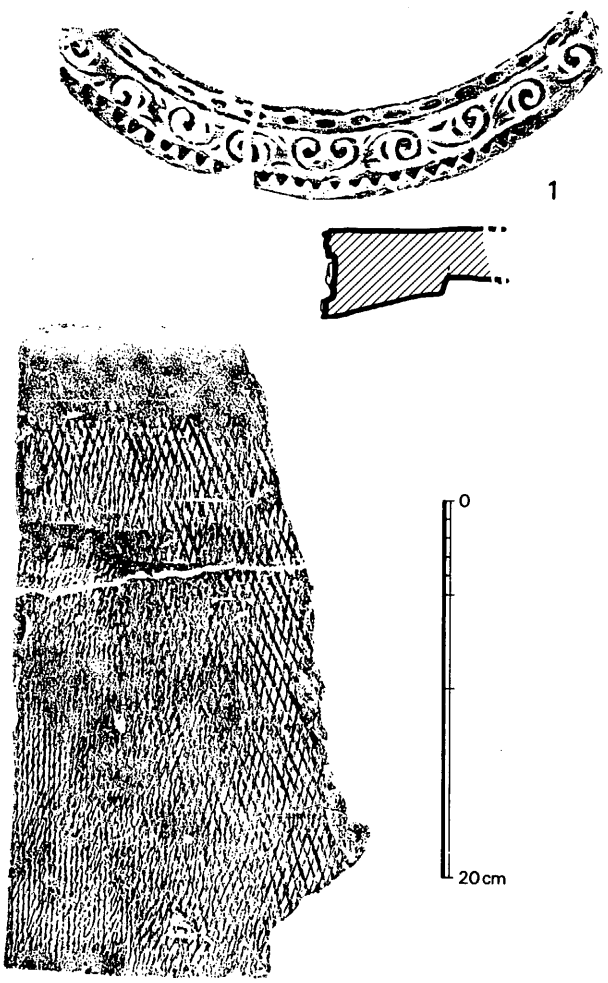


第86図　軒丸瓦拓影・実測図

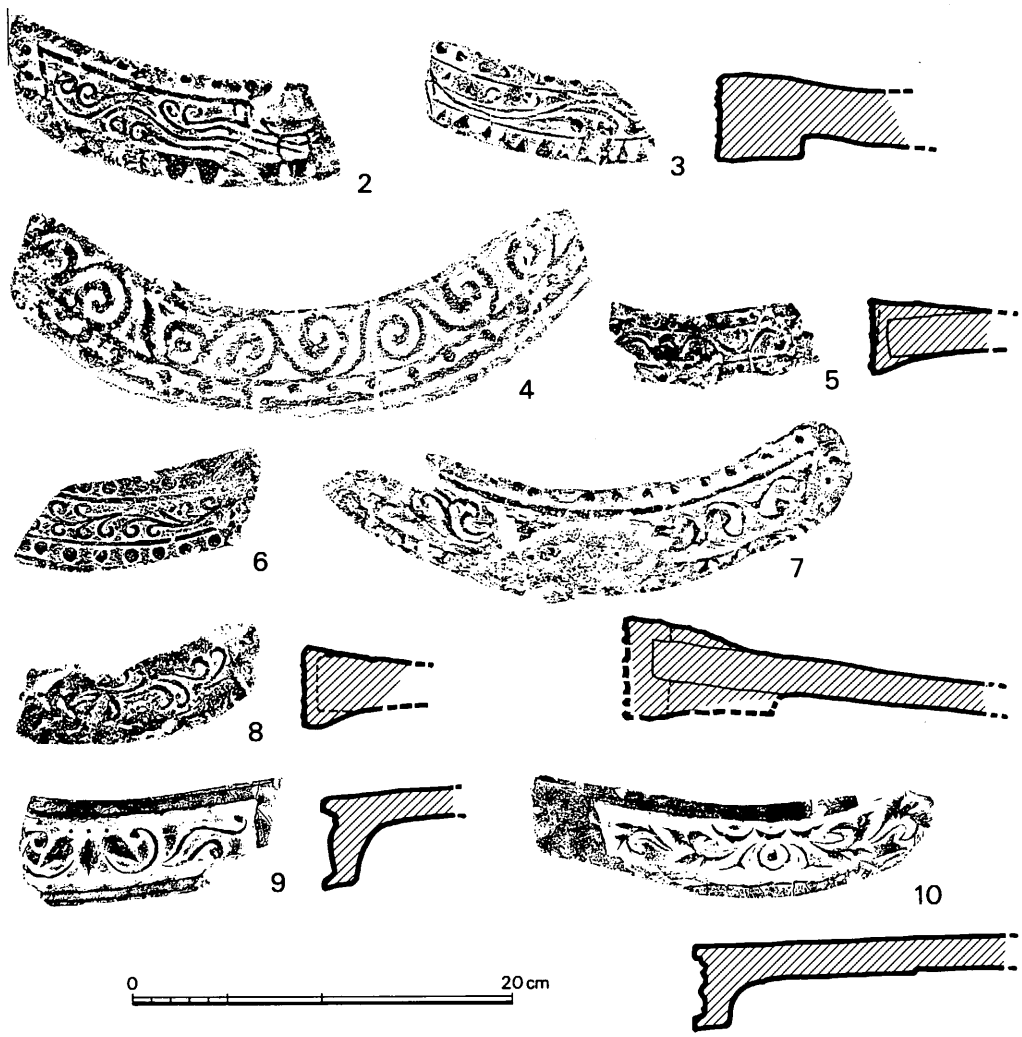
けて4点が出土している。5は大宰府史跡の発掘調査では初出の軒丸瓦である。6点（11%）の出土があった。中房の連子は小さく低いが、1＋8＋□という3重になる。蓮弁は単弁14弁である。分割が当分でなく、弁には大小がある。間弁は花弁と花弁をつないで低く彫られているが、省略されている部分もある。狭い外区には小さい連珠文が配置され、珠文数33～34程となる。珠文帯の外側には、一段高く狭い界線が施されている。軒丸瓦の笵は傷の状況から木型と想定される。胎土に多量の砂を混ぜるが、灰橙色に硬く焼き上がる。出土傾向は鴻臚館式のそれに似て、大野城市側市道の両側、下成土塁地区である。6は今回の調査では5点（9%）が出土した。この瓦当と同じ大宰府政庁南門跡からの出土例の丸瓦には「平井瓦」の文字があるものがある。7は4点（7%）出土している。6・7とも出土傾向は大野城市側下成土塁に見られた。

軒平瓦（第87・88図、図版73・74）

今回の調査では10種40点が出土した。1は鴻臚館Ⅰ式軒平瓦である。14点(35%）出土した。観世音寺境内、大宰府政庁跡、筑前国分寺などでの出土率は鴻臚館Ⅰ式軒丸瓦よりやや低めであるが、ほぼ呼応した状況にある。今回の調査での出土率はかなり高く、鴻臚館式軒丸瓦とともに水城西門跡II期の主要軒瓦であった状況を物語っている。第87図に図示した瓦では平瓦部が残っており、その凸面には細かい斜格子の叩打板が横方向に叩打された痕と細かい縄目が縦方向に叩打された痕が認められる。今回出土の14点のうちには、この他に短い幅の平行叩打痕を残すもの2点が認められた。叩打具にはこの他に正格子のものもあり、それぞれが縄目痕を合わせもつものなどがある。また、最近、鴻臚館Ⅰ式の瓦当笵には少なくとも2種類があることが判明している。瓦当文様と叩打具の関係は今後整理する必要がある。出土傾向は軒



第87図　軒平瓦拓影・実測図（1）



第88図　軒平瓦拓影・実測図（2）

丸瓦と同じである。

2は中心飾を持ち、左右に3回反転する均整唐草文軒平瓦で、曲線顎の瓦である。7点(17.5%)が出土した。うち1点が西側土塁頂部上部の瓦溜りから出土している。この瓦当と同笵の大宰府政庁南門跡出土例では、陰刻の「平井瓦」の叩打具痕が平瓦に打たれたものが知られている。瓦当と平瓦の接合はつつみ込み打法である。多量の砂を混ぜ、茶褐色に焼きあげられている。3は左から右に偏行する唐草文軒平瓦である。4点（10%）出土した。短く深い段顎には横方向の縄目の叩打痕が残る。平瓦と瓦当との関係は破片のためはっきりとしない。胎土には多量の砂を混ぜているが、明灰色に硬く焼き上がる。

4は左から右に偏行する唐草文軒平瓦で、3点(7.5%)出土した。胎土には多量の砂を混ぜ淡茶灰色に焼き上がる。5は2点(5%)が出土している。破片資料で文様全体はつかめないが、均整唐草文軒平瓦のようである。第86図5の軒丸瓦と胎土に混ぜられた砂の質や焼き上がりが類似している点、今後の出土例に注意が必要である。6は第86図7の軒丸瓦と大宰府政庁跡や筑前国分寺でセットとして組むと考えている軒平瓦である。瓦当文様は中心飾のない均整唐草文で、左半では左から右に唐草文が流れる。今回は2点(5%)が出土した。

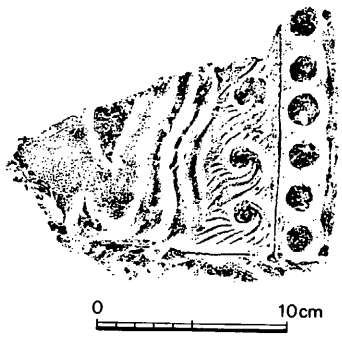
7は均整唐草文軒平瓦である。1点(2.5%)出土。中心飾は向かいあう弧線の下に反対に向く弧線が組合ったやや変わったもので、唐草は4回反転する。上帯から脇区には連珠文を、下帯には線鋸歯文を置く。瓦当と平瓦はつつみ込み技法で接合される。平瓦には斜格子文が縦方向につく。顎は一回曲線顎を作ったのち、段顎に仕上げなおしている。淡橙色に焼き上がり、胎土には砂を混ぜている。8は内区右半分の文様だけで、文様全体がやや判然としない。1点(2.5%)出土。5の軒平瓦と同様、胎土に混ぜられた砂の質や色、焼き上がりなど軒丸瓦5とよく似ている。5よりも近い感じがある。9・10は市道西側の攪乱坑からの出土である。9・10ともに類似品が観世音寺講堂跡から出土している。1点(2.5%)ずつ出土した。

道具瓦

鬼瓦と面戸瓦が出土している。

鬼瓦(第89図、図版75)

第89図は鬼瓦の破片資料である。今回の調査では、この他に1点出土している。2点とも同笵の鬼瓦で、同じ右下顎部の破片である。大宰府史跡出土の奈良時代の鬼瓦の笵の種類は少なくとも5種類が知られている。今回出土の鬼瓦はそのなかでも代表的な鬼瓦である。最も大きな手で、大宰府政庁跡、水城西門跡、水城御笠川貫流部付近、大野城大宰府口城門跡、筑前国分尼寺跡、怡土城付近などに同笵例の出土が知られている。

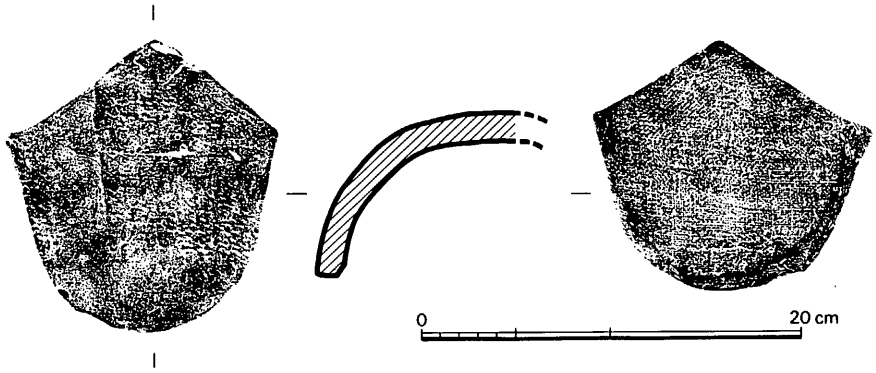


第89図　鬼瓦拓影

大宰府式鬼瓦は、西海道諸国でも作られ使用されているが、この鬼瓦は大宰府の諸機構のなかだけで用いられたもののようで、今日までのところ西海道諸国からの出土は知られていない。灰色で胎土に多量の砂粒を含むが、焼成は良い。2点とも大野城市側下成基壇から出土した。

面戸瓦(第90図、図版75)

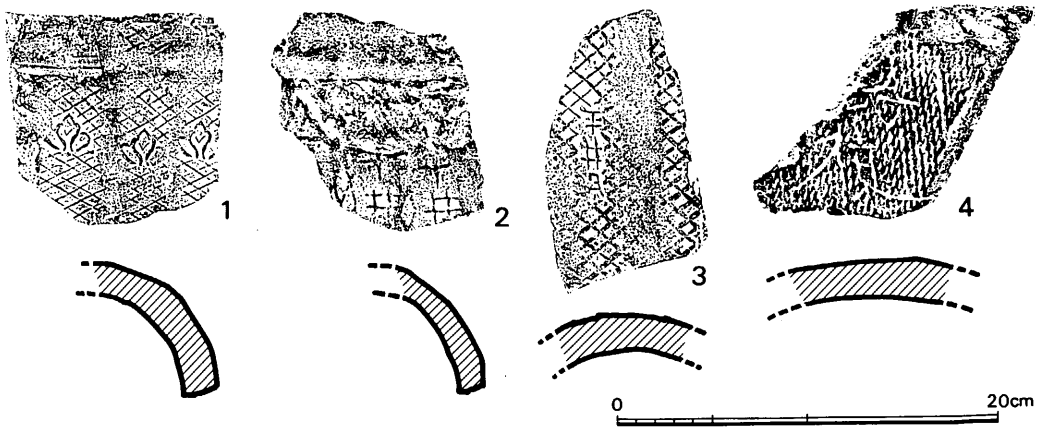
第90図は蟹面戸瓦の破片である。老司式丸瓦を原体として作り出している。凸面には縄目の痕が残る。砂を混ぜない粘土を用い、黒色に焼き上がる。市道東側の石組前面から1点出土している。



第90図　面戸瓦拓影・実測図

文字瓦（第91図、図版74）

第91図は叩打具に文字を刻み込んだもの（2・3）、ヘラ書きの文字瓦（4）と叩打具に花文を刻んだもの（1）である。1は丸瓦の凸面に叩打されたもので、破片で6点がある。2は丸瓦片1点で平井瓦と刻まれたもので、第86図6の丸瓦部に叩打された例がある。3は丸瓦片で3点の出土があった。4は平瓦の凸面に縄目を叩打した後にヘラ書きで文字を刻んだ破片である。破片には二文字分を認めるが、判読はできていない。SX104の上層からの出土である。



第91図　文字瓦拓影・実測図

土製品（第92図、図版75）

土錘（1）　管状土錘で、両端を欠損する。残長4.3cm、径1.3cm、孔径0.25cm。Eトレンチ中央の攪乱坑より出土した。

ミニチュア土器（2）　半欠品で椀形を呈する。復原口径1.5cm。SD101北半部の出土。

柱状土製品（3～13）　角柱あるいは円柱状を呈する土製品で、全て欠損品。角柱タイプは

断面正方形を呈するが、4は扁平で断面長方形を呈する。3・5・7・11は先細りで、端部に平坦面を有する。12の端部はやや反っている。胎土は粗く、器面に加熱を受けたものもみられる。SD122とSK125から出土した。他に福岡市博多遺跡群、太宰府市御笠川南条坊遺跡群、北九州市森山遺跡で類例がみられ、森山遺跡では平安時代の土器焼成窯から出土している。長さ約33cm（1尺）前後のものである。両端部が先細りであり、火を受けていることからことから脚としての用途が考えられよう。

石製品（第92図、図版75）

砥石（14･15）　4面を砥面とする。硬質砂岩製で、重さ276.3g。Jトレンチ表土の出土。15は欠損品。二次加熱により器面は脆弱。2面を砥面とする。砂岩製で、重さ271.1g。Eトレンチ中央の攪乱坑出土。

柱状土製品法量表

No.	タイプ	残存長	幅	厚さ	端部	出土遺構	備考
3	角柱	9.0	3.9	3.6	先細・平担	SA103	
4	〃	11.7	5.6	4.2	欠	〃	偏平
5	〃	13.2	4.7	4.4	先細・平担	SD101	
6	〃	11.4	4.3	3.7	欠	SD122	
7	〃	9.0	4.0	3.5	先細	〃	
8	円柱	6.7	4.4	4.3	欠	〃	
9	〃	3.7	3.1	2.7	〃	〃	
10	角柱	7.8	3.3	3.1	〃	SK125	
11	〃	10.0	4.1	4.0	先細・平担	〃	
12	〃	11.2	3.8	3.6	先細・反	Eトレンチ	
13	〃	12.2	4.4	3.7	欠	灰褐色土	

参考文献

1．『太宰府市史』（考古資料編）　太宰府市　1994

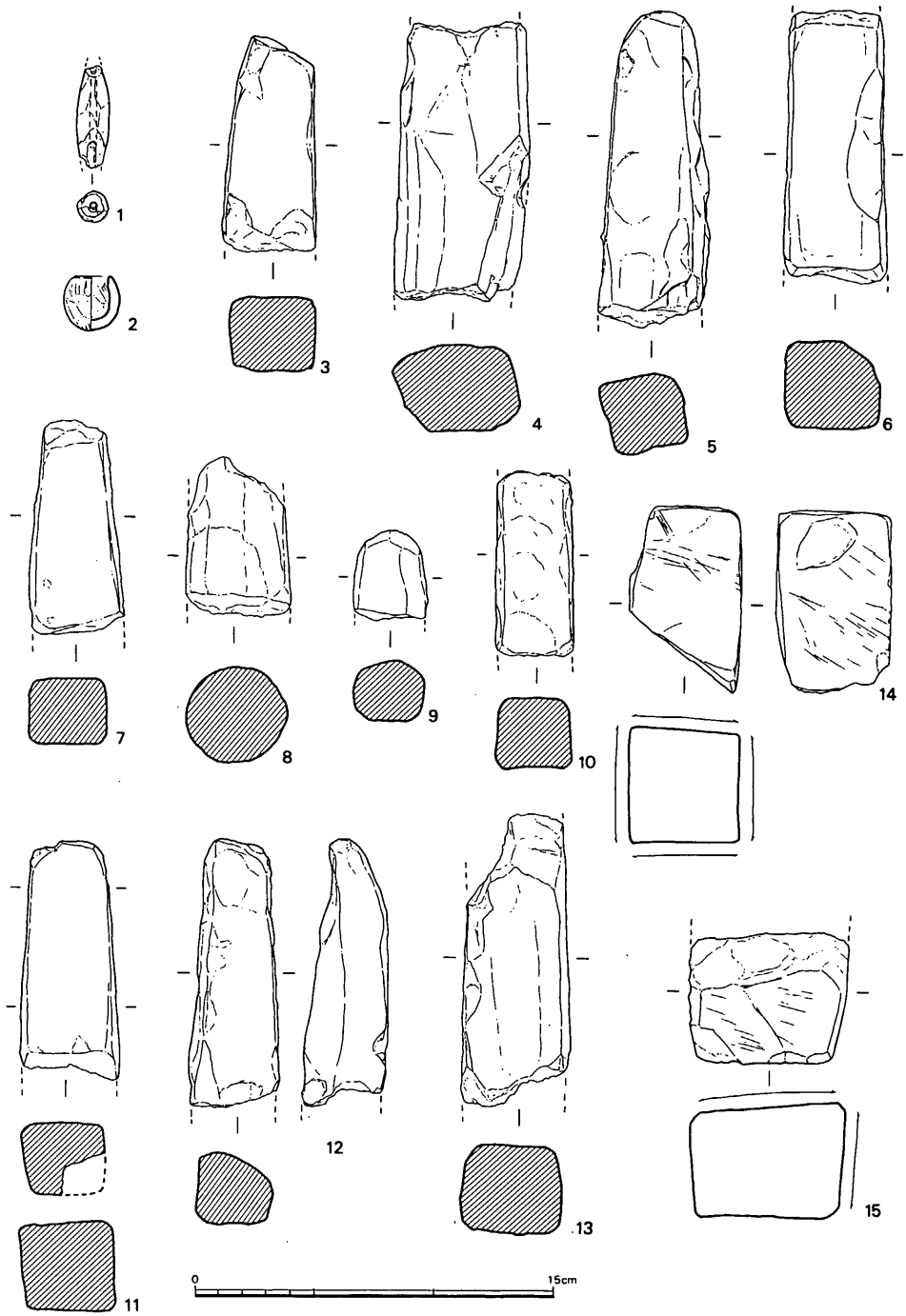
2．『特別史跡大野城跡Ⅶ』　福岡県教育委員会　1991

3．石松好雄　「筑前国分寺瓦考」『論苑考古学』　天山舎　1993

4．栗原和彦　「筑紫観世音寺出土の軒瓦」『論苑考古学』　天山舎　1993

5．高橋　章　「都府楼瓦考」『王朝の考古学』　雄山閣　1995

6．大脇　潔　「研究ノート丸瓦の製作技術」『研究論集Ⅸ』　奈良国立文化財研究所　1991



第92図　土製品・石製品実測図

小結

今次調査は西門に関連する遺構の検出を目標として調査を行った。その結果、土塁切通し部分で門建物1棟を検出し、土塁の博多側基底部の両翼では壁面の石垣・基底部石列を検出した。また、門遺構の北側では古代官道の側溝を検出し、門の前面には外濠が存在せず、外濠は官道の東側から始まることが確認されるなど多大な成果を挙げることができた。ここでは、検出した主要な遺構を時期ごとに整理を行い、まとめとしたい。

Ⅰ期（7世紀後半）

石垣SA115A、溝SD120がある。SA115Aは8世紀段階の門建物に伴う整地層下位で検出した。溝SD120はSA115Aの前面で検出した。北西方向に延びるも両端部は調査し得ていない。埋土下位より7世紀第三4半期の須恵器有高台杯2点が出土した。当溝が石垣・土塁に対してどのように関連するのか、その規模・性格に関しても次年度調査に持ち越しとなった。

土塁に関しては、西門付近の測量調査と西側土塁の断ち割り調査により、上成土塁の頂部幅約3m、基底部幅20～22m、高さ7～9m規模で、博多側に幅3mのテラスがあることが判明した。このテラスはJR鹿児島本線東側及び国道3号線西側においても、遺存状態は良好ではないが認められる。また、土塁の付属施設として柵列が存在するとの仮定のもとに土塁頂部で確認を行ったが、柵列は検出されておらず、テラス部分に存在した可能性が考えられる。柵列の確認も次年度の目的の一つとしたい。

これらの遺構は、出土遺物・遺構のあり方からみて天智3(664)年の水城築堤時の遺構と考えられる。今回は、築堤時の門建物の検出には至ってないが、その存在が大きく期待される。

Ⅱ期（8世紀）

石垣SA103・115B、石列SA104、門建物SB110、暗渠SX105・106、官道側溝SD101・102、外濠SX108がある。SA103は東土塁角部に築かれた石垣で、門建物と同レベルに位置する。掘形からは縄目の平瓦片が出土している。SA115Bは西土塁角部の石垣である。SA104は上成土塁中段テラスを埋める際に、基底部にカウンターウエイト（平衡重し）として埋設された施設で、東端はテラスの終わりに対応する。門建物のレベルとSA104とは3m程の比高差を有するが、石列が埋設されていることを考慮して土塁基底部のレベルを31.5m付近においたとしても1.5m程の差が生じる。しかし、門建物は土塁中央に設けられており、石列から10m程奥まった位置にあることからこの程度のレベル差は解消されるものと考える。

SX105・106は石列SA104に直交して付設された石組暗渠で、石列背後から滲み出した水を排水する施設と考えられる。また、SX105・106間（6×13m範囲）に門衛舎などを想定した場合、上部建物の排水施設とも考えられるが、平坦面の削平が著しく建物は検出されていない。

土塁に関しては、Ⅰ期の土塁頂部幅は3mであったが、門建物から左右20mに渡り上成土塁中

段テラスを版築状に突き堅め、門付近の土塁頂部幅をⅠ期の4倍の12mに拡幅している。

門建物SB110は土塁切通しの中央部に位置する。石垣SA103の存在により幅7m以上は拡がらないことは確実で、大野城跡太宰府口城門第Ⅱ期建物例から梁行1間と推定し、柱間を2間分の5.4mに復原した。桁行は4間（10.4m）で、中央2間が2.7mと広く、両端は2.5mとやや狭い。両端の柱掘形は前者に比して小さいことから控柱の掘形と考えた。また、土塁頂部両端と梁側柱列とが対応し、Ⅱ期門建物の築造に伴い土塁頂部を拡幅したことが窺え、土塁頂部には鴻臚館式軒瓦が多量に散布することから楼門形式の礎石建物であったと推定される。

SD101・102は官道の両側溝で、側溝の南端は土塁の基部にとりつく。西側溝SD101は大野城市教委調査の溝に連続すると考えられるが、東側溝SD102は外濠に直接排水している。地形的にみて西側が高いが、西側から流れてきた水はSD101で処理することで事足りたのであろう。路面自体は削平により遺存していない。また、門建物とSD101北端での比高差は3.5m程あり、この位置からは瓦葺きの門建物を見上げる格好となり、さぞや壮大に映ったことであろう。

『日本書紀』には「水を蓄えしむ。名けて水城と曰う」と名前の由来になった幅60mの外濠が博多側に存在し、土塁に沿って東西1.2kmを貫いていると考えられていたが、西門前面には外濠は存在せず推定路面幅12mの官道が通過することが判明し、SD101西側にも外濠は存在せず、官道東側から外濠が始まるものと考えられる。

Ⅲ期（9～10世紀）

当該期の門建物は検出されていないが、土塁頂部からは平安期の軒瓦が多量に採集されていることから、楼門形式の瓦葺き礎石建物が存在した可能性が考えられる。

Ⅳ期（11～12世紀）

当該期の遺溝として、溝SD122、土壙ＳＫ125、石敷溝SX117～119がある。SD122は門建物の北西側で検出した土塁に平行する溝である。ＳＫ125は官道北端中央で検出した楕円形土壙。官道の側溝SD101・102には石垣に使用していた花崗岩が落ち込み、その埋土からは糸切り小皿・青磁椀などが出土しており、溝としての用途を無くしていることから当該期において官道としての機能が終焉したものと考える。

前述した如く、今次調査は多大な成果を得ることができた。しかし、Ⅰ期の門建物・石垣・溝・土塁の状況・柵列など新たな疑問点が生じた。これらに関しては、次年度の調査で明らかにしてゆきたいと考えている。

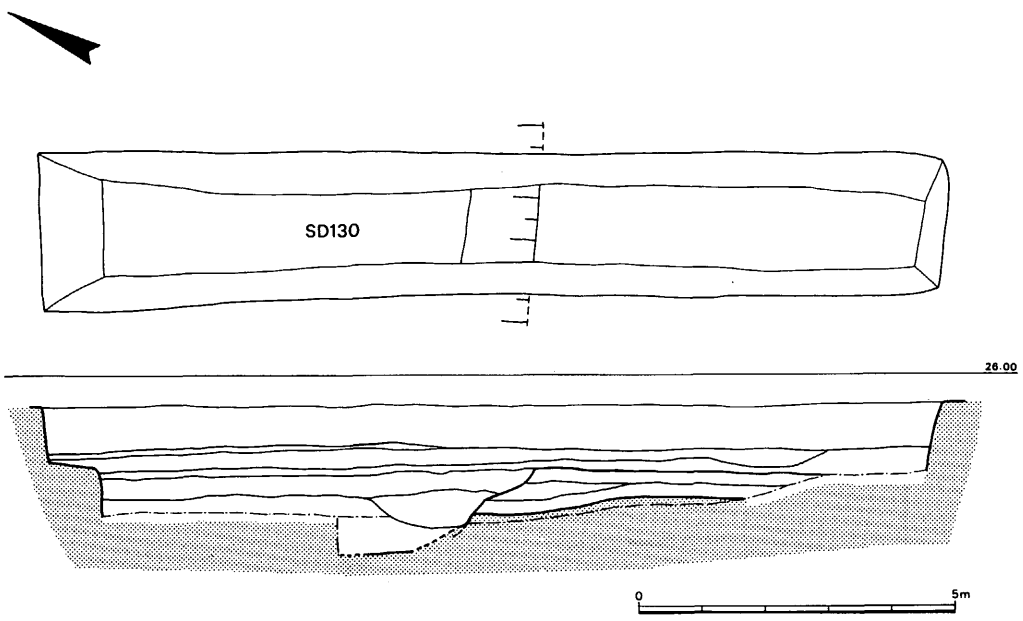
2．第27次調査

本次調査は住宅建設に伴う事前の調査である。当調査地は水城の内側約50mに位置し、東門推定地の南方約200mの所にあたる。水城には複数の導水施設である木樋が存在することは、既に多くの知るところである。木樋は内側から外濠に水を満たすための施設である。しかしながら、如何にして水が木樋に導かれたのかについては、今のところ明確な遺構が検出されておらず、また、その回答も得られていない。ただ、これまでの調査結果からの判断では内側にも浅い濠が存在し、この濠が導水に重要な機能を有したのではとのおぼろげながら結論めいたものが得られているものの、その具体的な構造となると不明な点が多い。この様な現状からその手がかりを一つでも得るのが、今回の調査の目的である。

調査地に幅2.5m×長さ14.5mのトレンチを設定した。調査面積は36㎡である。調査地番は太宰府市国分１丁目240-8番地で、調査期間は平成６年６月２日～同月４日の２日間である。

検出遺構

今回、検出した遺構は溝１条である。発掘区が狭小であったこともあり、溝の全体については把握できていない。



第93図　水城跡第27次調査区・土層図

溝

SD130　発掘区の中央部で検出したが、今回は南側の溝肩を確認しただけで全体の規模については明かでない。発掘区の北端部で北側の溝肩を確認できなかったことから、溝の幅は少なくとも7.5m以上の規模が推定可能である。溝の底部は湧水が激しく一箇所で確認しただけであり、正確な深さは必ずしも明確ではないが、溝肩から約1.3mである。

埋土は大まかであるが、上層から黄白色砂層・暗灰色粘質土層・褐色砂礫層となっている。特に、最下層になる砂礫層は厚く、流れの激しさを示しており、この中には多量の磨滅した瓦片が混入している。若干の出土土器からみると年代的には弥生･古墳期から9世紀代を下限とする時期が考えられる。

出土遺物　（第94図）

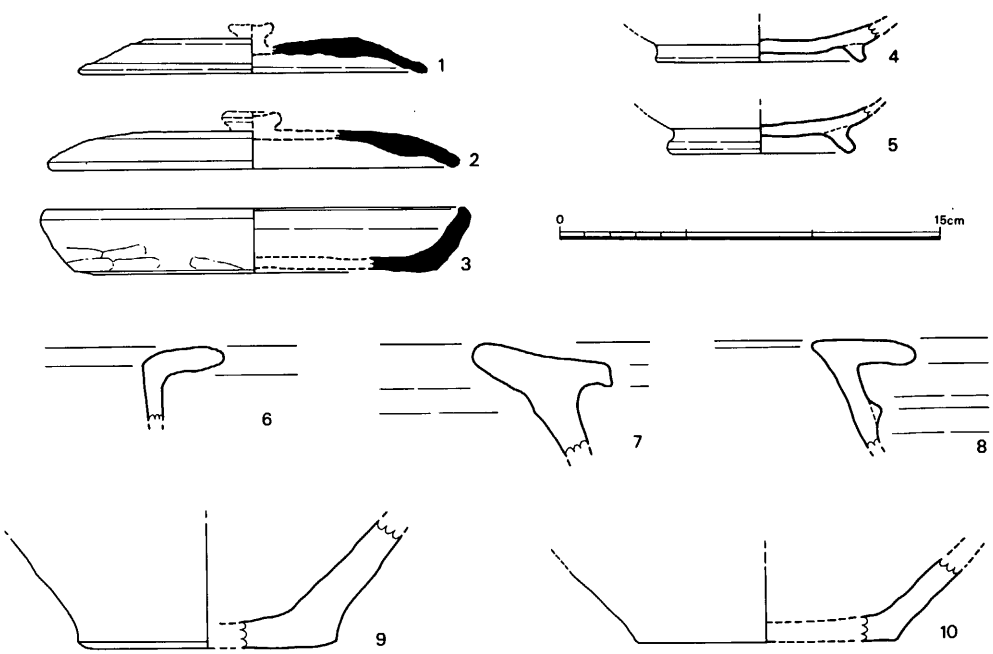
須恵器

蓋（1・2）　2点とも口縁部内面に僅かな段をもつ。天井部はヘラ切り。

皿（3）　口縁端部を内側につまむ。外面の体部下位と底部は手持ちヘラ削り調整。

土師器

椀（4）　高台はハ字形に開く。器面の磨滅が著しい。



第94図　水城跡第27次調査出土土器実測図

黒色土器

椀（5）　B類の椀の高台部小片である。内外面とも燻して黒色化しているが、器面の磨滅が著しく調整は不明。

弥生土器

甕（6～10）　6は逆L字状口縁の破片で、横方向のナデ調整。7は甕棺の口縁部。T字状口縁で、内側に張り出して外側には低く傾斜する。8は鋤先状口縁で、口縁下に断面三角凸帯を1条貼付する。9・10は底部破片である。ともに平底だが、9は器壁が厚く甕棺の可能性が高い。10は底部の立ち上がりからみて甕というより鉢であろう。

小結

調査の結果、東西方向の溝1条を検出したが、溝の規模などについては発掘区が狭小であったため明らかにできなかった。しかしながら、溝の幅が7m以上であること、埋土の最下層がかなり厚い砂礫層であることなどからみると、この溝はかなり大きな幅をもった激しい流れであったことが推定される。現在の地形をみると、四王寺山から派生する小丘陵が長く延び、平野部を最も狭小にしている。水城の土塁はこの丘陵に接続し、防御線としている。今、この丘陵の裾部に沿って小さな流れがあり、この流れは今回の調査区の南側を西流し御笠川に注いでいる。調査地付近の田畑の畦畔と畔道は周囲とは異なり、不自然な状況を呈している。この畦畔は国分寺跡付近から丘陵に沿ってある一定の幅をもってみられ、今回検出した溝はこの範囲の中に入る。即ちこの畦畔は旧流路の痕跡を示していると考えることができる。今回、溝SD130の最下層にみられた磨滅した瓦片は、上流の国分寺跡や国分尼寺跡などに使用されていた瓦とみることはあながち否定できないであろう。

はじめにも記したとおり、外濠への導水がどの様になされたのか、その具体的な構造なり解釈が現段階でなされているわけではない。木樋の取水部の構造、それに溝に導くための施設など、不明な点が多い。この様な状況の中で、溝SD130を検出したことは、導水の構造の解釈にあたり大きな前進といえよう。即ち、この溝をせき止めることにより、水を木樋に引き入れることはさほど困難なことではなかったであろう。

別　表

器種		挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
							ヘラ	糸		
SD 101（水城跡第 26 次調査）										
須恵器	蓋	82	1	(14.2)						
	杯	〃	2		(9.2)					
		〃	3		(9.2)					
	壺	〃	4		(12.0)					
		〃	5	(11.8)						
		〃	6		(14.0)					
		〃	7		(16.0)					
土師器	小皿 a	〃	10	7.6	6.1	1.0		○		
白磁	皿	〃	11		(6.8)					
	椀	〃	12		6.4					
		〃	13		(6.6)					
青磁	椀	〃	14	(16.0)	6.2					
		〃	15		5.0					
		〃	16		(6.0)					
SD 102										
須恵器	杯	〃	17	(14.0)	(9.0)	3.5				
		〃	18	(14.0)	(8.8)	2.9				
		〃	20		(9.2)					
	皿	〃	19	(15.2)	(11.2)	2.0				
	甕	〃	22	(19.8)						
土師器	小皿 a	〃	23	7.7	6.8	1.0		○		
		〃	24	8.3	6.4	1.4		○		
SK 125										
土師器	杯	83	4	14.8		3.2				○
瓦器	椀	〃	5	15.8	(5.4)	5.0				
SX 107										
須恵器	蓋	〃	6	(16.0)						
		〃	7	(13.7)						
		〃	8	14.0						
	甕	〃	10	(23.2)						
土師器	杯	〃	11	(14.0)	(7.0)	2.9			○	
SX 108										
須恵器	杯	〃	13	(16.6)						
SX 121										
土師器	小皿 a	〃	15	(7.6)	(6.2)	1.7		○		
灰褐色砂質土層										
須恵器	蓋	84	1	(13.0)		2.0				

器種		挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
							ヘラ	糸		
茶褐色砂質土層										
須恵器	蓋	84	2	(13.2)		3.0				
		〃	3	(10.0)		1.9				
	杯	〃	4	(13.4)	(8.2)	4.3				
茶褐色土層										
須恵器	蓋	〃	5	(14.0)						
褐色土層										
須恵器	杯	〃	6		(6.6)					
茶褐色土層										
須恵器	杯	〃	7		(4.3)					
		〃	8		8.9					
	壺	〃	9	(12.2)						
SD 130（水城跡第 27 次調査）										
須恵器	蓋	88	1	(13.8)						
		〃	2	(16.2)						
	皿	〃	3	(16.6)		2.6				
土師器	杯	〃	4		(8.4)					
黒色 B	椀	〃	5		(7.4)					

Ⅳ　水城跡の理化学的調査

1．水城土塁の地盤工学的研究

佐賀大学低平地防災研究センター　林　重徳

1．序　説

平成5年11月、12月に水城堤の一部がトレンチ開削された際に、地盤工学研究者の視点から築堤断面の一部を観察･調査[1]する機会を得た。その際トレンチ内の掘削側壁より不撹乱試料を採取し、簡単な土質試験を実施するとともに、平成6年7月より水城堤とその基礎地盤を含む2本のボーリング調査および数種類の土質試験が実施された。

ここではまず、約1330年前の施工当時の情勢、水城堤の地形・地質学的な位置、ならびに過去の調査報告書の内容等を地盤工学的視点から再検討し、“水城”の築堤技術について考察する。次に、平成5・6年度に実施した観察および調査・試験の結果等に基づいて、防衛施設としての堤体-濠の形状と併用工法を考察し、現在の安定解析法を用いて当時の技術水準の評価を試みる。さらに、約1,330年の“時間”が、土構造物の内部で土質特性にどのような影響と変化をもたらしたかについて、いくつかの試験結果を報告する。このことは、今日築造されているアースダムや河川堤防等の土構造物が、数百年～千数百年後にどのように変化するかを予測するための極めて貴重な情報となるものであり、遺跡調査が“過去”の調査に止まらず、“未来”への重要な調査となることを示すものである。

2．当時の情勢および大堤の位置と役割

2.1　当時の情勢[2)~4)]

土木工事、特に土工においては、その構造物としての目的とともに、許容され得る工期や地形上の位置など、工事を取り巻く情勢・状況が、土工量と断面形状の決定や施工方法の選択に大きな影響を与える。ここでまず、土木工事を計画・施工する地盤技術の立場から、中国の史書や我が国の記録に基づいて、水城の築堤当時の情勢と工事の目的を考察すると、次のように要約される。

（1）我が国における西の政治・経済、軍事の中核である「(筑紫) 大宰府」を防衛する施設であり、国の威信と存亡をかけた工事である。

（2）しかも、その築堤工事は、何時敵の来襲があるかも知れないと言う非常な恐怖心と緊迫した状況の下で、施工されたものである。

（3）したがって、失敗は許されず、一月でも一日でも早い完成が要求される工事であった。

（4）また、当時の国力からも、水城の築堤工事と二つの山城（大野城および椽の2城）の築造

を同時に施工したとは考え難いので、水城の築堤工事はほぼ1年数箇月以内で終了したものと考えられる。

即ち、水城築堤は、今日言うところの**“急速施工”**と**“確実施工”**が、同時に要求される大規模土工工事であったと言えよう。

2.2 地形・地質的位置

“水城（大堤）”は、御笠川を遮断する位置にある大宰府“水城”の他に、天神山土塁、大土居土塁、上大利土塁などと呼ばれる高さ約5m、基底幅約20mの小規模な築堤（“小水城”）が、計6箇所確認されており、まさに、「大宰府」を取り囲む形で、一連の防衛施設が配置・構築されている。

Fig.1は、今日の地質学者が描いた福岡平野の第四紀地質図である。基盤岩は堅牢であるが、第四紀層は相対的に未固結・軟弱な地盤を形成する。特に、河川周辺の平坦な部分には軟弱な粘土層が分布する場合が少なくない。図中に示されるように水城堤は、「大宰府」を控えて御笠川を遮断し、基盤岩の最も狭隘な位置に構築されており、その位置の選定においても地盤に関する十分な知識を持った技術者によって、決定されたことが伺える。

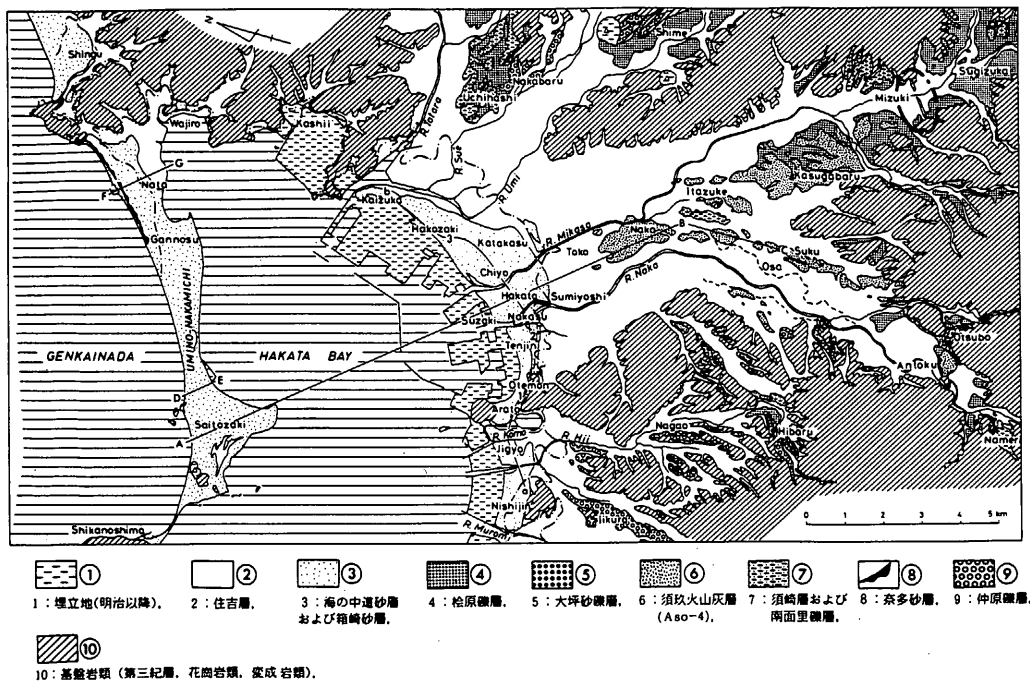


Fig. 1　福岡平野の第四紀地質図[5]と水城の位置

2.3 水城の役割と断面形状

“水城大堤”の役割は、以前の通説では、土塁中央部を貫流する御笠川を堰止め、博多側からの敵軍来襲時に、土塁を切って落し、敵軍を博多湾に押し流すためのものではないかとするものであった。しかし、その後、1972年の小水城の発掘調査において、土塁の外側に幅約7m、深さ2m程度の濠が確認され、さらに1975年に実施された大堤に関する本格的な調査により、大堤の外側（博多側）に大規模な濠が確認され、“水城”の防衛施設としての機能と構造の輪郭が明らかになった。即ち、『大堤が人工の盛土であって、版築工法によって築成されたもので、まず、幅75mに近い広い壇（テラス）を築き、その上にさらに基底幅15m、高さ約7mの堤が設けられていることが判明した[8]。』と報告されている。これらの調査結果をもとに“水城（大堤）”の当時の様子と断面形状をイラストレーションに描いたものがFig. 2である。

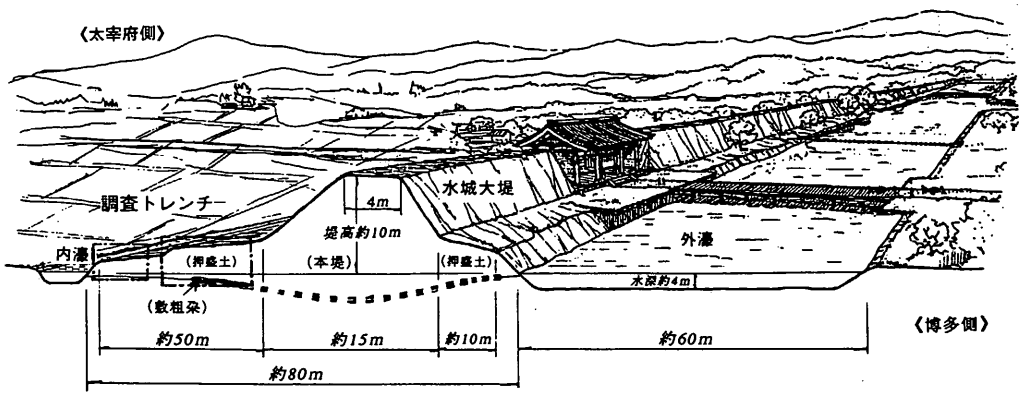


Fig. 2 “水城（大堤）”の当時の様子と断面形状のイラストレーション（文献2に加筆）

3.“水城”の築堤技術に関連する過去の調査報告[6)~11)]

過去に“水城”と交差する鉄道や道路が計画・施工された際などに実施された調査の多くは、基本的に考古学的視点からの調査であり、その都度、遺物および遺構については極めて丹念な調査が実施され、詳細な記録が取られている。地盤工学の視点からこれらの報告書に目を通し、築堤技術に関連するいくつかの非常に興味深い記述や発掘物について、以下に考察する。

3.1 敷粗朶

大正2(1914)年の鉄道工事中に一部壊平された大堤の断面を、相前後して観察した東大文科大学教授黒板勝美の〔福岡県学術旅行報告書；史学雑誌25-3〕、および九州医科大学の医学博士中山平次郎の〔水城の研究；筑前史談会講演集〕に、築堤に関する興味深い記述が見られる。即ち、黒板教授は『…下部は凡五六寸の層を成せる粘土を積み上げ、その間ごとに雑木を挿め

り、…』と報告しており、また中山博士はさらに詳しく観察調査し、『水城深部の粘土質の断面よりでる樹木枝葉の埋没し方は、水城根堅工事の築造法を識知するに有力なる参考となる。…多くは枝葉を境として、上下の土質が多少性状色沢を異にする…。一水平面における枝葉の方向は不規則であって、一定の方向を見い出しえぬ。…木葉の数は甚だ区々であるが、数十葉が圧搾され重なって固着し、…その全体の厚さが一二分に過ぎぬ。樹枝は直径一寸二三分以下のものが多く…』と記述している。さらに、注目すべき記録は、『…壊平の際之を検するにその樹枝は圧迫せられて扁平となれるもの多きに、樹葉はなお緑色を呈し恰も生木を見るが如く殆ど千二百四十年を経過せるものとは想像する能わざるの感あり、…』〔黒板〕と述べ、採集した樹葉の種類まで、大樟・青橿・藪肉桂・裏白橿・梼橿・小羊歯の6種を特定できている点である。

ここに記述されている状況は、軟弱な地盤のトラフィカビリティーの確保、および地盤補強を目的として、現在も用いられる“敷粗朶工”そのものである。しかも、その粗朶が腐植せず緑色を呈していたことは、その耐久性が確保されていたことを示唆しており、意識して施工されていたとすれば驚くべきことである。

3.2 版　築

1930年～1932年には、東門西側で発見された木樋の調査が本格的に実施され、木樋周辺や本堤中央部においては、締固め層の厚さ等から“版築”による施工が推定されている。

版築は直な自立盛土を可能にし、結果として木樋への土圧を軽減するものであり、木樋に盛土の圧力が作用しないような盛土工法を意識して採用しており、土圧と木樋の安定に対する認識を持った技術者による施工がなされている。

3.3 木製品

1986年10月～11月に、住宅建設に先立って実施された第14次調査において、灰白色砂層から出土した木製品（“えぶり”や“杭”；Fig. 3）は、当時の土工の施工方法と器具を考える上で貴重である。『長さ32.7cm、幅7.8cm、厚さ2.2cmを測る。身は割板材を使用し、直線を呈する下縁に15箇所の山形の切り込みを入れ、歯を形成する。歯は使用によってかなり磨耗しているが、中央部が特に擦り減っている。…』と記録されている。

この器具が、もっこ等で運ばれてきた土を敷き均す道具として用いられたであろうことは、容易に想像される。事実、トレンチ調査で観察される低盛土部の成層状況は極めて良好であり、土工における敷き均し・締固めの

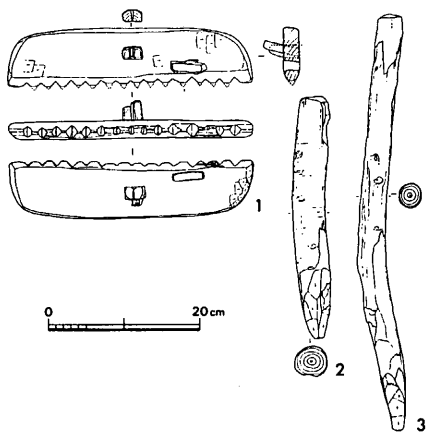


Fig. 3　“水城”から出土した木製品

重要性を認識して施工されたものと言えよう。

3.4　木杭や枕木状の木材群

また、1993年４月～６月にかけて実施された
第25次調査においては、西門切り通しの西側の旧低湿地盤と考えられる箇所(Fig.５参照；C地点)で、“枕木状の木材群の埋地遺構”(Fig.４）が確認されている。

出土した木材群の様態は、平地に築造された城の石垣の基礎工としてしばしば採用されている梯子胴木を連想させるものである。中世以降盛んになった平城の石垣を築く基礎技術の原形が、すでに用いられていたことになる。

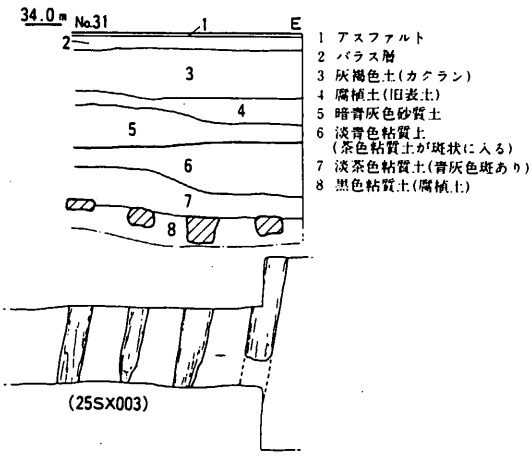


Fig.４　C地点付近の“枕木状の木材群”の出土状況

４．平成５・６年度の開削トレンチ調査とボーリング土質調査

Fig.５は、“水城”とそれを横断する鉄道や道路等の構造物とともに、平成５・６年度に実施されたトレンチ調査とボーリング調査の断面位置等を示したものである。

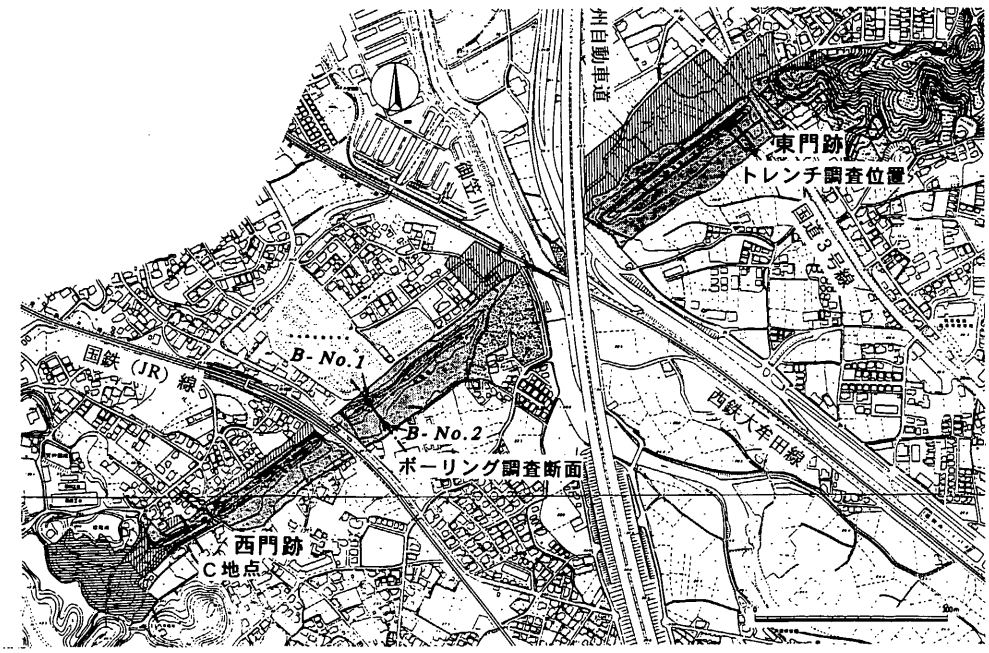


Fig.５　平成５・６年度の調査位置図

4.1　開削トレンチの観察

Fig. 5 の国道 3 号線沿い太宰府側の低盛土部で、平成 5 年度に実施された開削トレンチの断面をFig. 6 に示す。この調査箇所においても、旧水田面と思われる粘土質の上面と、さらに約15～20cmのまさ土を盛り立てた上面の 2 層に“敷粗朶”が確認された。写真－ 1 は“粗朶”の出土状況である。しかも、それらは低盛土部の全域に敷設されたものではなく、第 1 層目の粗朶が高さ約10mの本堤ののり先約12mの位置から、また第 2 層目はのり先約10mの位置から本堤基礎にかけて敷設されており、明らかに築堤の当初から、本堤盛土の高さと位置を意識して施工したものと考えられる。

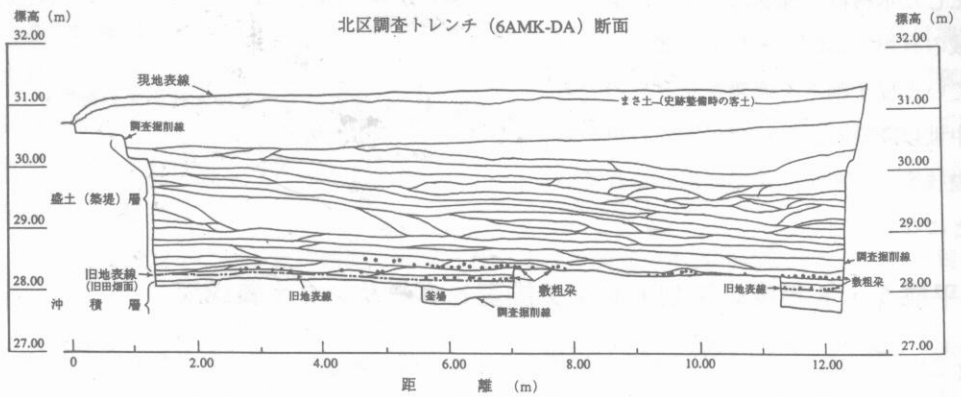
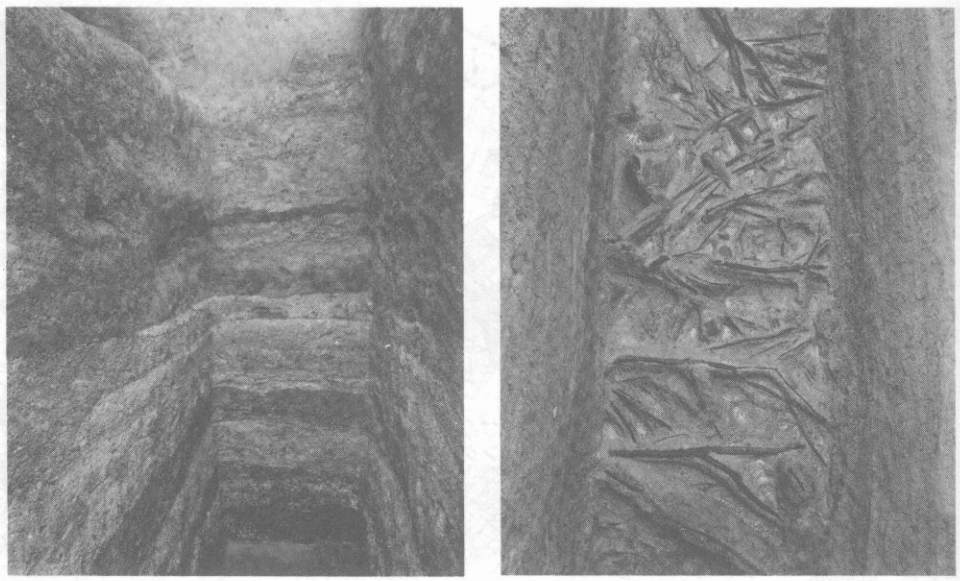


Fig. 6　開削トレンチの断面－旧地表面、敷粗朶および築堤の締固め層状態－



写真－ 1　“敷粗朶”の出土状況

以上の他、掘削断面図の観察から確認または推測される事実と状態を、次に列挙する。

（1）築堤時の締固め層の境界を示す部分に鉄分や粘土分の沈積（沈殿）がみとめられる。

（2）鉄分や粘土分が沈積した境界部は、稠密でかつかなり固く、固化が進行している。

（3）締固め層の中間部は、かなりポーラスで強度も低い。

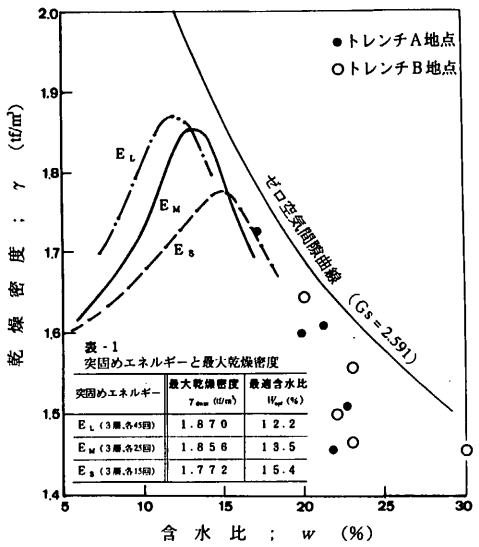
（4）締固め層厚は、低盛土部で約20～30cmから本堤に向かって次第に薄くなる傾向にある。

（5）また、締固め層面自体も本堤に向かって傾斜している。

（6）堤体形状から判断すると、博多側および太宰府側腹付け堤はいずれも高さ10～14mの本堤の安定を確保するための「**押え盛土**」と考えられる。

4.2 低盛土部の密度と締固め試験

開削トレンチの断面で実施した単位体積質量試験と、同地点より採取した土試料を用いて3つのエネルギーで行った突固め試験の結果を、表－1およびFig.7に示す。低盛土部は、比較的低いエネルギーでの締固めが行われているようであるが、密度の実測値はかなりの範囲に分布しており、密実部とポーラス化した部分の存在を裏付けている。



表－1
突固めエネルギーと最大乾燥密度

突固めエネルギー	最大乾燥密度 γ_{dmax} (tf/m³)	最適含水比 W_{opt} (%)
E_L (3層,各45回)	1.870	12.2
E_M (3層,各25回)	1.856	13.5
E_S (3層,各15回)	1.772	15.4

Fig. 7　突固め試験結果と低盛土部の密度

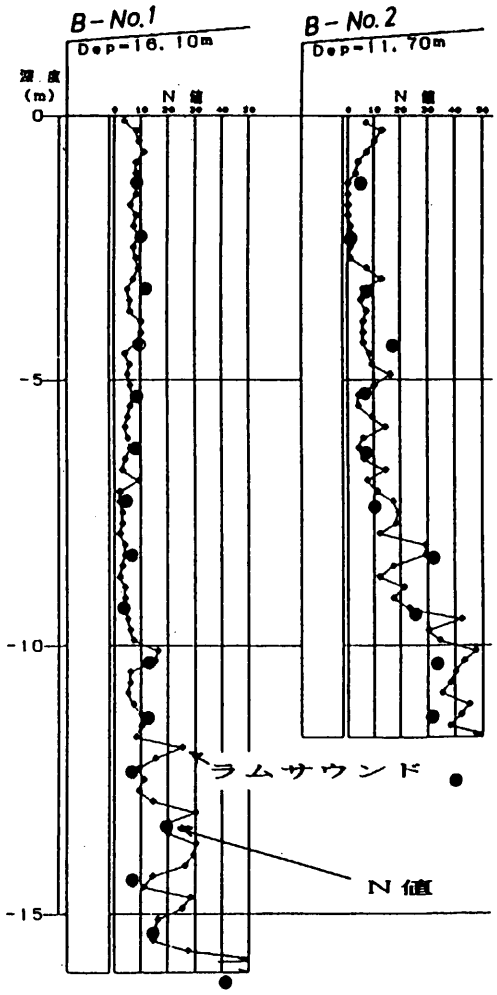


Fig. 8　ラムサウンド試験と標準貫入試験の結果

4.3 ボーリング調査

今回本堤中央部（B－No.1；標高34.14m）および太宰府側の低盛土部（B－No.2；標高28.11m）で実施したサウンディング試験の結果をFig.8に示す。ラムサウンド試験の結果は、10cm貫入毎の値を測定し、30cm貫入値に換算したものである。B－No.1においては、深度7.0mから10.0mにおいて木枝・葉片を狭在する層が3・4層確認されている。旧地盤面は深度10.0mの位置と考えられる。また、B－No.2においては、深度5.35mから6.60mにおいて木枝・葉片を狭在する層が2層確認されている。この地点の旧地盤面は深度6.60mの位置と考えられる。サウンディング試験の結果からも、本堤の方が大きな値を示しており、入念な施工（“版築”か？）がなされていることが窺える。

5．“築堤技術”について

5.1 水城の堤体形状と併用工法

ボーリング調査断面における測量の結果、本堤博多側ののり面は1：1.1～1.2の急勾配と約8m幅の小段を持ち、太宰府側では1：2.2～2.5程度ののり面と1：12～15の緩斜面を成すことが確認された。水城の役割が博多側からの敵の侵攻を迎え撃つ防衛施設であり、前面（博多側）に深さ4mの濠を持つ羅城であるとすると、防衛上は急勾配のまま濠に至る形状が効果的であろう。したがって、敢えて小段を設けざるを得なかった理由は、沖積平野に高さ約10～14mで、1：1.1～1.2の急勾配の盛土を築くために、“押え盛土工”の必要性を認識していたものと考えられる。

この“押え盛土工”の概念とその有効性を認識していたことを傍証する事例は、昭和48年に実施された「水城欠堤部－石敷遺構の調査」の報告書に見ることができる。即ち、Fig.9はこの報告書に記録されている石敷遺構東壁土層断面である。出土状況が『…使用された石は、一辺110×60cmをはかり、多くの石は50×50cm程度である。…乱雑に投げ込まれたかのように積まれており、…石敷の間に木杭が乱雑に打ち込まれ、…』と記録されていることから、築堤途中にすべり破壊が発生し、慌てて抑止杭とカウンターウェイトとしての石を投入した様子が窺える。

また、敷粗朶についても、水城の築堤における樹木枝葉の使用は、通常主にトラフィカビリティを確保する目的で、軟弱な地盤面上に1層敷設される敷粗朶の域を越えており、この“水城”の築堤方法が天然の材料である“粗朶”を用いた、今日言うところの“補強土工法”を併用したものであることを示している。

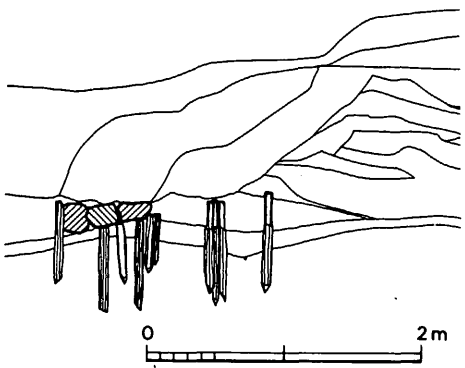


Fig. 9　すべり破壊の痕跡と杭および石群[9]

5.2 水城堤の安定計算

以上の観点から、築堤工法としての“押え盛土工”と“補強土工”の効果を検討するため、1つの想定される円弧すべりについて、分割簡便法により調査断面に関する安定計算を行った。

安定計算に用いた堤体と基礎地盤の諸定数を表－2に、検討した断面形状とすべり円弧をFig.10に示す。用いた堤体の強度定数は、「時間効果」による強度の増加を考慮・推定して、不撹乱試料についての直接せん段試験結果の約55%の値を仮定した。

検討した対策工と安定計算結果の一覧を表－3に示す。押え盛土などの対策工が無い状態での安全率は1.00であるが、押え盛土工によって安全率が0.11増加し、更に3層の敷粗朶を用いた補強土工によって安全率は0.09増加し、結果的に両対策工法の併用によって安全率は1.20が確保される。

表－2 安定計算に用いた堤体と基礎地盤の諸定数

層区分	単位体積重量 γ(tf/m³)	強度定数	
		粘着力 τ(tf/m²)	内部摩擦角 ϕ(°)
B－1	1.901	3.4	10°
B－2	1.606	1.0	5°
G	1.606	1.5	5°
敷粗朶	・EL25.2、EL26.2、EL26.8の3層に「敷粗朶」を配置。 ・敷粗朶は直径10～20㎜の枝木が平均10cmの間隔で配置され、1層当たりの引張り強度を2.0tf/mと仮定。		

表－3 安定計算結果の一覧

ケース	対策工	安全率
Case－1	押え盛土等の対策工法無し	1.00
Case－2	押え盛土有り	1.11
Case－3(1)	押え盛土＋敷粗朶（1層）	1.14
Case－3(2)	押え盛土＋敷粗朶（2層）	1.17
Case－3(3)	押え盛土＋敷粗朶（3層）	1.20

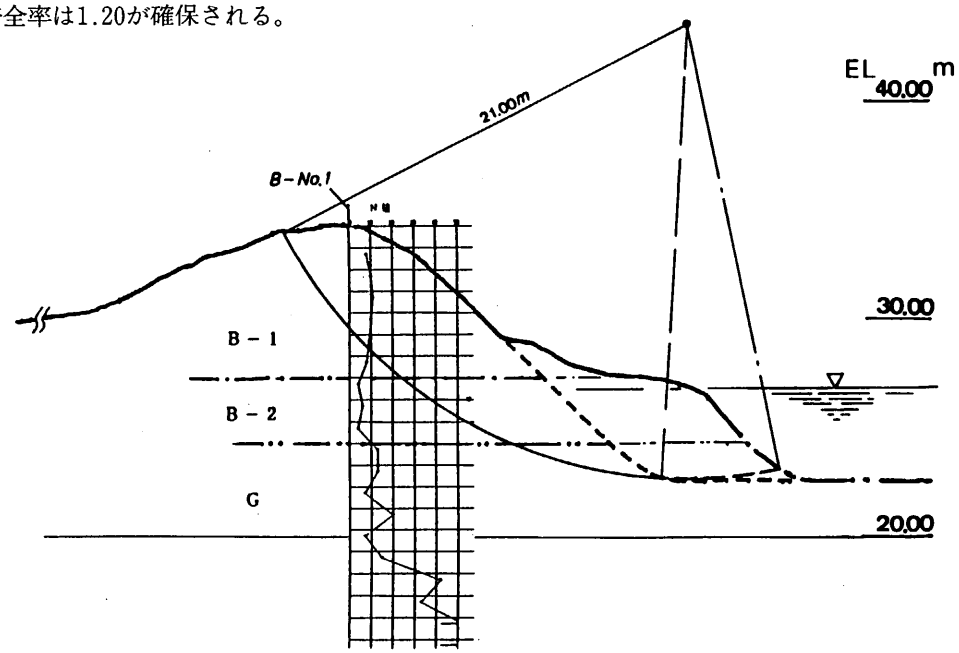


Fig.10 検討した水城堤の断面形状と想定すべり円弧

以上のような調査および検討・考察から、水城の築堤に用いられた地盤技術としては、次のようなものが考えられよう。

1) 盛土の施工に関しては、本堤や木樋付近においては、“版築工法”が、また低盛土部においては通常の“締固め施工”が行われているようである。締固め施工部においても、出土した“えぶり”等を用いて敷均しと撒き出し厚さの管理がなされている。版築工法については、固化材使用の有無や型枠のとり方等を含めて、今後の調査が必要であろう。
2) 沖積地盤上に約10～14m規模の急勾配の築堤を、しかも短期間にかつ確実に施工するために、“押え盛土工”および“敷粗朶による補強土工”等が必要であることを、盛土の最下部の施工段階から認識しており、極めて高度な知識をもった技術者によって、指揮・施工されたことを窺わせるものである。
3) 超軟弱な箇所では、“梯子胴木”的工法を採用している。
4) 工事途中ですべり崩壊を生じた箇所では、“抑止杭工”と石材投入による“カウンターウェイト工”を施工している。

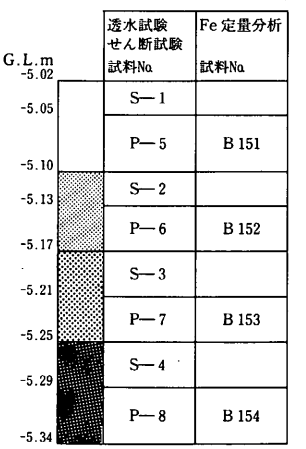
6．水城堤の土質特性における年代効果

平成5年に実施された開削トレンチ調査において、写真－1に示されるように、ほぼ等しい厚さに良く敷均し締固めたと思われる成層状態が確認された。締固め各層の上部はかなりポーラスで強度的にも低いようで、中間部から下部は稠密で固化が進行している様子が認められた。また、層の上部は白色を呈し、中間から下部につれて茶褐色へと明瞭な色調の変化が観察された。これは、盛土材料であるまさ土に含まれていた鉄分等の金属質と土の細粒子が、雨水や地下水の浸透によって、1,330年の歳月をかけ移動･沈積したためと考えられる。即ち、年代効果である。

この年代効果を調べるため、ボーリング調査において採取された試料より、1つの締固め層を特定し、その層の上部、中間部および下部の各部から不撹乱供試体を作製した。実施した試験は、土粒子の密度試験、Fe定量分析試験、一面せん断試験（S試料）および透水試験（P試料）である。次にその結果の一例を示す。

表－4に、本堤のボーリングNo.1から採取した深さG.L.-5.02m～-5.34mの厚さ32cmの層について実施した試験と供試体の位置関係を示す。なお、土粒子の密度試験は、8供試体すべてについて実施した。

表－4 年代効果を調べた層の供試体と試験



6.1 土粒子の密度と鉄分の移動

Fig.11に、土粒子の密度分布を示す。色調が最も濃い最下部ではなく、上から3分の2の付近で、最も大きな密度を示している。また、Fig.12には、鉄分の定量分析結果を示している。図中の破線は、当時の築堤材料の土取場としても想定可能な、水城堤から約2kmの距離の現地山（土取場）から採取したまさ土についての値である。土粒子密度が最も大きな位置において鉄分含有量が卓越する。地山の値と比較すると、上部における鉄分の溶脱・移動と、上から2/3の付近における鉄分の沈積が認められる。

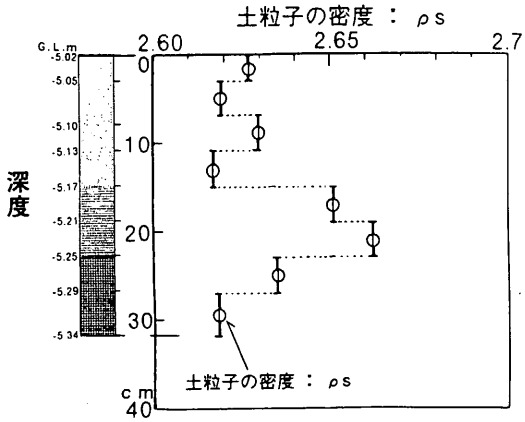


Fig.11 本堤G.L.-5.02m～-5.34mの締固め層における土粒子の密度の分布

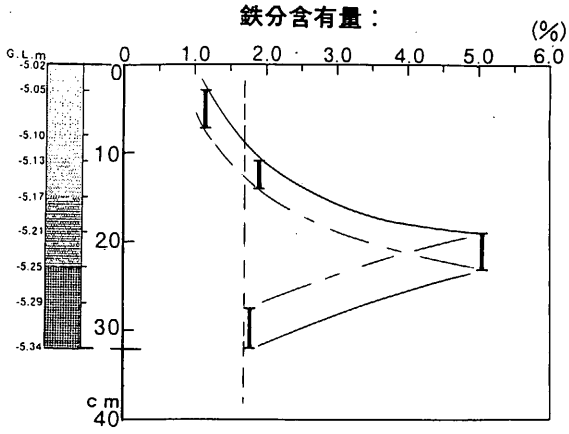


Fig.12 本堤G.L.-5.02m～-5.34mの締固め層における鉄分含有量の分布

6.2 力学特性および透水性特性の変化

Fig.13は、鉛直応力0.2kgf/cm²で実施した直接せん断試験結果の応力～変位関係を示す。供試体No.S-1,S-2,S-4の不撹乱試料とともに、試験後これらの試料を混合してS-2試料と等しい密度に締固めた供試体（撹乱土）および現土取場の土を締固めた供試体（地山の土）の結果を示している。No.S-1,S-2,S-4の不撹乱試料の場合、初期挙動は直線的でほぼ一致しているが、ピーク強度はポーラス部から稠密になるに従って順次大きな値を示すようになる。しかし、撹乱土に比べると、ポーラス部の強度でもかなり大きな値を示しており、締固めた直後の試料には無い年代効果としての固結作用の影響と考えられる。

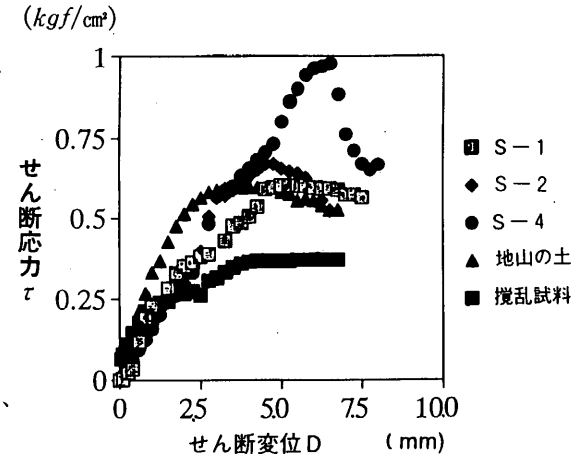


Fig.13 本堤G.L.-5.02m～-5.34mの締固め層における一面せん断試験結果の比較

Fig.14には、透水試験の結果を示す。土粒子の密度が最も大きく、かつ鉄分の沈積が認められた付近の透水係数が最も小さく、ポーラス部および最下部の透水性係数は最小値の10～20倍にも達している。鉄分および土粒子細粒分の移動・沈積は、透水特性に最も大きな影響を及ぼしているようである。

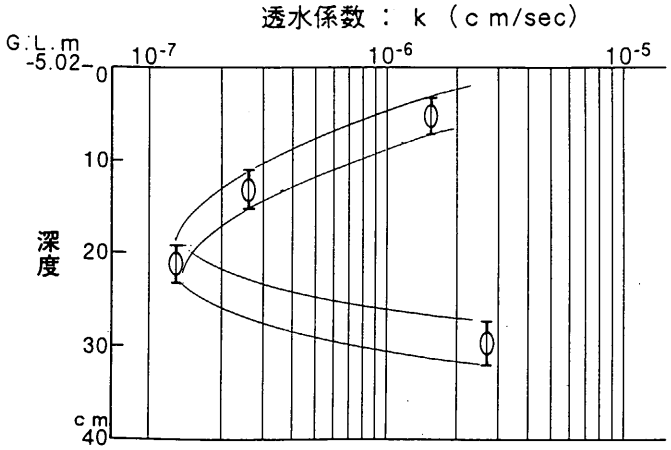


Fig.14 本堤G.L.-5.02m～-5.34mの締固め層における透水係数の分布

7．おわりに

「日本土木史（明治以前）[12]」によれば、“崇神天皇六十二（625）年冬十月　河内狭山に始めて、依網池を造り、…、又応神天皇七年八・九月、高麗人・百済人・新羅人等来朝し、武内宿禰に命じて、諸韓国人等を領して、池を作り、因って韓人池と号す。”とあり、すでに朝鮮半島からかなり高度な築堤技術が伝来していたことは確かであろう。事実、この河内狭山池（依網池？）に関する最近の調査において、築堤の基部から複層の腐植層が確認されており、“敷葉工法”と名付けられている。

過去の発掘調査における詳細かつ忠実な記録および今回実施している調査・試験と解析結果から推論すると、“水城”が地盤の工学的判断と土工技術に関する極めて高度かつ豊富な知識をもった技術者によって指揮・監督されたことは確実であろう。また同時に、実際の施工・労務に携わった多くの人々も、このような高度な技術を受け入れるに十分なレベルにあったといえよう。材料こそ天然のものであるが、また、それ故に、結果として千数百年の耐久性をも保持している“水城築堤に用いられている技術”は、千三百年を隔てる“現代の技術”をある意味では凌駕しているとさえ言うことができる。“水城”の堤体（特に版築工法や城柵）と基礎および木樋と濠の関係等に関する調査が進めば、基礎地盤の性状と堤体を含む力学特性や化学的特性および水位関係、利水構造が明らかとなり、さらに、当時の技術水準が明らかにされよう。

また、千三百三十年の歳月は、土構造物内の鉄分および細粒分の移動と沈積を生じ、土質特性に様々な影響を及ぼしていることが明らかになった。無論、このような変化は、初期の締固め度合や構成粒子および含有金属等に大きく左右されるものと考えられるが、今後更に調査研究が進展しデータが蓄積されれば、年代効果を実証する貴重な資料を提供するものと考える。

謝　辞；　平成５年度の土質調査では、当時九州大学大学院生の河野貴穂・三倉義教両君の協力を得て、また平成６年度の現地測量と土質試験は、当時佐賀大学学生中田敦也・本山智洋両君の卒業研究の一環として実施した。さらに、ボーリング調査は日本地研㈱の伊東尚美社長と田島恒美常務取締役のご好意によって実施され、また、土質試料中の蛍光Ｘ線分析は三菱マテリアルセメント開発センター小島利広氏のご好意によって実施されたものである。

記して、関係各位に深甚なる謝意を表します。

参考文献・資料

1）林重徳、橋口達也、石松好雄、栗原和彦、横田賢次郎；地盤工学から見た大宰府･水城築堤(その１)　土木学会第49回年次学術講演会講演概要集第VI部門　VI-247　1994

2）石松好雄　桑原滋郎；古代日本を発掘する－４　大宰府と多賀城　1985

3）古田武彦；古代史60の証言　金印から吉野ケ里まで　駸々堂　1991

4）MRT宮崎放送テレビ制作部；遙かなる百済王の縁　黒潮電撃隊1994年３月８15日放映　1994

5）　下山正一；福岡平野における縄文海進の規模と第四紀層　九州大学理学部研究報告地質学　第16巻　第１号　37-58　1989

6）太宰府市教育委員会；水城跡　太宰府市の文化財第24集　1994

7）九州歴史資料館；大宰府史跡　平成５年度発掘調査概報　1994

8）福岡県教育委員会；水城－昭和50年度発掘調査報告書　1976

9）福岡県教育委員会；九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ＸＸVI－福岡県筑紫郡太宰府町水城跡の調査－　1978

10）福岡県教育委員会；水城－昭和51･52･53年度の発掘調査概報と史跡環境整備事業実施概要　1979

11）福岡県教育委員会；特別史跡水城跡－昭和54年度史跡環境整備事業実施報告書II　1980

12）土木学会論；明治以前　日本土木史　1936

2．特別史跡「水城」基底部より発掘された植物遺体の同定について

九州大学農学部　井上　晋

1．調査目的と方法

1993年12月（水城第24次調査）に、水城後背地基底部のトレンチから土砂層と互層で発掘され保管中の植物遺体14資料の種名同定を行った。植物遺体は、主として樹木の葉と枝篠が泥土に圧着・混在した状態でトレンチ部位別に分類されていたため、各資料ごとに水洗いし、葉と枝篠を肉眼またはルーペによって観察、一部は遺体の触診も併用した。

なお、調査は1995年5月10日に実施した。

2．調査結果

（A）種名・科名・部位

各資料別に含有されていた植物種は次のとおりである。

①資料1：ムクノキ（*Aphananthe aspera* Planch.）・ニレ科……葉多数・枝篠

②資料2：タブノキ（*Persea thunbergii* Kosterm.）・クスノキ科……葉少数・枝篠

③資料3：カゴノキ（*Litsea orientalis* Chang）・クスノキ科……葉多数・枝篠

④資料4：ヤブニッケイ（*Cinnamomum pseudo pedun culatum* Hay.）・クスノキ科……葉多数・枝篠

⑤資料5：ヤブニッケイ（学名前出）・クスノキ科……枝篠の樹皮より鑑定

⑥資料6：シリブカガシ（*Lithocarpus edulis* Rehd.）・ブナ科……葉多数・枝篠
コナラ（*Quercus serrata* Thunb.）・ブナ科……葉少数

⑦資料7：ヤブニッケイ（学名前出）・クスノキ科……葉少数・枝篠

⑧資料8：カゴノキ（学名前出）・クスノキ科……葉多数・枝篠
クロキ（*Symplocos lucida* S.etZ.）・ハイノキ科……葉少数
イスノキ（*Distylium racemosum* S.etZ.）・マンサク科……葉少数・枝篠

⑨資料9：ヤブニッケイ（学名前出）？・クスノキ科……枝篠の樹皮より推定

⑩資料10：ジャヤナギ（*Salix pierotii* Miq.）・ヤナギ科……葉少数

⑪資料11：ジャヤナギ（学名前出）・ヤナギ科……葉少数
アオガシ（*Listsea acuminata* Kurata）・クスノキ科……葉少数
クスノキ（*Cinnamomum camphora* Presi）・クスノキ科……葉少数・枝篠

セキショウ（*Acorus gramineus* Sonland.）・サトイモ科……葉少数

⑫資料12：同定不可能……樹皮のない枝篠のみ

⑬資料13：ツブラジイ（*Castanopsis cuspidata* Scot.）・ブナ科……葉少数・枝篠

⑭資料14：カゴノキ（学名前出）・クスノキ科……葉多数・枝篠

以上、資料１～14に見い出された植物は木本12種・草本１種（セキショウのみ）計13種で、うち常緑性はタブノキ、カゴノキ、ヤブニッケイ、クスノキ、アオガシ、シリブカガシ、ツブラジイ、クロキ、イスノキ、セキショウの10種、落葉性はムクノキ、コナラ、ジャヤナギの３種であった。最も多く見い出された科はクスノキ科５種、次いでブナ科３種、他は各１科１種である。

（B）植物遺体の季節性

まず落葉樹に葉が着いていること、次に常緑樹の新葉の大きさ（展開度）と葉質が薄い点、および果実の未成熟なものが付着していない点の諸点から、恐らく晩春から夏（５月中・下旬～７月中旬）頃に伐採され、土中に敷き埋められたものと推定される。

（C）植物遺体の部位

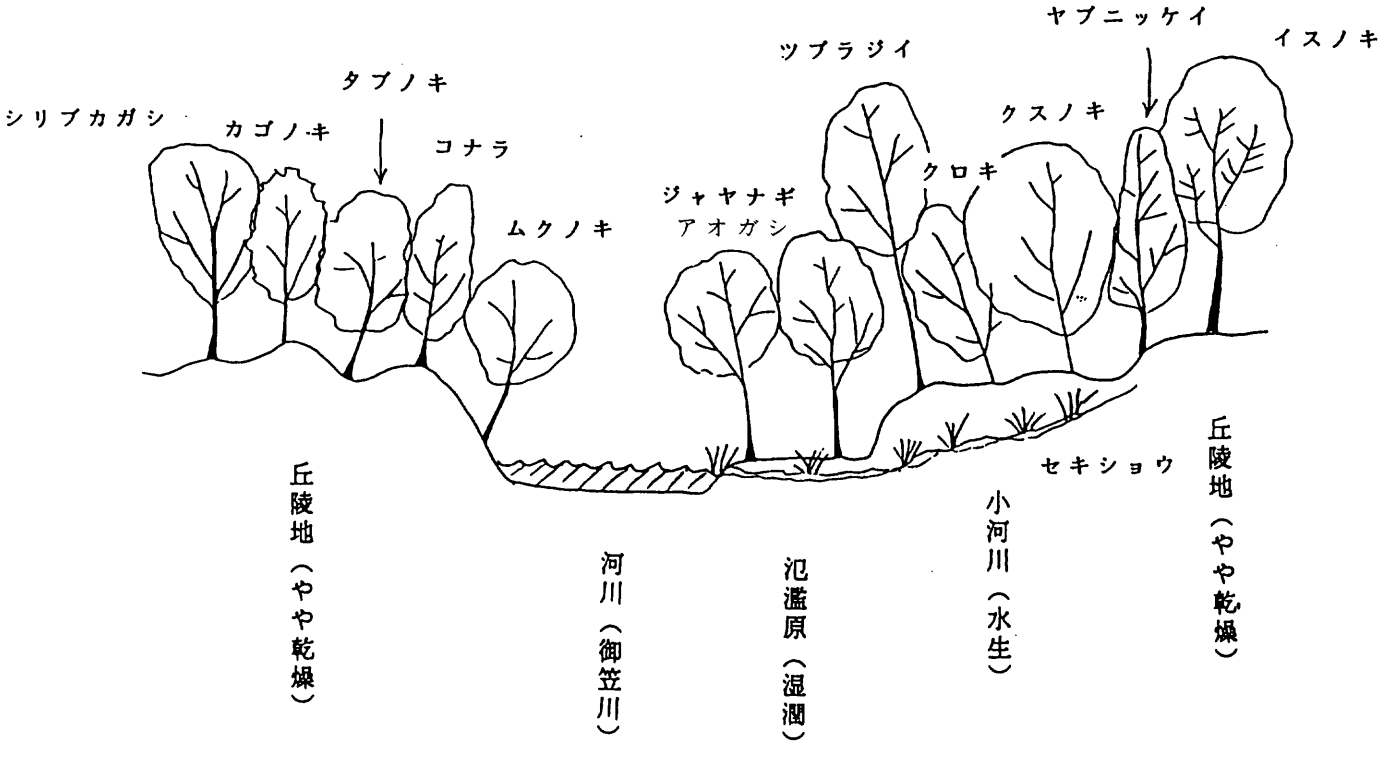
枝篠の大きさ(直径)から推定して、枝先より幹側へ１～２mの長さの部位を利用しているものが多い。ただ、敷粗朶利用以外の部位（太枝・樹幹等）を何に利用したか、また何故、葉や枝篠部位のみを敷き込んだか、当時の土木技術との関連および物理・化学的な解析の必要性も考慮に入れる必要があろう。

（D）植物遺体の葉の形態

土中の堆積状態を見ると、葉はその殆どが伐採後長時間放置された形態の、葉が内外に丸巻いたものがない(但しジャヤナギのみ巻いた状態)。これは枝篠や葉が伐採された後、直ちに敷き込まれたことを示しているとみてよく、この点から、極めて近距離から収集されたか、または工事の便宜上、水中に数時間から数日間貯蔵し、ある程度の量を確保しながら工事が進められたことが考えられる。先にジャヤナギは葉が巻いていたと記したが、これは葉の特性として葉質が薄く、また枝篠の水揚げが余りよくないことから、短期間に萎れる特性を持つためとみなされる。

（E）出土植物の生態

同定された植物13種は、いずれも本調査地を含む福岡県の丘陵低地帯における暖温帯性常緑広葉樹（照葉樹）二次林の一般的な構成種である。要するに、人為的撹乱を受けて成立した森林ではどこでも見られる普通種で、現在の森林植生と殆ど変わらない構造と種組成であることが想像できる。いま、これら13種の生育立地を模式図に示すが、「水城」が造成された当時（約1300年前）もほぼ同様な立地に生育していたとみなしてよいであろう。



水城築城時の照葉樹二次林における出土樹種の生育立地復原図

3．水城土塁中の木樋の電気探査

九州大学工学部　牛島恵輔

1．緒言

福岡県太宰府市の水城跡においては、特別史跡水城跡の解明を目的として、大宰府史跡調査の第５次５箇年計画により考古学の分野のみならず、土質工学（佐賀大学）および物理探査学（九州大学）などの協力により種々の科学的調査が実施されている。

水城跡は全長が1200m、幅が80m、そして高さが13mの巨大な土塁で、664（天智３）年に水を貯える目的で築造され、水城と命名されたと言われている(日本書紀)。そして当時はこの大堤の内部には、土塁の内側から外の濠へと水を導くための導水管（ひのき製）が適当な間隔で数箇所埋設されていたと推定されている（図１)。

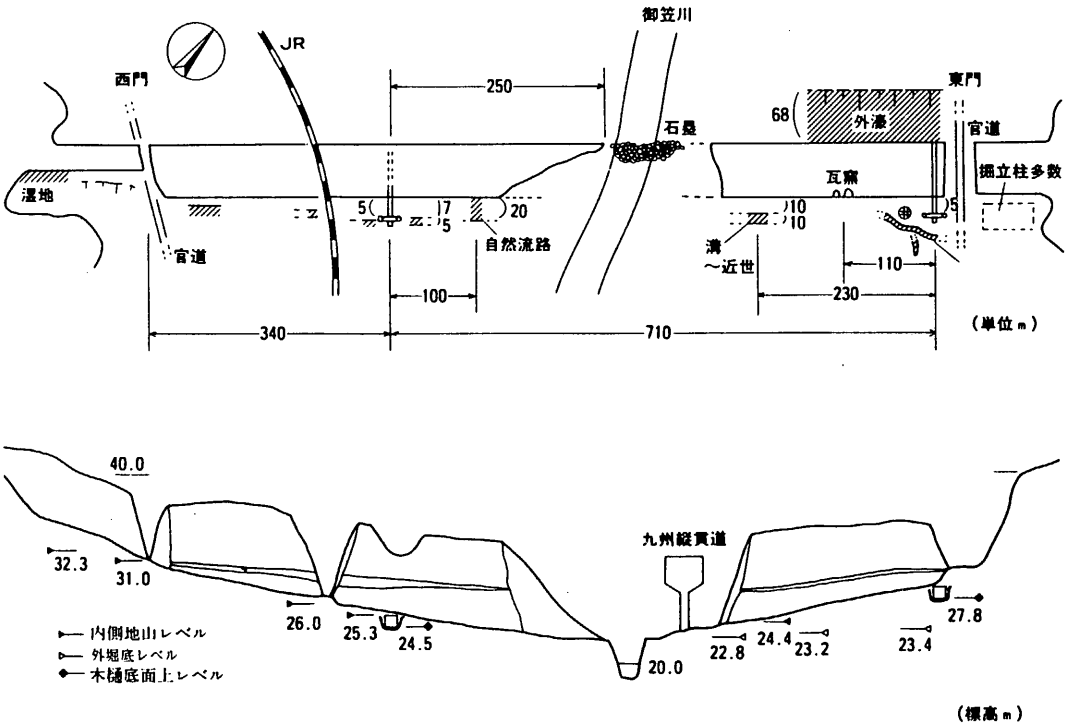


Fig. 1　水城跡の平面図（上図）および推定断面図（下図）

1930（昭和５）年の水城跡の東門（国道３号線側）付近の調査により発見された資料によれば、ひのき製の木樋は取水口の役割を果たしていたものと考えられ、木樋の規模は内のりで幅1.2m、高さ80cm、底板の部分は縦に２枚の板を鉄製のかすがい（長さ25cm、幅５cm）によって交互に接合されており、板の厚さは20cmであることが明らかにされている。

その後、これと同じ木樋が太宰府市吉松の西門（JR鹿児島本線）付近でも見つかっているため、図２に示すような全長1200mにおよぶ水城跡の土塁中には、これらの他にもまだ未発見の木樋が数箇所の地点に埋没しているものと期待されている。

他方、九州大学工学部では、1992（平成４）年に発足した文部省科学研究費の重点領域研究の遺跡探査（研究代表者；奈良国立文化財研究所　西村　康室長）の補助金を受けて、遺跡探査のための電気探査法のシステム開発の研究課題に取り組んでいる。

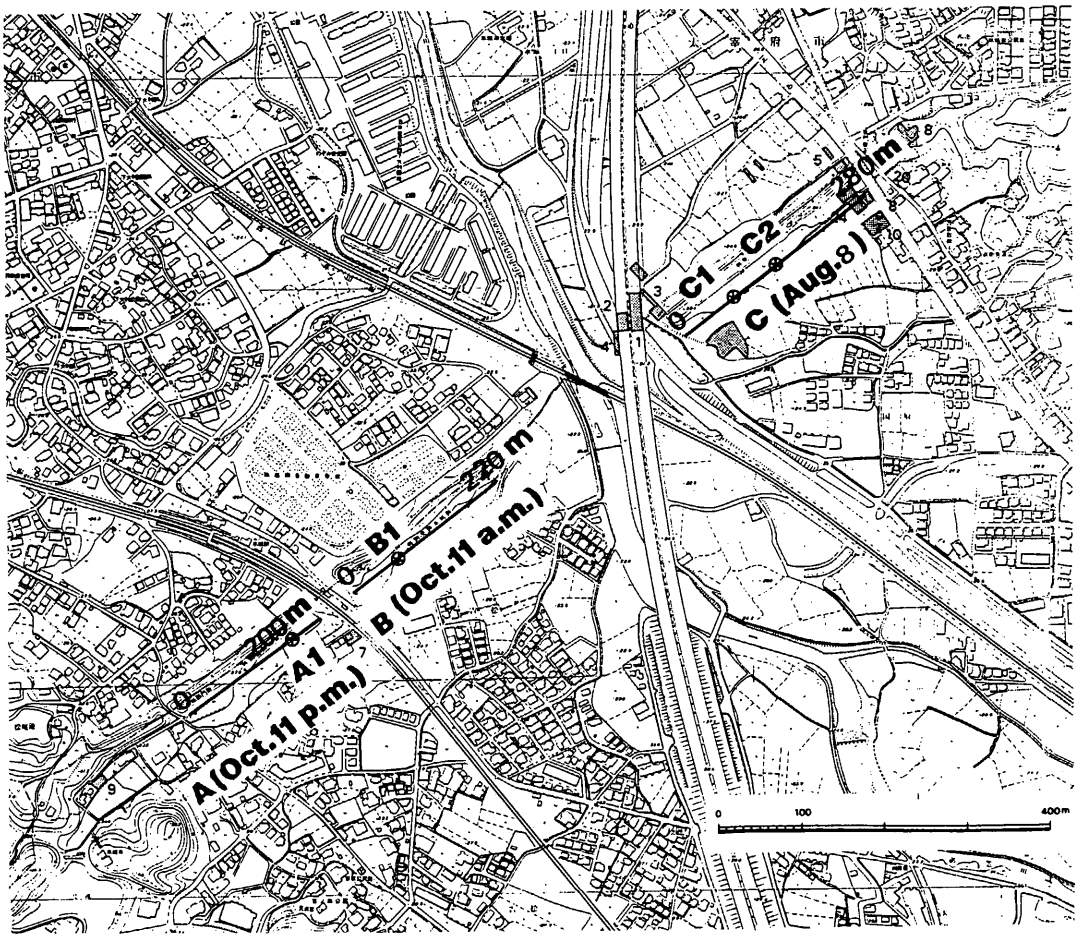


Fig. 2　太宰府市水城跡の調査測線図

本研究課題では、全国の考古学者および理工系学者（総数87名）との緊密な協力により、遺跡探査の研究課題に取り組んでいる。その中で、九州大学の研究グループは、地下浅部に存在する埋蔵文化財を高精度の比抵抗映像として可視化し、トレンチなどの発掘調査の前に現場において直ちに診断するシステムを構築することを目的としている。

したがって、九州大学工学部の研究グループは、この目的のために、直交電界法などの新しい概念の電気探査法を開発すると共に、パソコンによる自動計測システムを構築して、〈データ取得〉から〈データ処理〉を経て〈データ解析〉に至る3段階の手続きを野外調査の現場で実行できる遺跡探査のシステムを製作している。そして、実際に遺跡探査の現場である前方後円墳（高槻市の今城塚古墳、八女市の岩戸山古墳、大牟田市の黒崎観世音塚古墳）および弥生時代の水路跡（島根県の荒神谷遺跡、佐賀県の吉野ケ里遺跡、長崎県の原の辻遺跡）などへ適用して、地表からの各種の電気探査法の探査限界（分解能）を具体的に確かめながら、遺跡のための電気探査法のシステムを改良してきた。

近年の遺跡の高精度物理探査に関する要望が高まる中で、本調査は既存のデータから考古学の分野において水城土塁の内部に存在すると推定されている未発見の木樋を地表からの電気探査法により3次元的にイメージすることを目的として、福岡県太宰府市の九州歴史資料館からの依頼により、九州大学工学部の遺跡探査グループが1995年（平成6年）に3次にわたって実施したウエンナー法による水平電気探査およびシュランベルジャー法による垂直電気探査の調査結果をとりまとめたものである。

すなわち、調査範囲が比較的広いため、第一次調査（8月8日）では、まず木樋の存在がすでに確認されている東門（国道3号線側）付近において、種々の電極間隔のウエンナー法による水平探査を試験的に実施してみた。その結果、本地域においては探査対象（木樋）を的確に検出するためのウエンナー法による水平電気探査の最適電極間隔はa＝2mであるとの結論に達した。

そこで、図2に示すように東門側（国道3号線）の水城跡に沿って測線C（測線長は280m）を展開して、電極間隔（a＝2m）を一定に保ち、水平移動距離をd＝1mのピッチでシフトしながら測線全体のスキャン調査を実施した。その結果、木樋存在の必要条件である低比低抗体の存在を示唆する比低抗異常部が4箇所の地点で検出された。

これらの異常部の中で、既存の発掘調査などの資料等も検討して、見掛比抵抗曲線の形状および分布状況から、2つの異常部（図中のC1およびC2）のみが未発見の木樋が存在する可能性が高い地点であると診断した。

そこで、第二次調査（8月10日）では、これまでの発掘調査による資料および九州歴史資料館の栗原和彦課長の意見等も参考にして木樋存在の可能性が最も高いC測線の距離程82mの異常部（C1）付近の精密調査を実施した。すなわち、第二次調査では水平方向のみならず深度

方向の情報を高精度に把握するために、シュランベルジャー法による垂直電気探査（Vertical Electric Sounding）を高密度の測点間隔で実施した。

その結果、１Ｄモデルおよび２Ｄモデルを仮定したインバージョン解析により、ボーリング調査に相当する比抵抗柱状図および比抵抗断面図が数学的に導かれ、異常物体（木樋）の存在を示唆するパターン（深度および規模）を可視化することができた。

よって、今後の調査では地下の水平方向の比抵抗分布を把握するウエンナー法の水平探査と地下の深度方向の比抵抗分布を把握するシュランベルジャー法の垂直探査と併用すれば、埋没異常体の分布を３次元的にイメージできることが明らかになった。

したがって、第三次調査（10月11日）では水城土塁（総延長1200m）の残りの部分について木樋の存在箇所を的確に検出する目的で、午前中に中央部のＢ測線（測線長220m）について水平探査を実施した。その結果、JR鹿児島本線側の基点から距離程80m付近に低比抵抗の異常部（Ｂ１）を検出した。

さらに、午後には西門側を基点にとり東方へ200mの測線を展開して、木樋の存在箇所を検出する目的でウエンナー法による水平探査を実施した。その結果、距離程170m付近（JR鹿児島本線側）に低比抵抗の異常部（Ａ１）が検出された。

２．ウエンナー法による水平探査

地下の水平方向の比抵抗分布を調査する手法は水平電気探査（Horizontal Resistivity Mapping）と呼ばれている。本調査の電極配置としては、図３に示すウエンナー型の対称４電極配置を用いた。

この方法は、まず地表の調査測線に沿って外側に電流を流すための一対の電流電極（Ａ、Ｂ）を配置し、内側に電位差を計測するための一対の電位電極（Ｍ、Ｎ）を設置する。この時各々の電極間隔ａ（m）はすべて等しく、水平探査法では電極間隔は一定にして電極系の中心までの距離ｄ（m）を移動しながら地下をスキャン調査する方法である。この方法の探査深度（depth penetration）は、およそウエンナー法の電極間隔と等しいａ（m）程度であると考えられている。

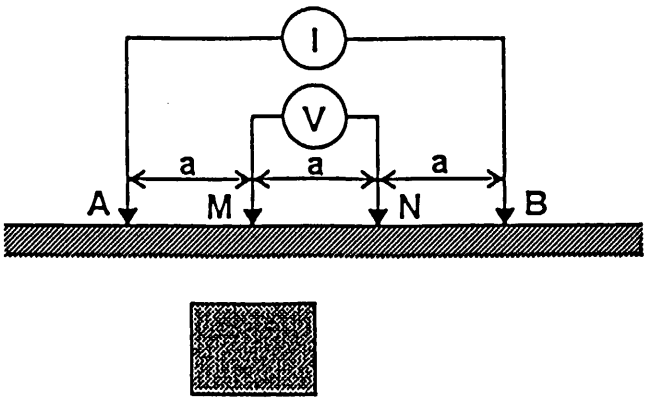


Fig. 3　ウエンナー法の電極配置

ウエンナー法の場合の見掛比抵抗値ρ（Ωm）は、大地へ流した電流値Ｉ（mA）、この電流に対応して計測される電位差Ｖ（mV）および電極間隔ａ（m）の関数で、次式によって求められる：

$$\rho a = 2\pi a V / I$$

既存の発掘調査の資料によれば、東門付近の発掘調査で確認された木樋の埋没深度が1.2m程度であること、および種々の電極間隔を用いて試験的に調査した結果、電極間隔ａ＝２mの場合が最も顕著に異常部が検出されたことなどを考慮して、1995年の電気探査では、まず概査法としてウエンナー法による水平探査（ａ＝２m）を下記に示すように土塁に沿って総延長700mの測線を展開して３回にわたり実施した：

測線Ａ　　測線長　200m　　西門（太宰府市吉松）付近
測線Ｂ　　測線長　220m　　JR鹿児島本線付近の中央部
測線Ｃ　　測線長　280m　　東門（国道３号線）付近

このようなウエンナー法による水平探査の結果、上式によって求められた見掛比抵抗値は、横軸に基点から電極系の中心までの距離（ｄ）をとり、縦軸に見掛比抵抗ρａ（Ωm）の対数値をとり片対数グラフにプロットされる。すると、たとえば図４に示すように、この水平探査曲線（Horizontal Resistivity Mapping Curve）の分布形状から地下構造のみならず比抵抗異常

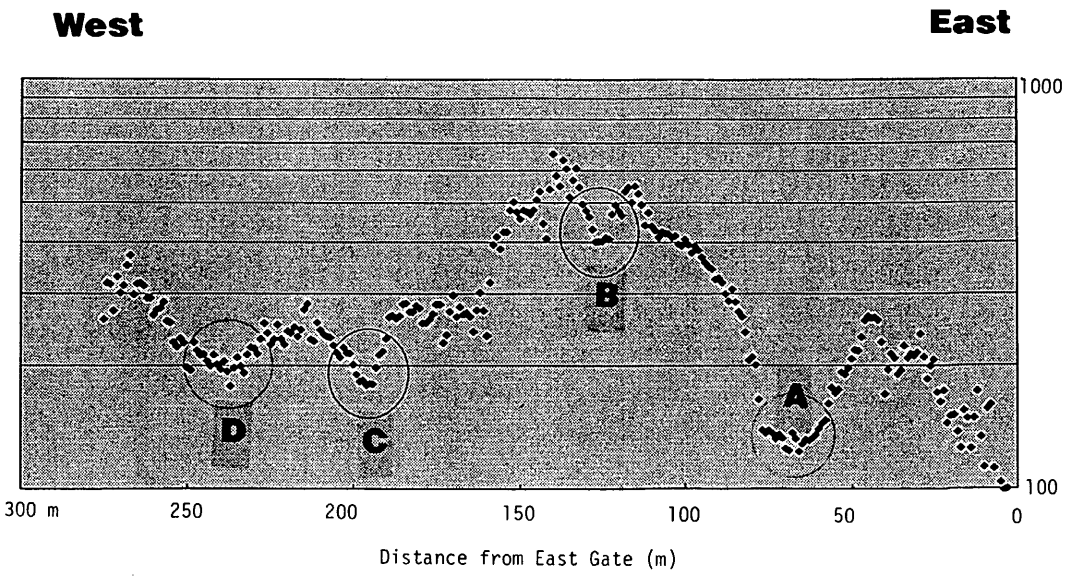


Fig. 4　水城跡の東門付近の水平探査曲線およびその解釈例

体（木樋）の有無、異常体の位置および埋没範囲などを具体的に推定することが可能となる。

異常部A	距離程	70m	大規模の低比抵抗体	過去の発掘調査の影響
異常部B	距離程	120m	局所的な中高比抵抗体	瓦窯跡の熱の影響
異常部C	距離程	190m	局所的な低比抵抗体	水路（木樋）跡
異常部D	距離程	240m	大規模の低比抵抗体	溝（近世）の影響

水平探査曲線の例

例えば、地下に金属製の埋設管などのように周辺媒質と比較して低比抵抗（$\rho 2 < \rho 1$）の球状物体が存在する場合に、ウエンナー法の水平電気探査を実施すれば、図5の下図に示すような逆W型の示徴が現われることが偏微分方程式の解として導かれる。

また、これとは反対にコンクリート製の埋設管などのように周辺媒質と比較して高比抵抗（ρ

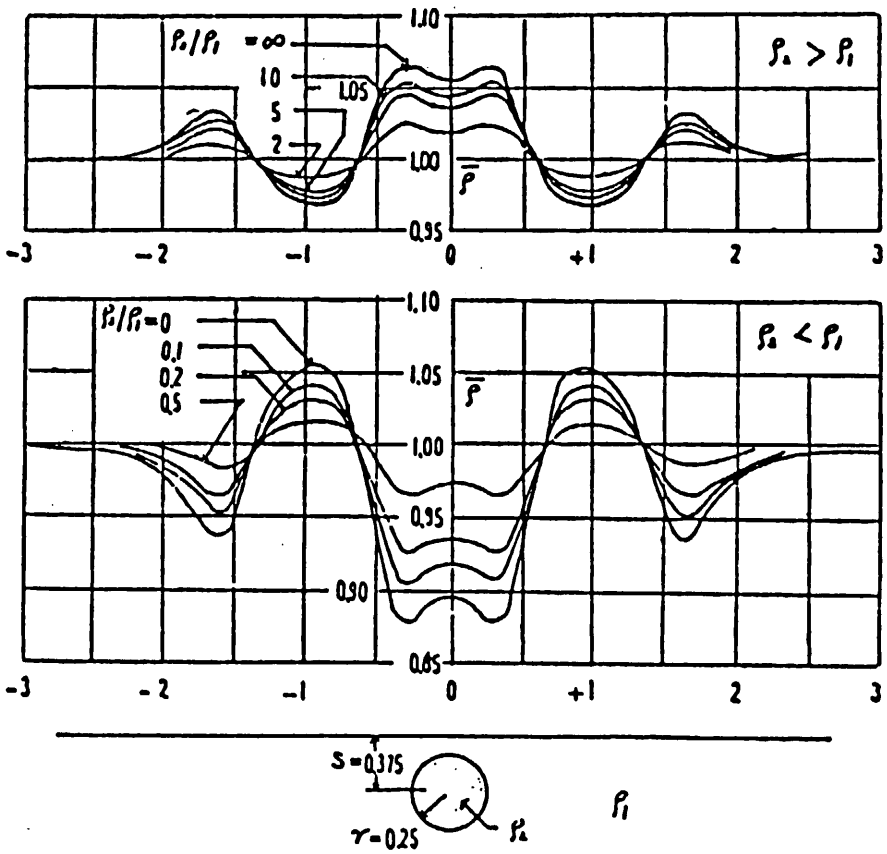


Fig. 5　埋没球のウエンナー法による水平電気探査（理論曲線）

$2 > \rho 1$）の球状物体が存在する場合には、図５の上図に示すようなW型の示徴が現われることが知られている。

したがって、ウエンナー法による水平電気探査を実施すれば、水平探査曲線の分布から埋設物の電気電導度（高比抵抗／低比抵抗）の情報のみならず、埋設物の中心位置および規模などを推定できることが分る。

第一次調査

これらの水平探査曲線の応答に関する基礎知識を用いて、実際にフィールドで取得された水平探査曲線（探査データ）の解釈が行われる。すなわち、まず第一次調査によって実施した東門付近（国道３号線側）の水平探査法の結果、図６に示すような水平探査曲線（測線Ｃ）が得られた。この図によれば、距離程82m（異常Ｃ１）および距離程153m（異常Ｃ２）に低比抵抗体の存在を示唆する逆W型の示徴が検出されている。

そこで、これらの２つの異常部について、従来の発掘調査の結果および見掛比抵抗曲線の形状およびパターンなどから総合的に診断すれば、局所的な低比抵抗体（Ｃ１異常部）が木樋存在の可能性が最も高く、中高比抵抗体（Ｃ２異常部）については、過去の発掘調査により確認

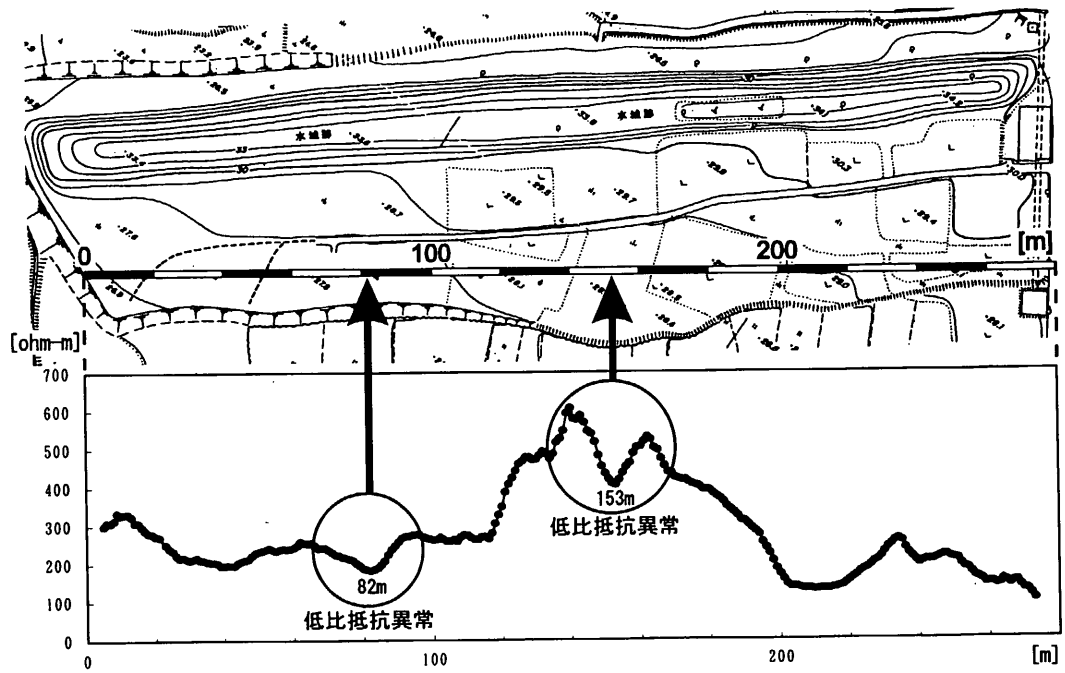


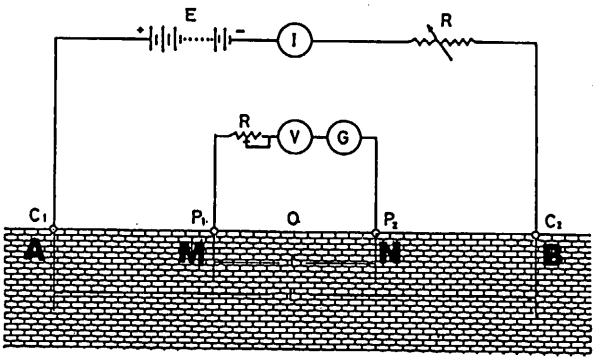
Fig. 6　東門付近（Ｃ測線；国道３号線）の水平探査
見掛比抵抗分布曲線（Wenner法：a＝2m）福岡県太宰府市水城跡電気探査（Ｃ測線95/8/8実施）

された瓦窯跡（被熱遺構）の位置と全く一致しているため、この地点は熱の影響を受けたために比抵抗異常部として検出されたものと解釈される。

したがって、第二次の調査では異常部（Ｃ１）付近の地下構造を３次元的に把握する目的で、ボーリング調査に相当するシュランベルジャー法による垂直電気探査を高密度の測点間隔で実施することにした。

３．垂直探査（第二次調査）

ボーリング調査に相当する深度方向の電気比抵抗分布を調査する目的で実施される電気探査が垂直電気探査法（Vertical Electric Sounding）である。この方法は、図７に示すように外側の一対の電流電極（A、B）から流電し、これによって生じる電界を内側の一対の電位電極（M、N）で計測して、電極間の距離をＡＢ＝Ｌ、ＭＮ＝lとすれば次式：



$$\rho=\pi\frac{L^2-l^2}{4l}\frac{V}{I}$$

Fig. 7　シュランベルジャー法による見掛比抵抗の測定（L>51）

により大地の見掛比抵抗を求める。

垂直電気探査の場合には、水平探査の場合と異なり電極系の中心を固定して、電流電極間の距離（ＡＢ／２）を幾何学的に次第に拡大しながら計測すれば電流の透入深度が増大する原理を利用しており、地下浅部から地下深部までの比抵抗情報が得られる。

垂直電気探査の測定結果は、両対数グラフの縦軸に見掛比抵抗（Ωm）を、横軸に電流電極間隔の半分の距離ＡＢ／２（m）をとってプロットされる。そしてこのグラフは、ＶＥＳ曲線（Vertical Electric Sounding）と呼ばれる。

近年の物理探査における進歩は、コンピュータを内蔵した測定機器、パソコンなどの電子計算機の普及と探査データ解析のためのソフトウェアの開発によるところが大きく、ＶＥＳ曲線の解析は物理実験のデータ処理と同様に、データからモデルを決定する手続きが電子計算機を用いてインバージョン解析により客観的に実施される。

インバージョン解析

物理探査データの処理は、物理実験のデータ処理と同様にコンピュータを用いて客観的に実

施される。すなわち、まず探査データに含まれる誤差の分布を想定して、その奥に潜んでいるモデル（地下構造）を解明する目的で、パソコンを用いて数値計算（フォワード解析）を行い、推定（Initial Guess）－あてはめ（Curve　Fitting）－診断（Diagnosis）の３段階のアプローチによるデータ解析が、非線形最小二乗法のアルゴリズム（図８）を用いて自動的に実行される。

このような自動解析法（インバージョン）のプログラムにより、地下構造モデルとして水平多層構造を与えれば、地質柱状図に相当する比抵抗層柱状図が得られる。さらに、地下構造を２次元ブロックモデルとして与えれば、有限要素法などの近似解法により最適解である比抵抗断面図が得られる。このような客観的に最適解が得られるプログラムは、水平多層モデル（１Ｄモデル；比抵抗が深度方向のみに変化）を仮定したインバージョン解析については、九州大学工学部（牛島恵輔他）で研究開発され、物理探査学会および国際協力事業団（ＪＩＣＡ）等により世界に公開されており、２次元構造（２Ｄモデル；比抵抗が深度および水平方向に変化）を仮定したインバージョン解析についても通産省工業技術地質調査所（内田利弘）によって研究開発され公開されている。

このような数学的に求められた最適モデルを用いて、物理探査学的な解釈および考古学の知識を用いて総合解釈（診断）の段階へと移行する。

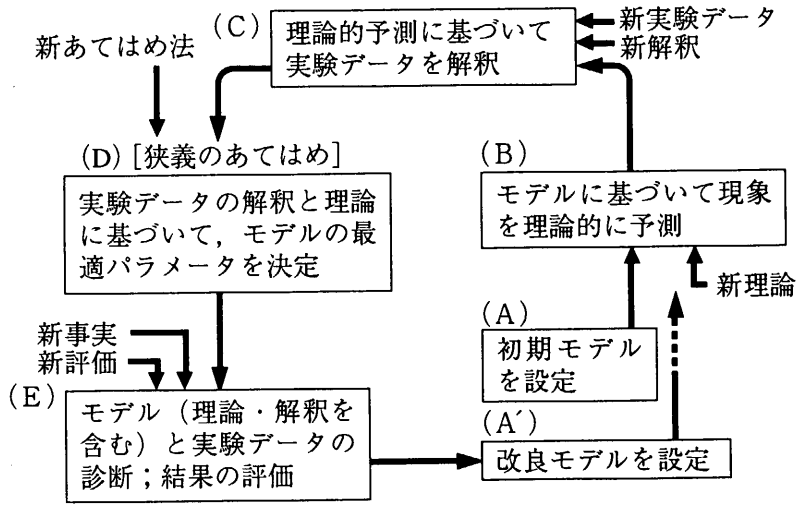


Fig. 8　非線形最小二乗法のアルゴリズム（中川他、1982）

４．第三次調査

第一次調査で実施したウエンナー法による水平電気探査と第二次調査で実施したシュランベルジャー法による垂直電気探査とを併用すれば、水城土塁中に埋没している異常物体を３次元

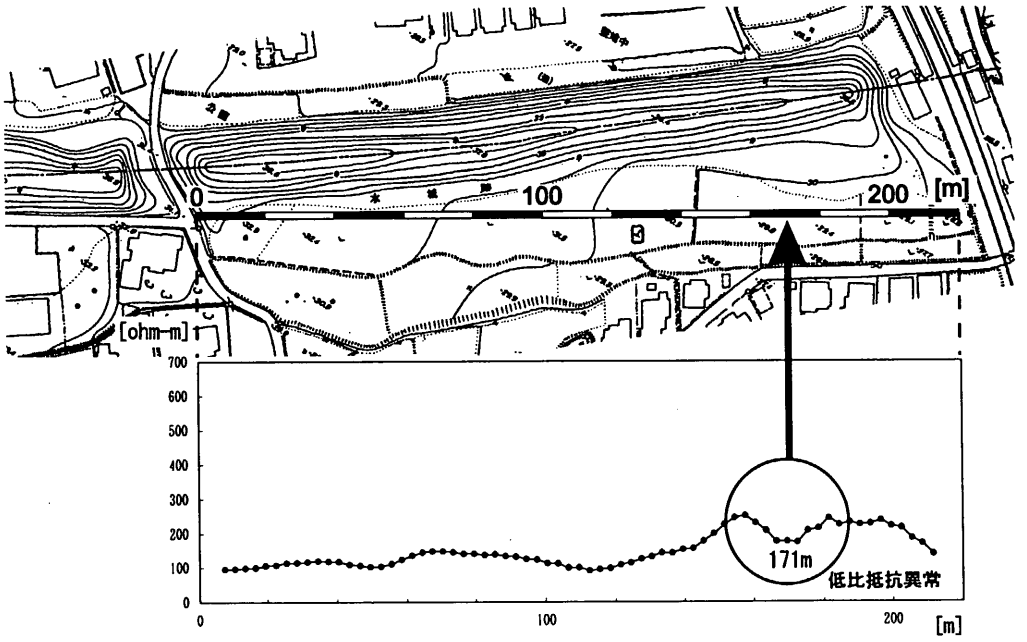


Fig. 9　西門側（A測線）の水平電気探査　見掛比抵抗分布曲線（Wenner法：a＝3m）
福岡県太宰府市水城跡電気探査（A測線95/10/11午後実施）

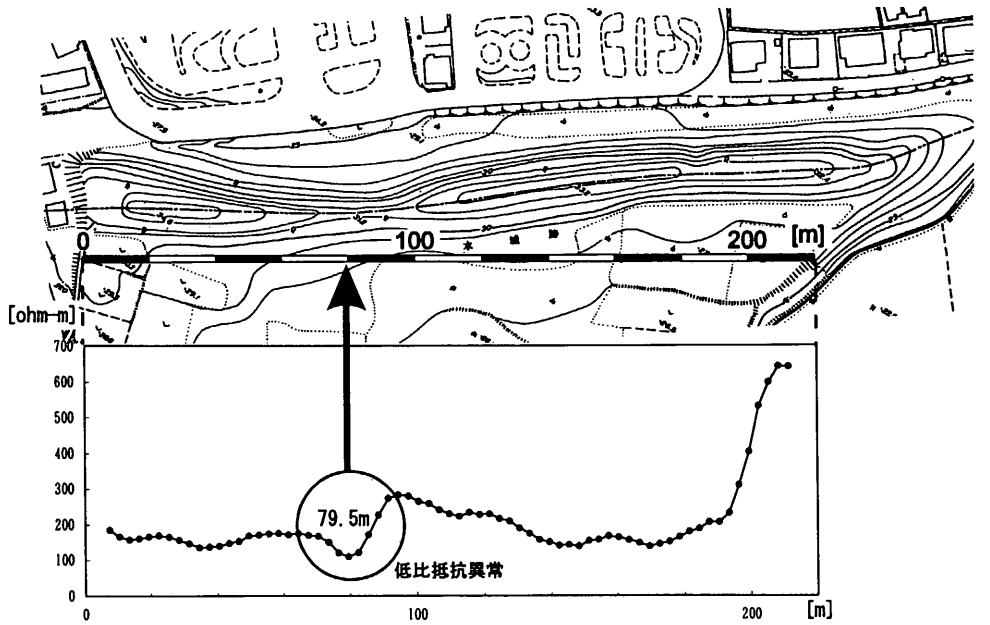


Fig.10　中央部（B測線）の水平電気探査　見掛比抵抗分布曲線（Wenner法：a＝3m）
福岡県太宰府市水城跡電気探査（A測線95/10/11午前実施）

的に検出できることが明らかになった。

したがって、このような探査手法を広域的に展開する目的で、第三次調査では水城土塁の西門側（太宰府市吉松）の測線A（測線長200m）および中央部の測線B（測線長220m）についても、埋没異常体の位置を的確に検出する目的でウエンナー法による水平電気探査を実施した。その結果、図9および図10に示すように西門側においては、A測線の距離程171m付近に低比抵抗異常体（A1）が検出され、中央部の測線Bにおいては、距離程80m付近に低比抵抗異常体（B1）が検出された。

5．結言

福岡県太宰府市の水城跡におけるウエンナー法による水平電気探査の結果、東門側の測線Cの距離程82m付近において、木樋存在の可能性が高い異常部が検出された。

したがって、この異常部（C1）の周辺地域において、シュランベルジャー法による垂直電気探査を高密度の測点間隔で実施した。すなわち、垂直電気探査では、探査対象が小規模であると考えられるため、まず水平探査曲線の異常部の中心にVES測点を設定し、次いで中心から両側に1m、2mおよび5mと次第に垂直探査の測点を拡大することにより、ミクロからマクロまでの比抵抗構造を把握できるように工夫して合計11箇所の地点においてボーリング調査に相当する垂直電気探査（VES）を実施した。

この時、探査対象の地質スケールは比較的小さいため、電流電極間の移動距離もできるだけ小さく、AB／2＝0.5、1.0、1.5、2.0、2.5、3.0、3.5、4.0、4.5、5.0、6.0、7.0、8.0、9.0、

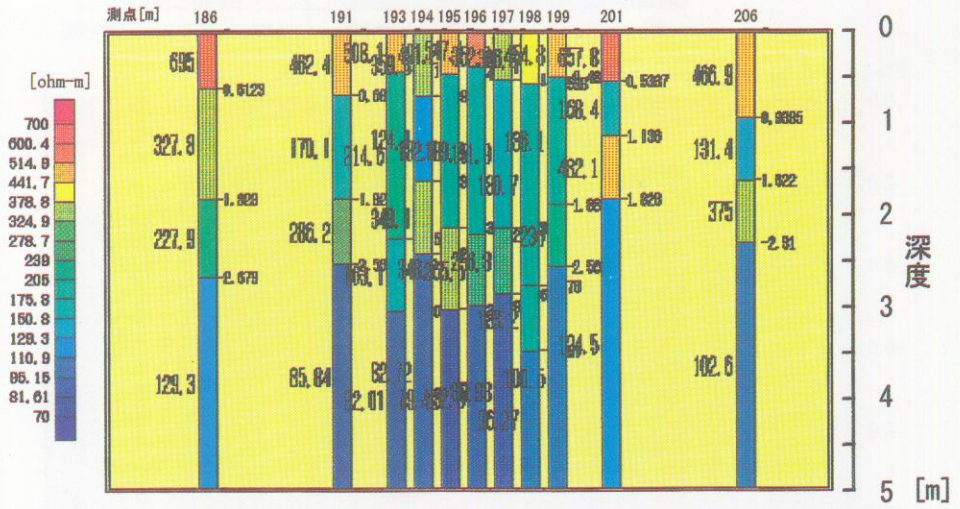


Fig.11　福岡県太宰府市水城跡シュランベルジャー法探査　1Dインバージョン結果（4層）
水城土塁（測線C）のインバージョン解析による比抵抗層柱状図

10.0mと移動しながら精密に見掛比抵抗値を求めるよう展開した。

水平多層構造（１Ｄ）解析

これらの見掛比抵抗曲線（ＶＥＳ曲線）を４層モデルを仮定してインバージョン解析した結果、図11に示すようにＨＫ型（$\rho 1 > \rho 2 > \rho 3 > \rho 4$）の比抵抗断面が得られた。したがって、本地域に低比抵抗を示す木樋が存在するとすれば、第２層（$\rho 2 = 200\Omega m$）であると診断される。よって、第２層の深度分布に着目すれば、上面深度は１mよりも浅く、下面深度は２m程度

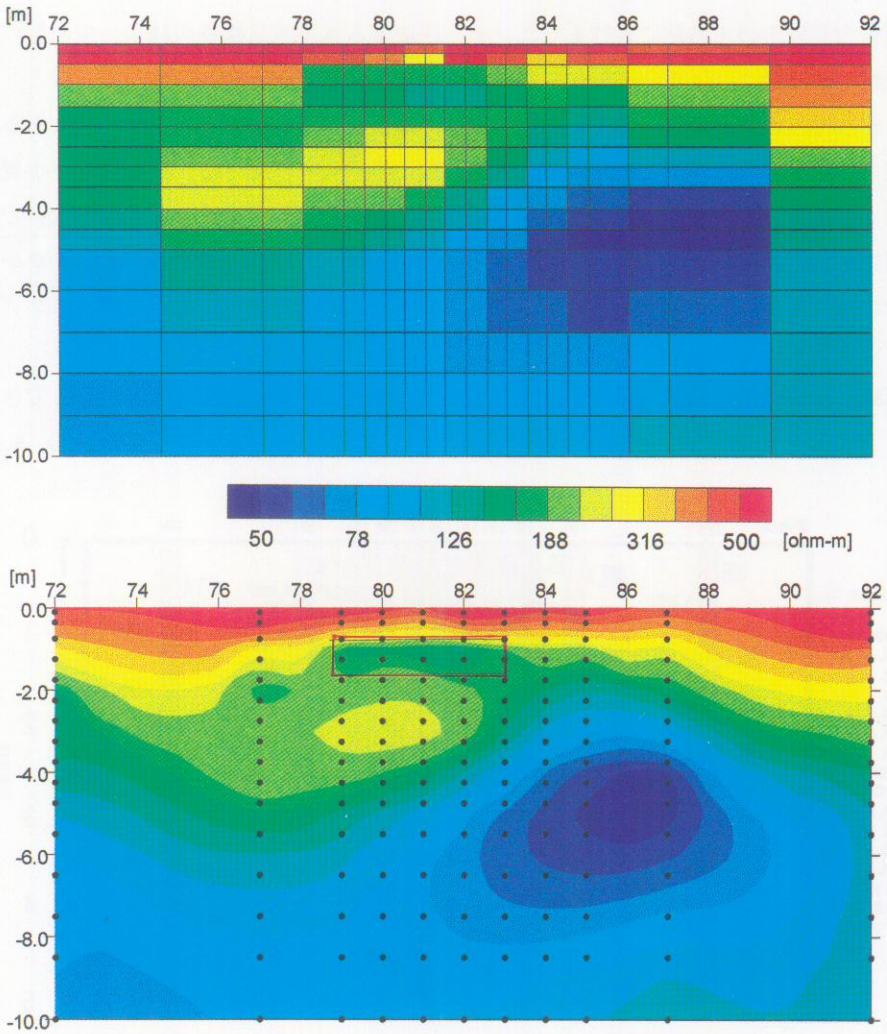


Fig.12　電気探査法による水城跡土塁中の水路（木樋）のイメージング

の深度に分布しており、異常の中心部の地点では最も深く2.3m程度の深度に分布していることが分る。そして、この異常の中心地点から左右両側に浅い深度で分析することが分る。

したがって、この付近で木樋確認のためのトレンチ調査を実施する場合には、距離程196m(測線CのC１異常部）の地点を中心に東西方向に10m程度のトレンチを掘削して発掘調査をすることが勧められる。

2次元断面（２D）解析

前述の水平多層構造モデルでは、地下構造は等方均質な水平多層構造から成ると仮定しており、水路跡（木樋）のように水平方向にも比抵抗値が変化する場合には、地下構造のモデルとしては不十分である。

そこで、今回は地下構造を２次元ブロックに分割して、有限要素法を用いて近似的に数値を求め、この理論値を全測点の垂直探査データと比較しながら、非最小二乗法により数値モデルを反復改良する２次元インバージョン解析を行った。この結果求められた２次元モデルの比抵抗値を用いてコンターを描いた結果を図12に示す。

この比抵抗断面図および水平探査の結果では異常物体の中心位置は距離程82mであったことなどを考慮すれば、木樋の存在を示唆する比抵抗異常体は、図中に赤枠で示すように埋没深度は１m程度で距離程78mから83mの範囲（幅５m）に分布することが明らかになった。

参考文献

西村　康（1991）：考古学における物理探査の利用現状、物理探査、Vol.44、No.6、404-411.

牛島恵輔（1994）：地下を可視化する先端技術－物理探査法－、地質と調査、第３号、16-23.

牛島恵輔、西村　康、寺町康昌、藤原宏志（1993）：島根県荒神谷地域の遺跡探査、物理探査学会学術講演論文集、Vol.89、30-33.

太宰府市教育委員会（1994）：特別史跡水城跡、目で見る太宰府市の文化財、1-14.

九州歴史資料館（1994）：大宰府史跡、平成５年度発掘調査概報、1-82.

太宰府市教育委員会（1994）：水城跡、太宰府市の文化財、第24集、1-218.

九州大学工学部、奈良国立文化財研究所、高槻市埋蔵文化財調査センター（1994）：高槻市今城塚古墳の電気探査（報告書)、平成６年10月、1-55.

九州大学工学部、奈良国立文化財研究所、八女市教育委員会（1994）：福岡県八女市岩戸山古墳の電気探査（報告書)、平成６年11月、1-52.

九州大学工学部、宮崎大学農学部、佐賀県教育委員会、吉野ケ里遺跡発掘調査事務所（1994）：吉野ケ里水田跡の電気探査（報告書)、平成６年12月、1-33.

九州大学工学部、長崎県教育庁文化課壱岐教育事務所(1995)：長崎県壱岐郡原の辻遺跡の電気探査(報

告書)、平成7年3月、1-35.

九州大学工学部、大牟田市教育委員会(1995):大牟田市黒崎観世音塚古墳の電気探査(報告書)、平成7年8月、1-25.

牛島恵輔、水永秀樹、加藤昭彦(1987):パソコンによる電気探査データの解析、物理探査、Vol.40、No.6、423-435.

内田利弘(1993):ＡＢＩＣ最小化法による最適平滑化拘束の比抵抗2次元インバージョン、物理探査、Vol.46、No.2、105-119.

牛島恵輔、水永秀樹(1993):地下空洞のリアルタイム探査法のシステム開発、文部省科学研究費補助金、重点領域研究遺跡探査、第1回研究成果論文集、59-64.

牛島恵輔、水永秀樹(1994):同上、第2回研究成果論文集、86-92.

水永秀樹、牛島恵輔(1995):遺跡探査のための電気探査システム開発、文部省科学研究費補助金、重点領域研究遺跡探査、第3回研究成果論文集、187-194.

水永秀樹、牛島恵輔(1996):電気探査法による遺跡のイメージング、同上、第4回研究成果論文集、231-257.

田中俊昭、光畑裕司、水永秀樹、牛島恵輔(1992):地下空洞の高精度探査に関する研究、物理探査学会第87回学術講演論文集、165-170.

田中俊昭、牛島恵輔(1993):遺跡の電気探査法に関する研究(Ⅰ)-直交電界を利用する電気探査-、物理探査学会第88回学術講演論文集、206-210.

田中俊昭、水永秀樹、牛島恵輔(1993):遺跡の電気探査法に関する研究(II)-マルチチャンネル計測システムの開発-、物理探査学会第89回学術講演論文集、235-238.

青野哲雄、角　和幸、水永秀樹、牛島恵輔(1995):福岡県八女市岩戸山古墳の電気探査、物理探査学会学術講演論文集、Vol.92、83-86.

岸川　広、青野哲雄、田中俊昭、水永秀樹、牛島恵輔(1995):前方後円墳の電気探査、物理探査学会学術講演論文集、Vol.93、196-200.

牛島恵輔(1993):ＶＥＰ法の遺跡探査への応用、センサー技術、Vol.13、No.2、63-67.

牛島恵輔(1993):地表からの埋蔵物探査、画像ラボ、Vol. 4、No.4、32-36.

図　　版



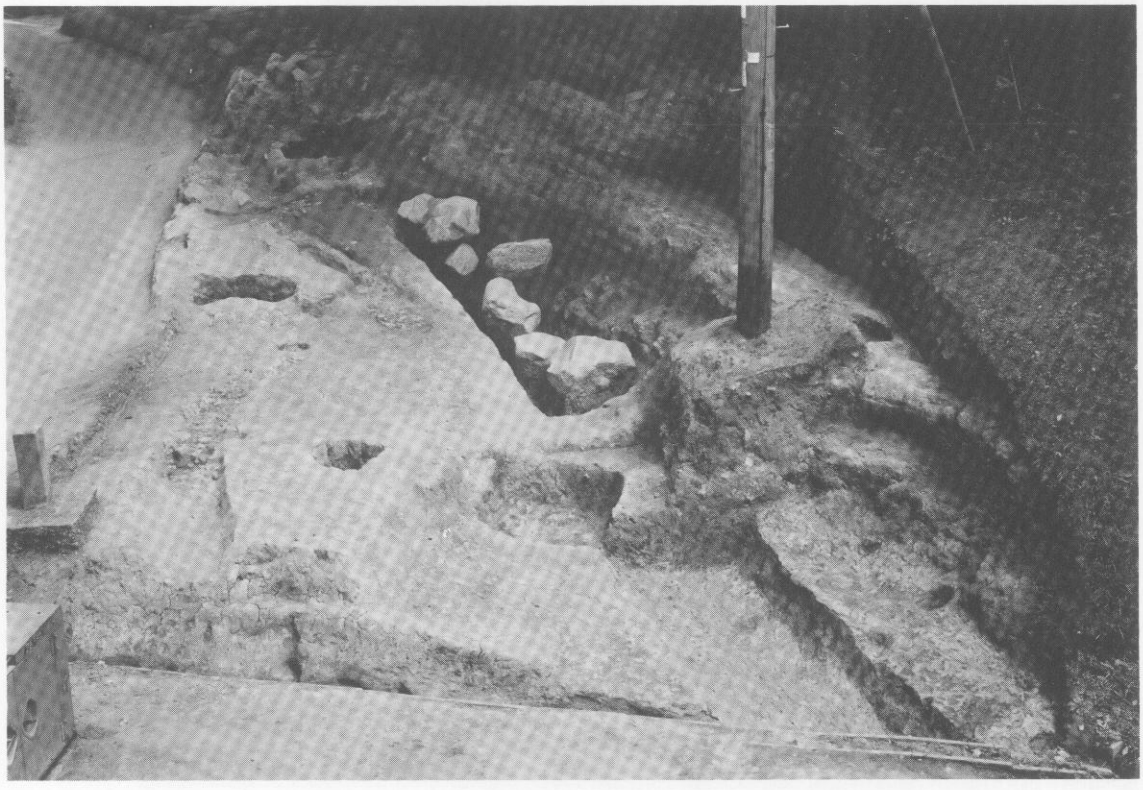
水城西門跡付近遠景（空中写真　北西から）



水城跡第26次調査区部分　（空中写真　北西から）



水城西門跡切通し部分（北西から）



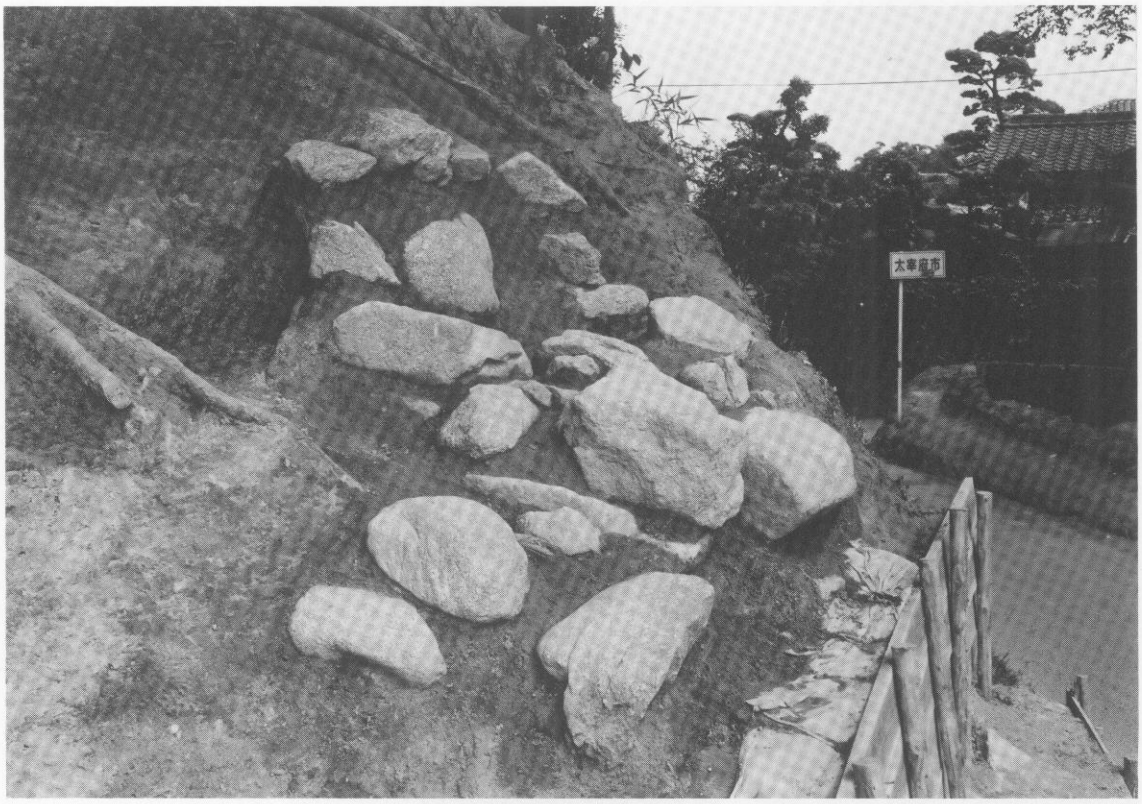
西門跡Ｅトレンチ北半部（北西から）



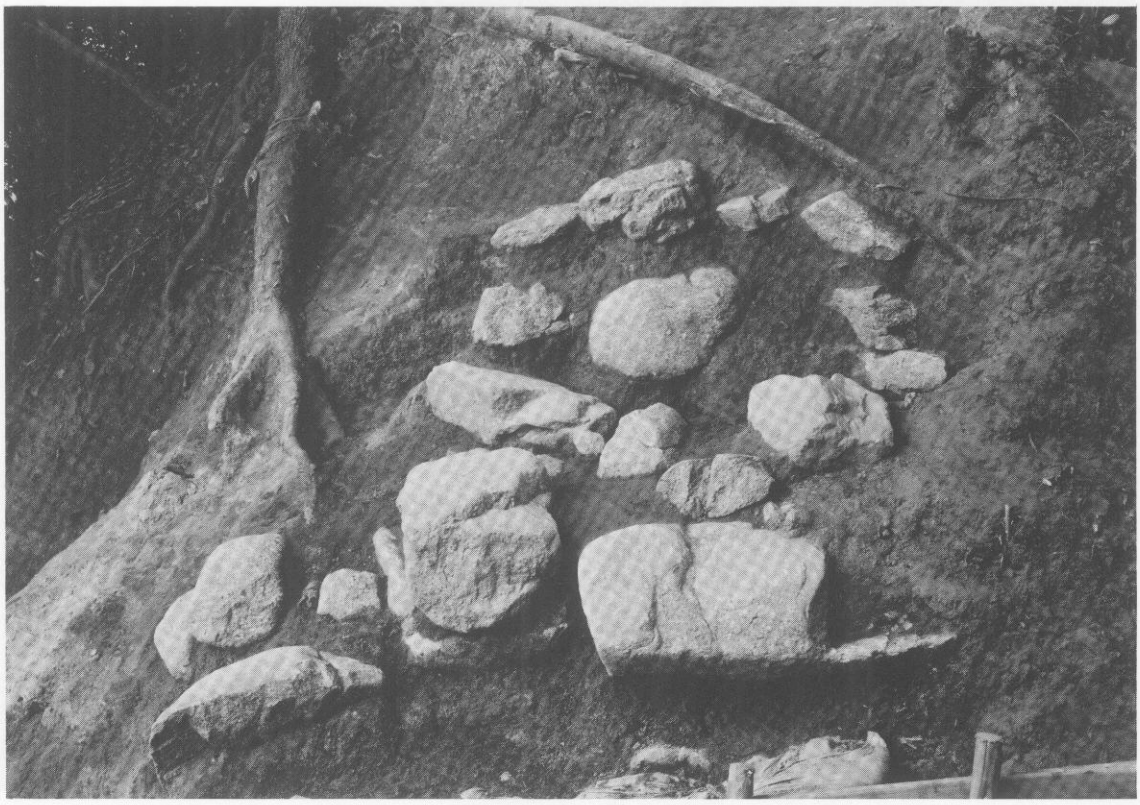
西門跡Ｂトレンチ中央部（東から）



西門跡Ｂトレンチ中央部（西から）



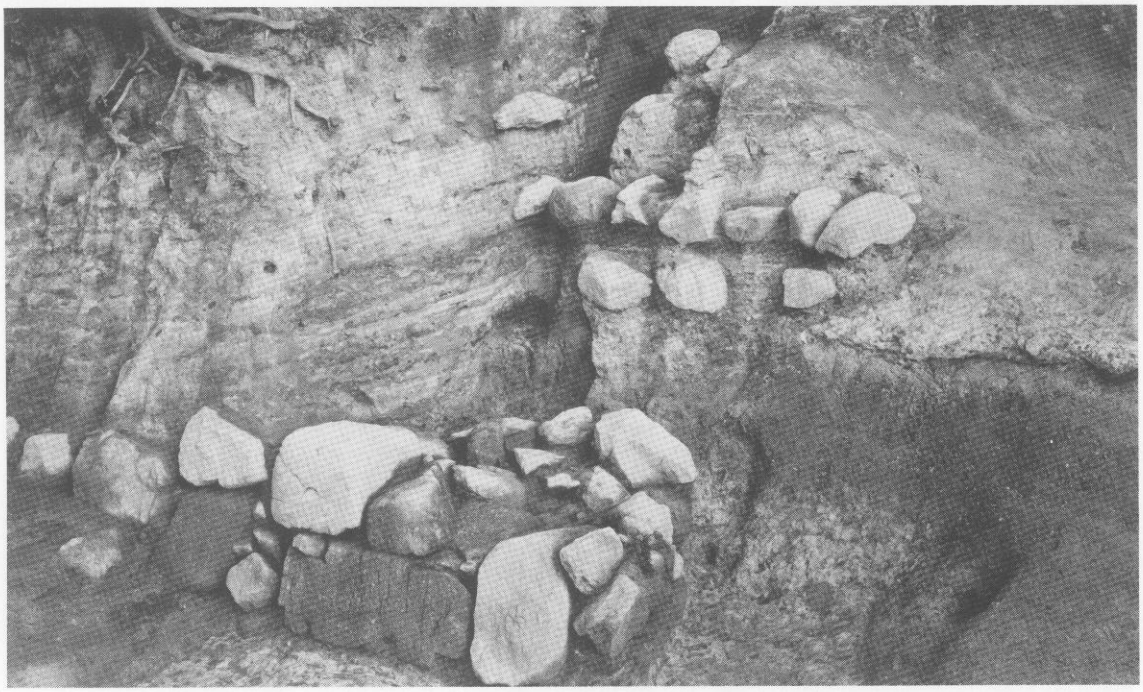
石垣 SA103（北から）



石垣 SA103（西から）



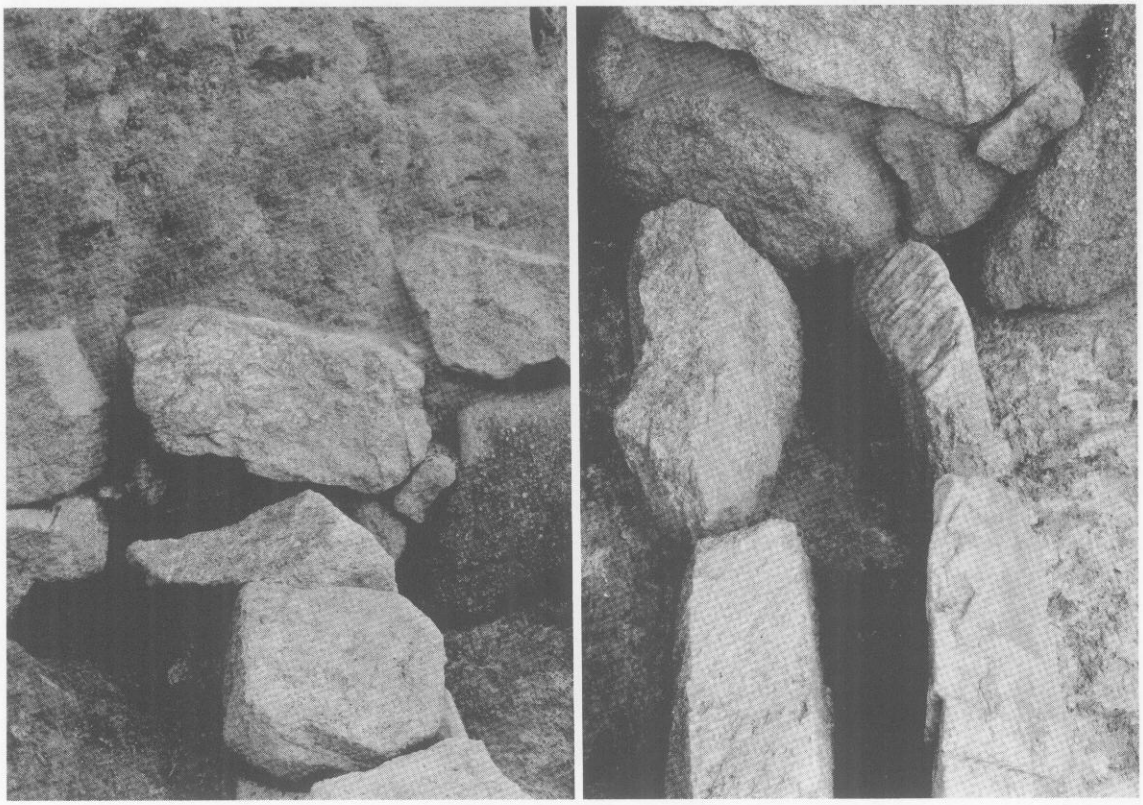
石垣 SA104（東から）



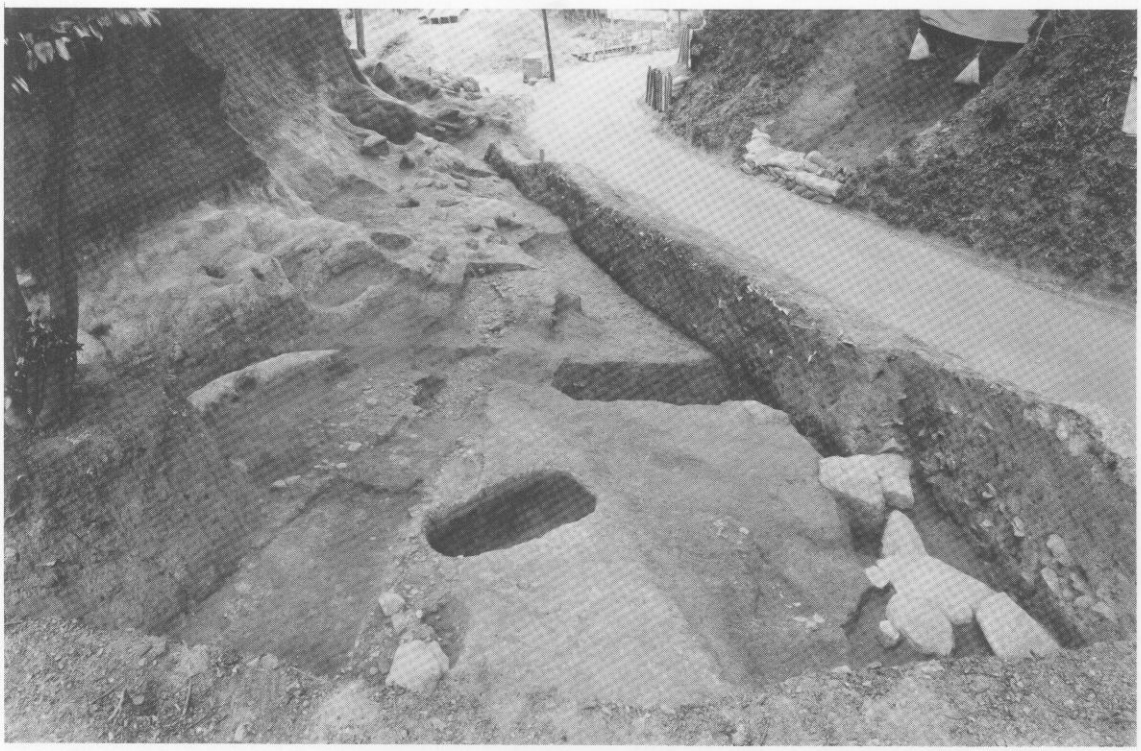
石垣 SA104西端断割り状況



石垣 SA104西端



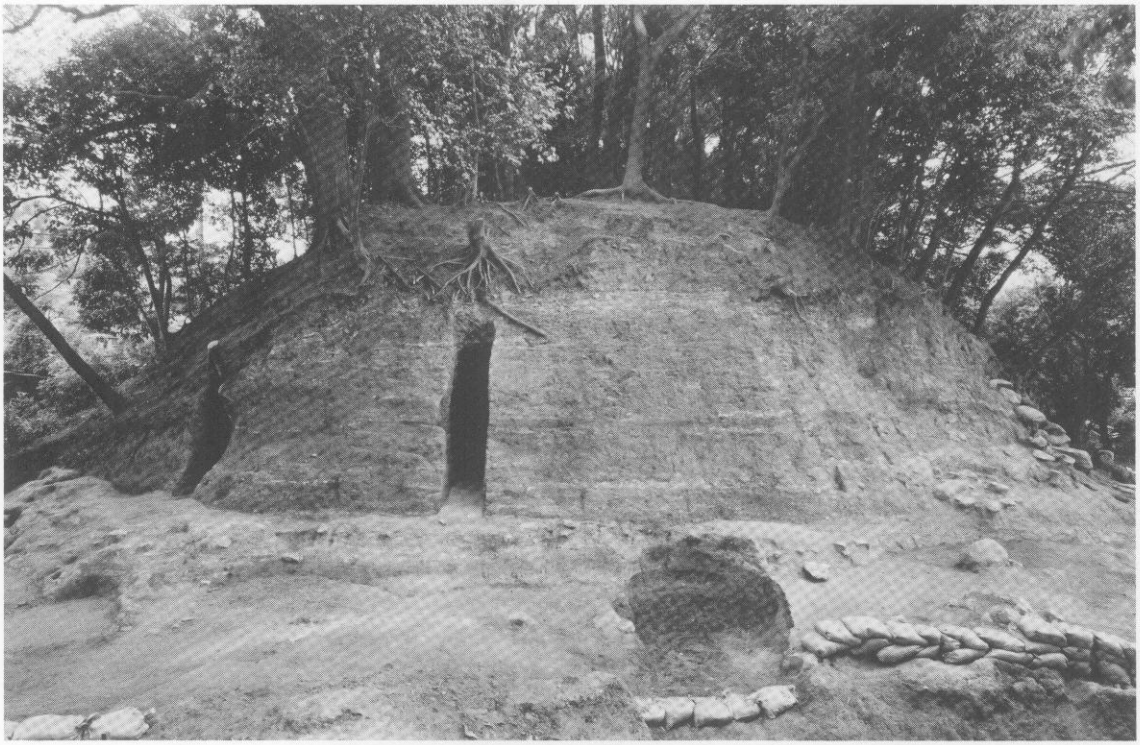
石垣 SA104細部〔暗渠 SX105取付き部　右は蓋石を取った状態〕



西門跡切通し部分（南から）



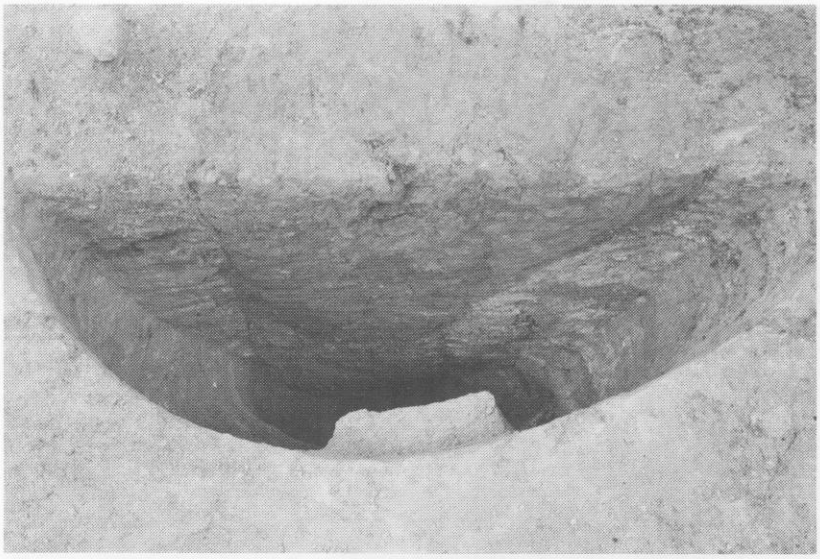
西門跡切通し部分（東から）



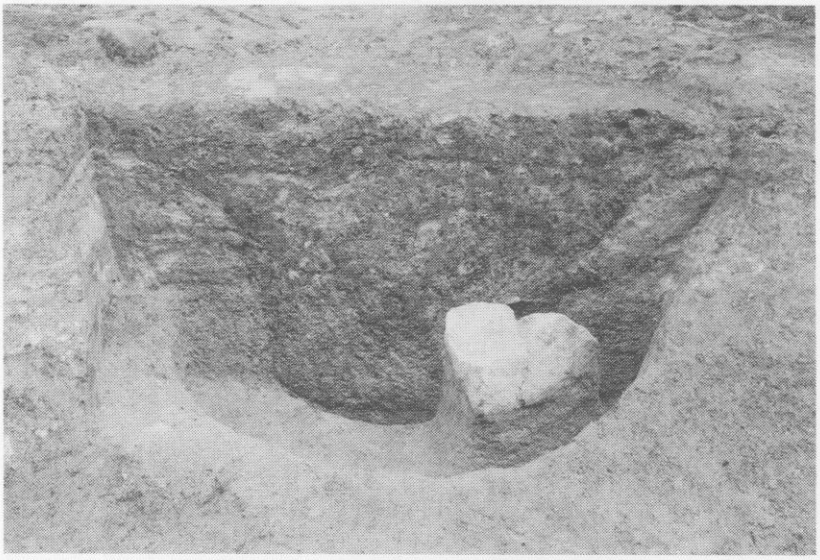
西門跡土塁壁面（東から）



門建物 SB110（東から）



（1）



（2）



（3）

門建物 SB110柱掘形



暗渠遺構 SX105（北西から）



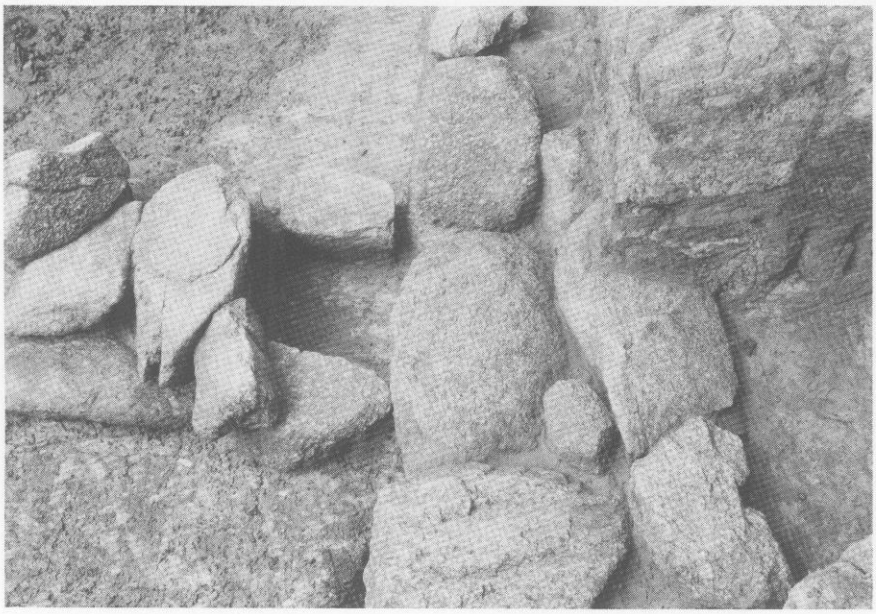
暗渠遺構 SX105（蓋石除去後　北西から）



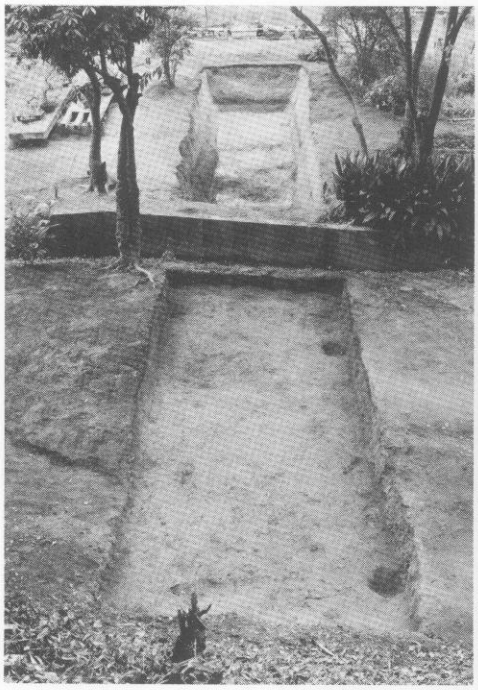
暗渠遺構 SX105（蓋石除去後　西から）



暗渠遺構 SX106（北西から）



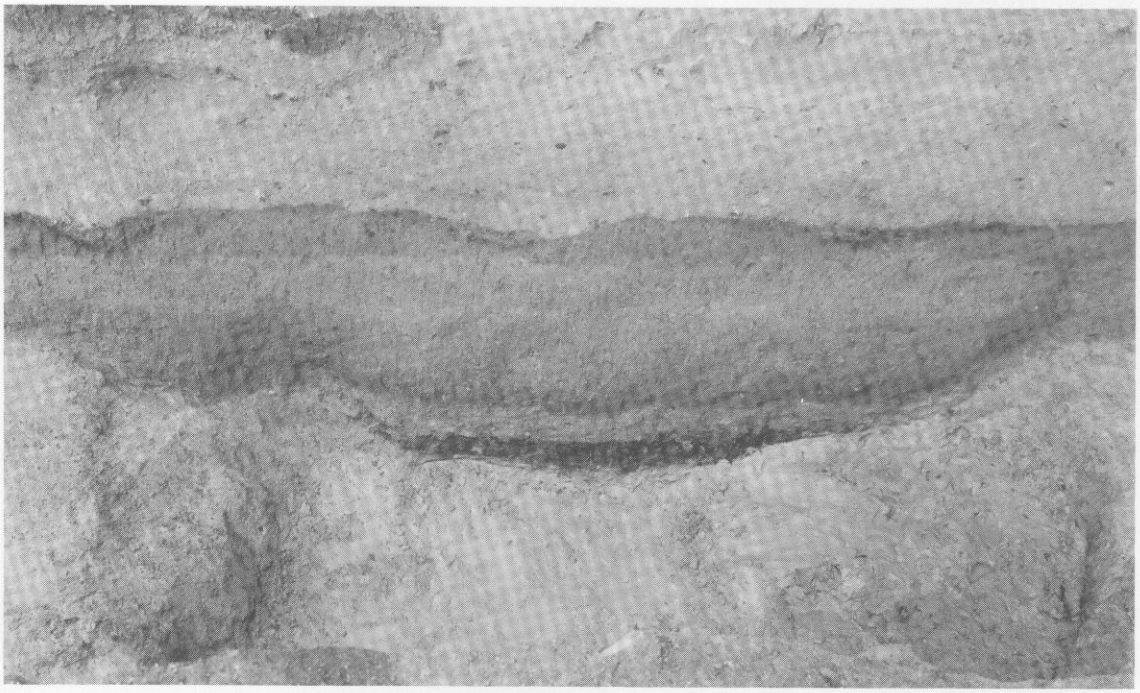
暗渠遺構 SX106細部（西から）



Gトレンチ全景（南東から）



濠 SX108（南から）



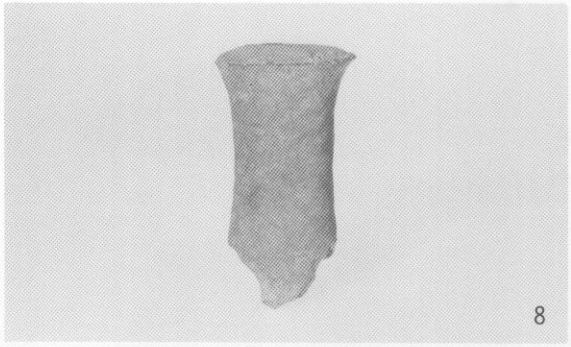
溝 SD122土層断面

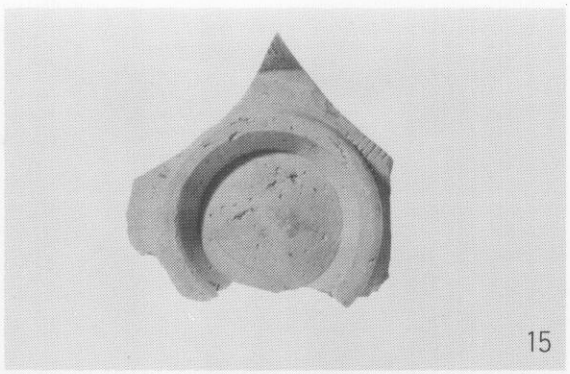


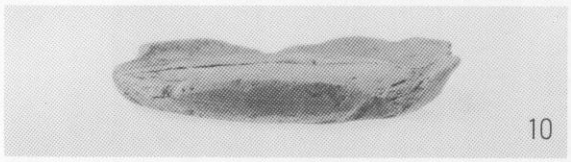
水城跡第27次調査区全景（南東から）

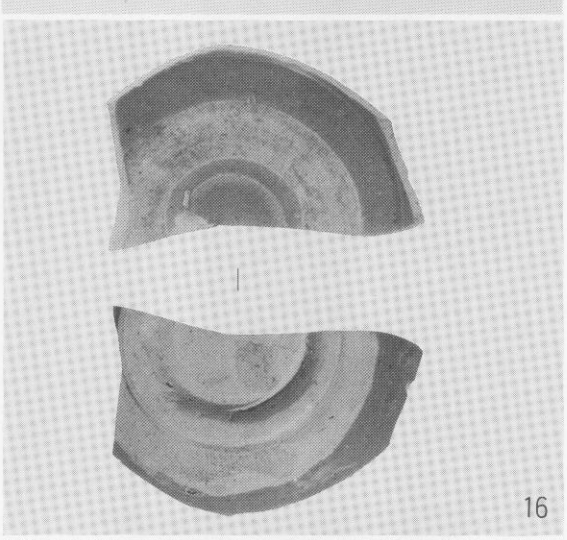


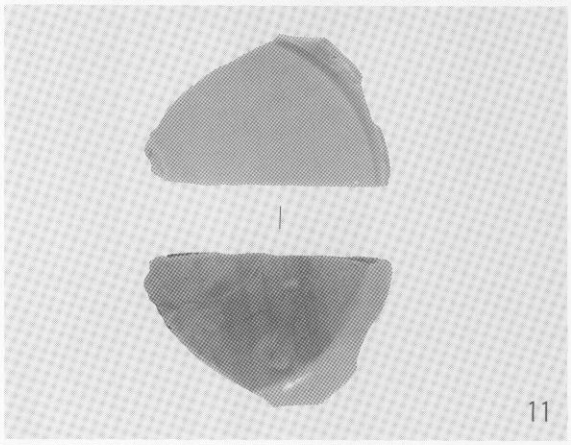
トレンチ東壁土層断面

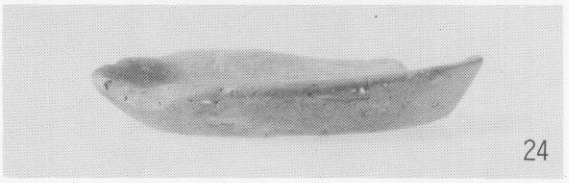

8

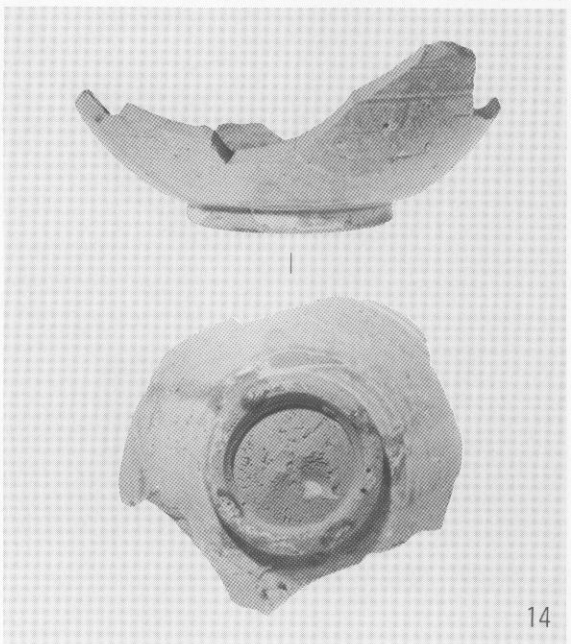

15


10


16

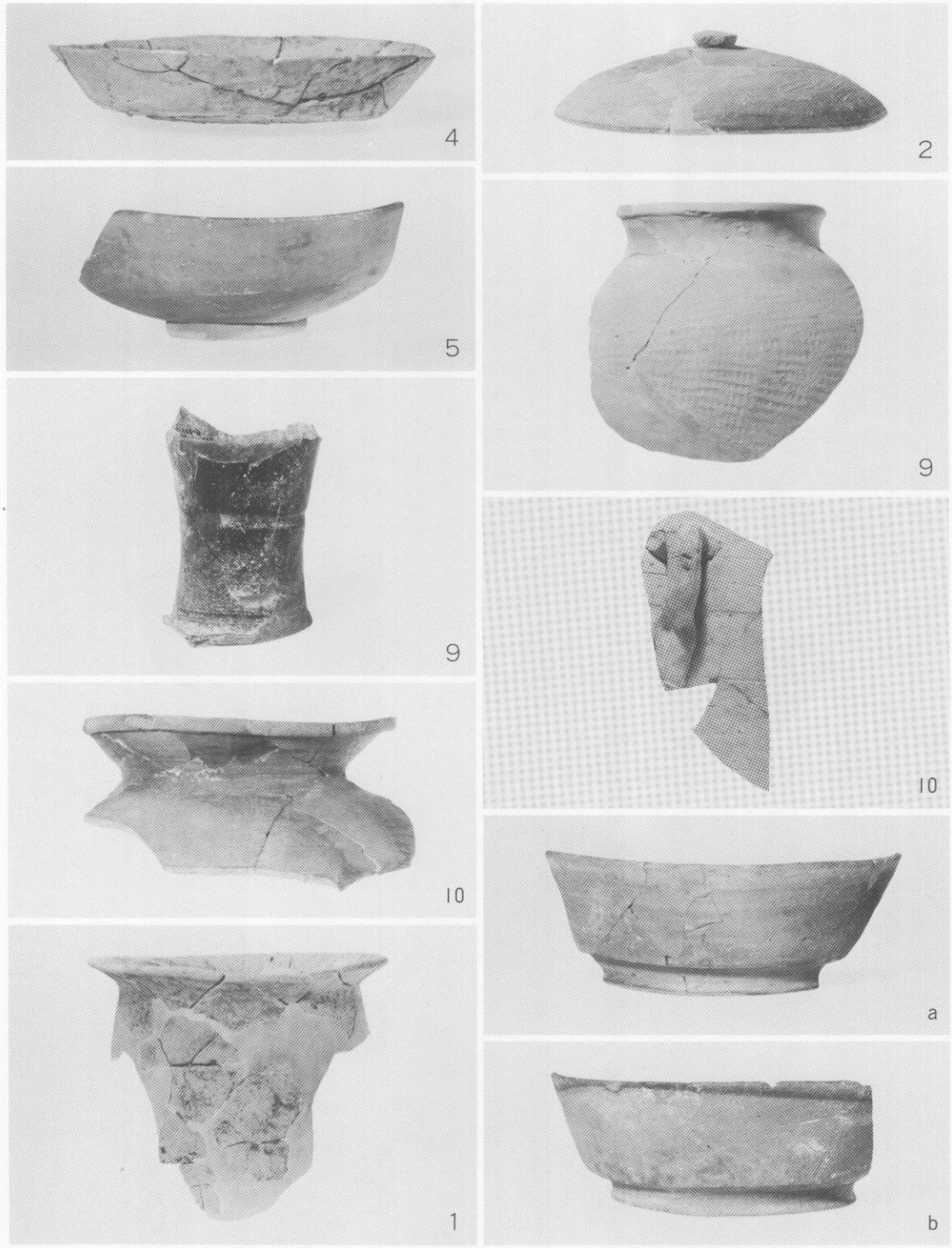

11


24

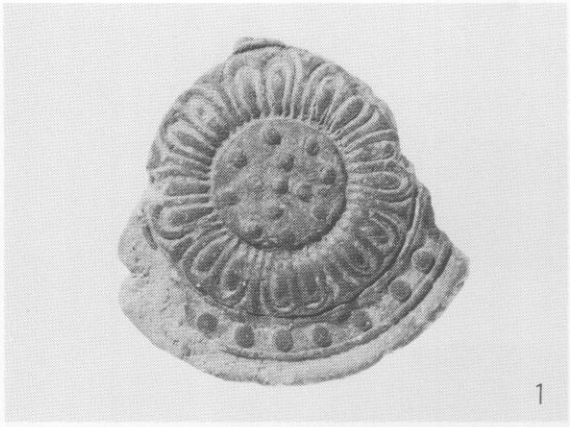

14

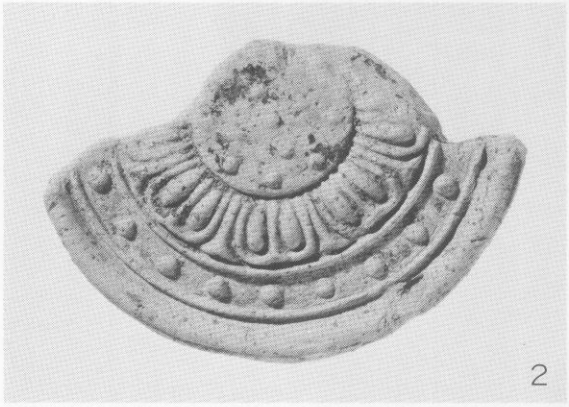

3

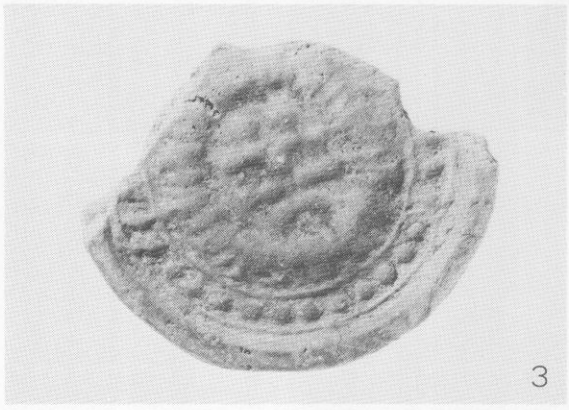
水城跡第26次調査　SD101・102・122 出土土器・陶磁器



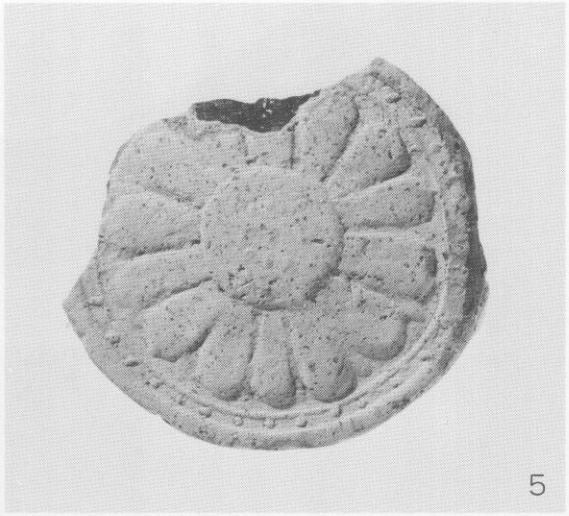
水城跡第26次調査　SK125、SX107、層位出土土器

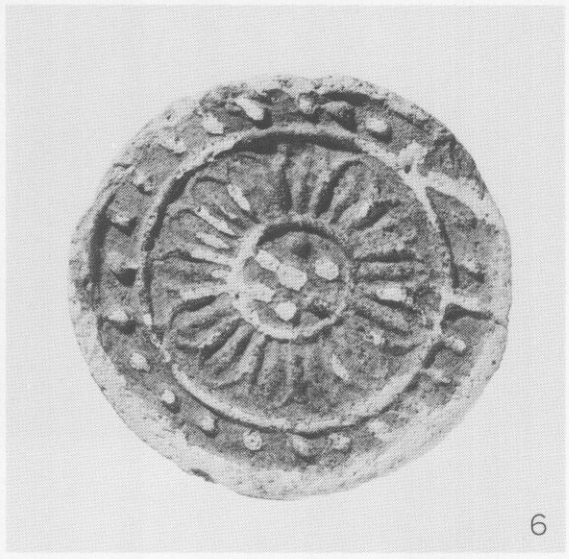

1


2


3

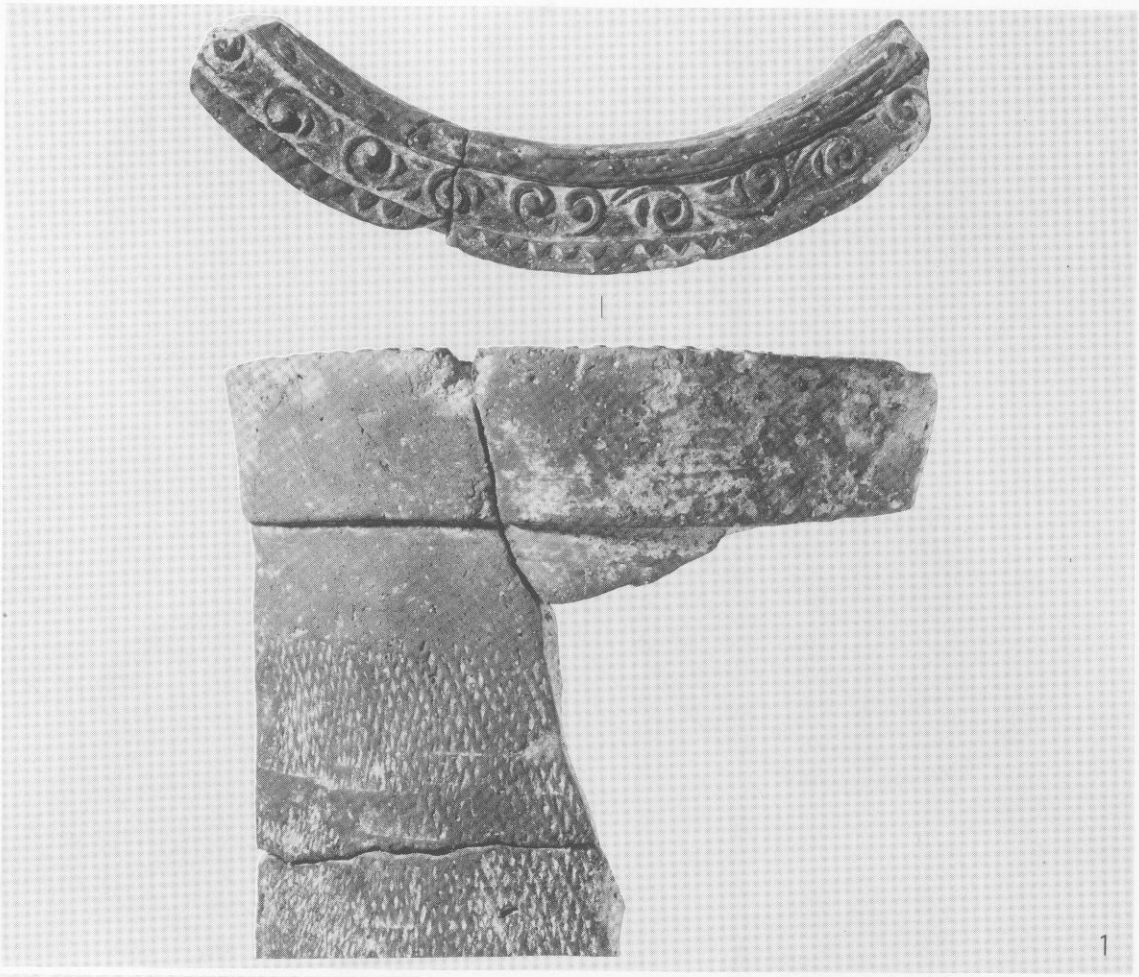

4


5


6


7

水城跡第26次調査　出土軒丸瓦





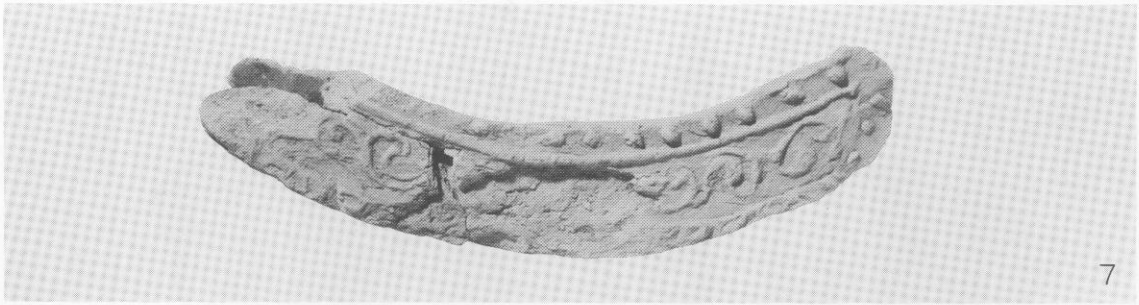


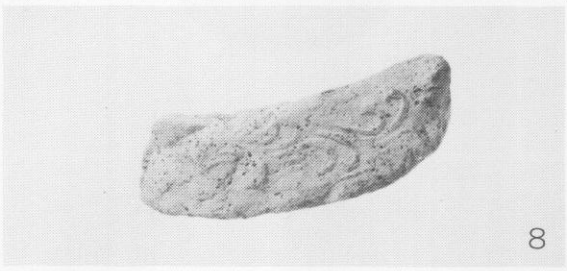






水城跡第26次調査　出土軒平瓦(1)

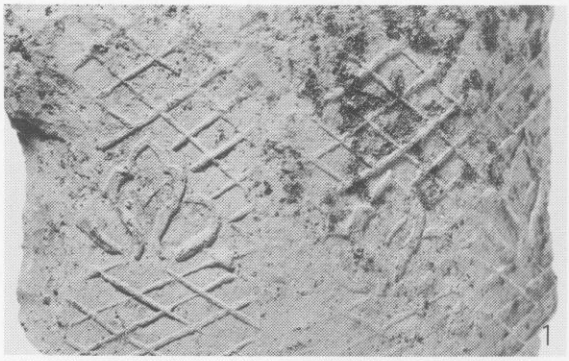


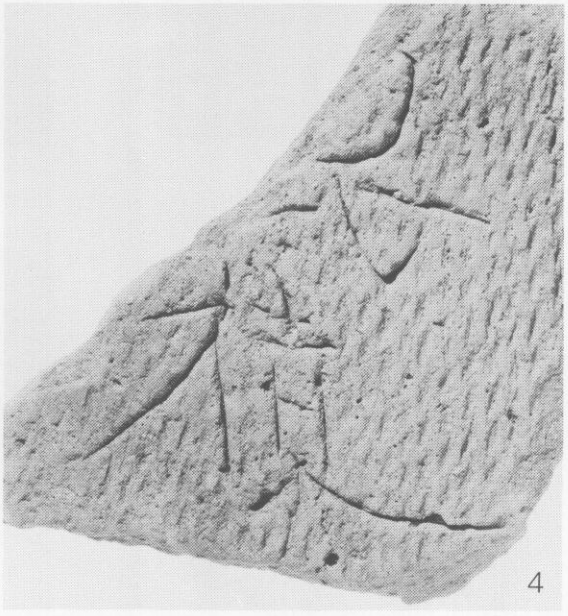






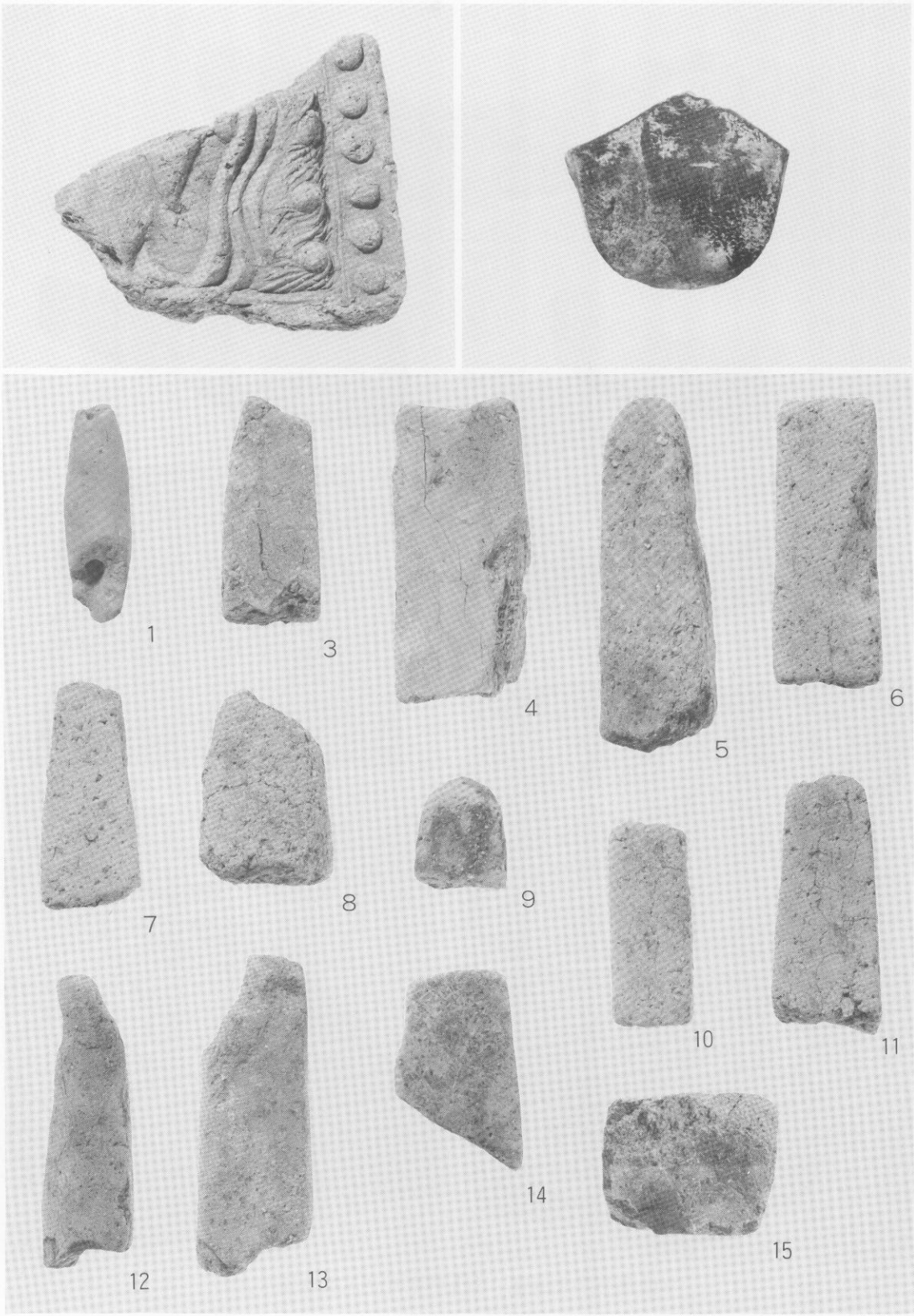








水城跡第26次調査　出土軒平瓦(2)・文字瓦など



水城跡第26次調査　出土鬼瓦・面戸瓦・石製品・土製品

報告書抄録

ふりがな	だざいふしせき
書名	大宰府史跡
副書名	平成7年度　発掘調査概報
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	栗原和彦、横田賢次郎、小田和利、小川泰樹、杉原敏之、狭川真一、大隈和子、林重徳、井上晋、牛島恵輔
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒818－01　福岡県太宰府市石坂4丁目7番1号
発行年月日	1996年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
大宰府史跡第116次調査	太宰府市大字観世音寺5丁目192－1			33°30′40″	130°31′23″	880919～880926	10.5㎡	墓碑建設
〃　第163次調査	〃			33°30′41″	130°31′24″	941017～950206	278㎡	史跡観世音寺境内の現状変更
〃　第165次調査	〃 3534－6・9			33°30′32″	130°30′48″	941212～941219	10㎡	住宅建設
〃　第166次調査	〃 478			33°30′34″	130°30′46″	941216～950117	550㎡	〃
〃　第167次調査	〃 350－6			33°30′55″	130°30′51″	940118～950202	220㎡	〃
〃　第170次調査	〃 3丁目363			33°30′38″	130°30′48″	950417～951019	220㎡	グランド拡張工事
〃　第172次調査	坂本3丁目277－2			33°30′55″	130°30′59″	950021～950627	6㎡	住宅建設
水城跡第26次調査	太宰府市大字吉松字星ヶ浦447-1 大野城市下大利2-1番地他			33°30′46″	130°29′31″	950418～951228	770㎡	計画調査
〃　第27次調査	太宰府市国分1丁目240-8					940602～940604	36㎡	住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大宰府史跡第116次調査	寺院	奈良時代	溝状遺構　1条	瓦	
〃　第163次調査	寺院	奈良時代	暗渠遺構　1基	須恵器、土師器	江戸時代の戒壇院復興に関係する遺構が検出された。
		平安時代	溝　1条	瓦、石製品、陶磁器	
		江戸時代	礎石建物　3棟 井戸　1基 池状遺構　1基 埋甕　3基	陶磁器、瓦、木製品、墨書木札 土製品、石製品、銅銭	
〃　第165次調査	官衙	平安時代	溝　2条	土師器、陶磁器	
〃　第166次調査	官衙	弥生時代	溝　1条	弥生土器	
		奈良時代	掘立柱建物　1棟	須恵器、土師器	
		平安時代	溝　1条他	緑釉陶器、瓦	
〃　第167次調査	官衙	奈良時代	竪穴住居　1軒 柵列　1列		官衙域で初めての竪穴住居が検出された。
〃　第170次調査	工房	奈良時代	建物跡　9棟 井戸　2基 竪穴　1基 暗渠遺跡　1基	須恵器、土師器、瓦、木製品、木印 木製品	大宰府組織の「匠司」に関連するか。"木印"が出土した。
水城跡第26次調査	防塁跡	奈良時代	外濠 基底部石列　2列 暗渠　2基	須恵器、土師器	
		平安時代	官道 経塚　2基	陶磁器、土製品	
〃　第27次調査	〃	平安時代	溝	須恵器、土師器、瓦	導水に関連する溝を検出

大　宰　府　史　跡
平成7年度発掘調査概報
平　成　8　年　3　月

発　行　九　州　歴　史　資　料　館
太宰府市石坂4丁目7番1号

印　刷　赤　坂　印　刷　株　式　会　社
福岡市中央区大手門1丁目8—34